
プロジェクト・メガル3・第二部

DirtyTom

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

プロジェクト・メガル3・第二部

【Nコード】

N2092K

【作者名】

DirtyTom

【あらすじ】

人類にとって決して忘れてはならない戒めすら時の経過とともに風化し、他人事のように歴史の中へと埋もれようとしていた。ありふれた日常に流される非日常。尋常ならざる警告をも打ち消すプロジェクトの全貌とは。そして人類にとってのプログラムの根とは。といったあおり文句は何のことやら、展開もオヤジギャグもほぼ滑リング、熱血一割弱でユルユルつと続けていこうと思っております。我慢できる範囲でおつき合いいただければ幸いです。

人物設定・第一部終了時点

最初に

そろそろ勝手に再開してしまおうなどと考えております。どういったペースでどこまで続けられるのかは未明ですが、可能な限りおつき合いいただければ幸いです。

とは言え、このまま本編を続けて連投していくことで膨大な話数が加算されることは必至であり、そのためせっかく読んでいただける方に負担を強いるのではとの懸念から、第二部という形で仕切り直しする結論に至りました。『僕の考えたすごい設定』や『あいたた人物紹介』を知っていたくのは個人的には望ましいことなのですが、やはり書き手側の観点からすればこういったことで脳内補完を強要するのは、やや反則？かな、という気がしてなりません。しかしながら、書いている本人からして何度も既存部分を読み直さねば進めない状況であるため、自慰行為の強要は切腹ものの見苦しさ
と承知の上で、読んでくださる方の混乱を回避すべく謹んで恥を晒すことにいたしました。嬉しいやら恥ずかしいやら、誠にこっぴどかしいところです。

人物設定・第一部終了時点

（あくまでも第一部終了時点での暫定的な人物設定であり、既存話数に反映されていない部分は今後変更追加の可能性があることをご容赦ください。特に身長体重設定はかなりアバウトです）

穂村光輔（十六才） 海竜王オビディエンサー。六年前の海竜王の搭乗者試験時、メガルを壊滅寸前まで追い込んだことにより、危険人物として認定され竜王の搭乗者リストから除外される経緯を持つ。その時の姉ひかるの死にショックを受け、一時は記憶をなくしていた。オビディエンサー三人の中ではもっとも調和を重んじるが、正義感が強く理不尽な暴力には屈しない一面も持つ。もっさりヘアーの山凌学園高校一年生。主人公なのに夕季や桔平より出番が少ない、別名、一応主人公。

身長・百七十センチ 体重・五十八キロ、七月生まれ 一話から

樹神雅（十七才） 陵太郎の妹。いじわるな性格で周囲を陥れては悦にひたっている。体は弱く、搭乗者リストからは落伍者扱いとなっていた。山凌学園高校の三年生で、アヒル口。セミロングの髪を背中であとめている。別名、忘れられたヒロイン。

身長・百五十七センチ 体重・四十一キロ、二月生まれ 一話から

古閑夕季（十六才） 古閑忍の妹にして空竜王オビディエンサー。頭脳明晰、身体能力も高いが、人づき合いが苦手で、他人と普通に接することができずに周囲から敬遠されている。姉、忍にコンプレックスを抱き、敵視していた時期もある。オビイ三人組の中では舵取り役。赤みがかった肩まである髪を尻尾のように縛っていたが、最近はその方で無造作にまとめることが多い。猫口の山凌学園高校

一年生。別名、真の主人公。

身長・百六十二センチ 体重・四十七キロ、八月生まれ 一話から

霧崎礼也（十七才） 陸竜王オビディエンサー。身体能力はオビ

イ三人組の中でもとりわけ長けており、ボクシングではプロを負かすほど。本質的に感情的、激情的で、夕季と衝突することも多い。

実質的なリーダーポジションで、良くも悪くも他のメンバーを引っ張る。かつては誰も信じていなかったが、陵太郎と雅にだけは心を開いていた。山凌学園高校二年生。一見優男風で金髪のシャギーレイヤー。別名、遅れてきた主人公。

身長・百八十一センチ 体重・六十八キロ、五月生まれ 一話から

樹神陵太郎（享年 二十二才） 雅の実兄で光輔にとっても兄

のような存在。ひかる亡き後、海竜王正式オビディエンサーとなるが、雅と光輔を守るために戦死する。死してなお、みななの精神的支柱である。さわやかな（または暑苦しい）好青年。

身長・百八十三センチ 体重・七十五キロ 一話他、回想にて登場

穂村ひかる（享年 十六才） 光輔の姉。かつて海竜王の第一オ

ビディエンサーだったが、搭乗者試験で混乱した海竜王から光輔を守るために命を投げ出した。背中までの黒髪を後ろで縛っている。

身長・百六十三センチ 体重・四十九キロ 六話他、回想にて登場

柊桔平（二十九才） 元国防省特殊任務部隊出身でメック・ト

ルーパー隊長。途中から進藤あさみにより副局長へ任命される。かつてのあさみの恋人だったが、その危険な思想に賛同できず敵対し

た。ばさばもっさりヘアで、一定の確率で鼻毛がのぞくことがある。給料日間近にはたかり対策のアンテナが立つこともあるが、あまり役にはたたない。別名、陰の主人公。（当初長男設定だったが、後付けにより三男ということに確定）

身長・百七十九センチ 体重・七十五キロ、六月生まれ 一話から

進藤あさみ（二十九才） メガル副局長にしてエスの統括長。途中から局長となる。三竜王の封印が解き放たれたために家族を失ったものと、義父風野を憎むようになった。竜王がすべての元凶と確信し、エスを設立し、メガルを壊滅させようとした。かつての桔平の恋人。茶色味をおびたショートカットでやや猫口。

身長・百六十五センチ 体重・四十九キロ、五月生まれ 二話から

木場雄一（三十才） エネミー・スーパー隊長。かつて桔平とともにメック・トルーパー隊に在籍していたが、妹の死によりエスへ籍を移した。妹、杏子がメガルによって見殺しにされたことを知り、すべてを恨み、すべてを消し去る道を選択した。忍に妹の面影を見て気にかけている。上司からも危険視されており、混乱に乗じて抹殺されようとした。中学校時、桔平とあさみの先輩だったが、桔平からはゴリラえもんと呼ばれバカにされている。天高くそびえるつんつん剛毛ヘア！。

身長・百九十二センチ 体重・九十八キロ 二話から

古閑忍（二十才） 夕季の姉。夕季以前の空竜王正式オビディエンスー候補だった。より感応力に秀でた夕季にその座を譲ることになるが、実は夕季のためにあえて身を引いたもの。努力家で、頭脳、身体能力ともに夕季より優れ、女ながらにメック・トルーパーでも

トップクラスの実力。光輔らの姉のような存在で、夕季には厳しい一面も見せることもあるが愛情によるもの。木場を慕ってエスに志願した。ボリウームのあるロングヘアーを背中で縛っている。酒豪にして酒乱。

身長・百六十八センチ 体重・五十二キロ 二話から

篠原みずき（十五才） 光輔の同級生。天真爛漫な性格で仲間内でわいわい騒ぐのが好き。すぐに人に抱きつきたがる。光輔に好意を抱いているのだが、素直に気持ちを伝えることができない。山凌学園高校一年生。ツインテールのアヒル口で雰囲気は雅にやや似ている。別名……

身長・百五十四センチ 体重・四十キロ 一話から

曾我茂樹（十六才） 光輔の親友。グループのムードメーカー。野球部でつんつんすだれ頭。一人で勝手に騒ぎ、周囲をあきれさせる。夕季に一目惚れしたが、可愛ければ基本誰でもいい。ゲームはギャルゲーを好む。山凌学園高校一年生。

身長・百七十五センチ 体重・六十五キロ 四話から

羽柴祐作（十五才） 光輔の親友で祥子の恋人。クールでグループのまとめ役。視野が広く気配りに長けているが、気が荒く利己的な一面もある。山凌学園高校一年生。茶髪にピアスあり。

身長・百七十八センチ 体重・六十四キロ 四話から

宮田隆雄（十六才） 光輔の親友。温厚と言うよりのんびり屋のぼっちゃんカット。常に周囲を冷静な目線で見ている。光輔の一

番のゲーム友達であり、勝負ことには容赦ない。山凌学園高校一年生。

身長・百六十七センチ 体重・五十一キロ 四話から

園馬祥子（十五才） みずきの親友にして祐作の恋人。背が高

くスレンダー系。みずきとは対照的に少し冷めたところがある。山凌学園高校一年生。茶色のセミロング。

身長・百六十五センチ 体重・五十二キロ 四話から

桐嶋楓（十七才） 礼也の同級生。一年生時、生徒会書記兼ミス山凌学園。二年生時は生徒会長を務める。よりよい学園作りという使命から礼也にも怖れずに接触するが、いろいろな思惑もある様子。山凌学園高校二年生。背中まである黒髪を片方の肩の上あたりで結んでいる。

身長・百六十七センチ 体重・五十キロ、四月生まれ 八話から

鳳順一郎（四十九才） メック・トルーパー隊長。髭面のダルマ体型で大酒飲みだが、懐が深く責任感が強い。だらしない面もあるが、仕事に対しては実直。夕季に対し娘のような感情を持ち、何かと気にかける。

身長・百七十二センチ 体重・九十二キロ 二話から

駒田かつみ（二十六才） メック・トルーパー隊員。短髪、がっちり体型の体育会系で快活。メックの分隊長でもあり、仲間達をぐいぐいと引っ張る。正義感は強いが趣向はややマニアック。南沢とともに夕季を妹のように可愛がり、夕季にとっては心強い存在。

身長・百八十センチ 体重・七十六キロ 三話から

南沢紀之（二十六才） メック・トルーパー隊員。優男風の所帯持ちにして一児の父親。温厚な性格で常に周囲全体のバランスを取ることを心がけている。危ないところを夕季に助けられ、以来ずっと気にかけている。駒田とともに早くからの夕季の理解者であり、常に頼りになる味方。

身長・百七十五センチ 体重・六十七キロ 一話から

大沼透（二十九才） エネミー・スリーパー隊員。一見ニヒルな暗殺者タイプだが根は優しい。防衛大学出身のエリートで、木場に全幅の信頼を置いている。キツチリとした短髪と目つきの鋭さが特徴。

身長・百七十九センチ 体重・七十八キロ 六話から

黒崎真吾（二十三才） エネミー・スリーパー隊員。メック・トルーパー随一のスナイパー。大沼同様木場を尊敬している。照れ屋でキョドる癖がある。

身長・百七十四センチ 体重・七十キロ 六話から

波野しづき 司令室のメインオペレーター。髪型にこだわりを持ち、思考も嗜好もマニアック。桔平を翻弄するのが趣味。

身長・百七十一センチ 体重・五十三キロ 一話から

風野守人 考古学者。樹神博士が発見したメガル文明の遺跡発掘

に深く関わり、進藤教授の手を経て、メガル・プロジェクトを引き継ぐ。ガイアー財団代表にしてメガルの実権者。ガーディアン、並びに三竜王の指揮権を持つが、その権限をあさみへ託し、地下へと潜った。家族を奪われたと信じているあさみから恨まれている。

一話から

火刈聖宜 元メガル局長。政府から派遣され、メガルを統括するとともに、政府とメガルのパイプ役を果たす。かつてのメック・トルーパー総司令官であり、エスの指揮権も持つ。あさみにエスを統括する権限を与えた。風野とは互いに真意を悟りながら水魚の関係を装っていたが、オビディエンサー暗殺指令に関与したものと疑われ更迭される。

一話から

設定及び用語の解説・第一部終了時点

（ここでのまとめは、第一部終了時点での確定事項であり、既存話数に反映されていない部分は変更追加の可能性があるのでご了承ください。考察不足による勘違いなども判明し次第訂正していくつもりです）

エネミー・スイーパー……通称『エス』。メック・トルーパーの内部に存在する別働隊。政治的にメックでは対応しきれない事象にダイレクトに対応すべく結成された。メックとは装備が異なる。オリーブドラブを基調とした迷彩服を着用。プログラムだけでなくあらゆる外敵からメガルを守るのが主たる目的。が、それはあくまでも建前であり、メガルの実権を奪おうとする首謀者によって組織されたもので、その秘された目的は三竜王の排除であつた（そのせいでプログラムが発動するとの考えから）。実情は日本政府の協力を色濃くうけており、ほぼその支配下にあるとも言え、コンセプトとは矛盾するメガルにとっては獅子身中の虫。火刈局長と進藤あさみが実権を持つが、火刈局長更迭後はメックに再編入された。メック・トルーパーの項目参照。

使用火器

バーム・バズーカ……バーム・キャノン。ロケットランチャーとしての機能のみならず、小型、細身の砲身からヒート砲弾やプラズ

マ砲弾（プラズマを閉じ込めた小型の砲弾。広域に渡りプラズマ状態の噴流を放出させる）を射出する、多目的ランチャー。女性隊員にも扱えるが、インプ程度なら一撃で複数撃破可能。装填数、六発。反動が少なく屈強な隊員なら片手保持も可能。貫徹力に重きを置いた砲弾も存在する（オリハルコン・ホロー）。国防省との共同開発。サブマシンガン……M16型近接兵器。メックのものより命中精度、威力とも上。

ハンドガン……メックのものと同じ。

オビディエンサー……従属者という意味で、竜王の正式な搭乗者をあらわす。竜王が主たる立場であり、パイロットはあくまでもそれに付き従う者だとの観点からそう呼ばれるようになった。オビイと略されることもある。

オリハルコン……精神感応合金。三竜王やガーディアン修復に使用される。種類により、装甲部、精神伝達部、武装部、などにわけられる。後にその主たる構成要素はメガリウムであると判明する。メガリウムの項目参照。

合金化する際の相手側によって性質も用途も異なり、含有率（純度）の割合で硬度や効力が変わってくる。同じ材料でも配合割合により全く別の性質になることもある。見た目も構成内容も銅と区別がつかない。それを調べる方法はメガルにしかなく、外部へ提供する場合には、かなり質を落としたものとされている。触媒はブラックボックス化されており、その秘密を世界中が狙っている。その秘密はメガルでも完全に解明できていない。

ガーディアン……巨大な神仏のような石像。三竜王が精神力を高め集束すると転送（投影）される。詳細は不明。

ガイアー・カウンター……プログラムをすべて記録してあるとされる石版をスーパーコンピュータで解析した指数。実際はかなりブラックボックス化されており、不明部分も多々ある。プログラム発動時、その種類を判別し、ほぼ正確な発動時間を逆算できる。解析によりダミープログラムと判明することもある。

ガイアー財団……メガルの母体。優秀な人材発掘が目的とされる。潤沢な財力を背景に、竜王計画の一環として日本中の身寄りのない子供達を援助し、適正試験を行う。光輔や夕季もその募集を経て集まった一部。

感応適正力……竜王への適正力を数値で表したものの。機械的に動かすだけなら誰にでも可能で、それがうまく扱えるか否かは計測の対象ではない。コクピット内に設置された特定の計測器でその値を算出。何が基準になっているのかは誰にも明かされていない。一説には六年前海竜王を暴走させた光輔のデータが元になっているとされ、覚醒後の数値は桁違いに跳ね上がっているものと推察される。

国防省……物語上の架空の省庁。

山陵市……中総半島沿岸部にある人口約十万の工業都市。メガルに必要な物資を製造している工場も多いが、労働者はそれが何なのか知らされずに作っていることもある。表向きは自動車部品や工場機械の製造で、納品も幾重もの手順を経てメガルへたどり着くことになる。砦壱島に近い場所に位置し、メガルに関連した人間達が集められている。隣の都市へは山を越えなければ行けなかったが、アクアラインで内陸部へのアクセスは容易となった。

私立山陵学園高校……ガイアー財団の出資で七年前に開校した。財団に關与した子供達を受け入れるのが創立の主たる目的であり、断ることもできるが、礼也や夕季のような中枢メンバーは強制的に入学させられる。校内にメガルとの通路もあると噂されるが定かではない。

全生徒数約千二百人。文武両道を掲げ、新設校ながら進学率も高く、スポーツ部門でも優秀な成績を収める、周辺地域では人気校。陵太郎が一期生。

制服は男女紺のブレザー、下はグレーのチェック。男子はブレザーにネック・タイ着用。女子は紺ソックスにリボン・タイ着用。夏は上着とネクタイをはずした服装で開襟シャツも可。女子には合服用のベストあり。

砦壱島……中総半島近海に位置する無人島。十五年前樹神調査団がメガル文明の遺跡とオリハルコン精製技術を発見した場所であり、そこで……

バトル・スーツ……精神感應を妨げないように、ライダースーツのように体にフィットしたデザインのもの。ジャケットとパンツに分割される。

光輔・ネイビーブルー、夕季・パールホワイト、礼也・ダークレツドが基調とされる。

プログラム……人類滅亡プログラムの略称。ダミーも含め数知れないプログラムが存在する。解析機により判明した時点でその名称のオペレーションが展開される。

人類が破壊活動の限界を超えた時発動し、過去いくつもの文明を滅ぼしてきたとされる。

メガリウム……精神感應合金の一つで人工筋肉のような役割もする。硬いと念じれば硬く、柔らかいと念じれば柔らかくなる。しかし人間の想像力には限界があり、液体になれ、というような極端な信号（不可能と思われるような命令に対して）は無意識のうちにカットされる。竜王の思考を介し、ガーディアンが形作られるものと考えられる。オリハルコンの項目参照。

メガル……ガイアー財団を母体とする、半官半民の巨大組織。傘下企業は世界中に展開しており、それらを総称してメガルと呼ぶこともある。その財力は先進国の国家予算に匹敵する。

オリハルコンの精製技術を唯一有し、それらの供給と技術の一部提供により政府や世界各国から対価を受け、財団を運営している。そうした機密を世界中が狙っており、報酬を約束された内通者が山のように存在し、暗躍する者が後を絶たない。

建前上は民間企業なので武器を持つことが許可されず、そのため政府との提携（第三セクター）の形をとっている。政府の管轄下でもある。国内では兵器の開発を許されておらず、関係各国で技術提携の元研究開発し、メガルへフィードバックされる。代表は風野博士。総合的な実権は火刈局長が掌握する（後に進藤あさみが引き継いだ）。

環境保全対策機関は建前上の名称であり、実情を知る者からは『迎撃要塞メガル』と畏敬の念を込めて呼ばれる。ガイアー財団の項目参照。

メガル三大計画……メガリウム計画、ガーディアン計画、竜王計画の総称。が、それは表向きであり、裏では別の意味合いも噂される。

メガル文明……ムー、アトランティスと並ぶ、第三の超文明。もしくは、同一の種族が名前を変え生きのびた三番目の文明。或いは、神界、魔界を脅かす三つ目の勢力ともされる。詳細は不明。

メック・トルーパー……カーキ色の特殊装甲服を着用。見た目は普通の軍服に似たものだが、軍用銃弾程度なら跳ね返すことが可能。簡素な増幅機能を装備し、発動時は筋力の倍以上の力を発揮する。表向きの所属は自衛隊からの派遣部隊であるが、給料体系も含めほぼ全員がメガルの職員扱い。そのため自衛隊のような上下関係は存在せず、階級も主任や班長といった一般企業に順じたものである。夕季や礼也は準隊員扱い。忍も同様であったが、メガルの正規職員からの配置として同等の立場で接しているもの。エネミー・スイーパーの項目参照。

使用火器

サブマシンガン……MP5型近接兵器。取り回しに優れ、オリハルコン・コートのものなら一撃でインプのコアを破壊できる。

ハンドガン……シグザウエル・P226、及びH&K・USP改を主に使用。外見は特に変化ないが、通常のものより強化されており、特殊実包の装填が可能。MP5型と同じ弾丸が使用できる。他にも何種かの拳銃が採用されている。

車両……RVタイプから大型トレーラー、装甲車に近い物まで、様々な種類が存在する。必要充分すぎるほど頑丈な構造であるにも関わらず軽量にして堅牢、装甲も申し分ない。大型車両の後部に戦車砲や多連装ロケット弾を懸架した物も多数見受けられる。多様な弾頭と相まって、通常兵器をはるかに凌駕する火力を見せつける。

船舶並びに航空機……陸上部隊が主であるメック・トルーパーにおいては、これらの利用は主に輸送手段として用いられる。現状以上の火力を有することに多くの問題があるため、これらは表向きには非武装とされる。

竜王……別項目にて説明。

竜王の解説・第一部終了時点

（第一部終了時点での確定事項なため、既存話数に反映されていない部分は変更追加の可能性があるのでご了承ください。考察不足による勘違いなども判明し次第訂正していくつもりです）

三竜王の構造……機械部分はほとんど見当たらず、コクピットに手足が付いただけのような造り。そのためサイズの割に内部は結構余裕がある。光輔や夕季程度なら小柄な人間を抱えて乗せることも可能だが、あくまでも収納できると言うレベル。木場のような大男の体格ではきつい。動力部分、武装システム等、すべて未解明で、破損箇所は同等のオリハルコンで単に修復される。

覚醒時ハッチの裏面が点灯し、それを含めコクピット内全周囲がディスプレイ状となる。光学迷彩と言うより、まるでガラス張りか何もないように内壁が透明となり、思考を読み取り、操縦者が望む情報が追従して提示される。

搭乗する操縦者の潜在能力によって無限に力を発揮するとされ、ガーディアンも同様のシステムであると推察される。現状では光輔ら三人を上回る能力の持ち主は判明していない。

燃料ユニット……歩行、及びマニピレーターとして操作するためのもので、覚醒時には不要となる。あくまでも補助動力源であり、

オビディエンサーの覚醒後は必要とされないため取り外された。無線や連絡用カメラ、ディスプレイのための小型バッテリーは継続して搭載。

ゴーグルシステム……ゴーグルを通して外部の様子や必要な情報が得られる。計器類での状態チェックも行えるが、燃料がなくなれば使用不可となる。覚醒後は無線用途以外取り外された。

三竜王専用武器（携行用火器）

コイルガン……竜王専用に開発された火器。火力、貫徹力に優れる。装填数、二十発。スぺアユニット、六弾倉携行。（ただし空竜王は四弾倉）

多弾倉マシンガン 25ミリ口径の機関銃。オリハルコンコートを使用した実包を使用。装填数、百発。二挺携行可。スぺアはコイルガンのもとはほぼ同じサイズ。

30ミリバルカン 腰だめに構え、一秒間に百連発の速射で敵をちぎり飛ばす。サポートカーとの連携が必要で、あまり実用的ではない。空竜王には装備できない。

陸竜王

三竜王中最強の攻撃力を持つ。普段は緑色と茶色の外殻だが、特

性を発揮する時には真紅のボディカラーに変貌する。眼の色は赤。身長五・九五メートル、体重二・八五トン、全幅二・五五メートル

ナツクル・ダスター……超振動ダガー。両ナツクルの周囲に握り込まれるように、高速で振動する光の輪ができ、対象を切り裂く。

バーン・クラッカー……拳の保護具状の鋼板（三十×五センチ、最厚部十センチ）を高熱を放ちながら撃ち出すもの。インパクトの瞬間熱量が高まり爆発を起こし、隆起部に収納された極細ワイヤーにより素早く手元に引き戻される。その破壊力は一撃で複合装甲の重戦車を粉碎し、新鋭戦艦の横腹に大穴を穿つほど（仮にその一撃に耐えられたとしても、衝撃と飛散した内壁によって内部は壊滅的な被害を受けるものと思われる）。実質三十センチの弾頭部を持つ、最大射程一キロメートルの徹甲弾でもある。質量、射出力言えば、同口径の弾頭を持つ滑空砲よりはるかに上。

サンド・ブラスト……手首を高速で振動させながら大地に打ちつけ、衝撃波を巻き起こす。敵を攪乱させるために使用することが多い。

海竜王

海中での戦闘を得意とし、防御力に特化する。普段は藍色であるが、特性を発揮する時には深海のような黒いボディへと変わる。眼の色は黄橙色。

身長五・八メートル、体重二・九トン、全幅二・六メートル

超高密度クロー……細く長い鋭利な一本爪。現存するどの物質よりも重く硬い。対象を突き刺し、切り裂く。

アロー・プレッシャー……チェーン付クローを射出、対象を遠方から突き刺したり、先端にカギ爪を作り引っかけて振り回したりする。最大射程五百メートル。

ナイト・フォッグ……両手のひらを突き出し、周囲に農霧を撒き散らす。敵の視界を奪い、攪乱させる目的で使用される。

空竜王

三竜王中、唯一空を飛ぶことができる。防御力、攻撃力では他の二体に劣るが、スピードにおいて他の追隨を許さない。普段は全身白色で、特性を発揮する時には鮮やかな白銀の色につつまれる。眼の色は青色。

身長六・二五メートル、体重二・二トン、全幅二・四メートル（翼展開時、約八〜十メートル）

フェザー・ブレード……両手首（甲）からリリースされる、あらゆるものを切り裂く両刃の剣。羽のように軽く薄い。

拡散空波……ブレードを内から外へ振り払うことによって起きる

真空の波動。射程はそれほど長くないが広範囲の敵に対して有効。

ドーン・トルネード……人差し指を突き立て高速回転させることによって起こる渦を振り下ろす。遠方の敵を吹き飛ばすことができる。

第十一話 『シーユアゲイン』 OP

進藤あさみは表情もなく、彼方の通話相手に相づちをうっていた。
よどんだまなざしを薄暗い室内に泳がせる。

『ガーディアン封印を解いたそうだな』

「申し訳ありません」

『何故私の指示を守らなかった』

「計画を実行すべきタイミングを逸してしまったと判断したためです。ロシア支部の妨害も含め、あれほどまでの状況に陥ってしまえば修復は不可能だったものと考えられます」

『一度リセットすることが望ましいと考えたわけか』

「はい」

『なるほど、一理ある。我々の目的はメガルの消滅であって、世界の破滅ではない。だが、それは君個人が決断すべき問題ではない』

「申し訳ありません。今後、指示をあおがずに勝手な行動をとらないことをお約束いたします」

『わかつていればいい』感情のともなわない謝罪をすんなりと受け入れる。『くどいようだが、ガーディアンの封印は今後何が起ころうと解いてはならない。周知のとおり、プログラムは風野博士が砦壱島から三竜王を持ち帰ったために発動したことは、まぎれもない事実だ。アスモデウスは奪われたそれらを取り返しにやって来たにすぎない。だからメガルだけが襲われる。決して人類に敵意を持つて訪れるわけではないのだ』

「心得ております」

『懸念はそれだけでない。博士が己の私腹を肥やすために我々を欺いていることが知れたら、政府も世界中の先進国も黙ってはいまい。メガルのせいで日本が孤立化するような状況だけは、何があろうと

回避しなければならない』

「……」

『遠からず、第二、第三のアスモデウスが押し寄せて来るだろう。そうなる前に何としてもガーディアンと三体の竜王を砦林島へ還さなければな』

「はい」

『今となつては君だけが頼りだ。躊躇するな。手段も選ぶな。この国を守るためなら、私は悪者になつてもかまわない。できうる限りの支援は約束する。頼んだぞ、進藤司令官』

「……はい」

『海竜王の件も含めてだ。いいな』

「わかつています。人選には細心の注意を払っておりますのでご安心ください」

『信用してもいいのか』

「はい。すでに我々への賛同も確認済みです。彼女ならば必ず期待に応えてくれるはずです」

『そうか……』一拍おく。『我々の協力者たる人員、か』

「はい……」司令室の窓から突き刺さる夕陽の眩しさに目を細めた。
「火刈さん」

あさみの全身が血のように紅く染まっていた。

第十一話 『シーユーアゲイン』 1

お目当ての桔平が外出中だと受付けで告げられ、古閑夕季はメガ
ル本館を出てメック・トルーパーの待機事務所へと向かっていた。
呼び出しがあつたわけでも、訓練の日でもない。

「おう、夕季」

後方から呼び止められ、夕季が振り返る。

ガッチリ体型の日焼け顔がにやりと笑う。駒田かつみだった。

「駒田さん」

「何やってんだ、こんなところで？」

「別に。……鳳さんは？」

「鳳さんなら今日は休みだ。何でも娘の用事とかだよ」

「ふうん……」

「何だ？ 何か鳳さんに用でもあつたのか？」

「……別に。最近顔見てなかったから」

「お、あの人喜ぶぜ。伝えておいてやるよ」

「いいよ、言わなくても……」

夕季が照れ臭そうに視線を落とす。

穏やかな表情で駒田がそれに注目した。

「アスモデウスがいなくなつてから俺達も平和ボケしてしまつてな
情けない話だが、何やっていいのかよくわからないんだ。南沢なん
て有休とりまくつて、ガキと嫁さんの相手だ。世間でもメガルのバ
ツシングさえあれど、俺達の存在なんてないに等しいみたいだしな
さんざん泣きついてきやがったくせして」

「それでいいんじゃない」

「ん？」

「あたし達が忘れられてくるくらいがちょうどいいと思う」

涼しげにまなざしを泳がせる夕季を、駒田は頼もしげに眺めていた。意味ありげに、ふっと笑う。

「そもいかないんだな、これが」

「？」夕季が不思議そうに駒田の顔を見上げた。

「おまえは普通の……、普通よりちよつと変わった女子高生に戻ればいいのかもしれんが、俺達はこの本職だからな。いつどんな不測の事態が起きてもいいように、テンションだけは維持しておかなければならない」

「……」夕季が口をへの字に曲げる。

「で、メツクの士気を高めるためにも、かねてから温めていた提案がある」体育会系の笑顔を向けた。「一日メツク隊長の実施だ。こんなこと誰も思いつかないだろう」

「……」嫌な予感がしていた。「……誰がやるの」

「いや、だから、おまえに……」

「やだ」駒田に背を向け、すたすたと歩き出す。
手を伸ばし、駒田の声が追いかけた。

「だからな、おまえならみんな納得するんだって。南沢に空竜王のカブリモノとかさせてな、鳳さん扮するアスモデウスをおまえがえいやつと……」

立ち止まり、夕季が駒田をじろりと見やる。

すると駒田のテンションがみるみるしぼんでいった。

「……と、もう二度と言わないから、そんな柊さんを見るような顔で睨まないでくれ」

「睨んでない」困ったように駒田を見つめた。「どんな顔……」

エネミー・スリーパーの事務所に足を踏み入れる夕季。

忍の姿はなく、人影もまばらだった。

きよろきよろと室内を見回す夕季に、休息中の大沼透が声をかけた。

「どうした、夕季。誰に用だ」

「木場さん、いないの？」

「隊長なら外出中だ」

「そう……」

「おい、真吾。飲み物買ってきてくれ」かたわらの隊員へ千円札を手渡す。「俺は炭酸だ」

「しゃ！」夕季の方をちらと見て、黒崎真吾は全力で自販機へ直行した。

「めずらしいな、おまえがこんなところへ来るなんて」

「……」大沼の顔をまじまじと眺め、夕季はそれを口にした。「今度うちに来る人のことで、木場さん何か情報ないかと思つて。お姉ちゃんもよくは知らないみたいだし」

「ああ、メガ・テクノロジーから出向してくるっていう例のか」

「桔平さんもつかまらないし。大沼さん、何か知ってる？」

「さあな」首をかしげる。それから夕季へと向き直った。「噂なら聞いているが、かなりのやり手らしいな。おまえや忍の知り合いなんだろ。あまり嬉しそうじゃないな」

「う、ん……」夕季が頷く。「嬉しくないわけじゃないんだけど……」

「何か複雑な事情でもあるのか」

「……」目線を落とす。「あたし達の知ってる人とはちよつと違うような……」

大沼も複雑そうな表情で夕季を眺めていた。

「そうか。環境が変わつて別人のようになってしまう人間もいる。淋しい気持ちもわかるが、ステップアップに成功したのなら、むしろ喜ばしいことじゃないのか？」

「うん……」

「買ってきたつス！」

飲料水の缶を抱え、黒崎が到着する。

その中の一つを大沼が夕季へ手渡した。

「それはそうと……」

ぺこりと頭を下げ、ジュースを受け取りながら、夕季が大沼に注目する。

嫌な予感がしていた。

「メックの一日隊長の話が出ているんだが」

「……」

「こいつの発案でな。木場さんも含め、俺達全員一致で可決した。前々からそう思っていた人間も結構いたようだ」

「じゃス！」黒崎が照れたように笑った。「みんなノリノリッス」

「ということだが、どうだ？」

「やだ……」

「では仕方がないな」

「じゃスうね……」

「……」

「……無理強いする気はないから、そんな柊さんを見るような目で俺達を睨まないでくれ」

「非常に切ないっス……」

「……睨んでない」困ったように大沼を見つめた。「どんな目なの……」

「……」

夕刻、正面ロータリーで桔平の姿を見かけ、夕季が近づいて行く。

「桔平さん……」

桔平は夕季に気づくと一瞬でネクタイをゆるめ、情けない表情全開でグチり始めた。

「あー、忙しい、忙しい。まったくまいっちんぐだぜ。毎日毎日書類整理ばっかだもん。誰か嘘でもいいから、インプの大群が出たとか通報してくれねえかな。いや、そいつは不謹慎だな！」自己ツッコミ。「んじゃ妊婦の大群が出たとかならどうだ？　おいおい、妊婦の大群ってさ！　違うか！」

「……」

「ほんとよ、これじゃ死んじまうぜ。おい、夕季。一日でいいから

副局長代わってくれ。一日副局長だ。偉そうなジジイどもがペコペコしてきて気持ちいいぞ。魔女っ子みたいなカッコさせてやるからよ。それよか、ネコ娘のカッコの方がいいか？ ん？ それじゃ、一日ネコ娘だな。一日ネコ娘って！ 違うか！」

「……」

ふうむ、と桔平が顎に手をあてる。

「いや、いつそ一日とかじゃなくてずっとでもいいかもな。朴さんに俺のデスマスク作ってもらって、おまえがかぶってだな……。デスマスクって、おい！」

「……」

「なんだ、おい、そのあつけにとられたような表情は。おまえはいつも俺を見る時そんなツラしてやがるが、そのマヌケを見るようなまなざしはいただけねえな。レベルの高いマシンガン・トークに圧倒されて言葉もねえのは仕方ねえが、せっかくのリスクが伝わってこねえぞ。発想の奇抜さに、思わず、なんてすごい人なんだろう、ってか！」

「……なんてバカな人なんだろうって思ってた」

「……違うかあ……」

木場雄一はメガル本部の最上階へ向かうエレベーターの中で、隣の人影へと目をやった。

あらかじめ木場に注目していた相手と目が合い、慌てて顔をそむける。

するとどこことなく雰囲気があさみと似通うその人物は、まるで微笑ましいものを見るように、にこっと笑ってみせた。あさみのような含んだ笑みだった。

木場の背筋を冷たい何かが走り抜ける。

栗色のミディアムレイヤーに、年の頃は二十四、五。細身の眼鏡の奥に隠れた鋭いまなざしは相応の積み重ねを感じさせた。

「進藤局長は明日まで出張だ。明日の夕方頃、もう一度司令室を訪

ねるといい」

まじまじと見つめられ、バツが悪そうに咳払いをする木場。

それをおもしろそうに眺め、当の人物、伏見綾音はまた含むような笑みを木場へ向けた。

「ええ、わかっていきます、木場さん」

前方に向き直り真顔になる。それから自分自身に言い聞かせるように呟いた。

「わかっていきますよ……」

第十一話 『シーユーアゲイン』 2

伏見綾音はメガルの基地内をくまなく探るがごとく徘徊していた。その鋭いまなざしはどんな些細な情報も見逃すことはない。

メック・トルーパーの待機所の付近で足を止めた。

獲物を狩る鷹のような眼光が何ごとかをとらえキラリと輝く。

生つばを飲み顎を引くと、その無防備な背中に音もなく飛びかかっていった。

「！」

ただならぬ気配を察知して、眉間に皺を寄せ夕季が振り返る。その顔を確認し、瞬きも忘れ声にならない声を発した。

「綾、さん……」

「ゆゝきいゝ」綾音の顔つきが豹変していた。にこにこと笑い、嬉しそうに夕季に抱きつく。「ひっさしぶり」

くすぐったそうに身をよじる夕季。しかし、決して嫌そうではなかった。

「……。いつ帰って来たの」

「昨日。あんた大きくなったねえ。あたしより背が高くなったんじゃない？」

「あ、うん……」

「ほら、また、もごもごもごしてえ。変わらないねえ、あんたは」

「あ、うう……」ちらちらとつかがうように目線を向ける。「連絡してくれば迎えに行ったのに……」

「ん？ 木場さんが来てくれるって話になってたみたいだからね」

「ふうん……」

「何だかビップ扱いになっててさ、まいっちんぐだったの。護衛な

んていらなのね。ここもすっかり変わっちゃってさあ。前こんなに広くなかったじゃん。ちょっと散歩してたら迷子になっちゃって、おんなじとこばっかグルグルまわってたら何だか切なくなってきたちゃってさ、びええって泣きそうになっちゃて、そしたら見覚えのある場所に出て、あんたみたいな顔が見えたからさ、一瞬違うかなって思ったんだけど、いや、あの顔は昔の忍に似てるかもって思っ
つて、ええい、いいや、駄目でもとってな感じでさ、がばちよ
つと」

「うん、うん……」怒涛の口撃にただ凌ぐのみの夕季。「あ、の……」

「ねえ、あんたまた基地の中案内してよ。あたし地図とか見るの苦手なんだよね」

「……あ、いいけど……」

あつけにとられる鳳と駒田。

「苦手って言うか、嫌いなんだけどね。面倒だからとりあえず行つたれ、みたいな感じで手ぶらでぶっつけ勝負してみたんだけど、やっぱり気がないから駄目だわ。こういうランドマークとかがないとこ
つて全部同じに見えちゃってイライラしてくるし、一つ角曲がったら全然知らない建物ばっかだしさ。ほんと、まいっちんぐだって。今日は後で進藤さんとこに行かなくちゃいけないから、また落ち着いた時にゆっくり頼むね。あ、今度の土曜とか……」

「久しぶりだな、綾音」

鳳に声をかけられ、綾音が咄嗟に身なりを正す。

「ご無沙汰しています、鳳さん」

「昨日帰って来たのか？」

「昨日帰ってまいりました」

鳳の顔もまた、にこやかだった。

「誰だ、この人？」

小声でたずねる駒田に夕季が答える。

「あたし達と一緒に財団の募集で集まった人間の一人。今はアメリ

力の関連企業で働いているけど」

「へええ」

「さすがのおまえも綾音の前じゃかたなしたな」

鳳にからかわれ、照れ臭そうに夕季が口をへの字に曲げる。

「仕方ないよ。綾さんはあたし達全員のお姉さんみたいなものだから」

「夕季、駄目じゃない！」

突然の怒号にすぐみ上がる夕季。

眉をつり上げ、綾音が睨みつけていた。

「目上の人に何て口きくの！ ちゃんと敬語つかいなさい」鳳に頭を下げる。「すみません、鳳さん。これからはちゃんとさせますから。ほら」

振り返り、夕季のへの字口を見て綾音のボルテージがさらに度合いを増した。

「夕季！」

「……」

そのやり取りをおもしろそうに眺めていた鳳が救いの手をさしのべる。

「いいんだ、いいんだ。こいつなら」夕季の背中をバシバシと叩いた。「やることはちゃんとやってる。誰も文句は言わん」

「俺達の命の恩人だからな。な、夕季」

合いの手を入れた駒田に、綾音が不服そうな顔を向けた。

「だからってお世話になっっている人達に対して……」

「そんなこと言ったら、メックもエスもこいつに敬語を使わなくちゃならんことになるな」楽しそうにバシバシと鳳。「いつそそうするか？ 夕季」

「ほら、そんな顔で睨むんじゃない！」

「おおっ！」

ビクリと退いた鳳を睨みつけ、夕季が押し殺した声を絞り出した。「睨んで……、ないです……」

「……余計おつかねえぞ」ぼそりと駒田。
かすかな物音に綾音が振り返る。

メロンパンをくわえたまま、呆然と立ちつくす礼也の姿があった。
「礼也！」

綾音に呼びかけられ、慌てて口からメロンパンを取り出す礼也。

「あ、綾さん……」呆けたように呟いた。

「またあんたは、そんなもんばかり食べて！」

「……いきなりかよ」

紙袋を後ろに隠し、緊張の面持ちで礼也が綾音に近寄って来た。

「あ、いや……。いつ帰って来たん、すか」

「だから昨日だってば」

「だからって言われてもよ……」

今いち距離感がつかめず、戸惑いを隠せない礼也。

すると綾音がにやりと笑った。

「礼也、背、伸びたね。カッコよくなったよ」

「んなわけねって……」綾音にそう言われ、照れたように礼也が口ごもる。それからかしこまった様子で向き直った。「いつまでいるん、すか」

「しばらくいるよ。世話になるけど、よろしくね」

「や、いや、そんなよ……」微妙なりアクション。それは歓喜を意味していた。小さくガッツポーズをする。「おし」

「おい、夕季。ありやどういことなんだ」

駒田が不思議そうな顔を向ける。

夕季は何も言わずに綾音の顔を見続けた。

「たいしたもんだな」

メックの事務所で資料を眺めながら桔平が感嘆の声をもらす。

「少なくとも補助具を装着した状態でのシミュレーションでは、礼也や夕季より上だ。おそらく陵太郎よりもな。その他もろもろの処理能力も申し分ない。本部でもこれだけ優秀な人間は見当たらない

だろうな。なんでこんな鬼スペックをメガなんぞにくれてやったんだろうな。うちの人事部は節穴か」

「彼女が望んだらしい」

重々しい口調の木場に怪訝そうな顔を向ける桔平。

「またなんで」

「詳しくは知らん。だが彼女自身が望んで、子会社のメガ・テクノロジーに出向したことは確かだ」

「……。おまえ、前にいた時、彼女とは……」

「知らん。俺とは入れ違いだ。だが噂を聞く限りでは、そこまでの人物ではなかったようだ。何がきっかけかは知らんが、常人では考えも及ばんほどの努力を積み重ねて、現在のような優能な人間になつたらしい」

「……そうか」ふん、と息をつく。「まあいい。理由なんざ関係ねえ。優秀な人間ならこっちは大歓迎だ。口だけ達者な連中ばかりだからな、ここは。まあ、すぐに光輔みたいにつてわけにはいかないだろうが、そのうちな、ばちばちとだ。……お！ 思い出した」

「？」

「おい、木場。しばらく、しの坊を俺の秘書として使わせてもらつてもいいか？」

「そいつはかまわんが」

「そうか。助かるぜ。事務処理、事務処理で死んじまいそうだ。奴ならデスクワークもドンとこいみたいだしな」

「あいつもまだ本調子じゃないからな。気にするな、と言ってはいるものの、居場所がなくてつらそうなところもあるし、かえって気が紛れていいかもしれんな」

「こっちが用がある時だけでいいからよ。頼むわ」

「ああ……」木場が顎を引く。それからずっと喉もとにつかえていた懸念を口にした。「桔平」

「あん？」

「……。伏見綾音には気をつける」

「何がだ？」

「あいつは進藤の親派だ」

「……」

「どうぞ」

進藤あさみに招き入れられ、伏見綾音は司令部別室へ足を踏み入れた。意味ありげな笑みを浮かべ室内を見回す。

「久しぶりね、伏見さん」

あさみに声をかけられ、その笑みを崩さぬまま綾音が向き直った。
「お久しぶりです。あさみさん」

表情もなく綾音の顔を見続けるあさみ。

それに動じる様子もなく、綾音は含んだような笑みをあさみへ向けながら言った。

「髪、切ったんですね。私も切ろうかな」にやりと笑う。「ご心配なさらないで下さい。必ずあなたの期待に応えてみせますから」

夕季と綾音は煩雑に人が入り乱れる本館の食堂で、向かい合って昼食をとっていた。

「すごいね、綾さん」

気を遣うようにそう言った夕季に顔を向ける綾音。それが午前中のシミュレーションのことだと気づく。

「よく言うよ」夕季の倍はありそうな皿になみなみと盛られたカツカレーのその上に、さらに小山ができるほどの福神漬を積み上げる。「おまえが言うど嫌味にしか聞こえないんだけど」

「……。本当だよ。あたしだってあんなにできなかった。桔平さんもびっくりしてた」

「きつぺいさんって、柊副局長のこと？」

「うん」

「ふん……」

「……」

夕季がそわそわし始める。綾音との距離を探るように何度も顔をうかがい見た。

「……。あの人は昔からそういうふうに呼んでいたから。その時は副局長なんかじゃなかったし。みんなそう呼んでるし……」

「別に何も言っていないでしょうが」

カレーライスを頬張りながら何気ない口調で綾音。

夕季が小さく口を曲げた。

「でも、言いたそうな顔してた」

その様子を眺め、綾音があきれたような顔をする。

「もう言わないよ。あんたらの人間関係に口出しする気はない。柊さんのこともよく知らないしね。んんん……。……ここも味が落ち

たねえ。何、このカツ。うつす」

言葉とは裏腹に、嬉しそうに綾音は次々と山を削り取っていった。
「知らなくてもいいよ」

「なんで？」

「変な人だから」カレーを口へ押し込みながら、もごもごと夕季。

「自分が好きなこと以外はまるで駄目だし」

「いいじゃん、いいじゃん。あたし変な人結構好きだよ」

「でも」

「おまえだって人のこと言えないだろ。充分変だよ」

「む、ぐはっ！……」呼吸のタイミングを誤り、むせ返る夕季。涙
目で恨めしそうに綾音をうかがい見た。

ははっ、と綾音が笑った。

「こんな粉っぽいカレーじゃ、変なところにも入るわな。これで四百
円だから文句も言えないけどさ」

夕季がかすかに反抗的な目を向ける。

「……あたし、結構好きだけど……」

「知ってるとは思っけどさ。いくら気さくに接してくれるったって、
あの人はここの副局長なんだから、その辺ちゃんと線引きしときな
よ。あんたまだ高校生なんだし、これからどんなふうにお世話にな
るかもわからないんだから」

「……わかってるよ」

「一流大学出てキャリア重ねてきた人達ですら、あの人の前では文
句も言えずにペコペコしてるくらいなんだからね。私生活はどうだ
か知らないけどさ」スプーンで茶碗半分もの量のカレーをすくい、
大きな口にガバツと押し込む。「ふんと、あたひらが口きけらいよ
うな人らが束にらつてもからわないくらい凄いひろらひいんから
」
「……」
「……」

「あんたさ、友達いるの」

基地内を案内している最中に綾音にぶすりと言われ、夕季が絶句する。

「……………うん」

「その子の名前、言ってみな」

「……………みやちゃん」

「他には」

「……………」

「あのね、あんたにとって雅はたった一人の友達なのかもしれないけど、雅から見たらあんたは大勢いる友達の一人にすぎないんだよ。特別でもなんでもないんだよ」

「わかってるよ……………。……………そんな言い方しなくたって……………」

「まわりが自分より馬鹿に見えちゃうんだろ？ あんたの性格だとわからないこともないけどさ」

「そんなこと、思っていないけど……………」

「だったらいいけどさあ。変なプライドとか持つてるなら捨てちゃいな。でないとつまんないのは自分の方だよ」

「……………」

「メックの人達はよくしてくれてたみたいだけど、もっと自分に近い友達も作らなきゃ駄目だよ。結局最後にいろんな相談にのってくれたり助けてくれるのは、そういう友達なんだからね」

容赦ない綾音の連打。まるで夕季の心の内を見透かすかのようにだった。

「わかってる、けど……………」

「わかってるんならちゃんとやりな。そういう努力もしなきゃ駄目。あんたは黙っていると誤解されちゃうタイプなんだから。向こうから来るの待ってるだけじゃ、いつまでたっても本当の友達なんてできないって」

「……………」

「ほら、都合が悪くなるとそうやってすぐ黙る。あたしには通用しないからね」

「……綾さん、キツいよ」

「あんぽん。あんたいつも人をへこましてんでしょうが。少しはその人達の気持ちが変わったかっての」

「……そんなことしてるつもりない」

「つもりなくてもしちやってんの。おんなじこと。無意識だったらなおのこと問題だったの。自分が損するだけだよ」

「あたしは……」

「損してもかまわないとか言ったら承知しないからね」

「……」

「夕季。あたしは別にあんたが憎くて言ってるわけじゃないからね。あんたのことが心配だから言ってるんだよ。そんなふうにつまんなそうに、ぶすつとしてる顔見たくないから。でももう言っただけなの。いって言うのなら、二度と言わない」

「それは……」

綾音の口もとが意地悪そうにつり上がる。

「ほんと、あんたって、こういう攻撃に弱いよね」

「誰だって弱いと思うけど……」

「それは凶星つかれて痛いからでしょ」

「……。自分だって、本当の友達はいなくせに」

「い！……」

「凶星だ」

「……。いるって、バカたれ」

「名前は」

「……。……忍」

「あとは」

「……。メアリとジーン……」

「嘘だ」

「嘘じゃないって！ 本当にいるんだって！ 英語の教科書に出てくるような名前だけだなー！」

「信じられない」

「ああ！ んじゃ、この世にリアルネームの山田花子は存在しねえ
つてのか！ 佐藤実わあつ！ 全部都市伝説かってことですよ！」

「歳は。身長は。髪の色は」

「……まあ、その。その話題はここでおしまいに……」

「駄目。今こっちの攻撃権だから」

「あいぐん……」情けなさそうに眉を八の字に寄せた。「わかった。
あたしが悪かった。もう言わないから！」

口をへの字に曲げ、バツが悪そうに夕季が顔をそむける。

その横顔を綾音は穏やかに見つめていた。

「あんたさ、学校に行っても、おもしろくないでしょ」

「……普通」

「嘘言いなさんな。友達もいないのに、おもしろいわけないでしょ
うが。普通、って、おまえが全然普通じゃないくせによく言うつて
の」

「……」

「だから、黙り込むなって」

「……。あたしとしても、みんなつまらなそうだから。だったら気
を遣うより何もしない方がいいかなって……」

じつと見つめる綾音。その見えざる圧力に押され、夕季が顔を伏
せた。

「あたしは勉強やスポーツができる人って、すごく興味があっただけ
どね。話とかしたくて近寄ってたりね。でも、向こうからシャッ
ター閉められたら、アカンわね」

「……」

「本当は損得じゃないってわかってるから、そんなこと言うんでは
よ」

「……。……うん……」

「ねえ。どれだけウマが合う人とだって、百年の親友ってのは一日
じゃできないもんなんだよ。積み重ねがあるから思い出つてのがで
きてくんだからね。でないとおんた、何も残らないよ」

淋しそうに顔を伏せる夕季。明らかにダメージを受けていた。

それを見て綾音がふっと笑う。

「へこむな、へこむな」夕季の背中をバンバンと叩く。「ま、あたしはあんたといえると楽しいけどね。いじめたり、からかったりさ。いじりがいあるよ、あんたも礼也も」

恨めしげに夕季が顔を向ける。

するとさらにももしろそうに笑いながら綾音は続けた。

「冗談だったの。わかってるならいい。あんたがそれでいいってんのならさ。もう子供じゃないんだしね。でも必ず自分が幸せになるための選択をしなよ。でないと、いつまでもずっとネチネチ説教してやるからね」

「……うん」ようやく安心したように笑った。「綾さん、相変わらずだね。学校の先生だってそんなこと言わないよ」

「当たり前だろ」にやりとする。「あたしはあんた達のお母さんなんだから」

二人は竜王の格納庫へ足を踏み入れていた。

綾音にはまだ実物の海竜王に搭乗する許可が出ておらず、もっぱら東棟地下階層にあるシミュレーション・ルームでの訓練が日課となっていた。

陽射しを受け、白く輝く空竜王を見上げる綾音。

「これにあんたが乗ってるんだね」

「うん」

「かつこいいね。頑張んなよ」

夕季が小さく頷いた。

それを眺め満足そうに綾音が微笑む。

それから隣にある海竜王に目をやり、複雑そうな様子で嘆息した。

「これが私の棺おけか……」

「え？」

夕季を見ようとせず綾音がニタリとする。「なんちってね」

「……」

他の竜王とは異なり、保護具を装着したままの海竜王を綾音がいとおしげになで始めた。

「本当は感じたままに動かせなくちゃ駄目なんだよね」

その表情は夕季にはしごく悲しげに見えた。

「すぐには無理だよ。あたしも今みたいになれるまでは結構キツかった」

「こいつにも一応擬似感応システムが搭載されてるんだけど、フイードバックされたデータを見ると情報の伝達率は本物とは桁違いだからね。あんた達が最新鋭の戦闘機だとしたら、こっちはおぼさんが乗る自転車がいいところ。相手が三輪車くらいなら何とかなっても、それ以上は無理。ま、今の人類のテクノロジーじゃ、その三輪車にすら対抗できないときてるから、お話にもならないんだけどね」

「……」

「何かきっかけみたいなものはないの？」

ふいに問いかけられ、夕季が身がまえるように顎を引いた。

「……わからない。でも……」

綾音が振り返る。瞬きもせずに夕季に注目していた。

夕季は綾音から顔をそむけ、言いにくそうに先の言葉につないだ。

「竜王に認められないと駄目なような気がする」

「……竜王に？」

「……。あたしや礼也じゃ、海竜王を動かすことができなかった。

陸竜王も礼也にしか反応しなかったし……」

「こいつもそうなの？」空竜王を指さす。

「……うん」

綾音が再び海竜王へと向き直った。

「あんたがそう言うくらいなんだから、きっとそうなんだろうね」

「……」

顔を上げ、夕季が綾音を見つめる。

「そっぴや、礼也も同じようなこと言ってたかな。あたしには無理

かもしれないね」

「そんなことないよ。綾さんならきつと……」

綾音はちらと夕季を見ると、好ましいものを受け入れるように穏やかに笑ってみせた。

「心が汚れきった人間じゃ駄目なんじゃないの？ あたしはあんたらみたいにはピュアじゃないからね」

「……」

移動式のステップに登り、海竜王のコクピットを覗き込む綾音。目を閉じ、静かに息を吸い込んだ。

「陵太郎の匂いがする。ひかるの匂いも……」

何も言わず綾音の行動をじっと見守る夕季。すんすんと、かすかに鼻をうごめかせた。

「きつと光輔は二人に守られてきたんだね。あんた達も」

「……」

「あたしは許してもらえそうにないけどね……」

「……。……え？」

「何でもないって」

振り返り綾音が笑う。

それはどこか淋しげに夕季の目には映った。

「夕季と仲直りできてよかったね」

本館連絡通路で並んで歩く綾音に言われ、忍はふいをつかれたように目を丸くした。

「……。どうしてそんなことまで」

にやりと笑う綾音。

「何でもわかってるって、あんた達のことは」

「あ、はは……」

「でもあんなに仲良かったのに、わかんないもんだね」

「……」 忍が顔を伏せる。しみじみとそれを口にした。「綾さんが行っちゃってからかな」

「あたしのせいかい！」

顔を上げ忍が笑った。それから少しだけ淋しそうに綾音を見つめた。

「綾さんがいなくなってからだよ。みんながバラバラになったのは」

「……」

「綾さんがいてくれたら、そんなふうにはならなかったかもしれない」

綾音の口もとがピクリと反応する。

「やっぱりあたしのせいだったのかい！」

「そうじゃないけど。でも、そばにいてくれたら、いろいろ相談したかったのになって」

「……」

淋しげに笑いかけながらそう告げた忍に、綾音はすべて見透かされていることを感じ取った。

「結局、残ったのは綾さんのまわりにいた人達ばかりだったね」

綾音も忍と同じ表情になる。昔を懐かしむようにふつと笑った。

「何言ってんだか、あんたは……」

「……。眼鏡、かけるようになったんだ」

「ん？ ああ、仕事中はね。この方が頭良さそうに見えるでしょ」

「そう。知らなかったな……」

忍が通路のガラス越しに外の景色を眺める。

雲のない青空は遠く彼方まで広がり、海面と融けあっていた。

忍の横顔を見つめ、複雑そうに綾音が眉を寄せる。鼻から深く長い嘆息をした。

「柊さんってどんな人？」

唐突な綾音の問いかけに忍の心が呼び戻される。

「いい人だよ。少しクセのある性格だけど。あたしも桔平さんにひっぱってもらったの。今のあたしだと、どこにも居場所がないから訓練には少しずつ参加しているけど、まだみんなの足手まといにしかないし」

「もともとあんたはデスクワーク向きなんだろうけどね」

「そうでもないんだけど……」苦笑い。「あの人、夕季とも仲いいのよ。一緒にケーキ屋さんとか行ったりして」

「へえ、あのへんくつがねえ」

「こないだも、夜までやってるバイキングのお店見つけたって大騒ぎしてた」

「夕季が？」

「桔平さんが」

「……だよ」

「あの人がいなかったら、あの子も心を開かなかったかもしれない。それだけじゃなくて、メガルも今のあたし達もなかったかもしれない。あの子はいつも人のことばかり考えている」

「あんたと同じだね」

「あたし、は、そんな……」

「ひよつとしたら、自分と向き合うのが怖いのかもね」

「……。まさか。あんなに強い人が……」

振り返り、綾音に笑いかけようとした忍が言葉を失う。

綾音は真剣なまなざしを海の彼方へ向け続けていた。

それは忍の知らない綾音の表情だった。

忍に気づき、綾音が表情を和らげる。

「……。だよね」

すると安心したように忍は言葉をつないでいった。

「司令にも臆せず堂々と意見が言えるのは、ここではあの人だけだよ。進藤さんにとってもかなりやりづらい相手だと思う」

「……そうかな」

「そうだよ。そのうち絶対更迭されるって、桔平さん、いつもわめいているけど」

「ふうん……」先と同じ顔になった。

「……」

「おい、しの坊」

背後から桔平の声が聞こえ、二人が振り返った。

咄嗟に表情を切りかえる綾音。

綾音の顔を認め、桔平が目を丸くした。

「お、ふっしみんないたのか」

「それやめてもらえませんか？」綾音が苦笑いする。「何だかニツカネンみたいで」

「あつはつはー！」楽しそうに桔平が笑った。「それ誰？」

「とにかくその呼び方、勘弁してください」

「じゃ、何て呼べばいいんだ？」

「はい」即答。「綾っぺ、お願いします」

「バカ野郎、そんなイテえ呼び方できるか！」

「そうですかあ？……」

残念そうに桔平を見上げる綾音。

その視線を鼻息一つで断ち切って、桔平は忍へ向き直った。

「おう、しの坊。頼んどいた資料だけど……」

「はい、机の上に置いておきました」

「お、もつかよ、さすがだな。サンキュー。しの坊がいてくれてほんと助かるぜ」

「そんな、私なんか何もできなくて。本当は他の方をお願いした方がいいのでしようけれど」

「バカ言え。この事務屋でおまえさんより仕事できる奴はいやしねえよ。速すぎてコピーとる時の手つきが見えねえ。忍者とコピー機がモチツキやってるみてえだぞ。さすが忍者のニンの字を持つだけのことはある」

「あ、はは……」

「的確なたとえかどうかはともかく、絵は浮かんできましたね」

「なあ。事務服もよく似合ってるじゃねえか。違和感ねえぞ。パツと見、ちよつと肩幅が広くて、背がでつけえオーエルにしか見えねえぞ」

「あ、ははは……」

「あんたはモデル体型だからね」

「おお、プラモデルだけどな、げはははは！」

「……」

「ベタ……」

「薔薇とか憂鬱とか愛媛県とか、俺の知らねえ漢字もすらすら書いちまうし、どうなってるやがんだ。普通、栃木とか新潟とか書けねえだろ。あと兵庫県とかよ」

「兵庫県、書けないんですか……」

「じゃあ鹿児島とか岐阜も無理ぽいですね……」

「無理ぽい話だったの。ほんとよ、メックの雑用やらしとくだけじやもつたいねえ。てか、俺が大助かりだ。しの坊には悪いが、当分俺の秘書してもらうぞ」

「それはいいんですけど、まわりの人達が変な目で見てますよ」

「かまうこたねえ、奴らやつかんでやがんだ。能書きばっか立派でろくに仕事もしやがらねえ小物のくせしやがって、兵隊のおまえさ

んが自分らより仕事ができるのが気に入らねえんだよ。ケツの穴がちっせえ、ちっせえ。そんなんじゃブリブリ出るものも出ねえだろ。いっちょ奴らにおまえのケツの穴のでけえとこ見せつけてやれ！高卒なめやがったらパワハラで復讐だ！おまえの顔見ただけでヒーヒー言っただけで逃げ出すくらいに恐怖心を奴らに植えつけてやるうぜー！」

「私はそんな気などまったくありませんけど……」

「どこから指摘したらいいのかわからないんですけど……」

「明日から能無しジジイどもにもペコペコ頭下げさせるからな。楽しみにしておれ！」

「……それは、勘弁してください」

「困ったことがあったら三田さんって人に聞けばいいからな。あの人は信用できる」

「はい……」

「ほんとよ、何でもできちまうんだな、おまえは」頼もしそうに忍を見やる。「完璧超人だな。シモネタもオツケーだし」

「それはオツケーじゃないです」

「酒のペースもハンパねえ。メタボ鳳もびっくりだ。なみいるウワバミどもを蹴散らして、新チャンピオンの誕生つてとこだな」

「そんなにたいしたことでも」恥ずかしそうに身をよじる。「私、飲んでもそれほど顔に出ない方なので……」

「よく言っぜ。こないだの飲み会でリンダの真似して腰振ってたの覚えてねえだろ」

「……え？」

「酔っ払って木場の目の前でよ、もぼどぼにぼとぼただあいい、あーっ！って。大概にしとけてばよ」

「……」フリーズ。「ひいいいいーっ！」

「あんたねえ……」

「困っちゃうナ、ほんとよ」

鼻から、ふん、と息をもらし、桔平が満足げに笑う。それから真

顔になつて綾音へ振り返つた。

「おい、綾っぺ、午後からもつかいシミュやるぞ。覚悟しとけ」

「はい」嬉しそうに頷く綾音。

「さっそく呼んじやってますね」

「え？ 何？」

「いえ……」

「綾さん」

夕暮れ時のメガル本館で夕季に声をかけられ、綾音が振り返る。まるでそれを待ちかまえていたかのように口火をきった。

「あ、夕季、晩飯一緒にカツカレー食わない？ 食堂ってやってるんでしょ」

「……」

「あれやっぱりクセになるね。なんでだろ。あんなにぼそぼその力レーなのに。あゝ、ハラ減った……」

ポンポンと腹を叩いたところでようやく夕季の横に桔平の姿があることに気づき、慌てて綾音が口もとを引きしめる。キリッとしたまなざしを向けた。

「柊副局長、お疲れ様です。夕季、あなたも用がないのなら早く帰りなさい。ここは遊ぶところじゃないのよ」

「……綾さん、もう遅い」

「……」

恨めしそうに夕季を眺める綾音。

そんなことなどおかまいなしに桔平は綾音に笑いかけた。

「おう、綾っぺ。これから夕季とバイキングに行くんだけどな、一緒にどうだ？」

綾音が一歩退く。

「あたしは……。すみません、今ダイエット中でして……」

「ダイエットってツラじゃねえだろうが」

「……いったい、どんなツラなんでしょう」

困惑するような様子の綾音を見かねて夕季が助け舟を出した。

「言っただじゃない。綾さん、ケーキバイキングなんて行かないって」

「ケーキ……」

そのかすかな変化を桔平は見逃さなかった。

「お」にやりと笑う。「いま目つきが変わったな」

「いえ、そんな……」

「いや、甘いものならドンとこいって顔だぜ」

「どうしてそうなるんですか」

「俺にはわかるんだよ。殿方ごときにや負けませんわよ、おほほほ！　って目してるぜ」

「それ、誰ですか……」

「やめなよ。綾さん嫌がつてるじゃない……」

「とばけんな！」

突然の怒号に夕季が口をつぐむ。顎を引いて二人の顔を見比べた。
「騙されねえぞ。その目は百戦錬磨のつわものの目だ。飢えた野獣の目だ。獲物を狙う獰猛な鷹の目だ。イーグル・アイだ」

「イーグルは鷹じゃなくて鷲ですね」

「そう、そのアイだ。隠したってそのちょっとエロい眼鏡の向こうで殺気が横モレだぜ。夜も安心できねえ」

「何気にデンジャラスな言いがかりはやめていただけませんか。私は争い事は好みませんので。でもどうしてもとおっしゃるのなら」

綾音の眼鏡がキラリと光を放つ。

二人の間にバチバチと火花が散り始めた。

「八時スタートだから、先にファミレスあたりで軽くイッちまってから戦地に赴くわけだが、ハンデはどうしとく？」

「でしたら、私のライスは太盛りで結構ですけれど」

「なるつ、俺のはてんこ盛りプラス、サラダバーで結構だ！」

「なら私は超てんこ盛り二皿と一ポンドステーキで……」

「上等だ、この野郎！　今日のメダマは紫芋のミルクフィードだ、覚悟しとけゴルア！」

「のぞむところですよ、おほほほ！」

「てめえ、おほほほ！」

「……」夕季は一人、淋しそうにそのやりとりを眺めていた。「誰……」

翌日、メック・トルーパーの事務所に、一人暗い顔で考えをめぐらせる桔平の姿があった。

木場が入室したことに気づかない。

「どうした、桔平」

木場に声をかけられ、ようやく桔平が重い口を開いた。

「……おまえの言ったとおりだった」

そのただならぬ様子に、木場が神妙な顔で桔平に向かい合っている。

「何があった」

「いや、あの女、とんでもねえタヌキだ」

「伏見のことか？」

「ああ、危うく騙されるところだった。愛想がいいのはそとつらただけだ。ちよつと信用した振りしたら、途端に牙を剥いてきやがった……」

桔平の表情がかける。

心配そうにそれを眺め、木場が眉間に力を込めた。

「何があった!」

「負けた……」

「……」嫌な予感につつまれる木場。ようやくことの真相に近づき始めていた。「……とりあえず、何が、と聞いておくぞ」

「ケーキの大食いに決まってんだろが」あきれたように木場を見下し、それを口にする桔平。「甘いものには絶対の自信を持つこの俺に、奴は初めて土をつけやがった。しかも完敗だ。俺の得意ジャンルの早食いでも話にならねえ。あんな恐ろしい女、見たことねえ。情け容赦もねえ。とつくに臨界点突破でタップ寸前の俺を置き去りにし、紫芋のミルフィーユがあのでつけえ口の中へ次から次へと。ああ、恐ろしい。あいつの目には俺も夕季も映らねえ。手当たり次

第に目の前の敵を食らいつくすバーサーカーみたいなもんだ。ケーキ大食いマシーンだ。うっ！ 思い出しただけで吐きそうだ、ぷ……」

「……夕季はどうした？」

「ネコ娘みたいなツラで黙々とプチケーキをたいらげていやがった。あいつもあの歳で数々の修羅場をくぐり抜けてきただけあって、さすが肝が据わってやがる。そして一ミリでも動いたらリバーズしそうな俺の目の前で、二人で楽しそうにおしゃべりなんかを……、ぷ……」

頭を抱える桔平をまじまじと眺め、木場が脱力する。だと思った、という顔だった。

「俺のプライドはズタズタだ。あんな醜態晒しちまって、これから俺はあいつらの前でどう振る舞えばいいやら。俺のつちかつてきた尊厳が、イメージが……」

「安心しろ。おまえのイメージは何一つ変わっていない」

「何！ 他になんかコメントはねえのか」

「何を言ってほしいんだ、俺に」

「俺がこれだけ落ち込んでるのに、かける言葉もねえのか。てめえ、それでも親友か」

「……」 立ち上がり、茶を入れ始める木場。どうしてもよさげに吐き捨てた。「だったら今度は激辛勝負でもしたらどうだ？」

「何だと！」 ギリギリと歯がみしながら桔平が怒りをあらわにする。拳を握りしめ、立ち上がった。「ナイスだ、木場！ それだ！」

「……」

「おはようございまーす」

綾音の声だった。

弾かれたように振り返る桔平。

「おい、綾っぺ、あんな」

「……」

「礼也」

夕暮れ時のメガル本館で桔平に声をかけられ、礼也が振り返る。

「今からメシ食いに行くんだが来るか？」

「俺はいいす」即答だった。「ハラ減ってねーし」

「そうか。せつかく綾っぺも一緒に行くんだけどな……」

「……」

「ほら来ねえって言っただろうが。こいつはこういう奴なんだよ」

礼也が顔を向ける。桔平の隣に綾音の笑顔があった。戸惑うように注目し続ける。

それを微笑ましげに眺め、綾音は言った。

「礼也、今から柊さんと激辛勝負するから、用事とかなかったら立会人としておいで」

「行くっす」即答だった。「しかたねえし」

ぽかんと口を開ける桔平。すぐに気を取り直した。

「言つとくが、激辛と大食いは別物だからな。大食いのセオリーは一切通用しねえ」

「大食いにセオリーってあったんですか……」

「俺みたいなバイセクシャルならともかく、いくらスイーツに強くても腹が減ってくるくらいじゃ激辛はクリアできねえ。腹ペコのおまえさんが泣きべそかきながらヒーハー言ってる様子が目に浮かぶぜ」

「向こうで友人達と飲みに行くと、たまに調子にのってヒーハーって言ってますけどね」

「そのエロ眼鏡がアハンアハン言いながら無様に悶え苦しむ姿が目には浮かぶぜ」

「私はまったく違う光景が目には浮かんでしまいましたが……」

「ハンデをくれてやる気はさらさらねえ。プライドごとカンブなきまでに叩き潰してやる所存だ。おまえさんが血反吐をまき散らかしながらのたうち回る様子を眺めながら、一杯やらしてもらっぜ」

「完全に小悪党のセリフですね」

「だがもし俺が負けたら、俺のこと好きに呼んでもらってもかまわ

ねえぜ。絶対負けねえがな」

「えゝ。だったら、ひいらりんって呼んじゃいますよ」

意地悪そうに綾音が笑いかける。

それを睨み返して桔平。

「好きにしろい！」

「公私問わずにですがよろしいですか」

「望むところだ！」

「おほほほほ！」

「おほほほほ！」

「……」礼也は一人、淋しそうにそのやりとりを眺めていた。「誰だつてえの……」

翌日、メック・トルーパーの事務所に暗い顔で考えをめぐらせる桔平の姿があった。

綾音が入室したことにも気づかない。

「おはようございます」

桔平がうつろなまなざしで振り返った。

「ひいらりん」

「……。ひーはー……」

シミュレーションを終え、バーチャルスコップをはずした綾音が、ふう、と一息つく。

照明の灯ったシミュレーション・ルームから出て休息所へ向かうと、射し込む光に眩しげに手をかざした。

桔平がコーヒーの入った紙コップを手渡す。

「お疲れさん」

「ありがとうございます」

コーヒーを受け取り、綾音が嬉しそうに笑う。

「ほんと、すげえな、あんた。ここまで早く飲み込んでしまうとはな」

「そうでもないですよ。夕季達が使っていた頃は駆動システムもOSもかなり旧式でしたからね。総合的なパフォーマンスで言えば、現状は当時の倍近い性能ですし」

「にしてもなあ……」

「まあ、そのOSを組んだのが私ですから、そういった意味で誉めていただけるのなら嬉しい限りですけど。デリーでテスト中の機体は余計な物がない分、竜王よりも性能が上だと言われていますし、あまり自慢にもなりません」

「ほおお……」

「私だけの力ではないことは確かです。夕季や礼也には全然及びませんよ」

「んなこたねえだろ……」ズズ、とコーヒーをすする。「あち……。そろそろ現物に乗ってみるか？」

「いいんですか」

「ああ。この分なら大丈夫だろう。あさ……、進藤局長からのオーダーも出ているしな」

「……そう、ですか」

あさみの名前を出した途端に綾音の表情が曇る。
それを気遣うように桔平が笑ってみせた。

「あんた、よっぽど礼也に信用されてんだな。あいつ、俺が誘ってもまず来ねえのによ。礼也だけじゃなく、夕季やしの坊だつてそう
だ。たいしたもんだよ。仕事もバツチりだしな。世の中にはいるんだな、あんたみたいな完璧な人間も」

「完璧超人は忍じゃなかったでしたっけ」

「いや、まだまだ足りねえ」綾音のツツコミに桔平が露骨に顔をゆがめる。「あいつはシモネタがオツケーじゃないからな」

「……思いのほか、重要なフアクターだったみたいですね」

「画竜点睛を欠くつてやつだ」

「……」ズズ、とコーヒーをすすり、綾音が自嘲気味に笑う。「私のことをあまり買いかぶらない方がいいですよ」

「何故だ？」ズズズー！ とコーヒーをすすった。「あちっ！」

「私はあなたが思っているような人間じゃありませんから」

火傷した舌を出しながら、「俺があんたのこと、どう思ってるって？」

「……あなたが见ているのは私の上辺だけです。本当の私を知れば、きっと幻滅すると思いますよ。あなただけでなく、他のみなさんも

……」

「俺はともかく、礼也や夕季は上っ面だけの人間にやなつかねえよ。俺だつててこずつてるつのに。あんた本当にたいしたもんだ。あのへそ曲がりどもをあんただけ掌握できりゃ、いい上司になれるぜ」

綾音が静かに振り返る。桔平をまじまじと眺めた。

「なるほど」

「？」

「ガーディアン、よく集束させることができましたね」
桔平がちらと顔を向ける。

「まあ、な。何とかな」

「すごいですね」

「おお。ずけえよ、あいつらは。実は俺も半信半疑だったわけだが……」

「よくあさみさんがOKしましたね」

「……。まあな……」

綾音が、ふつ、と笑った。

「メガル、って、どういう意味だかご存知ですか？」

「ん？」紙コップをダストボックスへ放った。「いや、知らん」

「表記によれば、大地と空と海をつかさどる万能の神の名前らしいですよ」

「メガル文明のか？」

「ええ。私達科学者にとつての神はそんな抽象的なものではなく、メガリウムという形で具現化してしまいましたけれど」

「メガリウム、ね」

「当然、ご存知ですよ」

「さわりくらいはな。朴さんに聞いても全く理解できなかったが」

「我々の理解する範疇において、メガリウムはあらゆる金属中もっとも高密度で、もっとも強く、もっとも危険なものです。ガーディアンのように思念を物質化できるので、生きている金属とも、神の細胞と呼ぶ人もいます。まあ、私達が精製できる物は、本物には到底及ばない混ぜ物だらけの偽物ですけれどね。ガーディアンと竜王でも純度かなり違う。その分だけ限界点の到達箇所に差が生じてしまっわけなのですが」

「神の細胞、か……」二杯目のコーヒーを販売機から取り出す。「前にメガリウムで作られた小さなナイフが、人工ダイヤの塊を豆腐のように切り裂くのを見たことがある。それまでの価値観や常識が一度にふつとんだよ……。あちちち！」

「大丈夫ですか？」

「おうよ」

「常識なんてものは所詮、あるものに依存した憶測にすぎませんか

ら。今でこそダイヤより硬い物質の存在もちろはら確認されていますが、一昔前までは硬い物の代名詞でしたしね」

「硬い物のホームラン王だったな。俺達の認識じゃ硬い物と言えばダイヤで、大金と言えば百万円だった」

「私は子供の頃、石油を『せきゅう』と言っていました」

「うちのお袋は今でもそうだ」

「本当ですか。気が合いそうですね。ひょっとしてガソリンのことをギャソリンで言ったりします?」

「そりゃねえわ……」

「ないですね……」キリツと口もとを結ぶ。「竜王の外殻はそれらを軽く超越するものです。硬くて高密度にもかかわらず柔軟で軽いとくれば、もうわけがわかりませんよ。人工筋肉としてもカーボンナノジウムのシートをはるかに凌駕する性能ですしね。現在、竜王の透明なコクピットが光学迷彩に応用できないものかと鋭意研究中です」

「すげえな」

「すごいですよ、本当に。絶対零度に達するためにはそれよりも低い温度で冷やさなければならぬという矛盾がつきまいますが、問題なのはロンスデーライトのように新しく発見されるのではなく、メガリウムならばそれらを可能にするための事象すら作り出せてしまいかもしれないということです。硬いと念じれば硬く、逆を望めば柔らかくなる。ただ、その理論へ到達しえないものに対しては不可能なままですけれどね。人間の想像力には限界があるので、あまりにも非現実的な命令は無意識のうちにカットされるみたいですよ。たとえば、死んだ人になあれ、とかね」

「そんなことができちゃうんなら、生きてること自体がバカらしくなっちゃうだろ」

「……。かもしれせんね……」

「……。ま、人間は自分の頭の中に存在するものしか理解しようとしねえからな」

「……そういう方もいらっしやいますね」

「ここはそんな人間どものパラダイスだ」

「パラダイスですか」

「パラダイスだ」

「そうですね……。……羨ましいですね」

「羨ましいわけあるかって！」

「はは……。……」 頬に手を当て、考える仕草をしてみせた。「少なくとも現時点で夕季や礼也は、それまで不可能とされてきた領域へ踏み込む権利を得てしまったことは確かですね。空竜王は現行の機体では滞空し続けられない場所を縦横無尽に飛び回り、陸竜王ならばマグマの中でも自在に活動できるかもしれない。海竜王はエベレストよりも深い海の底や、帰還不可能な海域すらプールのように泳ぎ回るでしょう。いずれもまだ誰も見たことがない、誰も到達しえなかった、人類にとって未知の領域です」

「えれえこっちゃだな」

「えれえこっちゃですよ。ロシアではウロボロス・ユニットの試作品が完成したらしいですしね。何でも、エネルギーと呼ばれる仮説をスイングバイ理論に置き換えたって話ですよ。すごい発想ですね」 紙コップをくわえたまま硬直してしまった桔平を、綾音が表情もなく眺めた。

「今はまだ単なる効率化のためのシステムにすぎませんが、エネルギーを消費しつつ、尚且つ出力を下げずに燃費が飛躍的に向上するだけでも素晴らしいとは思いませんか。近い将来、力を何倍にも増幅したり、限りなく無の状態から動き出せるようになるかもしれませんよ。とは言っても、百パーセントが望めない限りはどこまでいっても所詮擬似永久機関の範疇ですけれどね」

「……。……。……まあ、まったくもってそのとおりだな……。……」 もっともらしく頷いてみせる。「俺もそろそろハイブリット・カーを買おうかどうか迷ってたところだったしな」

「私は次のモデルチェンジの時に買おうかと考えています」 涼しげ

に笑った。「静止状態の車の中でドライバーが体重移動をするそのごくわずかな力をきっかけに、坂を転がるように動エネルギーが積み重なって、車は無限に走り続ける。永遠に続くメトロノームか振り子のようです。すでにその理論は完成しているようですが、今の技術力では軽自動車一台を動かすのに地球サイズのユニットが必要になるみたいですね」

「駄目じゃん……」

「ええ。コンピュータのシミュレーションでは一応成功しています。が、事実上実現不可能です。それも半年前までの話ですけれどね。先だつてのプログラムの発動後、理論は急速にたぐり寄せられています。マックスウエルの悪魔も単なる絵空事ではなくなってきましたね」

「……。ああ、あれはイテえよな……」

「ご存知なんですか？」

「んあ？ ああ、ああ。なんたつて悪魔だしな……」

「はい？」

恥ずかしそうに桔平が顔をそむけ、咳払いをする。

「ま、ガーディアンにしたつて、礼也達が思いついたものが、まんま形となって現れるわけじゃないつてことだけは確かだな。朴さんの受け売りだが、ありや竜王の作り出したもんだ。形や性能すべてが竜王の意志でできてるつて言つてもいい。立ち上げのプロセスもいろんなトンデモ武器を発生させるために必要なメカニズムも全部ひつくるめてな。人間の思考回路じゃあんなシロモノにやたどりつけねえよ。おまえさんが言うように、所詮想像力にだつて限界がある。礼也達はそれを呼び出しているにすぎないわけだな」

「それでもすごいと思いますよ。すでに理屈で語ることすらできない状況ですからね。コンパクトサイズの核融合炉やレールガンのコンセプトをはるかに超越しています。ヒート弾は音速の二十倍以上のジェット噴流を放ち、貫徹弾が時速五千キロのダーツだと形容した人がいる。でも、ガーディアンを既存の理論を用いてたとえよう

とすれば、積み重ねてきたセオリーをすべて破棄しなければなら
ない」

「技のネーミングなんかはその人間の頭に浮かんだイメージらしい
けどな」

「あいつ、三国志、好きですからね」苦笑いの綾音。「意味とかよ
く知らないみたいです」

「センスねえよな」

「ないですね」

「ま、俺だったら必殺技で、ハナゲカッター！　とか、叫んじまい
そうだけどな」

「よく人のセンスにケチがつけられましたね」

「あと、スタンディング・オーバー・シヨント！　とか、バッド・コミ
ヨニケーション、アーツ！　とかよ」

「それで倒される相手の気持ちとかも考えてあげてくださいな……」

「分不相応なモンに安易に手を出した過去の文明は、すべて滅亡し
ちまったわけだな。このままじゃ俺達も自滅確定だな」

綾音が重々しく頷いた。

「いずれにせよ強欲な人類が大气や重力までも資源のように支配し
始めたら、地球の公転や磁場に悪影響を及ぼすのは必至でしょうね。
魔獣を退けるためにその理論を応用することで、結局はさらなる魔
獣を呼び起こしたのと同じ結果となる。いちごっこがエスカレー
トすればするほど、地球を取り巻く環境は不安定になる仕組みです。
うまくできてますね、プログラムっていうやつも」

「ほっときや親のすねの骨の中身までしゃぶりつくすのが人間って
やつだからな」

「同感ですね。無から有を生み出せる技術を世界中が欲し、人間達
が醜く奪い合う。これがプログラムの根っこでしょうね。魔獣や竜
王のメカニズムがヒントを与えてしまったことは否定できませんが、
その発動ボタンを押してしまったのが人類だとすれば、何だかパラ
ドックスのようですね」

「うまく奴らの罠にかかったような気もするがな……」

「どちらにせよ、私達技術屋泣かせであることには違いありません。理屈がわからないものを扱わなければならないことほど、最高の屈辱はありませんから」

「んなもん、つじつまが合つてりやいいんじゃないか。便利であることには変わりねえんだから」

「どうつじつまが合っているんでしょう……」

「……。合つてんだよ、俺の中じゃな。ただうまく説明できねえだけだよ」

「は、あ……」

あきれたように綾音を見下ろし、やれやれと言わんばかりに桔平が両手を腰へ当てる。

「おまえ、なんで息してる」

「なんでつて言われましても、生きているからとしか答えようがありませんが……」

「仮におまえさんがいつも死にたいと思つていたとするとどうだ」

「……。どうだと言われても……」

「理由は何でもいいわ。ま、リアルな話でいけば、太ってるのを気にしてるのとかな」

「……気にしてませんし」

「あくまでも仮の話だ。たとえ太っていることに気づいてねえとしてもだ」

「だから、太つてねえですし……」

「太りすぎて今すぐにでも死にたいはずなのに、それでも今現在し続けているのが呼吸つてやつだ。息を止めずに、生き続けながら死にたい死にたいと願っている。矛盾してるだろ。メカニズムうんぬんの話じゃない。スイッチ切りたくても勝手に切れないのは、人間には生きようとする本能があるからだ。自分が支配できるものしか認められないのは人間の実に悪いところだ。だから人類はいつまでたっても宇宙人に進化できねえ」

「……。で？」

「で？」

「はい」

「……。ま、マッドサイエンティストのおまえさんに言っただけで無駄だろうがな」

「マッドではないんですが……」

「要するに、そういう気持ちはごまかせねえってことだ」バツが悪そうに顔を赤らめた。

「はあ……。そうですね……」

第十一話 『シーユーアゲイン』 6（後書き）

何やら一見難しそうなところは全部雰囲気でやっちゃいました、
と文系の落ちこぼれが先に泣きを入れておきます……

メック・トルーパー達の集うロータリーで綾音は円の中心にいた。その外側にいるのは夕季であり、メックやエスの面々だった。

「いや、本当にすげえよなあ」

腕組みの駒田が感嘆の声を出す。

「補助員付きとはいえ、海竜王をこんなに早く乗りこなしまうんだもんな。さすが夕季の姉御」

「そうっす」目を見開いて黒崎が何度も頷いた。「さすが綾っぺ姉さんっす」

「そんなことないよ、クロちゃん」

照れたように綾音が顔を向ける。

すると黒崎が嬉しそうに笑った。

「いや、萌え萌えっす」

「何が……」

駒田が黒崎を押しつける。

「いや、そんなことないことない。夕季なんて、ここまでくるのに何度ズツこけたことか」かたわらの夕季へ振り返った。「な」

恨めしげに駒田を見上げる夕季。

「こら、そういう言い方するなっ」南沢がフロアに入った。「夕季はすごいよ。こいつくらい一生懸命努力する人間、俺は見たことない」

恥ずかしそうに夕季がうつむく。

それでもさらに駒田が南沢に食い下がってきた。

「いや、俺は別に夕季がどうこう言ってるわけじゃなくっ」てな。二人とも同じように努力してるのに、それでも綾っぺの方が上だったとしたら、そりゃすごいことなんじゃないかって、こう言いたいわ

けだ。もし綾っぺの方が夕季より努力してるんだったら、それはそれですごいことだしな」

「まあ、そうかもしれないが……」

それを受けて一歩前へ出たのは綾音だった。

「それは違いますよ、コマさん。夕季は私なんかよりずっと頑張ってますよ。前とは機体の性能がまるで違うんだから仕方ないですよ。昔のOSのままだと真っ直ぐ歩くのだって難しかったですよ」腕組みをしながら得意げな顔をしてみせた。「私も昔のシミュレーターに乗ったことありますが、オートマの乗用車しか運転したことがなかった私が工場の中で大型車をバツクしていて柱に思い切りぶつけた時よりも難しかったです」

「……よくわかったから、危ないことはもうやめような」

「わかっていただけたようですね」駄々っ子を諭すように駒田に笑いかけた。「ほんとにね、のりピーの言うとおりなんですから」

「のりピー?……」

全員が綾音に注目する。

照れたように南沢が笑った。

「俺、紀之だから……」

「……」

「引くなつて、夕季……」

「……。別にいいけど……」

「……」

「おい、真吾」

黒崎が振り返る。

厳しい顔つきの偉丈夫、大沼だった。

「おまえ、機材の整備、全部終わったのか?」

「終わったっス」

「そうか」かたわらの夕季に気がつき、眉を寄せた。「お、夕季、ここにいたのか」

大沼の顔を確認し、夕季がほっとしたように表情をゆるめる。

「さつき柊さんが探していたぞ。後で顔を出しておけよ」
「うん」

「お」綾音の姿を認め、大沼の表情が信じ難いほど和らいだ。「綾っぺじゃないか。海竜王に乗ったんだってな。どうだった？」

「何とか、つてところですよ」太陽のような微笑み。「沼っち」

「そうか。さすがだな」夕季が淋しそうにしているのが目に映った。
「どうした、夕季」

「……別に」

「そうか……」

「そうだ！」突然駒田が大声をあげる。

「どうした、コマ」

「いやよ、綾っぺに一日メック隊長やってもらうかなって思って」
「……まだ言つてやがったのか」

「何！」

それに食いついてきたのは、やはり黒崎だった。

「いっスね。ついでに一日局長とかも」

「おお、天才だな、おまえ。そんなこと誰も考えつかないぞ」

「それほどでもないっス！」

「この機会に、あのコネで副局長やつてる口先だけのチンピラにペコペコ頭下げさせてやるか」

「いっスね。天才っス」

「俺もそう思ってたところだ」

「おまえら……」

綾音へ振り返る駒田。

「どうだ、綾っぺ」

夕季が綾音に注目する。

綾音の表情は夕季の希望とはまるで違ったものだった。

「あ、やります、やります」

「マジで？」

「マジっスか！」

瞳を輝かせ、綾音が満面の笑みを二人へ返す。

「魔女っ子みたいな格好させてくれます?」

「させちゃう、させちゃう。な?」

「チンピラに頼んで用意してもらっス」

「夕季とセットでな」

「いっスねっ!」鼻息を荒げた。「もう萌え萌えっス!」

「何が……」

引きつり始めた夕季の顔を綾音がちらと見やった。

「よし、早速コネ野郎に頼みに行くか」

「一刻も早くコネ野郎に頭を下げてお願いに行くっス」

「おまえら……」

「最低だな……」

南沢と大沼があきれたような顔を見合わせる。

夕季は悲しげなまなざしで何ごとかを綾音に訴え続けていた。

南沢がそれに気がつく。

「ん? どうした、夕季」

「……。助けて、のりぴー……」

「……」

駒田と黒崎の勢いはとどまるところを知らない。

「決まったな」

「決まったス」

「夕季も姉御の綾っぺが言うことなら、むげに断れないだろうしな」

「むげに断れないスね」

「夕季はネコ娘のカッコの方がいいか?」

「それじゃ一日ネコ娘になっちゃっスよ」

「なんだ、一日ネコ娘ってのは」

「さあ」

「あつたま悪そうだな」

「悪そうっス」

「あっははは」

「あははは……」

「……あ」

手を上げた綾音に全員が注目する。

「何だか夕季が非常に悲しそうな顔をしているのでやめておきます」

「……あ、そう」 駒田が残念そうに肩を落とした。

黒崎はさらに残念そうに崩れ落ちた。「っすか……」

「ごめんね、クロちゃん」

「……あいいん……」

「あいくん？……」

妙な空気が流れ始めていた。

ぽんと肩を叩かれ夕季が振り向く。

大沼だった。

「気にするな。おまえが悪いわけじゃない」

「……。わかってる、沼っち」

「……」

「んんん、あああーっ！」

夕刻、隊員達のいなくなったメック・トルーパーの事務所内で、統括長席にふんぞり返って桔平が大きく伸びをする。目尻から涙を滲ませながら、向かい合う木場へ目をやった。

「この一ヶ月足らずで、すっかりここに馴染んじまいやがったな」
ピンとくる木場。

「伏見のことか？」

「ああ。あれじゃ、夕季達もなつくわけだ。あいつ、『お疲れ様』の後に『また明日お会いしましょう』って続けてきやがるんだぜ。さよなら、とかじゃなくてな。いつ会えるかわからない相手には、『また今度』ってあの笑顔でよ。ああいう何気ない一言が黒崎あたりのアホハートを貫いちまうんだよな。おまけに隊員達に勝手にあだ名つけやがってよ」

「みんな喜んでるようだがな」

じろりと木場を見やる桔平。

「おまえはなんて呼ばれてんだ？」

「……」

「言えつて。副局長命令だ」

「……木場兄さんだ」

「木場兄さんっ！」ガバツと起き上がり、目を剥いて睨みつけるように吐き捨てた。「木場兄さんだあゝ！ おまえが？ んで喜んでやがんのか、いっちょ前に」

「頼んだわけじゃない。あいつが勝手にそう呼んでいるだけだ」

「あいつが勝手に？」ガシャンと椅子にもたれかかり、不機嫌そうに顔をゆがめた。「けっ！ 兄さんってツラか」

「……」ムツとする木場。「そういうおまえはどう呼ばれているんだ」

「ああっ！」木場を睨みつけ、バツが悪そうに顔をそむける。「……」

「ひいらりん、だ……」

「ひいら……」

「うるっせーよ！ 笑いたきゃ笑え！ どうせ俺はひいらりんだよ

！」

「おい、俺は別に……」

「もういいってばよ！ 同情なんざしてほしくねえ！ 同情するなら金を貸せ！」

「……」

あきれたように桔平を見下ろす木場。暗くなつた窓の外に目をやり、ふん、と息をついた。

「木場」

桔平に呼ばれ木場が振り返る。

桔平は先までとは違い、静かな調子でそれを口にした。

「俺にはあの綾音って娘が、そんなに悪い人間だとは思えねえんだがな。あの娘が来てからこの雰囲気は格段によくなってる。事務屋の連中にも受けがいいし、何より夕季や礼也達の精神的な支えに

なってるのが大きい。いつもどっかピリピリしてて今にも噛みつきそうだったあいつらが、あんなに素直になっちまうんだもんね」

「……」

「確かにあさみとは仲がいいのかもしれないが、それはそれだ。それに……」まじまじと注目する木場に真顔を向けた。「巨乳だしな」

「……。貴様、部下を何という目で見るか！」

一瞬でも心を許した己を恥じるように木場が激怒する。

それを悲しげに眺めて、桔平は頷いてみせた。

「わかってるって。俺達のまわりは貧乳ぞろいだからな。それまではボインの部類だろうと思っていたしの坊ですら、綾っぺに比べればマイナークラスだ。噛ませ犬だ」

「……」話が噛み合わず、しばし熟考する木場。「おい、何がわかったって言うんだ」

「言うな、木場。おまえが爆乳好きだということは、しの坊には黙っておいでやる」

「おい、桔平。俺はそんなこと一度も……」

「おまえのパソコンの中身、俺が知らねえとでも思ってたやがんのか」「貴様、また勝手にのぞいたのか！」

「おうよ」一片のやましさも持ち合わせない。「イテえぞ、ありや」

「……。あれは前におまえが……」

「だったら消しいいじゃねえか」

「いや、あまり入れたり消したりするとよくないって黒崎が……」

「とか何とか言っつてよお、ジャンルごとにきっちり分けて、ダイレクタなタイトルまでつけてやがって。おかげですげえ取り出しやすかったじゃねえか」

「あれは……」

「フォルダに自分の名前とか入れちまうと流出した時とかえれえ目にあうから気をつけとけって。俺から言えることはそれだけだ」

「……」

ガタン。

物音に振り返る二人。

水替えをしようと、花瓶を抱えたまま忍が立ちつくしていた。畏怖するように二人を眺める。

「あ……」

「おい、待て、あな……」

忍が後退さる。目を見開いたまま、怯えるようなまなざしを向け続けた。

口もとを押さえ、くるりと背中を向ける。

「そんな……」

「何がだ！」逃げるように去って行く忍を追いかけて、木場が立ち上がって手を伸ばした。「何がそんな、なんだ。そんな、はこつちのセリフだ。おまえは誤解している」

「あゝあ、やつちまったな、木場」まるで人ごとのように桔平。「最低だな、おまえ。いつかこうなるだろうとは思ってたがな」

くわつと目を見開き木場が振り返った。

「おい、桔平、何とかしろ！」いっばいいいっばいだった。「早く何とかしろ！頼むから！」

「何ともなんねえな」静かにそう告げ、桔平がふつと笑う。「仕方ねえだろ。遅かれ早かれつてとこじゃねえのか？ 奴でさえあのザマだからな。この期に及んで比べる気もしねえが、夕季なんざ、つるんつるんのペタンコーだろ。哀れなモンだ」

「おい、桔平」

「だいたいあの野郎、最近調子こいてやがんだ。みんながちやほやするんで勘違いしてやがる。勝手にメツクのマスコットみたいな気になってやがってよ。それも綾つぺが来てから人気そっくり奪われちまったんで、軽くへこんでやがんの。いい気味だぜ」

「おい……」

「しかも綾つぺにやまるで頭が上がらねえときてやがる。あの野郎叩くんなら、今がチャンスだぜ。かなり弱ってるからな」

「……」

「あん？」

重苦しい様子で目配せをする木場を、不思議そうに桔平が眺める。振り返ると、表情もなく夕季が二人を睨みつけていた。

「……」何ごともなかったように朗らかに笑いかけ、桔平が夕季の肩へ手をかけた。「おまえ最近頑張ってるなあ。実にバッチグーだ。これからもその調子で……」

夕季が桔平の手をつかみ胸もとへ引き寄せる。くるりと返して、その勢いで押し倒した。

「だうっ！」

背中から吹き飛び、床で後頭部を打ちつける桔平。

ゴチンと鈍い音がした。

「てめ！ 危ねえって、クルクルパーになっちまうって！」

倒れたままの桔平を無表情に見下ろし、夕季は憮然とした態度で言い放った。

「謝らないから」

「何だと、てめ！」

一瞥すらせずにすたすと夕季が去って行く。

その後ろ姿を木場は畏怖するように眺め続けていた。

「……」

「おい、待て、こら！ てめえ、許さねえぞ！」

涙目で吼えわめく桔平へ振り返り、木場が冷ややかなまなざしを向ける。

「いい気味だ。訴えられなかっただけでも、ありがたいと思え」

「何だと、てめえもグルか！」ギリギリと歯を噛みしめる。すぐに情けない顔つきに変わった。「……あ、ヤベ。目の前がグルグルしてきた。なんか気持ち悪い。おい、木場、保健室連れてってくれ」

「……」

「このままじゃクルクルパーに……」

「安心しろ。それ以上ひどくはならん」

「……」。そんな目で見ちゃ駄目だと思っぜ……」

第十一話 『シーユーアゲイン』 8

綾音は陵太郎の墓の前にいた。暗めの色のスーツを着込み、神妙な面持ちで手を合わせる。小さく首を振り、隣の墓石を眺めて目を伏せた。

そこには『穂村』と刻まれてあった。

「綾さん」

聞き覚えのある呼びかけを背中では受け止める。

深く息を吸い込み、綾音は笑顔で振り返った。

「雅」

「また来てたんだ」満面の笑みのカウンター。「せっかくまたお昼おごってもらおうと思ってたのにどこにもいないから探しちゃった。駄目だよ。もうおなかぺこぺこ」

「おまえ……」

「え？ 何かおかしかった？」

「全部な」腕組みしながら見据える。「特にとっかかりがな」

「ええ〜！」おおつとびつくり。「そんなことどうでもいいから、早くお昼食べにいこ」

「……」

墓地の近くにある臨海公園のベンチへ腰を下ろし、綾音がそろりと雅の顔を覗き込む。

「あんたも大変だったよね」

そのつつみ込むような微笑みに、雅も安心したように笑い返した。「大変だったよ。綾さん、急にいなくなっちゃうんだもの」

「そっちかよ！」眉間に皺を寄せる。「でもって、やっぱりあたしのせいかい！」

「？」

ぽかんと綾音の顔を見つめる雅。

それを見て綾音が、ぷっと噴き出した。

つられて雅も笑う。

「あっはっは、あんたはさあ、ほんとに……。でも思ったより元気
そうで安心したかな」

「綾さんもね」

「あたしは関係ないでしょうが」

「心配してたんだよ、みんな。一人でアメリカ行っちゃうから」

「ん？ んん。うん……」

「英語話せないのに」

「んん……」

「日本語だってあやしいのに」

「いや、あやしかねえだろ……」

「お兄ちゃんも」

「！」

「すごく心配してた」

「……」

顔を伏せる綾音。革靴のつま先を見つめ淋しそうに笑った。

それが綾音の地雷であったことに気づき、雅が慌てて取り繕う。

「あ、今、ケイちゃんも一緒なんだよね。元気にしてる？」

「ん、ああ、元気だよ、あのバカなら」

「そっか。久しぶりに会いたいな」

「あいつも会いたがつてたよ、あんたにさ。仲良かったもんね、あ
んたら」

「まあねえ。ある日突然、綾さんのところに行く、って言い出すん
だもん、こっちはびっくりだよ。英語、いつも赤点君だったのに」

「あいつこそ日本語もあやしいのにな」

「向こうで綾さんが淋しい思いしないように全部ボケを拾ってやる、
って一生懸命英語の勉強してたんだよ、ケイちゃん。アメリカンな
発音で華麗にツツコンで驚かせてやるって。なんでやねん、って英

語でなんて言うのとか聞いてきたから、ホワットイスデイスじゃない？ って適当に教えてあげたら喜んで使いまくってた」

「だからあいつ、それ連発してやがったのか。間違ってるくせに妙に自信満々でムカつくことこの上ない……」

「うん。しいちゃんがたぶんノーウェイじゃない？ とか言ってたけど、あたしが、違うよ、そんなんじゃないよ、ホワッイデイスだよ、って無理やり説得したの」

「おまえのせいかな……」

「ドヤ顔で同じことばっか言ってるメンドくさかったから、みんな適当にあしらってたんだけどね。しいちゃんだけは最後まで親身になって教えてたけど」

「あの子は真面目だからね」

「はは。綾さん、向こうでどんな仕事してたの。メガ・テクノロジーだっけ。何作ってるの？」

「あんまり大きな声で言えるようなことしてないよ」顔を伏せたまま自嘲気味に笑う。「何だかんだ言っても、結局人殺しの道具になるようなものばかりだから」

「違うよ」

芯の通った雅の声に綾音が顔を向ける。

雅は涼しげに綾音を見つめていた。

「みんなのためのものでしょ。綾さんが好きな人達を守るために必要なもの」

「あんだねえ……」雅の顔をまじまじと眺め、ふっと笑う。「やっぱり陵太郎の妹だわ」

「そうかな」

「そうだろ。でなきゃ、そんな恥ずかしいこと、ぬけぬけと言えないって」

「ひどいよ、綾さん」ぷっぷくぷう。「いじわるすぎー！」

「おまえが言うな！」

「まあねえ」

「あっはっは」

綾音が楽しそうに笑った。

公園からは港を通して海が一望できた。幾隻もの船が通り抜けるたびに、音を立てて波が打ち寄せられる。

ほんやりとそれを眺める二人。

綾音がちらりと雅の横顔を見て言った。

「あんた、痩せたんじゃない。前に写真で見た時はもっとふっくらとしてたよ」

「そう？」

「気をつけなよ。もともとそんなに丈夫な方じゃないんだから」

「うん。綾さんも……」綾音の顔をまじまじと眺め、不思議そうに首を傾げる。「あれ？ 太った？」

「もしもし、雅ちゃん……」

「でも、そのメガネかけてるとよくわからないよね」

「……」

何かに気づき、雅がポンと手を叩く。

「あ、なるほど」

「何かなるほどだ！ てめえ！」

「どこことなくエロい感じでごまかそうとして……」

「何言ってるのかな、この子は！」

「ねえ、お昼、食べちゃっても大丈夫かな……」

「何がですかあ！ 何が大丈夫かななんですかなあ！」

「だって心配だよ。ダイエツトとか……」

「あー、もー、てめえは！」

「あ、すごい、綾さん、メガネ曇ってるよ。このままじゃ電柱にぶつかっちゃうかも。バンソウコウ持ってる？」

「ぎゃー！」

「べたべたのメガネキヤラだ。じゃあメガネ取るとやっぱり……」

「なんねえよ！ 絶対『3』とかにはなんねえから安心しろ！ ありねえだろ！」

「なんだ……」

「なんでガツカリしてんの……」

「だって」

「だって？……」

雅の顔がほころぶ。そこに六年の歳月は感じられなかった。

ふいに綾音の表情がかける。声のトーンを落として雅に問いかけた。

「どうしても、あんたじゃなけりやいけないの？」

「……」綾音の質問の意図をくみ取り、雅も同じ表情になる。「今のところ、その適正があるのはあたしだけみたいだから」

「ふうん……」心配そうに雅を眺める綾音。「国防省でもプロジェクトが進行中らしいけど。こればかりは努力してどうこうなるものでもないみたいだし。早く他に適正のある人が出てきてくれるといいね」

「あたしは今のままでもいいかな」

「どうして？」

「やっとみんなの役に立てることが見つかったから、かな。ずっと役立たずだったから」

「誰もそんなこと思ってたないって」

「でも……」

「でもはなし。二度とそんなこと言ったら承知しないからね」

「……」。綾さんっていつもそうだよね」

「？」

「最後はそうやって力わざでさ。強引すぎ。心配してくれるのは嬉しいんだけど」

「当たり前だろ」にやりと笑う。「あんたらはあたしの大切な家族なんだから」

綾音は一人、人影のなくなった格納庫の中にいた。

薄暗い照明のもと、三体の竜王の輪郭がひっそりと浮かび上がる。

陸竜王と空竜王を横目で眺め、海竜王の前で立ち止まった。

海竜王は保護具を付けたままのいでたちで、他の二体同様、四点フックで天井から吊り下げられていた。

ステップを登りコクピットの中を覗き込む。そのまなざしに決意を宿しながら。

綾音は海竜王に乗り込むと、シートへもたれかかり静かに目を閉じた。

深く息を吐き出す。

何かを思い返している様子だった。

やがて海竜王の全身が淡い光を放ち始める。

優しく綾音をつつみ込むように。

第十一話 『シーユーアゲイン』 8（後書き）

東真紀さんのアルバムを聴きながら書いたりしてます。どちらか
と言えば猫派で、犬はあまり好きではないのですが、ジョンの歌を
聴いていると涙が出そうになります。あれはヤバいです……

ある夏の日の午後、騒がしさに眉を寄せ綾音が振り向いた。

小学生の礼也と夕季が取っ組み合いのケンカをしている最中だった。夕季の方が明らかに劣勢だったが、持ち前のメンタルの強さで何とか踏みとどまっている。

イラつくほどの蝉の大合唱が二人をさらにけしかけているようでもあった。

はあく、と嘆息し、二人の間へ割って入る綾音。
またか、という表情だった。

「やめ、やめ。本当にあんた達はいっつも、いっつも
キツとなって夕季が振り返る。」

「だって礼也がすぐこうちゃんいじめるから！」

それを受け、敵意を剥き出しにして礼也が噛みついた。

「バーカ！ あいつが悪いんだ。いっつもウジウジしてやがって。
見てるだけで腹立ってくる！」

「礼也が怖がらせるからじゃない。年上のくせにどうしてお兄さん
みたいにできないの！」

「るせえ！ おまえこそ年下のくせにナマイキだ！」

「ナマイキじゃない！」

「ナマイキだ！」

睨み合う二人。

礼也が夕季の髪をつかみ振り回すと、夕季は礼也の口の両端から
親指を突っ込み思い切り引っ張った。

「く！……」

「ぶががが……」

あきれたようにそれを眺め、綾音がふと表情を和らげた。

「まあさ、ケンカするほど仲いいって言うけど、あんた達よっぽどお互いのこと好きなんだろね。何だか夫婦ゲンカみたいだよ。たぶん、よその人が見てもそう思っただろうね」

綾音の言葉に二人がはっとなる。申し合わせたように手を離し、ぶいと横を向いた。

「あははは」楽しそうに綾音が笑う。二人の頭をガシガシと撫でた。「よし、アイス食いにいくぞ」

雅は駅前の書店へ訪れるたび、いつも同じ本を眺めていた。何度も前を通りかかり、その都度ちらちらとうかがい見る。

それに気づく綾音。

「それ、欲しいの？」

じつと綾音の目を見つめながら、首を横に振る雅。

綾音がにやりと笑った。

「バイト代入ったから、買ったげるよ」

「いいよ」

「遠慮するなつて。どうせ千円くらいだろ？」

ずっしりと重いおしゃれ図鑑のような書籍を手に取り、綾音がレジへ向かって歩き出す。

不安そうにその様子を見守っていた雅も、頬をゆるめひよこひよこ後に続いた。

綾音が財布を取り出す。

雅はカウンターで肘をついて、嬉しそうに本と綾音を何度も見比べていた。

「二千五百円になります」

「い！……」

恐怖の宣告に綾音が一瞬で凍りつく。

すっかり固まってしまった綾音を不安そうに見上げる雅。それから小学生らしからぬ表情で、諦めたようにつつむいた。

横目でちらりと見やる綾音。

眉を寄せ、震える声を絞り出した。

「……やつすう」

「……」

宿舎へ帰る道中、雅はずっとスキップをし続けた。夕暮れの街並みで、綾音に買ってもらった本を頭上へ持ち上げて嬉しそうに笑う。くるりと振り返り、それを胸もとで抱きしめた。

「ありがとう、綾さん」

満面の笑顔だった。

それを見て綾音も心から嬉しそうに笑った。

忍は深夜になっても勉強を続けていた。部屋では夕季が眠っているため、共同の食堂で教科書を開く。

あくびをしながら綾音がやって来た。

「まだやってんだ」室内が暗いことに気づき、照明をすべてとす。「頑張ってるね。でも適当なところできりつけて寝なよ」

「うん、あと少しだけ。……」ふと思い立つ。「ねえ、綾さん、ちよつとわからないところがあるんだけど……」

「無理無理。あんたにわからないものがあたしにわかるわけないでしょ」

大げさに両手を押し出してみせる綾音に、忍は困ったような顔を向けた。

「そっか。これやったらすぐ寝ようと思ってたんだけど、もう少し頑張ろうかな」苦笑い。「起きてなきゃいけないと思ったら、何だか急におなかすいてきちゃったな……」

妙なプレッシャーを感じて綾音が口もとをひくつかせる。

「……。ラーメン作ってやるから勘弁しろっての……」

「そう言うと思ってた」

にやっと笑った忍を見て、綾音はすべて計算づくであったことを理解した。

「おまえ、最初からそのつもりだったろ」

「えへへえ」

「えへへえ、じゃない！」大あくび。「あゝあ、あたしも腹減っちゃったな。一緒に食べるかな」

二人は向かい合って即席ラーメンを食していた。ズルツ、ズルツと夢中で食べ続ける。

忍が笑顔を向けた。

「やっぱり綾さんの作ったラーメンはおいしいね」

「ぬかせ。本当は寝る前にこんなもの食べちゃ駄目なんだからね。

今日は特別。特別だから……」

しかめつらの綾音を眺め、忍が嬉しそうに笑った。

「あ、やば、とまんない。もう一杯いこ」

「……」

夕季はその家の前から一步も動かなかった。

綾音を通りかかり、不思議そうに中を覗き見る。

庭で一匹の大型犬が夕季の方へ顔を向けていた。

「犬、好きなの？」

夕季が振り返った。吹き抜ける木枯らしもものともせず、何かを訴えるようにじつと綾音を見つめ続ける。

「……子供が産まれたらくれるって」

ぶるぶるっと肩をすくめ、困ったように綾音が眉を寄せた。

「……残念だけど、うちじゃ飼えないんだよね」

「……」

夕季は何も言わずに綾音の顔を見続けた。

無言のプレッシャーを感じて綾音が口もとをひくつかせる。

「……。んじゃ、ここの家の人に、いつでも触らせてくれるように頼んであげるから、それで我慢しなっ」

夕季は綾音の顔を見つめたまま、黙って頷いた。

礼也は遠くから宿舍の明かりを睨みつけていた。辺りはすでに暗

くなり、通りもまばらだった。

いつしか雪がちらつき始める。

アルバイトを終え帰って来た綾音が、礼也の姿を見つけて近寄って行った。

「うゝさぶ！」ぶるぶるつと肩をすばめ、手のひらをこすり合わせる。「どした？　また悪いことして陵太郎に怒られたのか」

礼也が顔をそむける。

綾音がにやつと笑った。

「ケンカだろ？　一緒に謝ってやるから、行こ」

「やだ。謝るようなこと、してねえ」

「バカ、仲直りしろって言ってんじゃないって。あんたまた飛び出して来たんでしょ。きつと陵太郎や雅、心配してるよ。みんなに迷惑かけてるんだから、そっちはあんたが悪い」

「……」

「何だかよくわからないけど、あんたが大事にしていることがあって、それを守ろうとしてケンカになったんなら謝らなくていい。だったらあたしもそいつ一緒にぶつとばしてやるって。けどどね、もしあんたがそいつに逆のことをしたのなら、ちゃんと謝りな。それで勝手にへソ曲げてるような奴は、あたしがぶつとばすからね」

「……」

勢いを失い、礼也が顔を伏せる。

それを見て綾音は安心したように笑った。

「心配すんな。陵太郎が間違ったこと言いやがったら、張り倒してやるから」

洪々頷く礼也。

「よし」頭に降り積もった雪を取り払うようにガシガシと撫で、マフラーを礼也の首へかける。肩を抱き、自分の体へぎゅつと押しつけた。「行こ」

綾音が礼也の手をつかもうとする。

一度は引いたものの、おそろおそろ礼也がそれを握り返した。

降り落ちる雪が街灯の光に浮かび上がる中、二人が手をつないで歩き出す。

綾音がバッグの中から何ものかを取り出し、礼也へ手渡した。
バイト先から持ち帰ったメロンパンだった。

「腹減ったろ。これ食べな」

「……」

目に涙を浮かべながら礼也がパンにかじりつく。

綾音はそれを嬉しそうに眺めていた。

「おいしいでしょ。あたしが作ったんだよ」

「……ん」

綾音は重い足取りで家路をたどっていた。

疲れ果てた表情で宿舎の前へ立つ。

すでに他の面々は各自の部屋へ入室している様子で、入り口にも明かりはなかった。

いつからか自分には必要のない存在だと感じ始めていた。

ここにいれば多くの人間が笑顔を向けてはくれる。だが他人とのつながりはみな上辺だけで、本当は自分が誰からも必要とされていないのだと、綾音は強く思うようになっていた。

いつまでもとどまっていたところで結果を残せる見込みもない。

このままここにいても、どうにもならないはずだ。自分だけでなく、周囲にとっても。自分はここにはならない人間なのだ、と。

そして綾音は、節目となるこの日にみなに別れを告げるつもりだった。

眉を寄せドアノブへ手をかける。

それを開け放ち、心の内を吐露した瞬間に自分はこここの人間ではなくなる。ここから解放されるのだ。ここから出ていかなければならなくなるのだ。

静かに綾音が扉を開いた。

もう二度と帰ることもないだろう、決別の扉を……

＊

いつしか綾音は海竜王の中で眠ってしまっていた。
冷たい体躯に抱かれるようにその身を任せる。

海竜王の内部から静かに広がる淡い光が、綾音の指先に近づきつつあった。

しかしそれは綾音に触れることを躊躇するように、何度も満ち引きを繰り返すだけだった。

綾音の目尻から流れ落ちる涙。

「……ひかる、陵太郎……ごめん……」

悲しげに眉をゆらす。

それは懸命に苦痛に耐えているふうにも見えた。

海竜王から光が退いていく。

まるで綾音に触れるのをためらうかのように。

サッカー部の練習を終え、穂村光輔は疲れた表情で下宿の前までたどりついた。

すでに陽は落ちており、眠そうにあくびをしながら階段を駆け上がる。

光輔の部屋の前で立ちつくす人影があった。

振り返り、彼女がにこつと笑う。

「おつす、光輔。元気でやってる？」

光輔が目を見開く。

信じられないものを見たと言わんばかりに、それを口にした。

「綾、さん……」

太陽のような微笑みが光輔を迎え入れようとしていた。

了

第十一話 『シーユーアゲイン』 9（後書き）

変なところで区切ってしまいました。

特に大きな展開もなくせに横道だけがどんどん膨らんでしまい、紹介編なのに一話では収まらなくなってしまうたからです。再開一発目からこの展開はかなりインパクト不足で微妙な感じです。

本来ならば数話にまたがって少しずつエピソードを積み重ねていくのが自然な流れですが、一度に詰め込んだことで非常に慌しくもなっていました。見苦しいとはわかってはいるのですが、やむをえずという感じで……。

それでも見捨てずにおつきあいしていただける皆様に感謝しております。今後ともよろしく願います。

次回からはリバーズ（裏面）となります。

第十二話 『ソーロンゲ』 OP

聞き覚えのある泣き声が聞こえ、伏見綾音は振り返った。

宿舎の入り口で、光輔が立ったまま泣いていた。

近寄って頭へ手のひらを乗せる。

「どうした、光輔。誰かにいじめられたか？」

しかし光輔は顔をゆがめたまま、えぐつ、えぐつと泣きわめくだけだった。

「ほら、泣くな、泣くな」腰を落とし、綾音が光輔の顔を覗き見た。ふいに光輔が綾音に抱きつく。

母親に甘えるように、誰はばかることなく想いをぶつけ続けた。

「光輔……」

綾音が目を細める。光輔の頭を抱き、つつみ込むように微笑んだ。
「綾さん、さっきは光ちゃんがごめんなさい」

宿舎の食堂で穂村ひかるに声をかけられ、綾音が顔を向ける。

「いいって、別に」ふつと笑った。「なんか急に淋しくなっちゃったみたいだね。でも、あたしゃお母さんかったの」

そう言って楽しげに笑う綾音を、ひかるは穏やかに見つめていた。

「しかし、あんたも大変だね。本当に光輔のお母さんみたいなものだしさ」

「そうでもないよ。私も光ちゃんがいるからやっていける、みたいなところもあるし」

「そんなもんかね。あたしにはわからんよ。到底耐えられそうにないわ」

「綾さんの方がもつと大変でしょ」

「なんで？」綾音が不思議顔を向ける。

それをおもしろそうに眺め、ひかるが言い放った。

「だって、私達全員のお母さんみたいなものだし」

「やめろって、ひかる。あんたとは三つしか違わないんだから。せめてお姉さんって言えっての」

露骨に顔をゆがめて否定する綾音に、ひかるがさらなる追い討ちをかける。

「おかゝあさん。お小遣いくださいな」

「……てめえ」

ふふつ、とひかるが笑った。

その時、樹神陵太郎が食堂の扉を開いた。

二人が同時に顔を向ける。

「ひかる、雅知らないか？」

「みやちゃんならさつきしいちゃんのところにしたけど」

「おう……。あら？」ようやく綾音の存在に気づく陵太郎。「お、綾さんもいたのか」

「も、いて悪かったかい？」

意地悪そうに綾音が笑う。

慌てて陵太郎が作り笑いを浮かべた。

「いや、いってくれてよかったってことで……」

「ことで、ってどういうことであ……」

あきれたように嘆息する綾音。

そんな様子を見かね、ひかるがフォローを入れるように割って入る。

「あ、りょうちゃん。このあいだのことだけど」

「ナイスひかる、と言わんばかりの陵太郎。ポンと手を叩いた。

「おお、俺もそのことでちょうどおまえに話があったんだ！」

陵太郎とひかるが楽しそうに笑う。

綾音は淋しそうな顔で静かに二人を眺めていた。

自分が邪魔者であることを感じ取りながら。

「ねえ、お姉ちゃんは？」

放心状態で立ちつくす光輔が、悲しみに揺れる綾音の顔を見上げていた。

「ねえ、お姉ちゃん、どうしたの……」

何も言わず、綾音が光輔を抱きしめる。

声にならない絶叫を心の内に封じ込め、とめどなく流れ出る涙を押さえつけるように、綾音はただひたすら光輔の小さな体を抱きしめていた。

「光輔……」ぎゅっと唇を噛みしめる。『ひかるを殺したのは私だ……』

第十二話 『ソーロング』 1

「ほお」

メガル本部別館の特殊技術研究室で桔平は感嘆の声をもらした。
レーシングスーツのようなジャケットを羽織り、その着心地を何
度も確認する。

「すげえな、ほとんど重さを感じない」

正面で手を重ね、技術者は満足げにその様子を見守っていた。

リトルメタボリック、兵装開発担当の朴だった。

五十坪ほどの広大な部屋の中には、いろいろ物騒なものが乱雑に
敷きつめられている。万が一に備え、防護壁に囲まれているため窓
はない。

朴は丸眼鏡をかけた丸い顔を満面の笑みでつつみ、得意げに説明
を始めた。

「今までの半分の重さだよ。もともとそんなに重たいわけでもなか
ったけどね。パツと見、薄手のレザーみたいだけど、着心地はウレ
タン素材に近いでしょ」

桔平の背中に左手を添える。

「力を抜いて」

「？」

朴が右腕を大きく振りかざす。その手の中には大型のハンマーが
握り込まれていた。

「ちょ、ちょ、朴さん！」

桔平の顔が青ざめる。

それすらものともせず、朴はにこやかな笑みのまま拳大の鋼鉄の
塊を力任せに桔平の背中へ見舞った。

「ああ〜っ！……ん？」 桔平が目を白黒させる。「痛くねえ……」

ほとんど衝撃を感じなかった。わずかに軽めの何かを投げつけられた程度。

すると朴はさらに満足そうに笑いながら、桔平の顔を見上げた。
「すごいでしょ。桔平さんの背中、ピンポン玉が当たったくらいにしか感じなかったんじゃないの？」

「……確かに。何だこりや、どういうことだ？」

「インパクトの瞬間、服の中身が衝撃を感知して硬化したの。ダイラタンシー流体みたいなものだね。中身は秘密だけど」

「ダイラタン……。何だって？」

「水がない時、海の砂を思いっきり踏みしめると硬くなるでしょ。

簡単に言うとあれとおんなじ。片栗粉の液化化物質だと思うとわかりやすいよ」

「……簡単に言うとおんなじなんでスな。ふん……」

「それと衝撃を縦横斜め全方向に分散させる素材を交互に重ね合わせる。オビイ用のだとあんまりモコモコにできないから、五層ずつ。でも今度のは心臓のところに新型の極薄トラウマプレートも付けてあるし、コンバットナイフくらいじゃ全然とおらないよ。槍で突かれても手のひらで押されたような感じがするだけ。衝撃ばっちりカットできてると思う」アイスピックを差し上げた。「一発やってみる？」

「いや、いい、いい」身をよじりながら両手を押し出す。「万がーがこええ」

「残念だね。信用してくれてると思ってたのに」

「信用できねえのはあんたのコントロールの方なだけだな」

「それはあるかもね」ガッハッハと笑う。「こないだもダーツやって、カウンターで飲んだ東大出の新人君のお尻にブスツと刺さっちゃったしね。きゃー！ だつて。あつはつは！」

「いや、あつはつは、じゃねえだろ……」

わけもわからず、一見何のへんてつもない薄手のジャケットを見続けるだけの桔平。

「何だかよくわからんが、とにかくすげえな」

「これは竜王のオビイ専用特別に軽く作ってあるけど、メック用のもちゃんとできてる。今、江西町の工場でテストロットを作らせてるから、そのうち届くよ。同じデザインでオートバイ用のも作ってるから、いつロットが切り換わってるのか誰も気づかないよ。メガテック・バイカーズは今やちょっとしたブランドだしね。メックのはバルカン砲にだって耐えるんじゃないかな」

「マジでか？」

「うん。そのかわり、中の人、骨とか腸とかぐちゃぐちゃになるけどね」

「駄目じゃん！」

「まだまだ改良の余地が多いのは確かだね。見た目はかなり微妙だけど、表面を魚のウロコみたいにして衝撃を分散させたりしちゃうのも効果あるみたい。トラウマプレートもどんどん進化してるし、今に拳銃弾くらいなら人体へテンションを伝える前に吸収できるようになるんじゃないかな。当たってもスーパーマンみたいにタマがぼろぼろ落ちるよ。それに爆発反応装甲をミックスしちゃうかなとかも考えてたんだけど、やめといたよ」

「何じゃ、そりゃ」

「圧力とインパクトにしか反応しない爆薬をアーマーの外側に付けね、衝撃を爆発のエネルギーと爆風で緩和しちゃうの」

「イスラエルの戦車とかに付いてたやつか？」

「そ」

「……。殴っただけで派手に爆発とかしたら、さぞかし相手もびつくりすんだろうな……」

「びつくりどころか、相手もぶっ飛ぶよ。まあ、殴ったくらいじゃ反応しないけどね。目の前で戦車に大砲撃たれても、吹っ飛んで跳ね返るけど無事。人間ゴムマリだね」

「そっからいいイメージが全然連想できねえんだが……」

「ヘルメットとネックガードしとけば顔が吹き飛ぶこともないんだ

けど、たぶん中の人気が絶して結局やられちゃうだろうからボツ」

「ボツだわな……」

ものものしく煩雑な机の上から、これまたバイク用の物に見えるヘルメットを手に取る。

「このフルフェイスのヘルメットと合わせれば、防御はさらにオツケー。とりあえず即死の可能性はかなり下がったんじゃないかな。メック用のスーツには簡単な増幅機能を備えたのもバリエーションとして用意する予定だから。竜王のサポートシステムからフィードバックされたやつだけど、一人で車をひっくり返すくらいは楽勝だね。世界一強い男になれるよ。無線連絡や各種情報の操作もシールドディスプレイからアイセンサーで呼び出される仕組みだよ。これもまだ実験段階だけど、近いうちに空を飛ばしたり、素手でインプくらい弾き飛ばせるような装置も搭載していくから」

「……そんなんじゃ内輪ゲンカもできねえな。ちよつとしたロボツトだ」

桔平が複雑そうに顔をゆがめる。

そんな気持ちをまるで解そうともせず、楽しそうに笑いながら朴は続けた。

「パワードスーツってとこじゃない？ 実際デリーの研究所では竜王を模したパワードスーツが開発中だよ。本当の意味でのメック・トルーパーの登場も遠からずってところかもね」新型の銃を手にする。「このアサルトライフルも弾丸がオリハルコン・コートしてあるやつだからね。インプくらいならかなり有効だと思うよ。結構ダメージいけるんじゃない。うまくいけば貫通させて一発で何体も倒せるかも。ハンドガンと弾の共有ができないのが痛いけどね」

「……。竜王の件は？」

「ああ、カメラね。付けといたよ。もともとゴーグルシステムは異物でしかなかったからやらないけど、今のマイクロホン側のスイッチでオビイにもこっちの様子が送れるようにしておいた。邪魔になるといけないから任意だね。あとは健康状態と精神状態を計測する

センサー。これも任意で呼び出せるようにしようと思ったけど、かえって混乱するんじゃないかって思ってたやめといたよ。司令室のモニタには常に夕季ちゃん達の情報が送信されるんだけどね」

「ああ、その方がいいな。奴らの状態はこっちできっちり管理するつもりだから」ジャケットを脱ぎ、桔平は信頼する者だけに見せる顔で朴へ振り返った。「サンキュー、朴さん」

朴が嬉しそうに笑った。

「あ、そうだ」ふいに背中を向け、机の引出しから何冊もの本を取り出す。「これ綾ちゃんに渡しといて。読みたいって言ってたから」桔平の両肩が下がるほどの蔵書の山を押し出した。

幾何学、航空力学、量子理論といった分厚い専門書だけでなく、超常現象とUFOの謎、都市伝説マガジン、ワンとニャンダフル、といったものから、漫画やアニメ雑誌までさまざまなジャンルを網羅する。

「こういうマニアックな本って、向こうだとあんまり日本語のやつないんだって」

「月刊アニメマッチョ、って……、まあこれもマニアックっちゃマニアックだわな」

「昨日二時間以上もおしゃべりしちゃった」にこにこ満面の笑みを浮かべる。「いい娘だね。僕がくだらないこと言っても一生懸命レシーブしてくれるしね」

「あんたの言うことは難しいこと以外は大抵くだらねえことだな」
「心外だね。僕も桔平さんには毎回転レシーブさせられてるのに」
「打ったタマが全部外に出てつまってんじゃないか……」

「言えてるね。綾ちゃんはちゃんとトス上げてくれるから僕らより立派。僕の奥さんにしたいくらい」

「奥さんならいるだろ。あんたなんかにもつたいないくらい美人のが」

「おお、そうだった。ミス上海大の最終選考にまで残ったようなベっぴんさんなのにつかり忘れてたよ。ミスまであとちょっとだっ

たのに残念だったよ、奥さん」

「審査員の胸ぐらつかんで失格になったのがちよつとか」

「まさか殴られるとは思ってなかったけどね。エッチな水着でむらむらしますねって言っただけなのに」

「あんた留学中に何やってたんだ……」

「同じこと言われて、ミスの人はポツと顔を赤らめてたよ。ほんと、それだけの差なのにね」

「……一生かかっても埋められねえ差だな」

「うちの奥さん、怒ると怖いからね」

「遊びに行つて、正座させられるとは思わなかったな。夜中まで騒いでたこつちも悪かったが」

「機嫌悪かったね。巨人が逆転負けしたから」

「勝つてるときは一緒になつて騒いでたくせにな……」

「ビール、じゃんじゃん出てきてたのにね。ほんと、七回までは六対〇だったのに……」遠い目をする。「じゃ、綾ちゃん、娘になつてくれないかな」

「娘もいるだろが。……あんたそっくりな残念なのが二人」

「あいや、うつかりしてたね」

「しすぎだわな」

「いくら桔平さんでも娘の顔の悪口は許さないよ！二人とも奥さんの若い頃そっくりのべっぴんさんなのに」

「……性格があんたに似てるのが問題なんだって」

「三人でモノポリーやると僕がいつもハメられるの。うかうかトイレもいけないよ」

「黙ってりや文句ねえんだがな」

「二人でネカマの振りして評判の悪いブログとか炎上させちゃうらしいよ」

「ネカマって……。すげえことしやがんな」

「僕もやられた。すぐにやり返したけどね」

「……最低だな」

「娘のこと侮辱すると許さないよ！」

「いや、あんたのことを侮辱したんだが……」

「ほんと、顔と性格が逆ならよかったのにね」

「いや、最悪だろ」

二人で苦笑い。

「ほんと、あの娘、おもしろいね。発想が柔軟でユニーク。頭良く
ていゝんなこと知ってるから切り口の幅も広いの。まあ、一番盛り
上がったのは特撮ヒーローの話なんだけどね。るろろろろろ」

「二時間も何の話してやがったんだろうな……」

「いやあ、まさか僕と娘達の他に、かつて日本を支配していた先住
民族がジオフロントに潜伏していて、破壊作用の巨大ロボットを
使って国家転覆を目論んでる、って仮説を持つてる人間がいるとは
夢にも思わなかったよ。実に萌えたね」

「危ねえこと言っでねえで勝手に燃えつきちまえて……」やれや
れという表情を向けた。「ま、変人同士気が合うんだろうな」

「あつはつは」メタボ腹を揺らしながら豪快に笑う。「桔平さ
んにだけは言われたくないね」

「あんな……」

「いい娘だよ。一生懸命みんなにとけこもうとしてるし」

「結構いじわるだけどな」むすつと口もとをゆがめる。「俺が知ら
ねえこと承知の上で、わざと難しいこと連発してきやがる」

「ああ、桔平さんからかうとおもしろいよって、僕が教えたの。す
ぐ知ったかぶりとかするからって」

「てめえのせいだ！」

「言いがかりつけると訴えるよ！」

「なんでやねん……」

「ホワツイディス！」

「ホワツ？……」

第十二話 『ソーロンゲ』 2

下宿先の廊下で振り返り、光輔が嬉しそうに笑った。

「ずいぶん久しぶりに会ったってのに、よく俺のことわかったね」
それを受けて綾音も、にやっと笑い返す。

「ああ。すぐにわかったよ」

「十才の頃から変わってないってこと？」部屋のドアを開ける。「
あ、ちらかってるけど、ゆっくりしていつてよ」

「ああ、サンキュ。あたしがあんた達のこと見間違えるわけないで
しよが。どんなに見た目が変わっても絶対に変わらないものがある
んだよ」部屋の明かりがとる。「うっわ、きつたな！」

雑誌やゴミで散らかった六畳間を片づけながら、光輔が不思議そ
うな顔を向けた。

「そつなの？」

「特に『泣き虫光輔』はね」上着を脱ぎ、意地悪そうに笑った。カ
ップラーメンの空容器を踏み抜く。「ほんと、きたねーな！」

「勘弁してよ……。でもさ、帰って来てるんならもつと早く教えて
くれればよかったのに」とりあえず邪魔な物を押し込めようと、押入
れを開ける。「雅も夕季も何も言ってくれないんだもんね」

「あたしが頼んだの。あんたをびっくりさせてやろうと思ってね。

ばたばたして結局こんな遅くなっちゃったけどさ」押入れから
洗濯物の塊が雪崩となって転がり落ちてきた。「逆にびっくりさせ
られるとは思わなかったけどね……」

「言ってくれたら片づけといたのに」

「普段から片づけとけて！ マンガに出てくる部屋が！」

「あ、綾さん、ゴキブリ」

「おわっ！」雑誌を片手に格闘が始まった。「てめえっ！ てめっ
！ あ、そつちいった、光輔！」

「おわっ！」

「どけ、光輔！」ミッション・コンプリート。満足げに胸を張った。
「よし！」

苦笑いの光輔。

「相変わらずだな、綾さんは。昔と全然変わんな……」綾音の顔を
しげしげと見つめる。「あれ？ 太った？」

「おまえも言うか！」

「あ、でもそのメガネかけてるとさあ……」思いついたようにポン
と手を叩いた。「ああ、なるほど」

「やかましい！」

「やっぱりアメリカだと毎日肉ばかり食べてるから？」

「ぶっ殺されたいのか！ 何が、食べてるから？ だ。すでに増量
確定じゃねえか！」

「だって……」

「おかしいだろ！ 人を傷つけといて、だって、はおかしいだろ！」

「まあまあ、綾さん、落ち着いて。久しぶりに会ったんだからさあ
……」

「久しぶりに会って、太ったとか言われる身にもなってみろや！」

「あっはっは」

「おまえ、泣かすぞ！ ったく、おまえも雅もろくな育ち方してな
いな」

「はは……」

ひとしきりまくし立て、綾音がふっと笑う。

「仕方ないか。陵太郎の兄弟じゃ」

「……」

光輔は懐かしそうに綾音の顔を眺めていた。

小さなテーブルに向かい合って座り、綾音が目を丸くして大声を
あげる。

「マジで？ あの夕季がねえ」

「そつだよ。俺もびつくり。あんなさ、子供みたいにぼろぼろ泣くんだもん。普段は桔平さんや鳳さんにタメ口きいたり、礼也にだつて平気で食つてかかるくせにさ」

「へえ。結構かわいいところあるじゃんか。忍の前くらいでしか泣かないと思つてたのに。あたしは一度もあいつのそんなところ見たことないなあ。階段から転げ落ちた時だつて、鼻血だらだら流しながら平然と歩いてたからね。ガキンちよのくせに、ここんところにシワ寄せちゃつてさ。ううん、だつてさ」

「あつははは！」目尻に涙を滲ませながら光輔が反り返る。「あ、このことあいつに言わないでよ。またすつげえ睨まれるから」

「わかつてるつて」綾音がにやりと笑つた。「あんた夕季のこと大好きだつたもんね」

「……いや、なんのこと」

「待つてゝ、ゆうちゃ〜ん、ゆうちゃ〜んっ」

「いや、それ、やめて……」

「あつははは！」

「……ほんと、いじわるだよなあ、綾さんつて」淋しそうに顔をそむける。「雅がいじわるなのは間違いない綾さんのせいだ」

「あつはつは！ 言うな、言うな。あ、何か食べたいものある？ 作つたげるよ。足りないものあつたら、すぐに見つてくるから」

「……」綾音が抱えてきたスーパールの袋をしげしげと眺め、光輔が考える。やがて迷いのない口調でリクエストを告げた。「ラーメン」「はあ？」

「久しぶりに綾さんが作つたラーメンが食べたい……」

二人は向かい合つてラーメンをズルズルと流し込んでいた。

「これこれ。これが食いたかつたんだよ」ぷは〜と顔を上げ、光輔が目を輝かせる。「やつぱ、綾さんの作るラーメンは別格だな」格別と言いたかつたらしい。

「何言つてんだつて」湯気で白くなつた眼鏡を取り、髪を後ろで束

ねた。「即席ラーメンなんて誰が作ったって同じでしょうが」

どんぶりの中身は即席ラーメンにきざみネギと玉子を落としただけの、いたってシンプルなものだった。

周囲には綾音が買い揃えた食材で作られた豪華なサイドメニューが並ぶ。

光輔はそれらの皿には目もくれず、ひたすらラーメンだけを食らっていた。

「それが違うんだな。何だろ？ この麺の湯で具合とか、スープ投入のタイミングだとか、タマゴの絶妙な半熟加減だとか……」

「……」

「真似しようと思ってもできないんだよ。しいちゃんも言ってた。何度トライしてもあの感じは出せなかったって」

「……おまえら、もつといいもの食え」

「それはそうなだけどさ、何て言うんだろ。たまにさ、すごく食べたくなるんだよな。どんなうまいラーメン屋に行っても、それはそれみたいな。ほら、夜中までゲームやってたりする時とか、特にさ。だから俺、ゲームやってると綾さんの顔、よく浮かんでくるよ」

「……。何つつ覚え方してんだ、おまえは」

「ははっ、人それぞれだよ。しいちゃんも即席ラーメン作るたびに綾さんの顔浮かんでくるんだって。雅は本屋さんに行くと綾さん思い出すらしいよ。なんでか知らないけど。礼也はメロンパンをバカにされると綾さんをバカにされたような気がして、その人とケンカになっちゃうんだって」

「そいつは迷惑な話だな……」

「はは」ぐびぐび、と汁を飲み干す。「おかわり」

「はいよ」光輔が差し出したどんぶりを受け取り、綾音が立ち上がった。「あたしももう一杯いこ」

「ほんと、よかった」

振り返り、動きを止める綾音。光輔の顔に注目した。

「しばらくこっちにいるんでしょ。これでまた、ちよくちよく綾さ

んのラーメンが食べられる」

綾音は何も答えなかった。ふっと笑い、静かに流し台の方へ向かう。

その様子を光輔は不思議そうに眺めていた。

「うーん……」宿題とにらめっこの光輔が眉間に皺を寄せる。

その横で綾音は昔のアルバムを懐かしそうに眺めていた。

「……」口をタコのようにすばめ、光輔がちらと綾音を見やった。

「綾さん……」

「駄目」顔も向けずに即答。「もう少し自分で頑張るな」

「きびし」。先生と変わんないじゃんか……」

「あたしは先生みたいに優しくないよ」スナック菓子をマシンガンのように口へ放り込みながら、鋭利なまなざしを光らせる。「夕季だつて体調不良で一学期の成績散々だったのに、最後にはちゃんと帳尻合わせたんだからね。あんたももうちょっと頑張んなよ。……あら、もうなくなったか」

「いや、夕季と一緒にされても……」

「今日ぐらい、ちゃんと宿題やるときな」二袋目を開封した。「最後まで見てやるから。……。うめーな、これ……」

「ぐむっ……」

悩ましげに頭を抱える光輔。

それもおかまいなしで、綾音はアルバムの写真を見続けた。

誰かの誕生日会のものだった。見知った面々がずらりと並ぶ中心で、泣いている光輔を抱きしめるように笑顔の綾音がいた。

「ねえ、あんたさ……」

綾音に話しかけられ、シャープペンシルを鼻の下に挟んだまま光輔が顔を向けた。

「なんでオビディエンサー辞めちゃったの？」

綾音も顔を上げる。

二人が真顔で向き合った。

「嫌だったの？」

「……嫌、つてわけでもないけど」

「じゃ何？ やっぱり怖いからとか？」

「うーん、それもあるけど……」

「……」

「サッカー、やりたくてさ」

「部活？」

「うん。入部はしてたんだけど、アスモデウスがいなくなるまでは
ごたごたしてて、ろくに練習にも出られなかったから」

「両立は難しそうだね」

「うん。うちの学校、メガルと関わり深いから、ある程度は便宜も
はかってくれるみたいけどさ。やっぱりね。竜王に乗ってるから
とか、みんなに言うわけにもいかないし……」

「そっぴや、夕季も剣道部辞めちゃったって言ってたな」

「あ、でもさ」 思い出したように光輔。「またアスモデウスみたい
のが出てきたら、俺乗ってもいいと思ってるよ。そしたら部活と
か言ってられないだろうしね。夕季や礼也にも助けてもらったから、
少しでもあいつらの役に立ちたいしさ」

綾音が光輔の顔をまじまじと見つめる。

その眼光の鋭さに息苦しさを覚え、光輔が顔を伏せた。

「……なんて甘いかな、やっぱ」

綾音が部屋を見回す。

多少乱雑ではあるが、どこにでもあるような男子高校生の部屋だ
った。ゲーム機、雑誌、マンガ本、模型、サッカーボールとスパイ
クシューズ。

同じ環境の高校生達にそれ以上の役割が課せられることはない。

「心配すんなって」

顔を上げる光輔。

綾音は穏やかな表情で光輔を見つめていた。

「もう乗らなくてもいいよ。メガルは人材の宝庫だからね。陵太郎

の時は急すぎて対応できなかったみたいだけど、もう大丈夫だよ。
あんたは何の心配もしなくていい」

「……綾さん」

「だから一生懸命勉強しな」

「綾さん、てば……」

綾音が光輔の部屋から出て行く。

去り際に一言、「また来るよ」と告げた。

その表情にかげりが見えたのが光輔は気になった。
妙な胸騒ぎがしていた。

とある午後。

光輔は庶務課での手続きを行うためにメガル本部を訪れていた。
身分証明を提示し、ゲートを抜ける。

途端に夕季の叫び声が襲いかかってきた。

「光輔！」

嫌な予感がして、おそろおそろ光輔が振り返る。

夕季の表情からは怒り以外のものが見出せなかった。

「あんた、綾さんに何言ったの！」

「……」顔をそむけ、上ずった声を絞り出す。「いえ、何も……」

「嘘つくな！」

逃げようとした光輔の首根っこを後ろから夕季がつかむ。

「……綾さんてば……」

「光輔！」

礼也の怒号に光輔が振り返る。

これまた、好意的とはほど遠い、激しいまなざしだった。

「てめ、綾さんに何言いやがった！」

「……。ああ、あれね？」何かを思い出したと言わんばかりにポンと手を叩く。「あれあれ……」

逃げようとするところを、今度は夕季とは反対の首根っこを礼也につかまれた。

「逃がさねえぞ」

二人が光輔の襟を引き千切らんばかりに振り回す。

光輔はただ無抵抗のまま、なすがまま、頭をカクカクと揺り動かすだけだった。

「……あの、このとおり本人も反省していることですし、今回は見逃していただけませんかでしょうか……」

情けない口調で許しを請う。

それに対する二人の表情は、NO！ だった。

「……。あの、俺何言ったわけ？」

「てめえ！」

「覚悟しろ！」

「覚悟しろって、……女の子が」

「息の根止めるから」

「おう、止める、止める！」

「……」

「光輔……！」

光輔に負けず劣らずの情けない声に三人が注目する。

桔平が今にも泣きそうな様子で走り寄って来るのが見えた。

夕季がそっぽを向く。

「この野郎、綾っぺに何言った！」そう叫ぶや、桔平が光輔の胸倉を両手で締め上げる。「ことと次第によっちゃボコボコだ！」

「……」

一旦顔を伏せ、再び顔を上げると、光輔は心から申し訳なさそうに口を開いた。

「すいません。桔平さんの場合、心当たりが多すぎて……」

「なんでやね〜ん……」

第十二話 『ソーロング』 2（後書き）

すっかり左手マウスに慣れてしまいました。右手用マウスのままですが、何が便利かと言われれば、まあアドベンチャー系のゲームをやる時くらいでしょうか（エッチなやつだったりするかどうかは秘密です）。文章を打ち込む時はテンキーとかあんまり使わないし、よく手もとが狂うので結局いいのか悪いのかといった感じです。まあ、左手でコーヒー飲むよりは格段にこぼさなくなったと言い切れます。あ、それだけです。

どうもありがとうございました。

第十二話 『ソーロンゲ』 3

竜王の格納庫の隣にある控室に桔平と綾音の姿があった。

その日の訓練を終え、綾音がパイプ椅子へ腰を下ろし、深く息を吐き出す。表情の薄いその顔は少し疲れているようにも見えた。

「ほらよ」

「ありがとうございます」

桔平から手渡された紙コップを受け取り、綾音が嬉しそうに笑った。

「もうすっかりコツつかんじまったな」

桔平を上目遣いに眺め、コーヒーをズズズとする。「まだまだですよ」

「そんなことねえだろ」ズズズズとすすった。「あっちーなあ！ もう！」

「ひいらり……、柊さん、猫舌でしたっけ？」

「んあ？」凶悪なまなざしを綾音に向ける。「ひいらりんでいいわ。約束だからな。あの激辛勝負以来、舌の皮がズルむけなんだって」

「それはまいっちゃんぐですね」

「まいっちゃんぐだな」

「だったらアイスにした方が」

「おお、いつも買ってから気づく。さっきもそうだ」

「……」ふいをつかれたように綾音が笑う。「本当に変な人ですね。夕季が言っていたとおりです」

「うるせーよ！ こっちは目一杯普通のつもりなんだよ！ それをあのガキヤ、思いつきりぶん投げやがって。まだ後頭部いてえぞ。

おい、綾っぺ。おまえ夕季の姉御なんだろ。ガツンと言っとけ」

「わかりました。ガツンと言っておきます」ズズズ、と軽く受け流

した。「あゝ、おいしい」

「野郎、俺のこと、完全に見下してやがるからな。何とか尊敬するように仕向けられねえもんかな」

「あっははは」

「いや、笑いごとじゃねえって」

「大丈夫ですよ。ああ見えてあいつ、柊さんには一目置いていますから」

「……。とてもそうは思えねえんだが、俺の気のせいかな？」

「余裕がないだけです。あいつはいつも、いっぱいいいです。から。どんな時でも目一杯で、一生懸命で、それがあの子の唯一のとりえなんです」

「わかってる、けどな……」ふいに物憂げに目を細める。「ほんと猫みてえな奴だつて。なつかねえくせに知らねえうちにチヨコンといやがるから、触ろうとするとまた逃げていきやがるし」

「猫、好きなんですか」

「……。猫はな」

「ご自分もノラ猫ですからね」

「……」淋しそうな顔を向けた。「てか、俺は一匹狼のつもりだったんだが……」

「人間社会に一匹狼なんて存在しませんよ。そんなことを言っているのは群の中にいるのに気づいていない平和な人だけです。まあ、だいたいご自分だけそう思われてるパターンがほとんどですが」

「……。俺？」

「はい」

「……」

「狼は集団を好み調和を重んじる賢い動物です。もしたとえるのなら、一匹狼は一人で運命を切り開くかつこい存在ではなく、群から締め出された嫌われ者という解釈が妥当でしょうね」

「……。俺？」

「……。その点はどうなのでしょう……」

「……」

「狩りをする獣は生きるために群を作ることが多い。そうしないと他の群に邪魔をされて獲物にありつくことができないから。何だか人間と似ていますね」

「生き物の本質は同じってこともな。俺らだって木場みたいにウツホウホ言ってた時は集団で狩りとかしてただろうしな。会社の組織なんかも、どっかしら自然の摂理と似通ってる」

「でも野生の動物は人間の社会の中では生きてはいけない。どれだけ強くても、大きくても、捕獲されるか飢え死にするだけです。ごくまれに共存を実現している地域もあるようですが、それも人間側の妥協による部分が大きいはずです」

「てめえらで奴らの居場所踏み荒らしといて、妥協もくそもねえだろが」

「それは言えてますね」意地悪そうな顔をしてみせた。「だけど、猫はどんな環境でもしたたかに生き抜いていく。時には媚びて、時には牙を剥き、そのくせどこにいても野生を失わない」

「犬だって同じだろ」

「……」がっかりしたように桔平を見つめる。「犬は木に登れないじゃないですか」

「なこと言ったら、猫だって泳げねえだろが」

「……。引き分けですね」

「……。引き分けか、な」

「そんなことはどうでもいいんですけど」

「どうでもよかったのか、やっぱ……」販売機に硬貨を投入し、セレクトする。「あ、またホット買っちゃったじゃねえか！」

綾音がおもしろそうに笑った。

「大丈夫です。夕季も礼也も、決して嫌いな人間に頼ったりはしませんから」

「……」桔平が、まあいいか、という顔になる。「おまえさんに言われるとそんな気になってきちゃうな」

「甘えているんですよ。あいつ、同年代の人達の中にいるのが苦手みたいだし」

「だったら、もっとかわいく甘えてくれねえかな」ズズズ。「あち！　すごくあち！」

「かわいいじゃないですか、充分」
「ん？」

「あたしはあいつがかわいくて仕方ありません。あいつだけじゃなくて、礼也も雅も、忍だつて……」

「……。おまえさん、こんなことやってねえで、学校の先生にでもなつた方がよかつたんじゃないか」

「はい？」

「何だつたら口きいてやってもいいぜ。山凌の講師くらいなら何とかなるしよ」

「そんなツラじゃないですよ」

「どんなツラだ、そりゃ……」

「あははは」

楽しそうに笑う綾音を眺め、桔平もおもしろそうに笑った。

「まあいいわ。んなことになつたらリベンジもままならねえからな」
「リベンジ？」

「おうよ」ふん、と鼻息を荒げる。「この俺を二度までも負かした、激辛大好きバカ食いエロメガネ女を勝ち逃げさせてたまるかつての」

「……もう少し言い方ないんですか」

「オバキユーでもそんな食わねえぞ」

「なんスか、それ……」

「おいおい、ずいぶんと挑戦的じゃねえか。今度は何で勝負しようつてんだ！　おお？」

「いや、あつしは何も言つてねえですが……」

「メガ味噌カツか？　びつくりベトコン・ラーメンか？　それともサクッと鬼盛りチャーハンか？」

「ああ、それ全部クリアしました」

「何！」

「ただになるからって雅にそそのかされて」自嘲気味に微笑む。「結局あいつが食べた分は私が払いましたが……」

「ぐむむむ」と悔しがる桔平。「てめえら、何故俺も誘わねえ！」

「……。お忙しいだろうと思って……」

「お忙しいもへつたくれもねえだろ！」激しく睨みつけた。「冷てえじゃねえか！」

「……ノラ猫というよりは淋しがりやのウサギちゃんですね」

「ウサギちゃんだってえの！ あゝあ、みっちゃんも切ねえよな。あんなにおごってやったのによ。誘ってくれりや仕事早引けしてでも行くってえのに」

「……副局長って結構ご自由なんですね」

「ああ！」じろりと綾音を睨めつける。「ご自由も何も、どうせ俺なんざ飾りみたいなモンだからな。いらねえ子だ」

「みなさん、よく従っていらっしやいますよね」

「んなモン、俺の後ろにいる局長が怖いからに決まってるんだろ。俺がチクリや、てめえらがクビになるとでも思ってるんだろ。俺には何の権限もねえってのによ。風野のおっさんの一言で大臣の席に空きができるとは聞いたことあるが」

「怖い世界ですね……」

「怖い世界だつての。俺なんか局長のハンコがなけりや意見の一つもとおらねえ立場だつてのに。置き物つてか、言ってみりやマスコミトみてえなモンだ。寝坊こいて爆睡してても、ふけて便所でタバコ吸ってても、知らないうちに重要な会議は暮れてく。後で怒られても知ったこっちゃねえ。つまんねえ揚げ足とって得意なツラしてやがるアンポンどもを睨み倒して黙らせるのが、マスコミである俺の役目だ」

「ずいぶんやさぐれたマスコミですね……」

「所詮任命職なんざその程度だろ。本当の権力者だとは誰も認めてねえよ。奴らから見りや、チンピラがコネで肩書きだけの仕事をや

つてるようなモンだからな」

「……自覚していらっしゃったんですか」
「たりめえだ」

「そうですか。お心が広いんですね」

「まあな」得意げに胸を張る。「もしメックや他の奴らが言いやがったら、顔の形がなくなるまでブン殴ってやるけどな」

「あ、やっぱり……」ふっ、と笑いかけた。「でも、それだけ柊さんと進藤局長の信頼関係が磐石だと、みなさんが信じていらっしゃるということですね」

「ぬかせ」けっ、と顔をしかめる。それから腕組みをしながら考える素振りをしてみせた。「だが、正直、あいつがあれだけできる女だとは思わなかったけどな。あれなら前任者にもひけをとらねえ。しゃくだが、俺なんかじゃとてもあいつの代わりは務まらねえ」

「……。なるほど……」

「ん？」にんまりと微笑む綾音に、桔平が不思議そうな顔を向ける。「何が、なるほど、なんだ？」

「いえ、別に」

「？」

綾音はそれ以上何も答えようとせず、ただ嬉しそうに桔平を見つめていた。

照れ臭そうに顔をそむけ、桔平が咳払いをする。まあいいか、という表情だった。

綾音といると桔平は妙な安心感につつまれるようだった。

「なんかよ」

「？」

「綾っぺ見てると、昔のあさみみたいに思えてくるわ。髪型とかよ」綾音の心が揺れる。静かに紙コップを見つめ、淋しそうに笑ってみせた。

「なんでそんなに自分を縛りつける」

桔平の言葉に綾音がはっとなる。

「……何のことですか」

すると桔平は残りのコーヒーを流し込みながら、何ごともなかったように続けた。

「言いたくなくや言わなくてもいい。だがこれだけは自覚しておけ。おまえさんが苦しそうな顔すると、あいつらも苦しむ。その方がおまえさんにとつてはつらいんじゃないのか」

「……。聞いていたとおりの人ですね……」

「……」真顔になり、綾音の顔をまじまじと眺める。「おまえ、死んでもいいって思ってるだろ」

「！」

目を見開いて硬直する綾音。それから笑みを作り、無理に平静を装ってみせた。

「わかっちゃいました？ 私が死にたがっていること」

桔平が静かにその顔を見据えた。

「死にたいわけじゃない。でも死んでもかまわないって思ってる」

「……」

「わかるんだよ、そういうこと考えている奴のツラは。生きていることを申し訳ないって思ってたやがる。理由まではわからないがな。だから、いつ死んだって、後悔とかしないんだろ」

「ご自分がそうだからですか」

今度は桔平が動きを止める番だった。

それを好ましげに見守り、綾音がふつと笑った。

「……何となく、わかる気がする」

「何がだ」

「いえ……」桔平から顔をそむける。暗くなった窓から本館の辺りを見上げた。「おとなしく飼われていれば楽なのに、自ら人の手を離れてノラになる犬や猫がいる。どうしてなんでしょうかね」

「そういう生き方が好きなんだろ」

「そうでしょうか。私にはそうしなければならなかった理由があるように思えて仕方がないんですけれど」

「……」

「ウサギは淋しいと死んじゃうってよく言いますけど、あれは嘘ですね。野生のウサギは一匹でも生きていける。淋しいと死んでしまふのは、生きることを放棄した人間だけです。だから……」淋しそうに目を伏せた。「気をつけてあげてくださいね」

「……」

桔平の表情が曇る。そのまなざしに決意が浮かび上がった。

「知ってるんだよな」

振り向きもせずに綾音。

「何がですか」

「やっぱりな。全部知ってますって顔だ」

桔平と同じ顔になって綾音が振り返った。

「だったら、どうします」

「どうもしねえよ」じろりと睨めつける。「おまえさんこそ、どうするつもりだ」

「どうもしませんよ」

「何故だ。あいつを助きたいんじゃないのか」

「だからです」涼しげなまなざしを向けた。「あの人を助けられるのはあなたしかいませんから」

「……俺はあいつの敵だぞ。つじつま合ってねえんじゃねえのか」

「そうでしょうか」

「どういう意味だ」

「私にはそうは思えない。本当に矛盾しているのは、あなたの方なんじゃないですか」

綾音の言葉が桔平の心へ突き刺さる。

その悲しみを含んだ微笑みが誰に向けられたものなのか、桔平にはわからなかった。

「……。どこから情報仕入れたかは知らないが、それが本当だと信じているのなら、このまま放ってはおけないだろう」

「そうですね」

「俺を殺すつもりだったのか」

「それも考えました。それで本当にあの人が救われるのなら」淡々と受け答え、平然とそれを口にする。「でも、それじゃ何も変わらない。むしろ彼女を苦しめるだけだから……」

今度は桔平が悲しげな表情を向ける番だった。

「苦しいのはあいつじゃなくておまえの方だろ」

「かもしれませんね。こちらが返り討ちにあう確率の方が高そうですし」

口をつぐんでしまった桔平に、綾音が力なく微笑みかける。

「すごいですよね。ほんの二、三分前まで食べ物や動物の話をしていたのに、今では殺すか殺されるかの睨み合いです。ほんと、怖い世界ですよ。きつと夕季達はわかっていないんでしょうね。自分達がこんなにも凄まじい環境に組み込まれてしまったことすら」

「……」

「ついさっきまで親しげに笑いながら世間話をしていた仲間が、次の瞬間には突然敵意を剥き出しにして自分の命を奪おうとする。そんなこと夢にも思わないでしょうね、あいつらは」

「心配なら教えてやったらどうだ」

「そんなことしたら夜も眠れなくなりますよ」

「だったら、おまえさんがそばにいて守ってやるんだな」

「必要ないでしょ。あなたがいれば」

「とぼけたことぬかしやがると……」

「ぶっ殺しますか？」

桔平が綾音の顔を真っ直ぐに見据える。

その直視すら、綾音は笑顔で受け流した。

「……」桔平が口をへの字に結ぶ。「俺のときのジョークで笑い死にさせてやる」

「無理ですよ、柊さんのセンスじゃ」

「何！」

「すみません」申し訳なさそうに眉を寄せた。「こっちも結構いっ

ばいいっぱいなんですけどね、柊さんの顔を見ているとついからかいたくなってしまう。朴さんの言うとおりですね」

「てめえら……。……なんか本気で殺意がわいてきちまったな」

「あははは」おもしろそうに笑った。「……わかるような気がします。あの人の気持ちも……」

「……」

複雑そうな表情で桔平が窓から外を見上げる。

本館の最上階からは消えることのない明かりが二人を見下ろしているようでもあった。

それから桔平は、向けるべきか否か迷っていたあいくちを綾音ののどもとへと突きつけてみせた。

「もしあいつが、おまえを殺そうとしているとしたら、どうする」

「……さあ」桔平を静かに見つめ、綾音が淋しそうに笑った。「どうしたらいいですかね……」

第十二話 『ソーロング』 3（後書き）

ゴールデンウィークは何もしませんでした。時間は腐るほどあったのに、取り返しのつかないほど見事に無駄な時を過ごしました。

唯一友人達と焼きそばパーティーをしたくらいです。富士宮焼きそばを食べてきたと豪語する世間知らずの田舎者に、本当の焼きそばというものを食らわしてやりました。これで彼もしばらくは大きな顔ができないでしょう。大きな手は生まれつきなので許すことにします。

そんな環境の中でいいモノができるわけねえす……

第十二話 『ソーロンゲ』 4

本館連絡通路で桔平と忍は並んで歩いていた。

午後からの会議に必要な資料を忍が桔平に手渡す。

桔平の顔を見るや、多くの職員達が立ち止まって会釈をする。それから、隣にいるまだ若いがかつちりとスーツを着こなした長身の女性職員をいぶかしげに眺め、通り過ぎて行った。

そんな反応などどこ吹く様子で、二人は世間話に花を咲かせていた。

「礼也なんてケンカしてバツが悪くなると、綾さんが帰って来るまですつと外で待っているんですよ。綾さんもそれがわかつているから当たり前前みたいになっっていて、いつも手をつないで一緒に宿舎に入って来るんです」

「あのわからんちんがねえ」窮屈そうに襟首に指を突っ込む。「イメージわかねえ」

「本当に、あの人がいなかったら、今の私達はなかったと思います」桔平の表情がなくなる。

忍が何ごとかを告げようとしていることを感じ取ったからだった。

「こうちゃんのお姉さんが事故で亡くなったこと、ご存知ですよね」

「ん、ああ……」

「綾さんはそれが自分のせいだと思っているんです」

「……。また何で」

忍が足を止めて顎を引く。すべてを告げる覚悟ができたようだった。

「前に言っていました。ひかるを救えなかったのは自分のせいだって。自分の中に、ひかるがいなくなることを望んでいた心がある。だから、救おうとしなかったからだって」

「……何だ、そりゃ」

「……。綾さん、りょうちゃんのことを好きだったんです」

「！」

目を見開いたまま桔平が襟もとをぐいと開く。少しだけ眉を揺らした。

「でも、そのひかるって娘がいなくなった時、あいつだって悲しい想いをしたんだろ」

桔平の視線をしつかりと受け止め、忍が頷いた。

「誰よりも悲しかったと思います。私達はみな家族みたいなものでしたから。とりわけひかるちゃんとりょうちゃんは綾さんにとって本当の兄弟同然だったはずです。だから、黙って二人のことを見守るうとしていた。それなのにそんな迷いから彼女を救えなかったことに責任を感じているんです。あの人は……」

昔を思い返すように、ガラス越しの青空を見上げた。

それを横目で見やり、桔平が嘆息した。

「そんなの、誰だって考えることだろ。それでひかるって娘が救えたかどうかわからないのによ。だいたいその娘だって、自分で納得して光輔を助けに行っただんだろ。だったら綾っぺが責任感じることもねえだろが」

忍が振り返った。

「でも綾さんはそれが許せないんです。少しでもそう感じてしまった自分自身が許せないんです。光ちゃんの搭乗実験を止められなかったことや、私達を捨てて逃げるようにここを飛び出したことも。

最後まで光ちゃんの実験に反対していたのは、むしろ綾さんだったのに。誰も責めたりしないのに、それなのに許せないんです、自分が……」

「で、一人で苦しんでるってわけか……」

「ええ……」

ぐいぐいとネクタイをゆるめ、桔平も空を見上げた。

遠くに積乱雲が見える。

「……。あいつは償いのためにここにやって来たんだな。……ここ

で死ぬために」

「綾さんが……」

忍がはっとなる。すぐに眉を寄せてうつむいた。

「助ける、とか言わないのか」

「……。綾さんがそれを望んでいるんですよね」絞り出すように言葉をつないでいった。「苦しくて苦しくて、どうしようもなくつて、そうしたいって思っているんですよ。それであの人が楽になれるのなら、仕方がないことなのかもしれません。私達はあの人に何度も助けられてきた。でも私達では彼女を救うことはできない……」

「誰にも心を開かないから、か？」

「……」忍が頷く。悲しげに目を細めた。「あの人を救える人がいるとしたら、一人だけです。それも今では望めません」

「……。眼鏡は心の中を覗かれないための仮面みたいなもんか……」

桔平が深く憤りのようなため息をついた。

「桔平さん。どうしたらいいんでしょう」

ふいにあふれ出た感情を隠そうともせずさらけ出す忍を、桔平は表情もなく眺め続けた。

「仕方がないなんて嘘です。あの人が死ぬなんて、そんなの嫌です。私はあの人を失いたくない。私だけじゃない。夕季も、礼也やみやちゃんだって。あの人は私達の心の支えなんです。みんなの希望なんです。それなのに、すぐそばにいるのに、私達はあの人に触れることもできない……」

「もうとつくに救われてるんじゃないかねえのか？」

桔平の言葉に活目する忍。

桔平は涼しげに空を見上げ、先につなげていった。

「ただあいつがそれに気がついてないだけでよ。おまえらが本当にあいつのことを大切な人間と思っているのなら、ぶん殴つてでもそれに気づかせてやれよ」

「……」

口をつぐむ忍を見やり、桔平がふっと笑う。

「みんながぁいつを必要だと思っっていることを気づかせてやればいだけだろ。そんだけ強く想ってんだ。嫌われるくらいの覚悟はできてんだろっしな」

「……それでどうにかなるくらいなら、とっくにしてますよ」「ん？」

「どれだけ殴ったところで心は動きませんよ」

「じゃ、どうしろってんだ」

「わかりません。でも……」顎を引き、探るようにそれを口にする。「心に傷を持つ人間が本当に痛みを感じるのは、優しくそっと抱きしめられた時なのかもしれませんね……」

「……」慥然とした表情で忍を見つめ返す。「俺にやってくれって言ってんのか？」

「……。やつちゃ駄目ですよ……」

「……」あきれたように嘆息した。「わかってんだったらやりやいいじゃねえか」

「それができれば一番なんですけどね……」

切なそうな顔を忍が差し向けた。

「……。メンドクせえんだな」

「ええ……」

すっかり消沈してしまった忍に目を細める桔平。

「別れ際の言葉にもいろんな意味があつてな。次の日に会うことがわかって『さよなら』って言うこともあれば、二度と会えない人間に『また会いましょう』って言うて別れることもある。あいつの場合はちよぴつと複雑だ」太陽の眩しさに手をかざした。「もう二度とおまえらに会うまいって覚悟を胸に秘めながら、明日を口にする。次の約束をする。おまえらを心配させないためなのか、それとも……」

「……どうしてそんなことがわかるんですか」

「さあ……。どうしてだろうな……」

「……」

「それは本当なのか？」

司令部別室で桔平が顔をしかめる。

机の上で手を組み、重々しくあさみが頷いた。

「十三体もの木偶が、一斉に姿を消しただと……」

「それも今朝未明、突如として」

「……。アスモデウスはプログラムごと消滅したはずだ。残ったのは石の塊ばかりだったんじゃないかねえのか」

「カウンターも何の反応も示していないわ。新しいプログラムの発動も確認されていない。もともと木偶として現れたそれらの残りが、アスモデウスの消滅によって維持する力を失ったということじゃないかしら」

「そんな都合のいい解釈じゃ割り切れねえな」襟に人差し指を突っ込み、ネクタイを緩める。「なんで今なんだ。アスモデウスが消滅した時に、ついでに消えて無くなるのが筋じゃねえのか」

「そんな筋、どこで確認を取ったの？」

あさみがにつこり笑う。

その瞳の奥の空虚さを覗き込み、桔平は目を細めた。心の内を読まれないように顔をそむける。

「……それにしてもあっちいな。もう十月だってのに、何とかかなんねえのか」

「そうね。これもプログラムのせいかもしれないわよ」

「んなことあってたまるか！ 地球の温暖化は人類のせいだ。自業自得だ。何でもかんでも奴らのせいにしよってんじゃない、虫が良すぎるぜ」

桔平を静かに眺め、あさみが笑う。

広域に渡る正面のガラス窓から、海面からの照り返しを含めた飽和状態の光量がこれでもかと押し寄せてきていた。

上着を脱ぎ、襟もとを開いて暑さを拒絶する桔平に対し、あさみはスーツ姿のまま汗一つかかずに机に向かい続けた。

「……さすが、パーフェクト・コールドだな」

「何？」

「いや、何でもねえ。それにしても……」恨めしそうに天井を睨みつける。「こんな時にクーラーの故障だなんてよ、やってらんねえ」
「申請は出しておいたから、もうすぐ空調屋さんが修理に来るとは思っけれど」

「それまで待つてたら死んじまうって」ネクタイをむしり取った。

「あー、もー、耐えらんねえ！」

「タオルくらい持つてきたら？」

「そんなことよりこの部屋にカキ氷器を買ってくれって。同じこと何回言わせる気だ！」

「却下」

「いやいや、一年中カキ氷が食えるぞ」

「冬になったら考えてあげる」

「く……」ギリと睨みつける。「冬はあれだろ、肉まんあっためるやつ買ってもらわなくちゃいけねえしな……」

コールがかかり、内線電話を受けるあさみ。

『荒井空調さんが修理に来ましたが』

「通して」

受話器を置くあさみをちらと見て、桔平が情けない顔を向けた。

「おい、直つたら呼んでくれ。俺はそれまで綾っぺ……、伏見の様子を見てくる」

「ずいぶんとご親密な仲になったみたいね」意味ありげににやりと笑う。

「ぬかせ。昔のおまえそっくりなんで、どういじわるしてやろうかと気持ちが高ぶっているだけだ」

「そう言えば彼女も同じようなことを言っていたわよ」

「何！ あの野郎、口の中に氷の塊突っ込んでロレツまわらなくしてやろうか！……」ぽんとひらめく。「そうか、カキ氷で勝負つう手があったか。あれなら目頭がツーンとなつて、あのバカ食い女で

もバキュームし続けらんねえはずだ！ サイケデリヤのマウンテンフラッペなら三回ツーンぐらいで俺は完食する自信がある。あいつが頭抱えながらレロレロ言って悶え苦しむ姿が目……」

「昨日それクリアしてきましたって、さっき報告に来たわよ」

「……」無表情にあさみを眺める。「……なんて」

「ただにならなかつたって怒ってたわ。二杯も頼んでおいて」

「……。そいつあ怒れるよな……」

桔平が部屋を出て行く。

その背中を見守りながら、あさみは少しだけ淋しそうに眉を寄せた。

あさみは司令室の机の前で、組んだ手の彼方に見える海原に定まらぬ視線を泳がせていた。

「すみませんね。あと少しで終わりますから」脚立の上から空調屋が告げる。

わずかにも表情を変えることなく、あさみは気持ちのこもらない声でそれに返した。

「……ええ」

天井にあるカバーとフィルターをはずし、上半身を埋めるように作業しているため、表情は読み取れない。その穏やかな口調は人の良さそうな商売人の中年男性を連想させた。

「あつついですねえ」

「……。ごめんなさい、気がきかなくて。扇風機でも持つてこさせましょうか？」

「いえ、いいんです。こういうのは慣れっこですから。でもねえ、こっ暑いと思わずいたずらの一つもしたくなっちゃいませんか？」

あさみがちらと空調屋を見上げる。

その顔に微妙な変化が浮かび上がった。

「なにね、いたずらって言ってもたいしたものじゃありませんよ。むしろ周りの人が喜んでくれるようなことです。せいぜい座ってい

る椅子の下に水風船でも仕掛けて割る程度のちっちゃないたずらですから」

「！」あさみが目を見開く。

それを知ってか知らずか、空調屋は相変わらずの調子で話し続けた。

「もちろん、今座っている方の椅子だとバレちゃいますからねえ。

仕掛けるなら新しい人の椅子がいいんじゃないでしょうかねえ。あ、心配いりませんよ。リモコンで遠くから割っちゃえば、わかりませんから。ボタンを押した人に水がかかるようなこともないでしょうしね。よろしければ、私が仕掛けておきましようか？」

「……」

それ以上何も受け答えることもなく、あさみは虚ろなまなざしを空の彼方へと泳がせていた。

第十二話 『ソーロング』 5

早朝、桔平らは竜王の格納庫の中にいた。

竜王のコクピットを点検していた技術者が顔を向ける。

「何も異常はありませんが」

「そうか……」

桔平の隣で木場が怪訝そうに顔をゆがめた。

「おい、桔平。気持ちはわからんでもないが、毎回毎回ここまでする必要があるのか？」

「んあ？」眉間に皺を寄せる。すぐに真顔になった。「ガセかもな。俺達を躍らせるための。だが万が一ってこともある。面倒だろうが何だろうが、俺がいいって言うまではこれが続けてくれ。とにかく奴らが搭乗する前には、必ずコクピットの中をくまなく調べるんだ」

「ああ」

「このことはあいつらには黙っておいてくれ」閉め切った場内を見回し声のトーンを落とす。「余計な不安を与えたくない。くれぐれもだ」

「ああ、心得ている」

「あんたらもな」

桔平の呼びかけに技術者達が顔を上げる。

「わかってますよ。なあ」

「ああ」

にやりと笑う。みな桔平が信頼を寄せる面々だった。

「思い過ぎだといいがな」

「ああ……」木場の顔も見ず、桔平は焦点の定まらぬまなざしを泳がせた。「或いは、時期をうかがっているのかもな……」

光輔は頼りない足取りで駅までの道のりを歩いていった。歩幅は小さく、ズボンのサイドポケットに両手を突っ込み、カバンを脇に抱えている。

さんさんと陽射しの降り注ぐ並木道の途中でふと立ち止まり、情けない顔で後ろを振り返った。

十メートルほど後方を歩く夕季と目が合う。
すると表情もなく夕季がふいと顔をそむけた。

途端に光輔の顔がさらに情けなさを増す。

「だから、誤解なんだって。信じてくれよ」

夕季がちらと顔を向ける。何も言わず、またすぐに横を向いた。

「うんもー！」身悶える光輔。「そんなつもりじゃなかったんだってば。でも本当に悪口とか言っていないからさ。なあ、本当だって。もう勘弁してくれよお」

「……」

「おまえのこと誉めてたら、たまたまそんな話になっただけなんだって。信じてくれよ」

「……」

「悪かったって。謝るからさあ。ゆうきい。そんなに怒るなよ。あ、そうだ！」ぽんと手を叩く。「あれおごるから。おばちゃんの店で。おまえの好きなストロベリー……」

「……」

まるで反応のない夕季に、根負けしたように光輔が前を向く。肩を落とし、はあく、と深く息を吐き出した。

光輔達の高校は中間考査試験の最中だった。テスト期間中は半日で下校できる。

通り過ぎて行く他の生徒達の目には、二人の様子はケンカ中のカッパルのように映っていたはずだった。

「……」

目線だけで夕季が様子をうかがう。

しょぼくれた光輔の背中が妙に痛々しく見えた。

何かを言おうとして、夕季がわずかに口を開く。

「ふた……」

その時、携帯電話に呼び出しがかかった。呼び出しに応じる夕季。

すぐに桔平の大声が飛び込んできた。

『夕季！ えれえことになった！』

顔をしかめ、人差し指で耳を塞ぎながら電話機を遠ざけた。

『アスモデウスだ！』

「！」

一変する夕季の顔つき。口もとを結び、携帯電話をまた引き戻した。

ゆっくりと光輔が顔を向ける。夕季の真剣なまなざしに、ただならぬ何ごとかを感じ取った。

『カウンターの反応もなしにいきなりだ。こないだ消えた木偶の一つらしい』

容赦なく押し寄せる桔平のがなり声は、光輔のいる場所までも通話圏内と化していた。

「どこに？」

『堂園町だ。まだ実害はないが、いつ動き出すとも知れねえ。早めに叩くぞ。おまえ今、どこにいる？』

「まだ学校を出たところ」

『そうか。近くに広い道はないか？』

「もうすぐ駅に着く」

『だったら駅で待ってる。すぐに空竜王積んで大沼を向かわせる。今のところインプが出たって報告はないが、不安だったら学校へ戻っててもいい』

「いい。駅で待ってる。早く来させて」

『すぐにその辺りもパニックになる。巻き込まれんじゃねえぞ』

「わかってる」

『礼也の方が近いとろにいるみたいだが、一人だけじゃ危険だ。早

く合流してくれ』

「了解。……綾さんは？」おそろおそろそれを口にする。

『綾っぺ……、綾音は待機中だ。まだやめとけつつたんだが、どうしても出たいって言い張ってな。礼也と合流してから、メックと一緒にバックアップさせる』

「無理させちゃ駄目だよ。綾さんはまだ……」

『んなこたあ、言われなくてもわかってる！ 余計な心配すんな！』
「……うん」

通話を終了し、夕季が光輔に向き直る。眉に力を込めながら真剣なまなざしをぶつけた。

「光輔、アスモデウスが出た」

「！」夕季と同じ顔になる。「どこに？」

「堂園町。あたしは駅でメックと合流するから、光輔は学校に戻ってて」

「いや、だつて……」

「大丈夫。心配しないで。何とかするから」

「ん。ああ……」

光輔が目線を落とす。

自分がそれに関わらないことを心苦しく感じているように夕季には見えた。

ふと、ぴんときて、光輔が顔を向ける。

「……。あれ？ 綾さんがどうしたって？」

「……」

「……。夕季……」

二人の不安を煽り立てるように、避難を促す大音量の警告サイレンが街中に響き渡った。

綾音は竜王の格納庫の前で、真新しいブルーのバトル・ジャケットに身を包み、出撃の待ち構えていた。

緊張の面持ちで眉を寄せ、ふうふう、と大きく息を吐き出す。

眼鏡をはずし、どこへともなく視線を泳がせた。

「おい、綾っぺ」

「はい」綾音が振り返る。桔平の姿を認めるや一瞬で表情を整え、余裕めいた笑みを差し向けた。顔を桔平に向けたまま、眼鏡をケースへ収める。

それを怪訝そうに眺めながら、桔平は平坦な口調で指示を伝えようとした。

「相手は木偶人形みたいなモンだ。ずっと反応もなかったし、今回だって結局動かずじまいかもしれねえ。解体作業のつもりで軽い感じでいけ」

「はい」

「かと言って動き出したらええこっちゃだ。慎重にいけ」

「……どっちすか」

「作戦は礼也と夕季の合流後に行く。もしもの時はあいつらが対応するから安心しろ。おまえらだけじゃ、木偶だろうと抑え切れないだろうからな」

「わかってます」

「大惨事だけは避けなくちゃならねえ。そしたら大惨事世界大戦だ」
「今のまったく必要なかったですね」

コホンと咳払いをし、桔平が懸架台の上のコイルガンを眺める。

「このガンも見た目は同じだが、中身は前の三倍増した。インプクらないならコアに当たらなくても充分コッパにできる。びびってちびんじゃねえぞ」

「大丈夫です。このコイルガンを設計したのは私ですから」

「……。あ、そうなの？」

綾音が安心したように笑った。すぐにその表情にかげりが浮き上がる。

「いいな、正面からやり合おうなんて考えるなよ。ヤバイとこは礼也や夕季に任せておけばいい。おまえは鳳さんの指示に従え。いいか……」

「がってんでさ！」

「……」

「……。あれ？……」

「……」こめかみを指でかく。「とにかくだ。現場の人間が危険だと判断したら、すぐに引つ込めさせるからな。そのつもりでいる」

「はい……」

そろって苦笑い。

「とりあえず、おまえは自分が助かることを第一に考える。それとヘルメットを差し上げる。朴の研究室に置いてあったものだった。

「こいつを着ける」

「それってメック用のものですよね。いりませんよ。こんな狭い中でそんなものかぶったら窮屈すぎて……」

「邪魔でも何でもいい。とにかく着ける」

「……」礼也達は着けなくてもいいのにですか？

「あいつらは別だ。こんなものかぶっていたら精神感応の妨げになる。覚醒していればコクピット内にちよつとしたシールドのようなものができるらしいしな」

「……」

「とにかくおまえは着ける！ 窮屈でも何でも、俺がいつて言うまでは取るんじゃねえぞ。もし取りやがったら、もう二度とメシおごってやんねえぞ。ひいらりん、とも呼ばせてやらん。それと今度俺のギャグにケチつけやがったらマジで張り倒すからそのつもりでいろ。わかつたな！」

「最後に本音が出ちゃいましたね……」

有無を言わず押しつける桔平に、綾音が心外そうに目尻を下げた。

その様子をまじまじと眺め、ふと桔平が動きを止める。

綾音の窮屈そうな胸もとに目線が釘づけたった。

その真剣なまなざしに気づき、綾音もピツタリとフィットしたスーツを見下ろした。

「少しサイズが小さいですね」

「いや、充分でけえと思うが」

「は？」

「へ？」

ようやく微動だにしない桔平の視線の行き先に気がつく。

「……」

「……」

二人が困ったような顔を見合わせた。

ふいに桔平がぽりぽりと頭をかき始める。

「……おい、あのだ。頼みがある」

不思議そうに顔を向ける綾音。

桔平はモジモジしながら、睨みつけるような表情でそれを口にしたら。

「何だか、つまんねえことで夕季とギクシャクしちゃった。自力じやリペア不可能だ。そこでおまえからあいつに伝えてほしいことがある」

「何をですか？」

しばし熟考。コホンと咳払いをした。「……俺の勘違いだった。

実はおまえもイイ感じの巨乳だったかもしれない」

「……。はあ！」一瞬の沈黙の後、思わず声が裏返る。両目をまん丸に見開いていた。「セクハラ？」

「いや、セクハラとかじゃねえし……」

「わざわざワンクッションとか入れてからに！」

「とにかく伝える。おまえの口から直接だ。俺には到底言えそうもない」

「それは言えないとは思いますが……」

「いいな、約束だぞ。このミッションが終わったら必ずだ」

「本当にいいんですか？」

「くどいぞ」

「でも、それ言ったらもつとギクシャクすると思いますけど」

「……」 桔平が動きを止める。「ちょっと待て。今は……」

綾音の顔色をうかがうように、桔平が頼りない声を押し出した。

「……ボインちゃんの方がポイント高いと思うか？」

「セクハラのですか？」

「いや、好感度の……」

「……さあ、私には決めかねますが」

「……あいつも変わりモンだからな」

「あなたほどじゃないですけどね……」

「……。うん……」

「そんなに悩むようなことなんですか……」 むん、と口もとを結び、綾音が手を叩いた。「じゃ、とりあえずそれでいってみましょうか」

「……いや、ちょっと待ってください」

「はあ……」

「もう少しだけ俺に時間をくれ」

「……いいですけど」

「バックパックの交換をしますから、しばらく待っていてください」
クルーにそう告げられ、格納庫の前で綾音が踏み止まる。

勢いをそがれ、妙なテンションで振り返ると、通路に控えめな笑顔で見つめる雅の姿があった。

「綾さん、頑張ってたね」

綾音がふつと笑う。嬉しそうに雅を見つめ返した。

「あんたもね」

「うん」

「ま、それもあたし次第か……」

「ん？」

「今回はあんたの出番はなさそうだよ。光輔に代わってもらうつもりもないし」

「だから頑張ってたって言ったの」

いたずらっぽく笑う雅を眺め、綾音は自嘲気味に目を伏せた。

「本当に、あんた達は……」

「絶対帰って来てよ」

はっとなって顔を上げる綾音。

凜としたまなざしの雅がいた。

「……大丈夫だって。礼也や夕季がいるし。木場さん達も……」

「約束だよ」

「……。ああ」

「待ってるから。一応スタンバっておくけどね」

「……。雅」

「何？」

「……じゃあね」

雅が眉を寄せる。不安げな表情だった。

「そういう言い方、綾さんらしくないよ」

「……」

「帰って来るんでしょう？ ちょっと出て行くだけなんですよ？」

「……たりまえだろ」

「だったら……」

内線通話の呼び出しを受け、綾音がそれに応じる。

桔平からだった。

『綾っぺ、アスモデウスが動き出した』

「！」「くわと目を見開く。「了解しました。すぐ行きます」

通話を終え、綾音が覚悟を決めた表情を彼方へ投げかける。

その時、雅が背中から覆い被さってきた。ふんわりと包み込むよ

うに、優しく静かに綾音の体を抱きしめる。

「……何やってんだ、おまえ。やぶからぼくに」

無然とした面持ちの綾音に、しかし雅はあくまでも笑みを含んだ

口調で受け答えた。

「うん。ちよっとお母さんばい感じで」

「お母さんて……」

「綾や」

「あやや?……」

綾音の表情が戸惑いに変わる。どうすればいいのかわからず、疲れたように目を伏せた。

「ドキドキしてるね」

「……たりまえだろ。初めての実戦なんだから」

「子供の頃ね、ドキドキしてる時に綾さんにこうしてもらったらすごく落ち着いたの。だから今度はあたしがやってあげるね」

「……」

「変な感じでしょ。今まで抱きしめてばかりで、抱きしめられたことなんてなかったから。そういうキャラじゃないもんね」

「……。おまえってほんと、意地くそ悪いよな……」

「えっへん」

「……何で得意げだったの」

「落ち着いた?」

「……ああ」静かに笑みをたたえた。「ありがと、雅……」

最終チェックのため、海竜王のコクピットに乗り込む綾音。

深く息を吐き出し、淋しげに眉を寄せた。その表情のままシートの下に目をやる。

正面へ向き直り、焦点の定まらない視線を跳ね上げたハッチのはるか彼方へと泳がせた。

「これが、あなたの望みなんだよね……」

第十二話 『ソーロング』 6

制服を風になびかせ、夕季が雑踏を駆け抜ける。

通り過ぎる人々は、みな避難のために駅とは反対の方角を目ざしていた。

車のクラクション、罵声、避難をうながす警察車両の警告が入り乱れ、街は騒然となっていた。

パニック寸前の商店街で、すれ違う住民達と何度も接触しそうになりながら、夕季が後方を気にかける。

「光輔、来ちゃ駄目。危ないから」

夕季の後から光輔が続いていた。真剣な面持ちで夕季を見つめ返す。

我先と逃げ場を求める人々の中で、二人だけが流れとは逆行していた。

「光輔！」

「気になったことがあってさ」

「……」 夕季が立ち止まり、住民の一人と接触した。「あ、すみません……」

「綾さん、何だか様子が変わった。まるでさ……」

「……」

「みんなにさよならを言いに来たみたいな」

「……。そんなはず、ないじゃない……」

「でもさ……」

光輔の言葉を断ち切るように、夕季が再び走り始める。

その背中を追いかけ、光輔は続けた。

「夕季だっておかしいって気づいてるんだろ。綾さんきつと……」

「いい加減にしなよ！ こんな時に。バカなこと……」

携帯電話の着信に気づき、再び夕季が足を止める。

桔平からだった。

「……。え、光輔？」ちらと光輔を見やる。「……。いないけど。

……。うん。うん。わかった……」

通話を終え、夕季がため息をもらした。

直後に光輔の携帯電話の着信音が鳴った。

様子をうかがうように夕季を眺め、光輔が通話に応じる。

予想通り、桔平からだった。

「もし桔平さんからだったら、あたしはそばにいないって言って
じろりと睨みつける夕季。

畏怖するようにそれを眺め、光輔が頷いた。

「え？ ああ。……はい、俺です。……。いえ、駅前です。……はい。
……。ええ。……。いいですけど……」夕季をちらと見る。「あ、
いませんよ。……。いや、そう言えって、なんか……」

「！」

「はい、ええ……。！」泣きそうな顔になった。「……。あの、凄い
顔で睨まれてるんですけど、俺どうしたらいいんすかね。……。ど
んなって、かなりヤバい感じです。……。いや、自分でなんとかし
るって言われても……。あ、あの……。え！ ボイン？ ……
なんすか、それ。……。いや、それ無理、いやあの……」

「……」

桔平との通話を終え、卑屈な笑みで夕季のご機嫌をうかがう光輔。

「あ、はは……」

まばたきもせずに睨みつけ、夕季はふいと背中を向けた。

「あ、あの……」

「ストロベリー三つ」

「ええっ！」

「……」

「……。はい……」

ダークレッドのセパレート・スーツに着替え、礼也がトレーラーの懸架台に足をかけた。片手で体を引き上げ、荷台に飛び乗る。荷台の上には上半身を起こしたポジションの陸竜王が置かれてあった。

ハッチに手をかけ礼也が振り返る。

二キロメートルほど先の街ではすでに火の手が上がっていた。そこで動き始めたアスモデウスをメック・トルーパーが足止めしているのだ。

呼び出しがあり、コクピット内の無線機を手取る。

『礼也、どうだ、行けそうか？』

モニタリングを開放すると、ハッチ裏のスペースに桔平の顔が現れた。

「ああ……」フィルムのように薄い画面を不思議そうに見上げる。

「準備オッケーす」

『そうか、頼んだぞ』

「夕季は？」画面の端をつまみ、ぐいと引っ張った。

『少し遅れそうだ。それまで何とかふんばってくれ……。バカ、てめえ、それがいくらするのかわかってんのか！ ハイブリットカーが何台買えると思ってやがる！』

「マジか……。ザコモデウスだろ。んなの陸リユウ一機で充分だって」ぺらぺらの画面がぐにやりと曲がった。

『油断は禁物だぞ。何やら、前のと違う雰囲気だ……。だから引っ張んな！ 子供か、おまえは！』

「いや、どうなってるのになってよ」

『どうせ聞いてもわかんねえんだろうが！』

「わかんねえけどよ……」打ち上げ花火のような滑腔砲の連撃音に礼也が眉をひそめる。「綾さんは？」

『綾っぺ……。綾音はメックのバックアップ中だ。無理はさせないから心配するな』

「ああ……」コクピットに身を沈め、礼也がやや上ずった声をひね

り出す。「……なあ、桔平さん。野郎を倒したら、ご褒美にこないだの店で……」

『激辛勝負はもうしねえぞ！』目を血走らせて激高する。『泣きながらヒーハー言うのは二度とゴメンだ！ てめえも甘党のくせに二百倍マロボ平気な顔して食いやがって、どうなってやがんだ』

「……メロンパンが好きってだけで、別に甘党なわけじゃねえぞ」
『やかましい！』

「……」

『そのかわり、中華に連れてってやる。木場のおごりでだ』

「……」礼也が桔平の顔に注目する。「綾さんにも言つといてくれよ」

『おお、綾っぺも夕季もみっちゃんもしの坊も一緒だ。木場のおごりでな』

「……夕季もかよ」

『つべこべ言つてたら連れてってやらねえぞ』

「わあったよ、わあった。そのかわり、俺一人で倒したら、もっかいどつか連れてってくれよ。みんな一緒でもいいから」

『わかった！ しゃぶしゃぶに連れて行ってやろう！』桔平がきっぱりと言い切った。『木場のおごりでな』

「おっし……」

通信を終了し、ハッチを閉め、礼也が目を閉じる。

「そろそろ行くかよ、陵太郎さん」

薄暗かったコクピット内が、眩いばかりの光で満たされた。

アスモデウスのゆるやかな前進に押されるように、百二十ミリ滑空砲を積載した作戦車両が後退する。

街は見る見るうちに瓦礫と黒煙に席卷されていった。

「木場！」部隊の後方で無線機を手に鳳がなりたてる。「こっちは後退させる。コイルガンの準備は？」

『いつでもいい』

「よし、替わってくれ」

『了解した』

鳳が振り返る。

整列した特装車両のかたわらで、大型トレーラーの上で方膝を立てコイルガンをかまえる海竜王を眩しそうに見上げた。

「綾音、準備はいいか」

『ばっちりです』

「よし、無茶するんじゃないぞ。おまえはそうやってかまえてるだけでもいいからな」

『がってんでさ!』

「……」ぽりぽりとこめかみをかく。

『……。あれ?……』

「撃てーっ!」

木場の号令で、十台を超す特装車両の大型コイルガンが一斉に火を噴く。

真っ先に到達したのは、海竜王のそれだった。

「……」

呆然と眺める鳳に気づき、南沢が不思議そうな顔を向ける。

「どうしたんだ、鳳さん」

「いや、何でもなし……」にやりと笑った。「仕方ねえな。みんなあいつのせいだからな」

「は?」

「ガキどもがあんなふうになっちまったのも、全部あいつのせいだっつてことだ……」

「?」

コイルガンの一斉射撃もものともせず、アスモデウスが行進を継続する。石像を思わせる灰色の姿のまま、全身のどこを可動させることもなく、声一つあがることもせず、滑るようにゆっくりと前進を続けていた。

海竜王のコクピットの中、綾音が唇を噛みしめた。

「木場さん」

呼びかけに木場が応答する。

『何だ、伏見』

「おかしくないですか」

『何がだ』

「全然、生き物の脈動が感じられないんですよ。まるで何かに操られているような」

『……。ああ……』

「ちよつと探ってみます」

『！　おい、伏見！』

「大丈夫です。無茶はしませんから」

『待て、伏見、待て！』

「大丈夫ですよ、兄さん。試してみるだけです」にやりと笑い、ふん、と鼻息を荒げる。「がつてんですから！」

『……。お、おう……』

腰部の両側にサブマシンガンと予備弾倉を携行し、コイルガンを保持したまま、海竜王がトレーラーから飛び降りる。

路面を叩き割りながらドスドスと走り回り、ビルを遮蔽物に見立てて、巨大な宇宙飛行士のような海竜王がアスモデウスの背後へ回り込んだ。

途中、綾音は何度も確認する。

アスモデウスの視覚は海竜王はおるか、他の何ものもとらえてはいないようだった。

仮面も牛も羊も、竜も、尻尾の蛇も、その目はすべて胴体と同じ石像色のままだった。

攻撃は受けるが反撃はない。

何かを認識しているのかどうかさえわからない。

確実に言えるのは、このままゆるやかな速度で前進を続ければ、いずれメガル本部へ到達するだろうことだけだった。

高層マンションの陰から海竜王が顔を出す。

そのわずか数十メートル先に、灰色の牛の顔があった。
『いける』

うん、と頷き、綾音が飛び出していく。

コイルガンを仮面の顎目がけてポイントした。

と、その時だった。

牛の目が怪しげな光を放ったのは。

「！」

死角から襲いかかる鞭のような蛇の一撃を、綾音がかるうじてかわす。

退いたその場所へ、大質量の槍が上から降ってきた。

「く！」

極度の緊張と恐怖から綾音の全身がすくむ。

身動きがとれない状態のまま、海竜王は今まさに叩き潰されようとしていた。

「綾音ーっ！」

鳳の絶叫。

それすらかき消す打撃音が辺りに響き渡ったのは、直後のことだった。

まばたきもできずに綾音が尖端の軌跡を見守る。

それは海竜王をわざわざ避けるかのように遠のき、放物線を描きながら後方へと引き抜かれていったのである。

尋常ならざる衝撃を受け、弾き飛ばされたアスモデウスの巨体が高架を砕き折る。

続けて視界を遮る赤褐色の影。

陸竜王だった。

拳を振り抜いた姿勢で大きく足を踏み出し、根を張るがごとく大地に踏みとどまる。睨みつけるような両眼が炎となって燃え上がった。

『綾さん、大丈夫か！』

「……」一瞬対応が遅れ、礼也に答えて言う。「ああ、礼也、あり

がと

『あんでもねえって！』

「……………」

全身から憤りのような圧縮空気を噴出させ、陸竜王が高く舞い上がる。

怒りの咆哮とともに睨めつけ、激情を叩きつけるその姿は、礼也の心情そのものだった。

「大それたことしやがって！ てめえ、シャレでしたじゃすまさないぞ！」口もとをつり上げる。「中華としゃぶしゃぶだ、この野郎！ 今のうちに銀行行つとけて、ゴリラえもん！」

『何がだ！』

太陽の光を背に受け、現存するどの物質よりも硬い拳がアスモデウスの仮面を陥没させた。

綾音は不安そうな面持ちで、ただその姿を眺め続けていた。

第十二話 『ソーロング』 7

『大丈夫か！ 伏見！』

綾音の心呼び覚ましたのは、木場の声だった。
慌てて応答する。

「……あ、はい。大丈夫です。木場兄さん……」
『馬鹿野郎！』

「……」

突然の怒号に綾音が言葉を失う。木場の野太い叫び声が綾音の心を引きしめた。

『二度と勝手な真似はするな！ 副司令の命令どおりヘルメットは被っているんだろうな』

慌ててヘルメットを着用する。「……ふあい」

『無事だったからよかったようなものだが、取り返しのつかないことになっていたらどうするつもりだったんだ。いつまでもうわついた気持ちでいるんじゃない！ もっと気を引きしめろ！』

「……すみません。木場……さん」

顔を失い、うなだれるように目を伏せる綾音。

そこへ礼也の声が割り込んできた。

『おい、こら、ゴリラえもん。綾さん、いじめんじゃねえ！』

『な！』

『ふざけんなって！』

『何だと！ 貴様！』

「礼也！ やめなさい！」焦って礼也をたしなめにかかる綾音。「
私が悪かったんだから。木場さんが正しい」

『つてよ……』

「すみません、木場さん。以後気をつけます。軽はずみな行動は控

えます」

『お、おお……』

真摯な姿勢で謝罪をする綾音に、木場がクールダウンする。頃合いを見計らうように鳳が参入してきた。

『おい、そのへんにしとけ、おまえら。まだ戦闘中だ』

『ああ、わかっている』

『礼也も集中しろ』

『わかっているけどよ!』

『今はくだらねえこと言ってるんじゃない。後にしろ、後に』
『……。くそっ!』

悪態をつき、渋々了承する礼也。

綾音が切羽つまった口調でとりなした。

『すみません、鳳さん』

『ん、ああ』一拍置く。『これでわかったろ、綾音。なめてかかってもフェロモンくらいしか出ねえ』

『フェロモンでか、ちびりそうでしたが……』

『それは仕方ねえ。黙っててやる』

『いえ、ちびってませんが……』

『とにかくおまえは礼也のバックアップに専念しろ』

『はい』

『それから、帰ったら説教部屋だ。覚えとけ』

『……あい』

通信を終了し、鳳がチツと舌打ちする。

『気にいらねえ。木場の奴、調子に乗りやがって』

『何言ってるんだ、あんた』

隣から問いかける駒田に、鳳は不満げな表情をしてみせた。
『綾音を怒鳴りつけられるのは、俺だけだったのに』

『……ちっせえ』

アスモデウスとの戦闘は膠着状態に入りつつあった。

終始押し気味ながら決定力を欠き、陸竜王が攻め手に窮する。

「なるっ！」

アスモデウスの振り払った石の槍を後方宙返りでかわす礼也。

アスファルトの路面に両足をめり込ませ、跳び上がる勢いでその破片を空高く巻き上げた。

伸び上がり叩きつけた拳は、石版のような左手の旗に阻まれると爆発音のごとく鈍く鳴り響き、膨大なエネルギーを広範囲に渡って迸らせた。

「一人ではキツいか……」思わず木場の口をついて出る焦り。静粛たる街を破壊し続ける魔人達の戦いを遠目に、無線機を手に取った。「大沼、まだ到着できるのか」

『すみません、隊長』大沼が応答する。その静かな口調からも焦りの色がありあろうかがえた。『避難住民の渋滞に巻き込まれてしまいました。複数のポイントで事故が多発しているようです』

「何！」

『一般車両を排除して先を急いだとしても限界があります。パニックに陥った彼らが我々の警告に従うとも思えませんが、強行いたしますか』

「……。いや、やめろ。これ以上市民感情に干渉するのはいい結果をともしないだろう。俺が夕季を拾って、直接そちらへ向かう」
『そうですね。その方が手取り早い。お願いします。こちらもあるべく急いではみませんが』

「警察と国防省にも我々の車両を優先させるよう俺から副司令へ伝えておく。大沼、ポイントを教える……」

遠くに爆発音と火の手を確認しながら、夕季と光輔が立ちすくむ。駅周辺は相変わらずの混乱状態だった。

他人を押しつけ、押し倒し、罵倒する人の群。

極限状態の今それは当然の行動であり、何びとも責められようはずもなかったが、弱者を捨て置き我先に助けを求め、あまつさえ突

き飛ばした自分達にすら罵声を浴びせる輩を、善良な市民として救わなければならない胸中は複雑だった。

夕季が振り返る。

彼方の戦闘に神経を集中させながらも、光輔の心はどこか別の場所へあるように思えた。

「……光輔」

「……。あ、うん……」

「……」

「……いや、何でもない」

「……」

着信に気づき、夕季が携帯電話を手取る。

それが緊急回線であることを確認し、側面のスライドスイッチでモードを切りかえた。

「はい、夕季です。……。はい、わかりました。……。ええ、光輔もいます。……。はい。……。はい、そうします」

通話を終了し、夕季が光輔に向き直った。

「光輔、木場さんがこっちへ向かってるって。あたし達はその足で大沼さんのところへ行くから、光輔も一緒に」

「……」

「光輔！」

「……ん、ああ」

「……」眉間に力を込め、夕季が口もとを結ぶ。「大丈夫、綾さんのことなら。今は自分の心配をして」

ゆつくりと光輔が顔を向ける。

「……ま、竜王に乗ってどうこうってわけでもないからな」心配そうに夕季を見やった。「そこまで心配しなくてもいいか……」

「……」

その時、激しい地響きとともにロータリーのアスファルトがめくれ上がった。

巨大な石像のシルエットを二人の網膜に焼き付けながら。

「何！ それは本当か！」

切羽詰った様子の鳳を、神妙な表情で駒田がうかがい見る。

「どうした、鳳さん」

「まずいことになった」

「何があった」

「もう一体現れやがった」

目を見開き、一瞬駒田が言葉を失う。

「何処へ」

その顔をまじまじと見つめ、鳳は言いたくなさげにそれを口にした。

「夕季が待機している駅のすぐそばだ。光輔も一緒らしい」

「何だって！」

「駒田。南沢達を連れて、すぐ救出に向かってくれ」

「ああ了解だ」

「鳳さん」

オープンチャンネルの無線機を通じ、綾音の声が二人を振り向かせる。

専用のサブマシンガンを両手に携えた海竜王が見下ろしていた。

「私が救出に向かいます」

「綾音、しかし……」

「車両では不確実です。足は遅くてもこの機体ならショートカットもできますし、第一路面状況に左右されることがありません。こんな時のための人型兵器なんじゃないですか」

「しかしな、綾音」

「大丈夫です、無茶はしませんから。パパッと二人を助けて、パパッと戻って来ます。私だって、あんな怖い目、もうゴメンです」

「だが……」

「ヘルメットもちゃんと被っていきます。最初から被っていますけど」

「……わかった。気をつけて行け。すぐにこちらにも応援を向かわせる」

『はい。お願いします。早く来てください。私だけじゃ不安ですから』

「よし、了解した。無茶はするな」

『はい。それから、うまくいったらさっきのなかったことにしてくださいね。説教部屋もなしですよ』

「わかった。もうちびんじゃねえぞ」

『ちびってねえってば！ もう！』

「……ああ、おお……」

ドスドスと海竜王が走り出す。

鳳はその後ろ姿をいつまでも不安げに見守っていた。

あさみは司令室に向きもせず、別室の机上ディスプレイで戦闘の様子をうかがっていた。

飛び跳ね、駆け抜け、撃ち放つ陸竜王と、鉄壁の防御を誇るアスモデウスが一進一退の攻防を繰り広げる。

しかし、それすらもまるで心にとどまらぬかのごとく、視線はディスプレイのはるか彼方を見据えていた。

脳裏に耳鳴りのように押し寄せるのは、押し殺した火刈の無常なる声。

『海竜王のオビディエンサーを殺せ』

机上で組み上げた手で口もとを覆い隠し、あさみが憂いのまなざしを泳がせる。

『事故に見せかけて殺せ。必ず殺せ。それがたとえ、誰であったとしても……』

喧騒に揺れる街道を海竜王が駆け抜ける。

駐車車両のバンパーにけつまづき、手をついた大型トラックの荷台をひしゃげ潰した。

コクピット内の綾音は何ごとにもとらわれず、ただ前だけを見つめていた。

光輔と夕季の笑顔が脳裏に浮かび上がる。二人の表情が苦痛にゆがみ始めるとかすかに眉を寄せ、見返りのない気持ちを つむいでいった。

『私があの子達を守らなければ』

『守りたい。あの子達を』

生き絶えた二人の亡骸を抱きしめ、喉も裂けんばかりの絶叫を撒き散らすもう一人の綾音。

『まだ死ぬわけにはいかない。まだ……』

目を細め、呟くようにそれを口にした。

「もう少しだけ待って。お願い、姉さん……」

続く

第十二話 『ソーロング』 7（後書き）

まさかの三部作だったりしました。

当初は安易な穴埋めキャラであっさりのつもりでしたが、結局愛着がわいて一個の人物の物語を完結させるような流れになってしまいました。自己マン以外の何ものでもなく、お見苦しい点多々ありますが、限界までおつき合いいただければ幸いです。

読んでいただきましてありがとうございます。

第十三話 『グッバイ……』 OP

「ひかる」

名を呼ばれ、穂村ひかるが振り返る。

それが綾音であったことを確認すると、ひかるは少しだけほっとしたような表情になった。

「綾さん」

ひかると向き合い、真剣なまなざしをぶつける綾音。廃墟と化したメガル本棟をちらと見やった。

「……ひかる、あたしが行く」

「綾さん……」

「あんたはここに必要な人間だ。でもあたしは必要ない。あたしが行くから、あんたは……」

「必要だよ」綾音の声を遮り、ひかるが涼しげに笑う。「駄目だよ、綾さん。わかってるくせに。私や光ちゃんだけじゃなくて、みんなが綾さんのことを必要としている。ここにいてほしいって思っている。もし綾さんに何かあったら、あたし、みんなに顔向けできないよ」

「あたしは……」ひかるの顔を正視できずに目を伏せる。憤りのように拳がわなわなと震えていた。「あたしなんか、そんな……」

「綾さんがいてくれたからみんな頑張れた。綾さんが私達を支えてくれてたから。少なくとも私はそう思っている。綾さんは私達の……」鳴り渡る警報サイレン。「……だから」

はっとなって顔を上げる綾音。

柔らかくつつみ込むような笑顔が、すべてを受け入れようとしていた。

「ありがとう、綾さん」

「ひかる……」見開かれたままの両眼から一筋の感情が流れ落ちる。凜としたまなざしがひたすら聡明で眩しかった。かすかな物音に反応し、二人が振り返る。

礼也だった。

礼也は幼さの残るその顔に不相応な鉄パイプをしっかりと握りしめ、睨みつけるようにひかるを直視していた。

「礼也……」

「光輔助けに行くんだろ。俺も行く」

「何言ってるの、あんたは！」

「俺も行く」綾音の声も届かず、礼也はひかるだけを真っ直ぐに見つめていた。「俺が光輔を助けてやる。絶対に」

悲しそうに礼也を見下ろしていたひかるが、ようやくその口を開く。

「礼也君、ありがとう。でも駄目だよ。私に任せて。お願い」

優しい瞳は、決して折れることのない礼也の心を抱きしめるように輝き続けていた。

「……。絶対帰って来いよ」

「絶対光ちゃんは連れてくるから」

礼也はじつとひかるのまなざしを受け止めていた。まばたきもせず、ひたすら真っ直ぐに。

ひかるが嬉しそうに笑った。

「必ず帰って来るから心配しないで、礼也君」

その強さは礼也の激情すら退かせていった。

「絶対だぞ、絶対に帰って来いよ」

「約束する」

腰を落とし、ひかるが礼也に小指を差し出す。

指切りの合図だった。

戸惑いながらも、それを受け取る礼也。

「やぶつたら、承知しねえからな……」

目に涙を浮かべ口を一文字に結ぶ礼也に、ひかるがにっこりと笑

いかけた。

「わかつてる。ありがとう、礼也君」

綾音は何も言わずにそれを眺めていた。

ただ淋しそうに眺めていた。

後悔だけがその胸を際限なく締めつける。

『あの時、私は何故、彼女を抱きしめてあげられなかったのだろうか
……』

新たな脅威の出現により、駅周辺は未曾有の大混乱に陥っていた。

安全を求めて人が人を押し倒し、平和を願う者が己以外の人間を傷つける。

そこに助け合いという言葉は意味をなさなかった。

「木場さん！ 木場さん！」携帯電話を握りしめ、夕季が懸命に呼びかける。「早くして！ お願い、もう収集がつかない！」

「わかっている。落ち着け、夕季。とにかく今は……」

逃げ惑う人々に突き飛ばされ、携帯電話が夕季の手から放れていく。滑るように転がったそれは雑踏に埋もれ、激しい足踏みの中粉々に砕け散った。

「……」

「夕季！」

光輔の声に夕季が振り返る。

アスモデウスが群集を見下ろしていた。

石像のような仮面の口をくわと開き、不気味な両眼を光らせる。

それはまるで獲物に狙いを定めたふうでもあった。

際限のない驚愕が人々に襲いかかる。

狂騒のエスカレーターはもはやとどまることを知らなかった。

駅前のショッピングモールをなぎ倒し、進軍を開始する灰色の巨影。

ビルを砕き、噴水を割り、立ち往生する蟻の群のような車両を踏み潰した。

蜘蛛の子を散らすかのごとく、民衆達が逃げ惑う。絶叫のるつぼとなった一帯は、阿鼻叫喚、地獄絵図の様相だった。

親からはぐれ泣きわめく幼女の手を取り、夕季は光輔とともに地下道へと駆け込んだ。

そこにはすでに多くの人達が避難しており、い合わせた母親らしき人物が幼女を抱きしめて膝から崩れ落ちた。

これから訪れる恐怖より、互いが無事であったことを確かめ合い涙を流す親子を、光輔と夕季は複雑そうな表情で眺めていた。

地響きに絶叫が覆い被さる。

夕季が入り口へ向かうと、光輔もそれに続いた。

爛々と妖しい光を浮かび上がらせる一対のセンサーが周囲を見渡していた。

先まで辺りにあふれ返っていた人影も今では一人も見当たらず、その行き場所を探っているふうでもあった。

地下道から鳴り響く渦を巻くような絶叫に気づき、異形の悪意がジロリと顔を向ける。

瞬時に自分達が補足されたことを夕季は悟った。このままではそこにいるすべての人間に被害が及ぶことになるだろう。

く、と奥歯を噛みしめ、夕季が飛び出して行く。

「夕季！」

その背中を追いかけるように、光輔も走り出した。

綾音は一直線に光輔達の待つ場所を目ざしていた。

心に覚悟を刻みつける。

それはもはや、悲痛な願いですらあった。

『陵太郎、ひかる、あの子達を守って。みんなを守って……』

視野に入った駅周辺に火の手が上がっていることを確認する。

はやる気持ちを深呼吸で押さえ込み、綾音は状況を冷静に見極めようと努めた。

そこで綾音は見た。

ほんの今しがた己を死の淵まで追いやろうとした物の怪と、まったく同じ姿形の巨影を。

それは駅から離れ、商店街の方向へ向かっていた。

何かを追いかけるがごとくに。

ゴーグルシステムの倍率を高め、その目的を探ろうとする。

するとアスモデウスに追われ一心不乱に走り続ける、見知った人影が視界一杯に飛び込んできた。

「！」カッと目を見開く。「夕季！」

スロットルを最大に設定し、最短ルートで海竜王が挑みかかって行った。

制服をひるがえし、静粛たる街中を夕季が駆け抜ける。

何度も振り返るその表情には焦燥が色濃く浮き上がっていた。

攪乱させるためにアーケードに覆われた商店街に逃げ込む。雑居ビルの陰に身を潜め、息を殺し、トレーサーの様子をうかがった。

その直後、アスモデウスが石の槍を水平になぎ、アーケードを建物ごと取り払っていった。

落下物を避けようと夕季が車道に飛び出して行く。そのわずか数十メートル先には、アスモデウスの巨大な背中があった。

うごめく蛇の尾。

このままではいずれ見つかるだろう。

だが、手を封じられた夕季は動くことすらできなくなっていた。

尾はのたうつ鞭となり、山のような巨軀を見上げるだけの夕季に迫ろうとしていた。

その時、派手な破碎音とともに反対側のショーウィンドウが粉々に砕け散った。

振り返る夕季、とアスモデウス。

そこには睨みつけるように巨大な相手の前に立ちはだかる光輔の姿があった。

アスモデウスを引きつけようと、咄嗟に車止めのブロックをショーウィンドウに投げつけたのだった。

「光輔……」

ちらと夕季を見やり、光輔が背中を向けて走り出す。
すぐさまアスモデウスが続いた。

ようやく恐怖の呪縛から夕季が解かれる。

「光輔！ 光輔！」

その呼びかけは狂騒の中へかき消されていった。

全速力で光輔が駆け続ける。

サッカー部一の俊足である足には自信があつたが、十倍以上の身の丈で迫り来るアスモデウスにとっては、人形がゆるやかに動いているのも同然だった。

「くそ！」

ジグザグに走り抜け、焦ったように振り返ると、雄叫びをあげながらアスモデウスが石の槍を頭上高くかかげるのが目に入った。

「！」

「光輔！」

先回りしていた夕季が横から光輔を弾き飛ばす。

その直後、光輔のいた場所へ槍の先端が達していた。

「夕、季……」

光輔に被さつたまま倒れ込んだ夕季が苦痛に顔をゆがめる。

右膝から血が流れ出ていた。

「おまえ、それ……」

「大丈夫」

「でも……！」

不気味な影が二人を覆いつくす。

アスモデウスが再度槍を振りかざしていた。

動けない二人の頭上目がけ、一直線に。

「くっそ！」

「光輔、逃げて！」

「く！」

体勢を入れ替え、光輔が夕季をかばうように被さつた。

「光、輔……」

「く、そ……」

万事休する。

夕季の体を抱きしめ、覚悟を決めた光輔が目を閉じた。

その肩越しに夕季がアスモデウスを睨みつける。

太陽を背負い、影となった巨体の両眼だけが不気味な光りを放つ。音のない世界の中、それはまるで二人を死の世界へいざなうようでもあった。

揺らめく影越しの陽の照射に夕季が目を細める。

悔しそうに唇を噛みしめた。

悪魔の雄叫び。

が、次の瞬間、二人の耳へ飛び込んできたのは、静寂を引き裂くような銃撃音だった。

背中にマシンガンの連続射撃を受け、くわと大口を開けたアスモデウスが振り返る。

そこで夕季は見た。

両手に構えたサブマシンガンの銃口から硝煙を立ち昇らせ、仁王立ちする海竜王の姿を。

「綾さん」

「えー」

事情を飲み込めないまま、光輔も顔を向けた。

「どうして、綾さんが……」

「……」

『夕季ー！ 光輔ー！ 遅くなってごめん！』

補助具の外部スピーカーを通して綾音の声が響き渡る。

夕季を抱きかかえるように光輔が立ち上がった。

『とりあえず早く逃げな！』

光輔の顔を見据え、夕季が頷く。

「綾、さん……」海竜王を見上げ、光輔もそれに従った。

迫り来るアスモデウスを真正面にとらえながら、コクピットの中、

綾音が静かに先につないでいった。

「そう長くはもちそうにないからさ……」

常に影響のない位置取りを計算し、銃を乱射しながら、二人が安全区域まで脱出するのを綾音が見届ける。

アスモデウスの一撃をかううじてバックステップでかわすも、腹部のサポートパーツが弾け飛び、今後の行動に制約が生じることになった。

『ここまで』綾音の脳裏に諦めがよぎる。『……』

すでに定められた終結だと覚悟していたはずなのに、何故か割り切れない感情をとまっていた。

光輔と夕季のことが気がかりだった。はたして無事逃げおおせたのだろうか。

自分が倒れれば、再びアスモデウスは目標を二人に定めるのだろう。

ならば少しでも時間をかせぐ必要がある。

礼也が、せめてメック・トルーパーが到着するまでは。

その強い想いだけが綾音の心を突き動かしていた。

あさみの目はディスプレイの映像に釘づけとなっていた。

遠方から映し出されたその映像では、人形のようにたどたどしい動きの海竜王が二体目のアスモデウスから逃げ回っている。

耳もとから流れ入る悪魔の囁きすら、あさみにまばたきを与えることはかなわなかった。

『さあ、押せ、進藤』

右手の中にスイッチのようなものが握り込まれていた。

『今だ、押せ……』

「！」

振り払われた槍の先端に触れ、海竜王が吹き飛ばされる。咄嗟に出した左腕の装甲が剥がされ、アスモデウスに背中を向ける格好で四つんばいになった。

あさみが手のひらに力を込める。

ボタンにかけた指先が小刻みに震えていた。

「伏見さん、撤退しなさい」

思わず口をついて出た言葉だった。

『……あさみ、さん』

「撤退しなさい、早くその場から！」己の臓腑にナイフを突き刺したかのような、悲痛な叫びだった。

『大丈夫です。私はまだやれます』

「命令です！」

『……』

「……」

『まだ逃げるわけにはいかない。……私は、もう逃げない』

「あ……」

アスモデウスが槍を高く差し上げる。ケエエエー、という咆哮をともない、無防備な海竜王の背中目がけてそれを振り下ろそうとした。

くっ、と呻くあさみ。

「逃げて！ 綾っ！」

が時すでに遅く、力任せに叩きつけられたその尖端は、海竜王の背中に触れるや周辺一帯を巻き込む大爆発を起こした。

「綾ーっ！」

あさみの絶叫が閉鎖された室内にいつまでも反響し続けていた。

光輔達の間近へとたどり着いていた木場が、予期せぬ爆発音にまばたきすら忘れる。

「何だ、あれは……」

「木場さん！」

聞き覚えのある声に木場が振り返る。

夕季を抱え近づいて来る光輔の姿が目に入った。

夕季は口を結び、眉間に皺を寄せ、苦痛に耐えているように見えた。

「光輔！ 夕季！ どうした」

「夕季がケガをしたみたいなんです」

「何、どんな具合だ」

「転んだ時に膝を……」

「たいしたことない」強きまなざしを向ける。「あたしのことなんかどうでもいい。綾さんが！」

「！」

海竜王のコクピット内で綾音は悶絶していた。震えが止まらず、しだいに意識も遠のき始める。

先の攻撃で装甲や補助パーツはすべて吹き飛び、海竜王は本来の姿に戻っていた。

もうろうとした意識の中、綾音の心に過去の想いが蘇る。

*

「あんだ、メックの正式採用断ったんだって」

真夜中の食堂で綾音に問いかけられ、陵太郎が顔を向ける。手を止め、問題集の上へ鉛筆を置いた。

「ん、ああ」

「鳳さん、あんたのこと誉めてたよ。まだ子供なのに経験者に混じっても全然見劣りしないって。メックに入るときや食いつぱぐれもないのにさ。オビイの候補者なら、なおさら優遇されるはずだし」

「ん、まあ、そうなんだけども。まだまだ先の話だしさ」

「そんなに先生になりたいの？」

「はは」照れ臭そうに頭をかく。「できればね」

綾音がおもしろそうに笑った。

「昔つからのあんたの夢だったもんね」

「いや、夢ってほどのものでもないんだけど、まあ、なれないものにこそなりたがるってやつかな」

「あんたのおツムだと、当然、体育の先生だよな？」

「いや、一応世界史とか狙ってるわけなんだが……」

「……。まずは大学に入んなきゃね。授業料、どうするの。あんたの成績じゃ、奨学金は絶対出ないだろうし」

「絶対って……。しばらくはメックと掛け持ちってとこかな」

「ま、やれるだけやってみな。駄目なら駄目で、メガルにいきやいだけだし。メックじゃなくても、仕事さえ選ばなきゃ、何とでもなるしね。駄目もとでいいんじゃない？」

「……やる前から、駄目駄目、言いなさんな」

子供をあやすように、綾音が微笑みかける。それから、何気ない様子でそれを口にした。

「ねえ、なんで？」

「なんでって……」

「そんなに子供好きだったっけ」

「うん、まあ」涼しげな顔を向けた。「バカな奴と、いい奴と、普通の奴は、好きかな」

「全部だよね」

「うん、全部」

「……」

「……。そんなに变かな……」

綾音があきたように陵太郎を見続ける。少しだけ意地悪そうな顔になった。

「んじゃ、どうでもいい奴は」

「そんな奴、いやしないよ」

「！」

「どうでもいい奴なんて、この世にはいない。もし、そう思っている奴がいるのなら、俺はそいつに違うつて教えてやりたい。俺にできるのはそれくらいだから」

ふいに発せられた真っ直ぐな心情に、綾音の心が射抜かれる。その凜としたまなざしに吸い込まれそうになった。

陵太郎は穏やかな面差しで笑いかけていた。

「勉強じゃ、ひかるや忍にはかなわないけど、それくらいならできると思ってたさ」

「……」綾音がぎゅっと口もとを引きしめる。眩いばかりの笑顔を直視できず、己を偽るようにおどけてみせた。「かあ、青いねえ、あんた。青臭いって、ほんと。やっぱ、陵太郎だ」

「何だよ、それ。綾さんが言わせたんだろ」

不満げに陵太郎が顔をゆがめる。

それを見て綾音は切なそうに眉を寄せた。

「俺は普通だ。綾さんがひねくれてるんだよ」

「ひねっ！……」

「スレすぎだよ。もっとかわいげあるとこ見せないと、一生男が寄って来ないって」

「……。おまつ！」綾音のこめかみに血管が浮き上がる。「大きなお世話だ。一生って、何あたしの人生、勝手に終わらせてんだ、おまえは。失礼にもほどがあるだろ。スレてるはねえだろ。いくらあたしがスレンダーだからって」

「いや、スレンダーじゃないでしょ」

「そこは言つとけや！」

「あははは！」

陵太郎が腹をかかえ豪快に笑う。

その様子を眺め、むくれていた綾音も嬉しそうに笑ってみせた。

「……ねえ、綾さんさ」

タイミングを見計らうように陵太郎が切り出す。

「今、何をしてる時が楽しい？」

ふいの問いかけに綾音が眉を寄せる。それからやや不機嫌そうにそれに答えた。

「楽しんでるヒマなんてないっての。あんたらみたいな手のかかる家族の相手で目いっぱいだし」口をへの字に曲げ、顔をそむける。
「あつちでぎゃあぎゃあ、こつちでぎゃあぎゃあ、毎日まいっちゃんぐだつてのさ」

苦笑いの陵太郎。

「じゃあさ、こうなると嬉しいかも、ってのは？」

ふん、と息をつき、綾音が意地悪そうに陵太郎の顔を見やる。

「あんたらがおとなしくいい子にしてくれりゃ満足だよ」にやりと笑った。「みんなで仲良くさ、いつもにこにこ楽しそうにしててくれりゃ」

「いや、そういうお母さんみたいのじゃなくてさ……」

陵太郎が悩ましげに頭をかかえる。

それを楽しそうに眺め、綾音が静かに問いかけた。

「そういうあんたはどうなの」

「ん？」何気ないしぐさで綾音に顔を向ける。「俺はみんなの笑顔を見てる時が一番かな」

「……」

「……」無言のプレッシャーに陵太郎が根負けした。「また青臭いとか言っただろ」

するとにやりと笑ってみせる綾音。

「言わないよ……」

「？」

切れかけの蛍光灯が不定期な影を二人へ落とす。
不思議そうに見つめる陵太郎の顔を綾音はいつまでも嬉しそうに眺めていた。

月明かりの下、陵太郎とひかるが口づけを交わす。

その様子を、綾音は物陰から息をひそめ眺めていた。

ふいに切なさうに眉を寄せた。

込み上げる想いが悲鳴をあげる。

「私はここにいます」

引き裂かれんばかりにのたうちまわり、切なさは声なき絶叫となつて心を締めつけた。

「いつだって、ここにいます」

震える拳をきゅっと結び、伝えられない気持ちを握りしめた。

「いつだって、すぐそばにいます……」

ひかるがいなくなればいいと思っていた気持ちを、綾音は否定することができなかった。

ひかるの死後、なおも。

せめてもの罪滅ぼしの気持ちで陵太郎を支えようとしたが相手にされず、その想いの強さを知り、綾音は身を引いた。

「私がいる……」

その一言がどうしても言えなかった。

助けを求め、すがろうとしたあさみは、もはや綾音の知るその人物ではなかった。

「すべて竜王のせいよ！ あんなものがここにあるから彼女は死んだの！ こんなことが起こったの！ 何故それがわからないの！

何故！……」

淋しかった。

空虚な穴が埋まるのならどんなものでもかまわなかった。

たとえ、それが望まぬ心であつたとしても。

『私はみんなを欺いてきた』

『私には彼らの笑顔を受け止める資格などない』

『私は卑怯者だ』

『私は嫌な人間だ』

『私は私のことが大嫌いだ』

『私がみんなと一緒に笑い合うことは許されない』

『私はここにいてはいけない』

『私には生きている資格などない』

悲しみにくれる陵太郎を眺め、苦しげに顔をゆがめる。

そして綾音は逃げ出した。

『本当にいなくなればよかったのは、私だ……』

*

『……や、あ……、や……』

呼びかけに耳を傾ける。

その声は綾音に力を与えてくれているようだった。

『……綾！ 綾、答えて、無事なの、綾、綾！』

『……ねえ、さん……』

『綾！ 綾、無事なのね！ 綾！』

『……』

コクピット内の照明は落ち、暗闇の中あさみの声だけが生を導く。バックパックにはあさみの差し金で爆薬が仕掛けられていた。本来ならばあさみのタイミングでその起爆ボタンが押されるはずだったのだが、アスモデウスの攻撃によって誘発されたのである。

それが幸いした。

膨大なエネルギーが炸裂すると同時に誘爆した爆薬は逆にクッションとなり、爆発反応装甲の役割を果たし、その力をいくらか分散させたのだ。

とは言え、大量の爆薬とアスモデウスの直接攻撃による衝撃は凄まじく、海竜王は人形のように吹き飛ばされ、激しく地面に叩きつけられることとなった。

次なる一撃を加えようと、アスモデウスが仰向けとなった海竜王に襲いかかるうとする。

すべての駆動系統が破壊され、もはや指先すら動かすことのかなわなくなった棺おけ目がけ。

『まだ死ぬわけにはいかない』

心を揺り動かす深く強い感情。

綾音にはわかっていた。

あの時、何故ひかるを抱きしめることができなかったのか。

死を覚悟した者と生に未練を残す者。そこには決して埋まることのない確たる差があった。

決別の言葉を胸に秘めながら笑ってみせたひかるを、綾音は正視することができなかった。

覚悟の差。

受け止めるものの違い。

そんな言葉では言い表せられない、もっと大きな心の深さを感じたからだった。

決して死を受け入れるわけではなく、それでもしっかりと受け止めることのできる人としての強さを。

あの時自分に足りなかったもの。

それが今、はつきりとわかった。

「く！ はっ……」剥ぎ取るようにヘルメットを放り出し、奥歯を噛みしめ苦しそうにあえぐ。

『私が守らなければあの子達が死ぬ』

『みんなを守らなければ』

『みんなを守りたい』

『まだ死にたくない……』

『でも……』

アスモデウスが死の槍を振りかざした。

「綾ーっ！」

朦朧とする意識の中、あさみの絶叫を子守唄がわりに綾音が静かに目を閉じていく。

「……もう何もできない」

「もう、誰も抱きしめられない……」

陵太郎やひかる達の笑顔が脳裏に浮かび上がった。

「……みんな、大好き……」満足げに微笑み、自らの意志で封印を解く。それを口にする時、みなと別れなければならないと心に決めていた最後の言葉の封印を。「……さよ、な……」

「綾さんっ！」

光輔らの絶叫。

それすらかき消す狂猛な雄叫びを張りあげ、醜悪な敵意が海竜王に襲いかかる。

その時、海竜王が艶やかな光に包まれた。

数瞬の後、アスモデウスが真横へ弾き飛ばされていく。

そして絶望の視線が交錯するその舞台の上で、怒りにうち震える真紅の巨人が雄々しく伸び上がった。

第十三話 『グッバイ……』 3

ハッチを開けようと海竜王の腹部へ光輔が飛び乗る。

パスワードを入力するも、すでに変更済みのそれを解除することはかなわなかった。

「光輔、どいて！ あたしがやる」

負傷した足を引きずりながら夕季が海竜王によじ登っていく。損傷個所に接触しスカートが裂けてもおかまいなしだった。

機体の一部が傷口に触れ苦痛に顔をゆがませる夕季。ハッチを開け、息も絶え絶えの綾音の姿を確認した。

「綾さん！」

綾音がゆっくりと顔を上げる。苦しそうに顔をゆがめ、力をふりしぼってまぶたをこじ開けた。

「ゆ、……き」

「綾さん！ 綾さん！」

「おい、どうした！」

車両の木場へ振り返り、夕季が大声で叫ぶ。

「木場さん、早く！ 綾さん、ケガしてる」

「何！」

光輔と二人で綾音を海竜王から降ろし、状態を確認しながら木場が窮屈そうなスーツの前面を開放させる。

「大丈夫か、綾音！」

「……木、場さん……」 苦しげにあえぎ、つらそうな顔を向けた。

「すみ、ません……」

「綾……、伏見、大丈夫だ。落ち着け。ゆっくり息をしろ。ゆっくりだ」

ケガはさほどひどくはない。しかし典型的なパニック症状であり、

このまま放置すれば命に関わる。

「待ってる。今、医療キットを取ってくる」

木場が車両へ向かう。

ぐるりと裏返る眼球を見て、焦ったように夕季が呼びかけた。

「綾さん、綾さん！ しっかりして！」

綾音は極度のショック状態から、呼吸困難を起こしていた。ぜえぜえと息を荒げる。

「夕季、夕季、どこ……」

「ここだよ。ここにいますから」

「ケガは、ない……、光輔は……」

「あたしも光輔も無事。綾さんのおかげだよ」

「そう。よかった……」突然、発作のように全身が痙攣し始める。

「く、はっ！……」

「綾さん！」夕季が綾音を抱きしめた。「落ち着いて。もう大丈夫だから。心配しなくてもいいから。みんなそばにいるから。綾さんのそばにいるから」

「……夕季」

夕季の腕の中、綾音が少しだけ落ち着きを取り戻したようだった。

瓦礫の街と化した駅前商店街で陸竜王とアスモデウスの第二ラウンドが始まるうとしていた。

一体目を何とか沈め、ダメージも回復しないまま礼也が挑む。

「綾さん！ おい、綾さん！ 大丈夫か！」

礼也の呼びかけに綾音が応じる気配はない。

不安を抱きつつも大地を蹴りつけ、一直線に相手の懐に飛び込んで行った。

石状の旗に弾かれ、反撃を待たずに陸竜王が反転する。

決してかなわない相手ではない。が、疲労の蓄積が著しい今、分が悪いのも確かだった。

「桔平さん！」

無線で桔平を呼び出す。

『おお、礼也』

「夕季はどうなってんだ！」

『綾っぺがケガした』

「何！」

『今、木場や夕季が救助に当たってる』

「ひでーのか！」

『いや、命に別状はなさそうだ。外傷も少ない。だが一人じゃ立つこともできん状態らしい』

礼也が眉間に力を込める。

「わかった。ここは俺が何とかする。そのかわし、ぜってー綾さん助ける！ 死んでも助ける！ そう、夕季に伝えてくれって」

『わかった。礼也、いいか、無理は……』

「のやるー！ よくも綾さんを。ぶっ殺してやる！」

『……』

眼前のアスモデウスを激しく睨みつけ、拳ごと憎悪を叩きつけた。
「くそつたれがっ！」

キットから取り出した安定剤を木場が綾音に与える。

すると綾音は落ち着きを取り戻し、空気の抜けた風船のように身を沈めていった。

「綾……、伏見、深呼吸しろ」

すつうつ、はあああ、と何度か深呼吸をする綾音。最後のそれは、安堵のため息と重なった。

「綾さん、もう大丈夫だから」

綾音が目線だけを夕季へ向ける。

「夕季……。……アスモデウスは」

「礼也が相手をしてる。自分は一人でも大丈夫だから、綾さんのことを頼むって」

「礼也が……」

「夕季」

木場に呼ばれ、夕季が振り返る。

「あと数分で大沼が到着する。彼女のことを心配なのはわかるが、今は奴を倒すのが先決だ」

木場の顔を真っ直ぐ見つめ、夕季が頷いてみせた。

複雑そうに綾音が目を伏せる。かたわらで申し訳なさそうに立ちつくす光輔に気づいて笑いかけた。

「光輔、ごめん。ドジった」

「！」

「役立たずでごめん。頑張ってたつもりだったんだけどさ、あんたと同じようにはいかないみたいだ。情けないよ。偉そうなこと言つてて、口ばつかでさ。でも心配しないでいいよ。必ず乗りこなしてみせるから。今のオビディエンサーは私だから。光輔には迷惑はかけない……」

うつろなまなざしを空高く泳がせる。その目尻から涙が滲み出し、手をかざし隠そうとした。しだいに口もとがゆがみ始める。

静かに綾音を見下ろし、夕季が口を結ぶ。

「綾さん……」膝をつき、優しげにつつま込むように夕季が言葉を発していった。「来てくれてありがとう。綾さんが来てくれなかったら、あたしも光輔も危なかったかもしれない。綾さんがいてくれて本当によかったと思う。ありがとう……。でも、またこんな無茶したら、あたし許さないよ。覚えておいて」

「夕季……」

夕季が微笑む。

逆光で影を落としたその表情が、何故だか綾音にはひかるの顔のように映った。

「……。ひか……」

「あたし、行くね……。待っててよ、ちゃんと……」

「……」
光輔は何もできずに、ただ見守るだけだった。

レリーフ板に激情を刻みつけるがごとく、バーン・クラッカーの乱れ撃ちを礼也が叩き込む。

身長差にして四倍以上、体積ではゆうに百倍はあるつかという破格の相手を、陸竜王が圧倒していった。

小爆発と火花を広範囲に撒き散らせ、中国拳法さながらくると体を返す陸竜王。アスモデウスの猛攻をかくぐり、懐へと飛び込んだ。

右の下腕全体を密着させ、次なる攻撃を封じる。

突き上げる竜の首に飛び乗り、その勢いで後方宙返りを決めた。

「うぜえって！」

大地に降り立ち、拳を振りかぶる。

が、それを追い抜くように、別の影がアスモデウスに挑みかかっていった。

漆黒のウオリアー、海竜王だった。

「な！ 光輔、か」

海竜王のたたみかけるような攻撃の前にアスモデウスが退いていく。

浴びせ蹴りでのけぞらせ、降り立つ勢いのまま、銀色に輝く高密度の爪で竜の頭を大地へ串刺しにした。

「あああああー！」

光輔の咆哮もろとも、怒りのクローがアスモデウスの仮面を吹き飛ばした。

車両の後部座席にその身を横たえ、綾音は淋しそうにそのまぶたを閉じた。

「光、輔……」

司令室別室の壁に激しくその身を叩きつけられ、あさみが気の抜けた顔を向ける。

そこには厳しい表情で睨みつける桔平の姿があった。

「おまえ、何をした！」

肩をつかみ、容赦なくゆさぶる。

放心したように、あさみはそれを受け入れるだけだった。

「あいつはおまえにとって大切な人間じゃなかったのか。おまえのことを本当の姉のように慕っていたはずだろうが。信じていたはずだ。そんな奴にまで手をかけやがって、おまえ何とも思わないのか！」

その言葉に、はっとなるあさみ。

「どこかでまだおまえのことを信じようとしていた。だが、それは俺の間違いだった。おまえは最低の人間だ。もう容赦しない」

激しい憎悪を剥き出しにし、桔平が部屋を出て行く。

しかし、あさみの視線はその背中ではなく、はるか彼方を見つめているようだった。

治療を終え、綾音が医務室から運び出される。

思いのほかダメージは少なかったが、しばらくは入院が必要だと告げられた。

心配げな面持ちの面々の中、その顔を確認し真っ先に飛びついたのは忍だった。

「綾さん……」かたわらの木場を押し分け、綾音と向かい合う。「

よかった、無事で……」

綾音が力なく笑ってみせた。

「心配かけて悪かったね。もう大丈夫だから……」

「綾さん！」

「！」

ふいに顔をくしゃくしゃにして忍が綾音に抱きつく。

ぼろぼろと涙を撒き散らかしながら覆い被さる忍を、綾音は戸惑うように眺めていた。

「よがった、ほんどーによがった！」

「忍……」

木場が忍の肩に触れる。

「おい、忍。気持ちはわかるがそんなに激しく揺ると体に……」
ドンと片手で木場を突き飛ばした。

「あだし、あだしね、ああ、ぼう……」

「もういいって……」綾音がふつと笑う。「ありがと、忍……」

「でも、でも、綾じゃんが死んじやったらって思って……」号泣。

「死んじやったらやだもう……」

「うんうん……」つられて涙が滲み出た。「わかった、わかったから……」

「あので、あど、死んじや、死んじやって、綾さんが死んで、死んじやったら」しどろもどろ。「死んじやう、ああ、もう、死んじやうって、ほんと死んじやって、そしたら死んで、死んじやってああああ！ やだぼう、死んじやうじや……」

「……あんま死ぬ死ぬ言いなさんな」

「死んじやった！ やだ、死んじやった！……」

「死んでねえってばよ……」

「あああ！ ふんともう、あああああ！……」
「……」

『失敗したようだな』

責め立てるような口調の火刈にも心を揺らさず、表情もなくあさみが受け答える。

「申し訳ありません」

『何故、計画どおりコクピットの内部に爆薬を仕掛けなかった』

「情報が漏洩していた可能性があります。彼らを怪しませないためにも必要な措置だと判断いたしました。バックパックでも十分な効果を望めるものと考えていましたが、量が足りなかったようです。次回はさらに大量の爆薬を用いて……」

『もついい』

一方的に火刈が通話を遮断する。

あさみはただうつろな視線だけを海の彼方へ投げかけ続けた。

進藤あさみは病室の前で立ち止まった。

一旦躊躇し、意を決して軽めのノックをする。

「どうぞ」

優しい声が返り、ハンガードアを開けると、綾音の嬉しそうな顔が飛び込んできた。

すすめられた椅子に座ることなく、何も言わずにアレンジされた花籠をテーブルへ置くあさみ。

綾音の方から先に切り出した。

「ごめんなさい、期待に応えられなくて」

「……」振り返り、綾音の顔をじっと見つめた。

「今度はうまくやるから」

「その必要はないわ。あなたはもうあれには乗らなくていい」

「それって、オビディエンサー失格ってこと？」

取り立てて騒ぐ様子もなく、綾音が核心に触れようとする。

あさみはその問いかけに答えようとはしなかった。

「悪いけれど、その言葉には従えない。私は海竜王に乗る」

「どうしてなの」その眉をかすかに揺らせる。「何故、私達への協力を白紙に戻したの。納得してくれているものと信じていたのに」

「その方がいろいろとやりやすいと思っただけです」

「何を……」

あさみの追撃をかわすように、綾音が薄日射し込む窓へと顔を向ける。

「考えが変わっただけですよ。あなたにとって私は必要な人間ではない」淡々とした口調でそれをつないでいった。「もっとふさわしい人が他にいますから」

「……」

「私はもう逃げない。たとえこの身がどうなっても。あなたが私のことを気遣ってくれているのはわかっている。でも、それだけは聞けない」

「綾……」

綾音が振り返る。

「やっと綾って呼んでくれたね。嬉しかったよ」嬉しそうに笑った。
「姉さん」

あさみの心に楔が突き刺さる。氷を砕く硬い楔ではなく、柔らかく暖かい、溶かすようなそれだった。
同様の想いを綾音も共有していた。

*

宿舎での雑用を終え、綾音が一息つく。

振り返ると、そこには笑顔で迎え入れるあさみの姿があった。

「綾ちゃんってすっかりしてるね。偉いよね。いつも小さい子の面倒見てくれてありがとう」

「いえ……」

綾音が身構える。

誰もがよく知っている人間だった。そして、誰も深く知ることのない人間でもある。

力なき自分達にとっては神にも等しい絶対的な権力を持つ人間がいる。あさみはその身内なのだ。いくら近づいたとしても、決して交わることのない、違う世界の人間だった。

「そんなにかしこまらなくていいよ。本当は私もね、綾ちゃんみたいにしたいんだけど、私が出ていくとみんな気を遣うみたいだから避けられてみたい。仕方ないのかな。ちょっと淋しいけど」

親しみを込めたその様子が、かえって綾音の警戒心を強めることとなった。

あさみの笑顔は作り物のようだった。それを見た誰もが、偽善者の顔だと批難する。事実、まるで心の内が読めずに、綾音だけでなく、誰もがあさみから離れていった。

「わかつてる」

ふいに真顔で呟くあさみ。

「私の笑顔ってわざとらしいでしょ」

「あ、いえ……」

ふっ、と控えめに笑い、あさみが綾音に背中を向けた。

「じつとしてると怖いってよく言われるの。だからごまかそうと思って無理やり作り笑顔でいるんだけど、ミエミエだからかえって引かれちゃうんだよね。まあ、仕方ないけどね……」

あさみの淋しそうな横顔を綾音が覗き込む。

綾音が静かに笑った。

誰にも見せたことのないまなざしで。

「へえ、適応順位三番目なんだ。すごいね。私は相手にもされなかったのに」

まるで自分のことのように喜ぶあさみに、綾音は照れ臭そうに笑ってみせた。

「本当にすごいよ、綾ちゃん。役に立ってる。私なんて、ただメシぐらいの役立たずで、恐縮しっぱなしなのに」

「あの……」

意を決したように綾音が切り出す。

途端にあさみの表情が切りかわったのを確認し、再び二の足を踏んだ。

「何？」

音もなく迫るあさみ。

本人にとつては無意識なのだろうが、向かい合う者の誰もがそれをプレッシャーだと感じずにはおれなかった。

駄目でもともと、綾音が勇気を振り絞った。

「姉さんって呼んでもいいっすか？」

あさみが無言で綾音を見つめる。

そのリアクションの意味を察し、綾音は己の失敗を痛感せずには
いらなかった。

「いいけど、一つ条件がある……」

背中を向け冷たくあさみが告げる。

再び振り向いた時、あさみの表情は普段接していたものとは別の、
厳しいものへと変わっていた。

綾音の全身に緊張が走る。ごくりと唾を飲み込んだ。

すると、につ、とおもしろそうに笑いながらあさみはそれを口に
した。

「私も綾って呼ぶからね」

綾音が安心したように笑った。

心から嬉しそうに。

*

懐かしいものを思い起こすように綾音が笑みをたたえる。

あさみの微妙な変化を感じとっていた。

「……わからないの。あなたはメガルには必要のない人間だと言っ
ているの。一刻も早く、……」苦しそうに顔をそむけた。「……ア
メリカへ帰りなさい……」

「……。姉さん、キャラ、ぶれてますよ」

「……」

あさみが背中を向ける。

何かを懸命に堪えているふうにも見えた。

綾音はそれをつつみ込むように見守り続けていた。

沈黙に押され、綾音が静かに口を開く。

「ブーブークッションって、座布団の下に置くのがセオリーだって
知ってました？」

「……そう」

「バッグに入れておくだけじゃ、せつかくのアイテムも意味ないから。もし今度……」

「興味ないわ。そんなくだらないイタズラ」

「……」

「嫌いな。そういう悪ふざけは」

悲しげな表情で綾音があさみの背中を眺める。

その時、ぶっきらぼうな声とともに、ぶっきらぼうな顔が病室に押し込んできた。

「するのがか？ それとも、されるのがか？」

仏頂面の桔平に一瞥をくれ、あさみが平坦な口調で答えた。

「……どっちも」

「そうかい。俺はわざとイタズラにひっかかる奴が許せねえ。一生懸命イタズラぶっこいてんのに、上から見られてるようだな。な、綾っぺ」

ギツと綾音を睨みつける。

綾音はそれを軽く受け流してみせた。

「そうですね」

何も言わずにあさみが病室から出て行く。

好意的な視線で見送る綾音とは対照的に、桔平は終始仏頂面のまゝ腕組みをし、ベッドのかたわらのパイプ椅子にどっかと腰を落とした。

ブブー、と空気を震わせる下品な音が部屋中に鳴り響く。

桔平がじろりと綾音を睨みつけた。

「わざわざネタをばらす奴はもつと許せねえ」座布団の下からぺしやんこになったブーブークッションを取り出し、桔平が怒り覚めやらぬ様子でわめき散らした。「おい、綾っぺ、てめえ、なんでばらしやがった！」

取り繕うように綾音が笑う。

「姉さん、座りそうになかったですから……」

「くそつ、完璧な計画だったのにおじゃんじゃねえか」

綾音がふと窓へ目をやる。

秋の深まりとともに気温は落ち着き、陽射しもやわらかく、そよ風が心地よかった。

「海竜王のオビディエンサーが殺されるかもしれないって噂が流れていたそうですね」

「んあ？」

綾音が振り向く。

「いったい、誰がそんな噂を流したんでしょうね」

「さあな」

桔平は冷蔵庫の物色に夢中だった。

「ったくよ、どこのマヌケが仕掛けたのかは知らねえが、起爆装置がはずれてちゃ爆弾は爆発しねえぞ。助けられたな、おまえ」

「……」表情もなく綾音が桔平の背中を見つめる。それから窓の外へ目をやった。

ロータリーに早足で歩き去るあさみの姿が見えた。

「そうみたいですな……」

「お、レーなんとかのシュークリームだ。南沢だろ？ 食っていいか？ 全部」

「ええ……」小さくなっていくあさみの後姿へ向かって、穏やかな笑みを投げかけた。「……。全部は駄目ですよ……」

第十三話 『グッバイ……』 4（後書き）

街イハンターが苦手でかなり否定派でした。最初の方はおもしろかったのに、なんであんなになっちゃったんだろ、ってなこと。ですが、当初はハードボイルド風味だったのに人気が出なくて、やむをえず路線変更してモツコらせたら人気が出たというようなことをどこかで読んで、なんだかなあという気持ちになりました。

打ち切り寸前だったアラちゃんの人がやけくそでウンを大量に投下したら人気が発射したという逸話は、切なさを通り越して爽快ですらあります。ウンがなければその後の一大ムーブメントがまるまる消滅していたことになります。さまです。自分的にはウンが出る前の方が好きだったのですが、そう言えば自分の好きなマンガとかはよく打ち切りとかになってたような気も……。

ということで、見捨てずにおつき合いいただける方々には本当に頭が下がります。お読みいただきましてどうもありがとうございました。

光輔と雅の顔を認め、綾音は最高の笑顔で出迎えてみせた。
それを受けて光輔も安心したように笑う。

「元気そうだね、綾さん」

「おう、光輔」

「さすがだね。俺、正直もう駄目かと思ってたけど。ああ、こりゃ死んだかなって」

「勝手に殺すなって……」

「いやいや、ほんと、もう二度とラーメンがさ……」

「そいつは笑えねえなあ！」

「はは。でもやつば、綾さんてすごいよ。さすが」

「よく言うよ、おまえ」

「いや、ほんとだって」

裏表のない光輔の言葉に、綾音が照れ臭そうに笑う。

「ま、新しいジャケットがなかったら結構ヤバかったみたいだけだね」

「海竜王はズタボロだったのにねえ」天使の微笑みを浮かべながら雅が乱入してきた。「やっぱり綾さんの方が頑丈だったことだね。ロボに乗らない方が強いんじゃないかな。アメフトとかのカッコで、とう！ って言いながらタックルしちゃって、あ〜れ〜ってふっとんじやって、場内爆笑の渦だよ」

「ふう〜ん……」

「あとモジモジ君のカッコとかでも……。あ、モジモジ君！ モジモジ君だよ、絶対！ 決まり！ そうに決まりました！ あやあのあ〜！」

「もじもじ、雅ちゃん……」

綾音に睨めつけられ、しまった、と言わんばかりに雅が目を見開く。

「そう言えば、ショックで綾さんがちびっちゃったって鳳さんがみんなに言いふらしてたけど本当？」

「い！……あのクソジジイ」

「内緒だけどつて言いながら、集会所で大声で話してたよ。場内爆笑の渦。桔平さんと朴さん、大喜びだった」

「……」

まあいいか、という様子で綾音がふつと笑った。再び光輔へと顔を向ける。

「ほんと、迷惑かけたね。今度はちゃんとやるからね」

「うん、まあ……」

シオシオと光輔の勢いがしばみ出す。

隣で雅が子供を見つめるような顔になった。

「どした？ 光輔」

「あ、のさ……」

もじもじしながら、光輔が綾音の様子をうかがう。

「何だよ、言いたいことがあるならはつきり言いな」

「うん」

ちらと雅の顔を見てから、意を決して光輔が切り出した。

「綾さん。俺に海竜王の搭乗権、譲ってくれないかな」

「光輔……」複雑そうな表情で光輔を見据える。「あたしじゃ無理って言いたいのか？」

「いや、そう言うわけじゃないけど……」

「……」

貝のように口を閉ざしてしまった綾音を、光輔が困ったように眺める。沈黙のプレッシャーを押しやり、顔をそむけながらそれを口にした。

「もともとリザーバー登録はしてあったし、桔平さんや進藤さんも綾さんがいいって言うてくれれば許可するって」

「……。姉さんが……」綾音が淋しげに眉を寄せる。その表情のまま、光輔を諭すようにつないだ。「それは駄目だよ。あんたは望んであれから降りたんだ。もう乗る理由がない」

「理由ならあるよ」

「……」

光輔の顔に注目する綾音。

その顔がこの部屋に入って来た時とは明らかに違ってきていることに気づいていた。

今度こそ綾音の目を真っ直ぐ見つめ、光輔が迷いのない気持ちを差し出す。

「守りたいものができたから、さ。自分でもあんまり意識してなかったんだけど、大事なものって気づかないうちに少しずつ増えていくんだね。本当にちよつとずつだけど確実にさ。それがわかったから、俺はそれを自分の手で守りたいって思ったんだ。どうせ俺なんかじゃたいしたことできないかもしれないけどさ。そんなのわかってるけど、でも、できるだけ多くのものを守りたいって思ったんだよ。綾さんがそうしてくれたみたいにな。俺も綾さんやみんなのことに守りたいんだ。だってさ、綾さんも俺達の大事な人だから」

まばたきも忘れ光輔の顔を綾音が見つめる。光輔から片時も目が離せなかった。

それに気づき、光輔がバツが悪そうに視線を遠ざける。雅と目が合い、自嘲気味に笑った。

「綾さん見てると何だか危なっかしくてさ。見ていられないっていうか。気づいてないっしょ、みんな心配してるの。ったくさ、変なところ鈍感なんだもんな」

「光ちゃんも人のこと言えないけどねえ」

「え、マジ？」

綾音の視線は光輔に釘づけとなっていた。

それは綾音にとって、痛烈な楔であることは間違いない。が、どうしても光輔から目をそむけることができなかった。

やがてあふれ出る感情。

「光輔……」

晒される想いを隠すように、綾音が手の甲を瞼へ押し当てた。

「綾さん……」

沈黙の中、困ったように振り返る光輔。

すると雅は、にっこり笑って頷いてみせた。

「綾さん、シュークリーム食べていい？」

「……。全部は、駄目だよ……」

「……一つしか残ってないよ」

「……」

夕暮れ時の公園に光輔と雅の姿があった。

二人で並んでブランコを揺らす。

「あのさ」

何気なく切り出した光輔を雅がちらと見やる。

「桔平さん達に気を遣ってきっちりしてる時の綾さんと、俺達の前でおどけたり世話やいたりしてる時のお母さんみたいな綾さん。どっちが本当の綾さんなんだろ」

「どっちもだよ」

しごく当然にそう答えた雅の横顔を、光輔が不思議そうに眺める。
「どっちも同じだよ。いろいろな人に気を遣っておろおろして、いつもいっぱいっぱいで、どんな時でもみんなのために一生懸命笑ってくれるのが、あたし達の知ってる綾さんだよ」

「……。そっか……」

「どうして？」

「うん……」表情もなく顔を伏せる。両脇で鎖を抱えるように光輔がぼそりと呟いた。「ひよっとしたら綾さん、俺達にさよならを言いに来たのかなって思ってた」

立ちこぎの雅が軽くそれをいなした。

「そんなわけないじゃん」

「……」

「さよならなんて言葉、言えるような人じゃないよ」
光輔がそろりと顔を向ける。

雅は夕陽に顔を焼かれながら前だけを見つめていた。

「あの人は何があっても、あたし達を置いて一人で逃げちゃうような人じゃない」

「……。アメリカ行っちゃったじゃん……」

「……」 夕焼けの眩しさに目を細める。「きっとそうしないとあたし達を守れないと思ったんだよ」

「俺達を？」

「……」

「……なんで？」

「……。わからないけど……。でも」

突き刺すような茜色の陽射しを受け、光輔には雅の表情がよく読み取れない。

それでもその口調だけはわずかにも揺るぎのないものだった。

「たとえ世界中の人達が悪人ばかりになっても、あの人だけはあたし達を裏切らないよ。絶対」

「……」

視界の片隅を一匹の野良猫が通り過ぎる。

白と黒のその猫は、ふいに動きを止めて振り返ると、ニャア、と小さく鳴いた。

その鳴き声が誰かを呼んでいるようで、二人が顔を向けると、通りの向こうで立ち止まりせわしく辺りを見回す子猫の姿を確認した。

交通が途絶えた頃合いを見計らい、親猫がもう一度呼びかける。すると子猫は吸い寄せられるように親猫のもとへと駆け寄っていた。

そのまま二匹は互いに身を寄せ合いながら、公園の隅へと消えていった。

「帰ろつか」満面の笑みをたたえ、雅が振り返る。「明日も学校だしね」

「ああ……」

背中を向け、それぞれの帰路へ足に向けた時、雅が光輔を呼び止めた。

「光ちゃん、また明日ね」

「……」

「また明日」

夕陽を受け、影を背負った雅が穏やかに笑いかける。
光輔も、ふつ、と笑い返した。

「ああ、また明日」

「ん……」

空港のロビーに見知った顔ぶれが勢ぞろいしていた。

きよろきよろと辺りを見まわした後で、整列する見送りの面々の前、スーツ姿の綾音が朗らかに笑う。眼鏡は着用していなかった。

光輔、夕季、忍、礼也、雅、木場、桔平。その一人一人の顔を確認するように向かい合った。

「綾っぺ、俺は悲しいぞ……」

どちらかと言えば、悔しそうな様子の桔平が口火を切る。

綾音が嬉しそうに笑った。

「私も悲しいです。みなさんとお別れしなければならいなんて」

「まったく。おまえさんみたいな変てこな奴には滅多にお目にかかれねえからな」

「どの口が言うんでしょうねえ」

「今時セクハラオツケーな女子職員も珍しいぜ」

「それはオツケーじゃないですね」

「もう二度とその巨乳が……、でっ！」

後ろから頭をはたかれ、険しい目つきで桔平が振り返る。

気まずそうな集団の中、一人夕季だけが口をへの字に曲げていた。

「こら、夕季！」

忍にたしなめられ、夕季がふいとそっぽを向いた。

「謝らないから」

「夕季！」

「シュークリーム、全部食べたし」

「全部じゃねえだろ！」心外そうに桔平が夕季を睨みつける。「一

つ残しといてやったじゃねえか！」

「おんなじ」

「や、だから、申し訳ねえと思って、会議抜け出して十個買つてきてやったじゃねえか！」

「そのうち八個は桔平さんが食べちゃったんだけどねえ」

「いや、みつちゃん、うまそうだったから、ついな」

「大人のくせに意地汚い」

「何だと、てめえ、夕季！」

「まあまあ」氣遣うように綾音が笑う。「あ、そう言えば伝言……」途端に桔平の表情が凍りついた。

「ああ！ いい、いい！ もういい！ あれはもういいんだ！」
「はあ……」

「？」口を曲げたまま、夕季が不思議そうに二人を眺めた。

コホンと咳払いをし、氣を取り直して桔平。

「結局大食い対決でも一度も勝てなかったしな」

「ひいらり、……柊さん」

「いい、いい、ひいらりんって呼んでくれ。許すから。綾っぺなら何と呼ばれても許す」

「……」につ、と笑った。「今度うちの工場へ見学に来てください。みなさん、ご招待しますから。その時はまた一緒にお食事に行きましよう」

「よし、今度はホットドッグで勝負だつてばよ！」

「ああ！」ポンと手を叩く。「私ホットドッグ大得意なんですよ！」

「おおおっ！」大げさに見得を切る。「大得意って……」

「こないだ地元の大食い大会に出たんですけど、何とか三連覇することができました」

「ふうん……。……三連覇？」

「ええ、かなりきわどい戦いでした。準優勝の人が途中で白目むいて倒れなかったら危なかったです。なんだかヤバいかなって思ってたら、残り時間二分で五本差まで追いつかれてて、まいっちんぐですよ。あんなすごい追従、記憶にありません。こっちも必死でした」
「……さぞかし必死だったんだろうな」みるみるテンションがしば

んでいく。「そいつも……」

「その人、隣の洲からわざわざ私と対戦するためにやってきたらしくて、そのまま全米大会で決勝までいったって話を後で聞いてぞっとしましたよ。私は仕事の都合で本戦出場を辞退したんですけど、正解でした」

「何言ってるのか意味わかんねえなあ……」

「あ、そうだ」ポン。「今度おいしいゲテモノ料理のお店にご案内しますよ」

「おいしいゲテモノ料理って、おまえ……」

「見た目はアレですけど本当においしいんですよ。サソリのから揚げとか、クモの姿焼きとか、羊の眼球とか。姉さんも誘って……」

「あ、うん……」

「……。あれ？」

綾音がおもしろそうに笑った。

「本当にお世話になりました」

「まあ、世話つつつか」苦々しく顔をゆがめる。「悪かったな、貧乏クジ引かせちまったみてえで」

「そんなことありませんよ」えっへん、と涼しげに胸を張った。「おかげで労災でハイブリットカーも買えそうですし」

「いや、それは無理だ」

「え」不本意そうな様子で桔平を眺める。「忍はそれで新車買ったって言うてましたが」

「ちよっ！ あー！」突然のキラーパスにしどろもどろの古閑忍。

「それはたまたま振り込まれた後で買ったというだけですし、お金は前からこつこつと貯めてたやつですし、何もそんな……」

「おんなじだろ」

「綾さん！」

「しの坊、てめえ、やりやがったな」

「やってませんで！ すし……」

「すし？……」

崩壊寸前の精神状態で、身振り手振りを交えながら忍が懸命の訴えに取りかかる。

「だって前の車古くて、なんかカラカラカラカラいってたし、燃費も悪いし、エアコンも効かないし、四十キロで走ってたら後ろの車にクラクション鳴らされたし、ワックスかけると塗装が剥げちゃうし、じゃ、どうしろってことですよ！」

「わかった、わかった……」

綾音が木場の前に立つ。

「木場兄さん、いろいろとお世話になりました」

「ああ」

「中華、おいしかったです。またご馳走してくださいね」

「あ、いや、割り勘で……」

「みみっちいこと言ってんじゃねえって」桔平が豪快に笑い飛ばした。「兄さんなら、兄さんらしく、どーんとおごつたればあ！」

「ならおまえが出せ。おまえの方が俺よりも給料多いはずだぞ」

「……いや、基本は割り勘だよな」

「またいつでも来てくれ、綾……」

「綾音でいいですよ、兄さん」

「おお……」

いたずらっぽく笑い、綾音が熱いまなざしで木場を見つめる。

岩のような木場の顔が真っ赤に染まった。

その時、忍が驚愕の表情で退いたのを誰も知らない。

「必ず来いよ。待っているからな」

「はい」

忍の様子がおかしいことに桔平が気づく。

「あれ？　しの坊、何、ギョロツと目え剥いちやってんだってばよ」

「剥いてませんってばよ！」目を剥いて桔平を睨みつけた。

「あそ……」

綾音と目が合うと、雅は甘えるように笑ってみせた。

こいつめ、という顔になる綾音。

「何も帰らなくてもいいのに」

「そういうわけにはいかないんだって」

「ふうん……」

「雅、つらいだろうけど頑張ってね。何かあったらいつでも言ってくるよ」

「毎日電話するから、料金お願いします」

「まかしときな。全部メガに払わせるから」

「言っと思った」

二人で、にやははは、と笑い合う。

綾音が前に立つと、横を向いていた礼也が照れたように顔を戻した。

「礼也。お見舞い、毎日来てくれて、ありがとね」

「いや、ヒマだったからよ……」

「頑張んなよ、応援してるから」

「ああ」表情を正し、礼也が嬉しそうに笑った。「綾さんもな」

「がってんだってばよ!」

「……」

「あれ?」

綾音が夕季の方を見る。

「夕季、しっかりね。こいつらシメられるの、あんただけだから」

「うん」

「……」 桔平がきよろきよろと辺りを見回す。「あれ? 今こいつら、つつつた時、俺の方も見たよね?」

夕季と目が合う桔平。バツが悪そうにそっぽを向いた。

おもしろそうに忍へ顔を向ける綾音。

忍も同じ顔で頷いてみせた。

「忍」

「はい」

「あんた、キャラ、ぶれまくってるから、大事にね」

「……あい」

光輔の前へ立ち、綾音が初めて違う表情を見せる。神妙な顔つきになり、申し訳なさそうにそれを口にした。

「光輔、ごめん。力になれなくて」

「何言ってるんだよ。綾さんらしくもない」

「……。あんた、何だか陵太郎に似てきたかもね」

「なわけないっしょ」笑い飛ばすように光輔。「本当にごめんとか思ってるんなら、もっとちよくちよく帰ってきてよ。ラーメン作りにさ」

それを聞いた礼也が割り込んでくる。

「おい、光輔、いい気になんな。綾さん忙しいんだって」

「何だよ、自分だってそう思ってるくせに」

「バカ野郎！ てめえのせえで帰んなくちゃならなかったってんだ」

「言いがかりはやめてよ」

「うるせえ」

礼也が光輔の頭をパチンとはたく。

「つてえな、もう……」

まばたきすらできず、二人のやり取りに心を奪われる綾音。遠い昔の記憶が鮮明に蘇りつつあった。

*

綾音は疲れ果てた表情で灯かりの消えた宿舎の前に立った。

深いため息をつく。

すでに限界だった。

感応数値は年下のひかるや陵太郎に及ばない。忍のようには抜けて頭がいいわけでもない。

いつしか綾音は、自分がメガルにとって必要のない存在なのではないか、と思い始めていた。

人と人とのつながりは所詮薄皮一枚だけなのだと、常々感じてい

た。

本当は誰も自分を必要としておらず、みな、ただ無味な愛想笑いを繰り返すだけなのだ。

自分がそうしてきたように。

今日、この日が終わると同時に、綾音はその場所から去る決心をしていた。

ずっと前から。

それでも、もし心残りがあるとすれば……

複雑な面持ちで、みな顔を思い返す。

すぐに気持ちを立て直し、笑顔を作った。

せめて最後までこの笑顔だけは絶やすまいと、綾音は心に刻みつけていた。

過去を切り捨て、決別の扉を開く。

しかし、眉を寄せ玄関を抜けた綾音を待ち受けていたものは、想像だにしていなかった光景だった。

部屋へ入ると一斉に灯かりがともり、クラッカーの音が綾音を出迎えたのである。

わけがわからず呆けたように見渡せば、そこには宿舎の全員が整列しているのが見てとれた。

そして、誕生日おめでとうの飾りつけ。

「せーの！」

「綾さん、お誕生日おめでとう！」

雅が音頭を取るその合唱は、耳を塞がなければならないほど盛大なものだった。

再び鳴り響くクラッカーの乱れ撃ち。それを追いかけるように笑い声が重なった。

テーブルの上を見れば、手作りのケーキと料理、おのおのが持ち寄ったプレゼントがところ狭しと並べられていた。

にやにやと薄ら笑いを浮かべ、陵太郎とひかるが近づいて来る。

「いや、いつ綾さんにバレるかドキドキだったよ」

「りょうちゃん、嘘つくのへたっぴだもんね」

「おまえもだろ」

顔を見合わせ、いひひひ、と笑う。

にこにこ笑顔を振り撒きながら、雅が光輔の背中を押した。

「光ちゃん、忘れてる」

コチコチに固まり、緊張の面持ちの光輔が、定まらない視線のまま綾音に花束を手渡した。

「綾さん、これからも僕達の素敵なお母さんでいてください！」

「バカ！ お姉さんだろ！」

礼也が光輔の頭をぺチンと叩く。

一瞬のタイムラグを経て、光輔が、びぎゃー！ と泣き出した。

「礼也君！ 叩いちゃ駄目！」

「だってよ、こいつが間違えやがったから」

「びえええっ！ ええええーっ！」

「光ちゃん、大丈夫？」

「礼也が悪い」

「んだ、夕季！」

「あっはっは！」

礼也達のやり取りを眺めていた綾音が、突然大声で笑い始める。
みな、ぽかんとした表情で、その様子に注目していた。

「あっはっはっは、はっはっは！ はあ……」

綾音が目尻の涙をぬぐう。

おかしくてたまらないといったふうだった。

「いい、いい、礼也。ずっと前からそのつもりだったから。あたしはあんた達のお母さんだから。これからもずっとね」腰を落とし、光輔の頭を撫で、優しくに微笑んだ。「光輔、ありがとうね……」

*

遠き想いに心をはせる綾音に、陵太郎の声が重なった。

『どうだ、綾さん。俺達の自慢の兄弟達は？』

ふっと笑う綾音。

「ばーか、自慢の子供達だろ……」

「え？」忍が目を見開く。

綾音が涙ぐんでいることに気づいたからだった。

「あ、綾さんまた泣いてる」

「光輔！」

たしなめようとする礼也に、逆に光輔が訴えかける。

「だってさ、綾さんが泣くなんてさ。綾さん、涙もろくなったんじやない。年かな」

「トシ！……」こめかみに浮き上がる血管。「てめえ……」

「おまえ、それ！……」

「てやんで」

戦慄の礼也を、綾音の一言が押しつけた。

注目する一同。

綾音は目頭を押さえ、懸命に涙を堪えていた。

「あんた達と離れなくちゃいけないんだから、悲しくないわけないじゃない……」

訪れる静粛。

それを真っ先に破ったのは、そこにいる誰よりも下品な男だった。

「うぐうつ……」

涙ぐむ桔平に木場が待ったをかける。

「何故貴様が泣く」

「だってよ、綾っぺが……」振り返る桔平。すると木場も同じように泣いているのを確認した。「て、おまえもか！」

「ぐむむむ……」

「ははっ」涙をぬぐい、楽しそうに綾音が笑った。「あと、頼んだよ」

「わかってるって」礼也が笑いながら頷く。

光輔と夕季もそれに続いた。

満足そうに綾音も頷いてみせた。

ちらと横を見やる。物陰からあさみが様子をつかがっていることに気づき、嬉しそうに笑った。

「……じゃあ、さよならってことだね」

「変だよ、綾さん」雅が不思議そうに首を傾げる。「そういう言い方、綾さんらしくない」

「バカたれ」ニヤリと笑った。「必ずまた会えるってわかってる時にはそれでいいんだよ」

「なるへそ」にゆつと笑った。「じゃ、それでいいよ」

「はは。じゃあね……」

みなに背を向けて歩き出す綾音。

しばらくしてから、くるりと振り返り、綾音は大声で叫んだ。

「頑張れ、みんな！ 負けるな！」

太陽のような笑顔だった。

了

第十三話 『グッバイ……』 6（後書き）

だらだらだらやっちゃいましたが、ようやく終わりました。もともとよくある安易な結末のためにハメ込むだけのキャラのつもりだったのに、肉付けをしているうちにこんなに膨れてしまいました。かなりのチートキャラで、ある意味メアリー・スー的な存在でもあります。コンセプトは十八禁ゲーに出てくる保健の先生が近かったりします。個人的には好きなのですが、安定しすぎて周りと化学反応が起こしにくいために、ここでドロップアウトです。

ということで次話の練りこみ作業にとりかかります。また次回からもあきれずにおつき合いしてやってください。どうもありがとうございます。

第十四話 『避けられぬプロセス』 OP

薄暗い兵器庫の入り口付近で伏見綾音は佇んでいた。

見通せぬほど高い天井と広大な敷地一杯に、ところ狭しと並べられた瓦礫の山を表情もなく眺める。

物音がし、ゆっくりと振り返った。

それが見知った顔であったのか、別段驚く様子もなく、またもとの体勢に戻る。

すると、その影が嬉しそうに問いかけてきた。

「あれ、帰ってきちゃったんですか？」

「……」

「てつきり、もうこっちには戻ってこないと思ってたんですけどね」
少年ぽさの残るその爽やかな口調を受け流し、綾音が少しだけ視線を落とした。

「あたしも帰ってこれると思ってなかったけど……」

「だって、そのつもりだったんですよね」

「……」

「よかったですね」綾音の背中越しに、含むような声が楽しそうに笑った。「だから言ったでしょ。みんな、いつまでも子供のままだやないって」

「……そうだね」

「雅達、元気になりました？」

「ああ」

「そうすか」嬉しそうにそう言い、伸びをする。「久しぶりに会ってみたいな。今度行く時は一緒に連れてってくださいよ」

静かに振り返り、綾音が笑いかけた。

「ああ、ケイゴ……」

「よしや。今夜はお祝いといきましょう。あ、メアリとジェーンも呼んでおきます。喜びますよ、二人とも」

喜び勇んで彼がその場から離れた後、綾音は再び瓦礫の山へと視線を埋め、平坦に呟いた。

「今度は、みんなに会いにね……」

柊桔平は誰もいなくなった司令部別室で、その通話に応じていた。プロテクトがかけられた回線に特殊なコードを用いてアクセスすれば、ホットラインとして使用できる。そのセキュリティはほぼ完璧で、受話器から放たれる音声を意味のある形で拾うことはまず不可能であり、受話器から二十センチ以上離れば、いかなる集音装置も役に立たなかった。

そこから押し込まれるのは、冷たく平坦な響きだった。

『大惨事に至らずにすんだのは君のおかげだそうだな。その気配りと機転の良さには、毎回驚かされる。今後も、我々とメガルの関係が円滑に続くよう、たゆまぬ努力を続けてほしい』

「ああ、わかつてるよ」

暮れかけた紅い海へと目線を泳がせる。

『我々も出来る限りのバックアップは約束しよう。いいか、くれぐれも言っておく。風野守人と進藤あさみから決して目を離すな。』

そのために貴様を副司令に推挙したのだからな。頼りにしているぞ』

「わかつてるよ……」

波打つ海の色が真紅に染まる。

さながら血のようだった。

「……火刈さん」

血の紅にまみれた瞳に決意を宿し、桔平は受話器を握りしめた手の袖口からボタンを引き千切って投げ捨てた。

第十四話 『避けられぬプロセス』 OP（後書き）

日本語って難しいとつくづく思います。

国語辞典からの抜粋ですが、円周上のすべての点とその平面にな
い一点とを結んだ時にできる立体は？ と言われて、それを明確に
イメージすることができませんでした。辞典に載るくらいだからそ
れが的確な表現ではあるのでしょうか、わたくし的には答えありき
の状態で無理やり自分を言い聞かせてそれをイメージするのがやつ
とでした。釈然とはしません。これが常識人の知識としてごく当
然であり、中高生の方々がその説明だけで瞬時に正解にたどり着け
るのだとすれば、会話すら怖くてできません。

そんな人間が他人様に脳内補完を要求してばかりでよいものかと

……

答え・円錐

第十四話 『避けられぬプロセス』 1

その時、教室の空気が変わった。

霧崎礼也が入室したためである。

しかしその理由は以前のような恐々としたものではなく、むしろ羨望による視線が多く見受けられた。

桐嶋楓はその足取りを表情もなく目で追った。

周囲の女子生徒が顔を見合わせ、楽しそうに笑い合う。

「霧崎君、変わったよね」

「話しやすくなったしさ」

「もともとカツコよかったわけだし、今、いい感じじゃない？」

「前のイメージが悪すぎたから、急上昇って感じたよね」

「ワガママなのは相変わらずだけど」

「合唱コンクールの練習とか、一回も来ないもんね」

「来ちゃうのも変だけだよ」

「それじゃ、変わりすぎ、ってことで」

「それくらいいいんじゃないの？」

「結構ダジャレとか言ってくるのが、イタイっちゃイタイけど」

「それは許してあげようよ」

「だね、だね」

礼也が自分の席にドッカと腰を落とす。カバンを開き、紙袋の中からメロンパンを取り出してかぶりついた。

ふいに目の前に影が落ち、パンをくわえたまま礼也が上目遣いにちらと見やる。

厳しい表情で楓が立っていた。左肩の上で結んだ髪を悠然と揺らしながら、侮蔑のまなざしを差し向ける。

「おはよう、霧崎君」

「……………おいす」何こともなかったようにパンを頬張る。「なんか用か。イチゴ姫」

楓の顔が火が灯ったように真っ赤に染まった。

眉をつり上げ、噛みつくように言葉を発していく。

「どうして合唱コンクールの練習に出てくれないの」

「あん？」じろりと見上げる。「かつたりいからに決まってんだろ」
「かつたるい……」

「別にいいだろ。んなの、遊びなんだからよ」

その言葉に楓のスイッチが反応した。

「遊びじゃない。みんな一生懸命にやってる。一人だけ勝手なことをして、みんなが迷惑しているのがわからないの！」

「どこのどいつが迷惑してんだって？」

教室中の生徒達が一斉に迷惑そうな表情になった。

「少しはクラスのこと考えてよ」

「だから、そうしてやってんじゃねえか」

「何が……」

「俺がいない方がやりやすいだろ」

「……………ああ言えばこう言う」

「あん？」

楓の頭頂部から高温の蒸気が噴き出し始めた。

「自分だけ、そんなわがママが許されるとでも思っているの。ご立派な理屈を並べて、さも考えているふうに見せても、自分本位な理由で面倒なことから逃げようとしているだけじゃないの。そんなの許せない」

「許せない、つつたって、どう許せないわけだ、こら」
じろりと礼也。

楓は腕組みをし、見下ろすようにそれを睨めつけた。

「主催者として、絶対に参加してもらいます」

「どうやって？」

「非常手段に訴えてでも」

「イテえこと言う奴だな。またパンツとか見せてくれんのか？」

「！」途端に赤面し絶句する楓。「霧崎君！」

小爆発のような金切り声に耳を押さえ、そっぽを向いた礼也の目にタイミングよく光輔の姿が飛び込んできた。

立ち上がり、教室の外へと出ようとする。

「よお、光輔。なんか用か。仕方ねえな、まったく」

「ちよつと、聞いているの！」

「おい、タンマ、タンマ」面倒くさそうに振り返り、礼也は入り口の前で立っている光輔を顎でくいとさした。「客人だ。また後にしてくれって」

ぐむ、と楓が口をつくむ。

「おう、光輔、よく来たな」

「おう」礼也に応じて手を上げ、すぐに首を傾げる。「……って、おまえがそういうこと言うの、めずらしすぎだろ。歓迎してくれるなんて、夢にも思わなかった」

「いや、ナイス・タイミングだったの。助かったぜ、実際」

「へ？」

ちらりと振り返る礼也。

すると、怒り覚めやらぬ様子で楓が二人の横を通り過ぎて行った。去り際に光輔の顔を思い切り睨みつける。

「……俺、なんで睨まれたの？」

「なんでだろうな。俺には同情することしかできねえ」

「……」腑に落ちない様子で光輔がまたもや首を傾げる。何とか気を持ち直し、思い返すように顔を赤らめた。「綺麗な人だな。どこかで見たことあるような。誰だっけかな」

「へ、綺麗なのは外っツラだけだ。中身は……」

「外っツラだけで悪かったわね！」

廊下の反対側から楓が叫ぶ。

その凄まじいまでの形相に光輔が退いた。

そんなことなどまるで気にも止めない様子で礼也が耳をほじる。

「お、聞こえてやがった。えれえ地獄耳だな」

「……。おまえってひどい奴だな」

何気ない光輔の呟きに、目をつり上げて礼也が牙を剥く。

「何言ってるんだって。ひでえのはあっちだ。何せ、あの嘘臭い作り笑顔とゴマスリだけで生徒会長にまでのぼりつめた女だからな」

「あ、生徒会長ね」ポンと手を叩く。「どうりで見覚えが」

「たいしたモンだって。女子アナとかになりや、成功するんじゃないのか」

「……。俺、女子アナとか、結構好きだけど」

「バカ野郎、俺もだ。ま、最近のは目も当てられねえが」

「そんなにひどい人には見えないけどな」

「ま、外から見てりやそんなもんだ」ふふん、と鼻を鳴らす。「愛想ばっか振りまいてやがるから、おまえみたいなのがよく勘違いするんだっての。で、一步間合いに踏み込んだ途端に、グサツとくるわけだ。結局おまえらのようなのは、はなから眼中にないんだって」

「ま、そりやそうかも……」ふと気がつき、三たび首を傾げる。「結局俺が駄目出しされてる感じになってない？」

「まあな」

「あ、やつぱり……」

自分達にとつて腫れ物以外の何ものでもない人物と対等の口を聞く下級生を、礼也の同級生達は畏怖するように眺めていた。

かつて礼也の傍若無人な振る舞いから目をそむけた柔道部の猛者ですら、悠然とした光輔の様子に目が釘づけとなる。何気なく振り向いた礼也と目が合い、またしても彼は小動物のように身をかがめて顔をそむけた。

「……」

「ん。どうした、光輔」

「……いや、おまえってさ、クラスの人から一目置かれてんだなって思っ」

「なわけねえわ。嫌われてるだけだったの」

迷惑そうな礼也と残念そうな光輔。

「……。せっかくやんわり言ってるのに……」

「うぜえこと言ってるな。ま、もっとうぜえのもいるけどな」

「へ？」

礼也がちらと目線を流す。

隣の教室前の廊下から、楓がすさまじい形相で睨みつけていた。

「それって雅のことだろ」

「……。お？」

「あれ、違うの？ 夕季？」

「……。ま、そんなところだ。じゃあな」

「おう」手を振りかけ、光輔が慌てて礼也を追いかけた。「あのさ、まだ用件言ってるないんだけど！」

「あん？」

第十四話 『避けられぬプロセス』 1（後書き）

お気に入りのおの人のモデルは某めざまし系の女子アナの人だったりします……

第十四話 『避けられぬプロセス』 2

「おい、桔平。聞いているのか」

メック・トルーパーの詰め所で木場に問いかけられ、桔平が気のない様子で振り返る。

「ん？」

「ん、じゃない。俺が遅れたのは、逃げ遅れた老人を見かけたからだという話だ。見失ったがな。あの人が無事かどうか、いまだに気がかりでな」

「ん、ああ」窓の外を眺める。午後六時前だというのにすっかり陽は落ち、滑走路の照明と本館の明かりだけがぼんやりと光を放っていた。「……俺は、にう麺でいいわ」

「は！ 何の話だ！」

「いや、だから、ソウ麺を煮た……」

「……」

メック・トルーパーの勤務形態は通常時、午後五時半をもって終業する。

全隊員の約三割が敷地内に住居を構えており、桔平や木場を含めたそれらの隊員達が、拘束手当の名のもとに緊急時に対応することとなっていた。とは言え、緊急とてかなり特殊なケースに限定されるため、ゲートで身分証明さえ提示すれば、外出も自由だった。所帯を持たない若手隊員がその主だった面々であり、彼らは館内の食堂を主に利用していたが、自己管理、自己責任の名のもと、飲酒もかなり自由だった。何かが起こった時、困るのが自分自身ということだけは、みな肝に銘じていたからである。

木場が深く息を吐き出す。

最近、桔平の様子がおかしいことには気づいているようだった。また、それを察する優しさが、彼にはあった。

「……メシでも食いに行くか？」

「ん。おお」桔平が顔を向ける。「俺は、にう麺で……」

「わかった。それでいい！」

「おう……」

桔平が窓越しに別館を眺める。

本館とは違い、研究施設が集中するそこからは、残業する職員達の開かれた明かりは見られず、どこか冷たい雰囲気か漂っていた。

桔平の視線は遠く彼方の海へ吸い込まれていった。

*

桔平は神妙な面持ちでその扉の前へ立った。

ノックをしかけ、インターホンがあることに気づき、手を引く。

その表情からは常の軽妙な様子は微塵もうかがえなかった。

心を決め、己に言い聞かせるように頷くと、赤いボタンを押した。すると中から、『入りたまえ』と小さいが重々しい声が返る。

もう一度頷き、桔平がドアのレバーへと手をかけた。

「失礼します」

二十メートル四方はあろうかと思われる部屋の奥の壁に張りつくように巨大な机が置かれ、入り口へ正面を向く姿勢で一人の男が山積みの書類と共存していた。

風野守人だった。

風野は司令室を進藤あさみに譲り渡してから、人目を避けるように、この別館の地下室へともっていったのである。

シエルターを連想させる部屋の中には、机と数台の端末機の他にはこれといったものもなく、それが余計にその空間を閑散と浮き上がらせていた。

地下五十階の扉を開けば、通路がガーディアンの格納庫へと続いていく。

「座りたまえ」

机の前に不自然に置かれた手すり付きの椅子へと桔平を誘導する。
風野から目を離さずに、桔平はそれに腰かけた。

「そろそろ呼ばれるころだと思っていました」

先に切り出した桔平をちらと目をやり、表情を変えることなく風野がそれを受け止めた。

「私もだ」メーカーからコーヒーを注ぎ、差し出す。「そろそろ君が来るころじゃないかと思っていた」

「おかしいことを言いますね」砂糖も入れずにそれを流し込む。「まるでこちらから仕向けたように聞こえますが」

「そうではないのか？」

「……」

自分の分をカップに注ぎ、風野がガラス容器をかたわらへ置いた。「見え透いた探りあいはず。君もここへ呼ばれた時点で、すべてを受け入れているはずだ」

「バレバレでしたか」

感心したように桔平が息を吐き出す。

「君が盗聴器を仕掛けられていることを知りながら、なお、我々に情報を提供したことがか？」

「そんなところです」

それを受け、風野が笑みをもらした。

机上のインターホンへ手を伸ばす。

スピーカーから通常会話程度の音量で声が返った。

「風野だ。柊副局長は入室した。階層のロックを頼む」

『了解しました』

ボタンの取れた袖口へ目をやり、桔平がにやりと笑う。

「白々しすぎましたかね」

「白々しいのはこちらと同じだ」

桔平が顎をしゃくつてみせた。

「失言じゃないですか。俺があなたの考えているとおりの人間ならば、あなたの発言は自分の首を締めることになりかねない」

「君が私の考えているとおりの人間ならば、それはないはずだ。でなければ、ぬけぬけとここへはやっては来ない」

「ですかね」

重々しく頷く風野。桔平の目を真つ直ぐ見据え、突き刺すように言葉を繰り出した。

「君には、ここへ来るための口実が必要だった」
にやりとし、桔平も楔を打ち返す。

「そしてあなたは、俺をここへ呼ぶための理由が必要だった」
顔を見合わせ、二人が同じ笑みを浮かべた。
眼鏡をはずし、それを机の上へ置く風野。

「もう一杯、どうだね」

「いただきます」桔平が半身になりカップを差し出した。「できたらミルクと砂糖も」

「好きなだけ使いたまえ」

ゆるやかな時が流れていく。

が、そこには一瞬たりとも気を抜く余裕はうかがえなかった。

頃合いを見計らうように、風野が引出しから小さな金属製の箱を取り出す。

手のひら大のそれはずつしりと重く、中央にある窪みに風野が視線を合わせるとぬめりと光を放ち、蓋が持ち上がった。

手渡されたその中身を確認し、桔平が両目を見開く。

「これは……」ごくりと生唾を飲み込む。「……ガイア・ストーン」
厳かに風野が頷いた。

「何故ここに……。これはあさみが……。……進藤司令が持っていたはずでは」

「彼女が自ら返却しに来た。条件付きでだな」

「……。あさみが……」

「君に引き継いでほしいそうだ」

「俺に！」風野を凝視したまま、桔平が動きを止める。獣に睨まれた獲物のごとくに、風野の直視から逃れられなかった。「何故……」

「それが返却を申し出た際に彼女が私へ提示した条件だ。正直、私もどう対処すべきなのか、はかりかねている」

「……。無理やり理由をこじつける必要もなかったというわけか……」

桔平の視線を受けたまま、もう一度風野が頷いてみせた。

「受け取りたまえ。君にその意志があるのなら」

「……。いいんですか。俺みたいな人間にそんな権限を与えても」
「権限を与えたわけではない。責任を課したのだ。君はその重責を担い、相応の人間であり続けなければならない。無論、断る自由もある」

「……。俺がこいつに相応しい人間なのかどうかはわからない。だが……」 厳しく叩きつけられた風野からの要求にも、わずかにも表情を変えることなく、ゆるぎないまなざしを向ける。「これがある」
「つからの挑戦状ならば、断る理由はどこにもない」

微動だにせずに風野が桔平の顔を注視する。

それは期待でも哀れみでもなく、畏怖に近いものだった。

第十四話 『避けられぬプロセス』 3

生徒会室に楓と男子生徒の姿があった。

開け放たれた窓からは、校庭でクラブ活動に勤しむ活発な声が流れ込む。

執務を終え、顔を上げた二人が笑い合った。

「すみません、すっかり手伝わっていただいてしまって」

楓の満面の笑顔を受け、その少年も柔和な表情で迎え入れた。

「かわいい後継者のためなら労力は惜しまないよ」白い歯を輝かせ、爽やかに笑う。「それに君達の失態は、OBとしての引き継ぎの悪さを露呈するようなものだしね」

「すみません。歴代の面々にまるで及ばない、至らない現役で」

「いや、そういうつもりは……」誉め殺しのように楓に刺し込まれ、バツが悪そうに苦笑いをする。「君はよくやってくれている。先代生徒会長の俺が保証する」

「ありがとうございます。先輩にそう言っただけだと、私も気が楽になります」

「はは……」

楓の熱いまなざしを受け、先代生徒会長、衣浦卓也の鼓動がトクンと高鳴る。

頃合いを見計らうように衣浦がそれを切り出した。

「桐嶋君、そろそろ返事を聞かせてくれないかな」

涼しげなまなざしに、楓が嬉しそうな笑みを返す。

「先輩、今大切な時期ですよ。私、先輩の足手まといにはなりたくないんです」

「そんなことはたいした問題じゃないんだ。俺にとって受験なんて単なる通過点にすぎないからな。同じ方向性を持った人間は、一緒

にすることがベストだと思うんだ。お互いの力をさらに引き出すことができる。君なら俺に相応しい」

「どう相応しいんですか？」

楓が身を乗り出したと判断し、衣浦が誇らしげに胸を張る。

「君のスペックなら俺とつり合う。君ならば誰もが納得するはずだ。君なら、誰もが認めてくれる」

「誰もが認めて……」

楓の表情に迷いが浮き出る。

衣浦は楓の心が揺れていることに気づいていた。

「つり合わないと思います。私の家は先輩のようなお金持ちじゃありませんし、それに片親ですしね」

「君のご両親が離婚していることなら問題ないよ」

「……」

「俺の両親はそんな小さなことにこだわるような器量の狭い人間じゃない。きっと君に対しても普通に接してくれるはずだ」

楓の表層から気持ちが抜けていく。

衣浦はその表情を、いまだ笑顔だと信じて疑わなかった。

「何だかプロポーズされているみたいですね」

「ははっ……」

「結婚してくださるんですか？」

淡々と発せられた楓の言葉は、真とも偽とも受け取ることができた。

その心の内が読めずに衣浦が顎を引いてかまえる。

「……。いや、そういうつもりじゃ……」

「冗談ですよ」

上辺だけの微笑みの前に、衣浦の外壁から安堵がこぼれて落ちていった。

「ははっ、わかってたけど……」

「……」 楓が嬉しそうに笑い、唇を小さく結んだ。「先輩、おりいっつてお願いがあるのですが」

「何だい。言ってみて」

「はい。これからクラスメートと学園行事の件で話をしなければいけないのですが、一人だと言いつらいので一緒につき合っていただけませんか」

「……」これ以上ボロを出さないように衣浦が画策する。「いいよ。言いにくいことなら俺が言ってあげるよ」

「いいえ、用件は私が伝えますから。先輩は私のそばにいて下さい」

「ははっ、何？ ボディガードか何か？」

「そうですね」

「……は、は」

「私がその生徒に何かされそうになったら、助けただけですか？」

「ああ……」衣浦が覚悟を決めた。多少危険な目にあつたとしても学園内ならばなんとかしのぐことができるはずだった。彼は人望もあり、教師からの信頼も厚い。公の場であれば、己の本気が見過ごされる状況はないと考えていた。何より、楓の信頼を得るチャンスでもある。「……助けられるかどうかはわからないけど、君が逃げるまでは何とか食い下がってみるよ。それでもいいのならついて行くけど」

「充分です」ほっ、と胸を撫で下ろす。「よかった、私、心細かつたんです」

「はは……。そんなにひどい奴なの？」

「ええ、最悪です」

「……」

「相手は霧崎礼也ですから」

「！」

一瞬で凍りつく衣浦の表情。

その心情も意に介さぬがごとく、楓は安心したように思いのたけを撃ちまくり始めた。

「私一人ではどうしようかと困っていたんです。何度話しても、一

向に改善してくれる様子もなく。でも先輩と一緒に行ってくださるのなら心強い限りです。二人であの学園のガンをギャフンと言わせてやりましょう」

「……。なんでまた」

「彼が合唱コンクールに参加してくれないからです」

「……。……。……。衣浦の目が点になる。すぐさまそれがつり上がった。「そんなことで！」

「は？」

鼻から荒々しく息をもらし、怒り心頭に発したとばかりに衣浦が楓を睨みつける。呆然と眺める楓に気づき、気持ちを立て直した。

「……。そんな……。……。それくらいのこと、注意しなくてもいいんじゃないのかな……。」

「でも、合唱コンクールは生徒会主催の大切な学園の伝統行事ですよ。全員参加が原則です。明確な不参加の理由がない限り、生徒会の役員として放っておくわけにはいきません」

不本意そうに言い切る楓の視線に貫かれ、今度は抑える素振りも見せずに衣浦が爆発する。

「おかしいだろ！ それ！ 授業態度や勉強のことならともかく、ただか学校行事くらいでそこまでする必要があるのかって言うているんだ。程度問題だ。そんな個人の勝手だろ。強制するようなことじゃないと思うよ。俺は賛成しない」

「私はそうは思いませんが」心のかよわないまなざしを差し向ける。「生徒全員の手で学園を盛り上げていきたいって、昨年先輩、そうおっしゃいましたよね？ 私はあの時の先輩の崇高な姿勢に感銘を受けて、生徒会長へ立候補したんです。先輩のようになりたい。少しでも自分達の通う学校の役に立ちたくて」

「……」

「でも、先輩がそうおっしゃるのなら、先に彼の生活態度を注意したいと思います。前から気にはなっていたので。私も同級生がむざむざ留年するのを黙って見ていたくはないですから」

「……そんなことついでに言うことじゃないだろ」
「は？」

目が据わり出した衣浦を、楓が表情もなく冷静に待ちかまえる。
まるで予測の範囲内だと言わんばかりに。

「だいたい、君にどうしてそんな権限があるんだ。先生でもないのに他人に干渉しすぎじゃないのか！」

「……」

まじまじと見つめられ、衣浦が楓から顔をそむけた。

「あ、いや……」精一杯の威厳を保ちながらそれを口にした。「悪いけど、そんな自分勝手な考えなら、つきあえないよ」

「そう言うと思った」

「え？」

ぶすりと突き刺すような楓の一言に、衣浦がまばたきも忘れ振り返る。

楓は笑っていた。

満面の、乾いた笑顔。

「いいえ、なんでもありません。そうですね、私もそう思います」
につこりと笑いかける。

それから楓はその表情のまま、笑顔を絶やさぬまま、きつぱりと告げた。

「私みたいな身勝手な人間は、先輩には相応しくないと思います」

第十四話 『避けられぬプロセス』 3（後書き）

エアベンダーの元アニメが押しだったりします。

アメリカンがジャパニメーションをトレースしているのは丸わかりですが、丁寧なつくり込みやアイロニーは、今や日本製以上ではという気さえするこの頃です。

目の見えない女の子や火の国の少女達も魅力的ですけど、自分的には母性愛を持つヒロインがツボですね。萌えに振り回されて日本人が遠い昔に忘れ去ってしまったものがそこにあります。そうです。中身がしっかりしていれば、萌えなんてものは必要ないのです。

てことで、カタラ萌えです。

つまらない冗談はさておき、どこかで続きやってくれませんかね

……

放課後、楓は数人の友人達とスイーツ専門店へとやって来ていた。午後二時から五時まではバイキングタイムとなっており、それぞれが皿いっぱい盛られたプチケーキを手に席へ着く。

その一つを丸ごと口へ押し込み、楓が大きなため息を吐き出した。「はあ〜！」

「何、何、どしたの楓」

「何でもないです」友人をちらと見やり、気だるそうに二つ目を押し込んだ。「あ〜、癒される」

「ストレスたまってるんじゃないの？」友人がからかうように言う。もう一人がそれを受けた。

「そだね、あたしらじゃ絶対真似できないしね」

「そんなじゃないって」三つ目も一口だった。

「こんな姿、衣浦先輩には見せられないね、桐嶋ちゃん」

「……」恨めしそうに目だけを向ける。「別に」

「別につて、懂れてたんじゃなかったっけ？」

「……」だったかな

「だったかなって。何、なんかあったの？」

「何も」

「つき合ってんでしょ？」

「違うよ」

「でもコクられたって。あ〜、うらまやしい」

「コクられたどころか、嫌われました」四つ目と五つ目を重ねて放り込む。さすがに無理があった。「おほっ！」

二人の友人が信じられないと言わんばかりにその顔に注目する。

「桐嶋ちゃんでも駄目なのね」

「ハードル高。さすがミスター山凌」

「先輩、育ちがいいから。あたしみたいなのじゃつり合うわけないよ」

「そっかな。うちらから見たら完璧なんだけど」

「そうだよねえ」

「やめてよ」

「ま、裏表激しいのも知っちゃってるわけだけどねえ」

「ブラック楓」

「……。どうもありがとう」苦笑いする。六つ目にフォークを突き立てた。「どっちみち今はそれどころじゃないしね」

「実はもうつき合ってる人がいたりして？」

「……まあ、そんな感じ」

「マジ！　どんな人なの？」

「衣浦先輩よりかつこいい？」

「かつこよくはないけど、かわいい、かな。手もかかるけどね」

「ひよっとして年下？」

「うん、まあ。やんちゃで困っちゃうけど」

「ひよっとして霧崎君？」

「……」

「あれ？……」

「……。かわいいって言ったんですけど。年下でもないし」

「でもやんちゃっ子ほどかわいい、みたいな」

「……。ふざけなさんなって」

「まあね」

「でも楓って勇気あるよね。霧崎君とかにも食ってかかってくしさ」
楓がわずかに表情を曇らせた。

そんなことなどおかまいなしに友人達が続ける。

「ほんつと。大村だってビビって何も言えないのにさ」

「ねえ知ってる？　大村の奴、柔道部だとすごく偉そうなんだよ。一年の子とかいじめてんの」

「マジ？　あいつキモ」

「何だかさ、霧崎君休んでる時だけ元気いっぱいだよね」

「うわさだけどさ、あいつ前に霧崎君にこてんぱんにやられちゃったらしいよ。勝てると思ってたみたいでさ、なめてかかったら、触れることもできないで一方的にやられちゃったんだって。で、それ以来トラウマスイッチ入っちゃったの」

「腹いせで後輩イジメてんのね？」

「うわあ、最低だね。自分より弱い奴にしか威張れないの。楓を見習えっつの」

「ふんが？」

「ふんが、つてさ……」

あきれたように眺める友人を、楓がどうでもよさげにちら見するため息まじりにエネルギーの補充を続けた。

「でもさ、あんた本当にあの子のこと怖くないの？」

七つ目のケーキを収め、口にフォークを含んだまま楓が真顔で答えた。

「……怖いに決まってるじゃん」

「じゃ、なんであそこまで執着しちゃうの。先生だって助けてくれないかもだよ」

「……。何か、腹立つから」

「へ？」

「ああいうの見てると腹が立つてくるの」

「あんたのこと、眼中なさそうだから？」

ジロリと友人を眺める。

「おっと、そんなに小さい人間ではなかったか？」

「そうだよねえ、桐嶋ちゃんに限って、そんな……」

「それもあるけど」

「あるんかい！」

「そんなに気に入らないの？」

「どこが？」

何気ない友人の問いかけに、ようやく手を休める。

「……たいしたことじゃないけどさ」

それほど興味がない様子で友人が、ふん、と頷く。

「あの子押さえれば、学校中のどうしようもないの、楓様に一目置くようになるかもね」

何気ない一言に反応する楓。ジロリと友人達を睨めつけた。

静まり返る空気を入れ換えようと、口走った友人がフォローする。

「……そこまでは考えてないか」

「そうだよねえ、桐嶋ちゃんに限って、そんなこと……」

「……でもある」

「あるんかい！」

二人のつつこみに悪そうな笑顔を浮かべる。「まあね」

「出た。ミス山凌の裏の顔」

「うるさいなあ」

「でも屈服させたいんでしょ？」

「……」

「ブラックだね、桐嶋ちゃんって実際」

二つ隣のテーブルにやって来たカップルへ視線を向け、そこで会話が途切れる。

「すごい、あの人。お皿の上、山積みだよ」

「三十個くらいはあるよね」

楓は神妙そうな顔つきで、十個目のケーキを押し込んだ。

「あの子、一年の古閑って子じゃない？」

楓が顔を向ける。

そこには山盛りのケーキを抱え込んだ桔平と、恥ずかしそうに向かいに座る夕季の姿があった。

「あの子、学期末と中間考査の二冠王らしいよ。ぶっちぎりだって」

「先生が問題の出し方を絶妙な感じで間違えてて、他の子全滅だったのに、一人だけ正解してたって」

「何、そのクイズ王っぷり」

無言で夕季らを見つめる楓を置き去りに、二人が楽しげにネタを

交し合う。

真剣なまなざしで夕季を見据え、桔平が咆哮した。

「おい、夕季、早く食え。あと一時間しかないぞ」

「一時間あれば充分だよ」

「バカ野郎、おまえ、あのな、せっかく休み時間に抜けてまで来てやったのに」

「別に今日じゃなくてもよかったのに」

「バカ野郎、会議中に急に我慢できなくなったんだからしょーがねえだろ」

「我慢すれば？」

「バカ野郎、我慢できねえだろ、普通」

「しなよ」

「どうしておまえはいつも上から目線なんだ……」

「上から目線じゃない」夕季が口をへの字に曲げる。「突然電話してこないでよ」

「バカ野郎、電話なんていつだって突然するもんだろ。それとも何か？ 今から電話してもよろしいでしょうかって言うてから、電話しろとも言うのか？」

「バカなの？」

「おまえ！ ダイレクトにもほどがあるだろ！」はあ、あ、とため息をつく。「こんな奴のどこがかわいいんだかな、綾っぺもよ」

「……」

「綾っぺが言ってたんだがよ、信じられねえだろ。俺は、そんなことねえだろ、って言ってやったんだがな」

口を突き出し、夕季が反抗的なまなざしを差し向ける。

「綾さん、言ってた」

「……。何て？」

「……」

「……」

「……」

「言えよ！」

「言わない」

「本当は思いつかなかっただけだろ、てめえ！」

「そんなことない。ちゃんと思いついた。でも言わない」

「思いついたんなら言え！　つか、思いついたってのはどういうことだ！　てめえ、やっぱりでまかせだったのか！」

「ん」

「ん、じゃねえ！」

「早く食べないとケーキ冷めちゃうよ」

「あ、そーだった。早く食わねえとな。って、いやいや、ケーキは冷めねえだろ！」

「バカなの？」

「冗談に決まっつてんだろ！」

「ごめん。天然かと思っただけ」

「バカ野郎、あのな！」

「バカバカ、うるさい。桔平さんなんかに言われたくない」

「なんかとはなんだ！　俺の方が学歴は上だぞ！　とりあえず今はだけどな！」

「うん」

「あれ？　ツツコミなし？……」

「本当のことだから。必ず卒業できるかどうかもわからないし」

「……真面目だな、おまえ」

「ケーキ溶けちゃうよ」

「バーカ！　ケーキが溶けるわけねーだろ、って、あゝ、ほんとに溶けてやがんなー、ババロア！」

「バカなの？」

「……そろそろノリツツコミってのを覚えてくんねえかな。子供じやねえんだから……」

「いい歳して我慢の一つもできない人に言われたくない」

「あー言えば、こー言う！」

「じゃあ黙ってる」

「いや、黙ってるのはナシでいこうぜ。女子高生の前でオッサンが黙ってケーキ食ってる姿想像したら切なくなってくるから。もっと相手のことも考えていこうぜ、な？」

「バカなの？」

「……バカでもいいから、せめて俺の目を見て言ってくれねえかなん、あたりからすっかりケーキに夢中だな、おまえ……」

「飲み物取ってくる」

「あ、俺、コーラな」

「わかった」

「……」

夕季が席を立つ。

その後姿を眺めながら、桔平はやれやれという様子で腕組みをした。

「ったくもう……」もの珍しそうに注目する楓達と目が合った。「

……」

「ロリコンかな？」

「パパにしちゃ若い感じだしね」

そのひそひそ声が桔平の耳に届く。

両手にグラスを持って戻った夕季をちらと見上げ、桔平がオホンと咳払いを試みせた。

「……。まあ、なんだ、夕季」

夕季がそろりと顔を向ける。

「ここはお兄ちゃんのおゴりだから、好きなだけ食べるがいい。気持ち悪くなつてうずくまるまで食ってもいいんだぞ。ちゃんとお兄ちゃんが家まで送っていつてやるからな。それからな、困ったことがあつたら遠慮せずに、何でもお兄ちゃんに言えよ。お兄ちゃんにな」

何となくムツとし、夕季がぼそりと言う。「はい、おじさん」

「おじさんて、ちみい……」

楓の友人達がおもしろそうに笑った。

「いるいる。甥っ子とか姪っ子にお兄ちゃんって呼ばせてる人」
「イタイよねえ」

喜ぶ二人を尻目に、興味なさげに楓がため息をつく。
着信に気づき、ケータイを手を取った。

「あ、もしもし……」

第十四話 『避けられぬプロセス』 4（後書き）

お寄りいただきまして、ありがとうございます。

ちよつと前の話ですが、あまり好きではない二人の男性アナウンサーが好き勝手しゃべっている番組があるのですが、リメイクされた映画のどちらが好きかという話をしている時に、「俺はこっちが好き」、「俺はこっちも好き」と言いながらソフトのケースをポンポン放り投げていました。

別に好きでも嫌いでもないんだけど、おしつけがましいトークで自己主張するので精一杯で、そういう気配りを些細なこととないがしろにしているなら、アナウンサーとして本末転倒なんじゃないっしょうか、と。いや、嫌いだからとか、女子アナと一緒にいられていいなあ、とかいうの抜きで。

自分なら本当に好きならば、たとえパッケージとは言えぞんざいには扱えません。友達に貸してと言われても貸しません。ええ、貸しませんとも、宇宙船レッドドワーフだけは……

教室から出て来た楓が一人の女子生徒とすれ違つた。

その顔を楓は知っていた。

「霧崎君、いますか」

別の生徒が受け答えると、女子生徒はぺこりと頭を下げ、教室の中へ入って行った。

その行動に楓は注目し続けていた。

机に突つ伏して寝入る礼也の前で女子生徒が二言、三言告げる。すると礼也はむっくりと起き上がり、眠そうな顔を向けた。

「わかった、わかった。こんなとこまで来んじゃねえって」面倒臭そうに追い払おうとする。「んなの、光輔に言つとけばいいじゃないか」

「人にばかり頼らないでたまには自分でやれば」

「うつせえな、わかったつつつてんだろ。はい、おしまいだ」

礼也にいなされ、その女子生徒、夕季がムツとなり肩を怒らせた。

「礼也！」

「でけえ声出すな。まわり、びくってんだろが」

周囲を見渡し、夕季が口をつぐむ。恥ずかしそうに顔を伏せ、ギツと礼也を睨みつけた。

「てめえ、殴り込みに来たようにしか見えねえぞ。なあ、大村」

礼也に睨めつけられ、柔道部のエースがビクツと体を縮ませる。

怯えるように顔を伏せた大男をちらと見やり、夕季が口をへの字に曲げた。

「そういうことばかり言ってるから、みんなから相手にされないんだよ」

「んだ！ てめえ！」今にも食いつかんばかりに礼也が身を乗り出す。「どのツラ下げて、んなこと言えやがる！」

そんなことなどまるでおかまいなしに、手に持った書類を礼也へ突きつける夕季。

「とにかく渡したから」

「なんだ、こりゃ！ ふざけんな！」

「いらなかったら捨てれば。後で怒られても知らないけど」

「んだ、てめえ、その言い草は！　なんでてめえは、上から目線なんだって！」

「上から目線じゃない」

不機嫌そうな礼也に対して、一步も引くことなく押し切ろうとするその下級生の勇姿を、級友達は恐れおののくように眺めていた。

礼也が立ち上がり、噛みつくように夕季を睨みつける。

そこへ夕季がカウンターを合わせた。

「綾さん、言ってたよ」

「！　勢いをそがれ、ぐつと顎を引く。『……なんて？』」

「……」

「……」

「……」

「言えって！」

「言えない」

「言えないってな、てめえ、どういうことだ！」

「かわいそうだから」

「ああーっ！」

「礼也はああ見えて結構いいところがあるって」

「！　……お、おお……」

「用もないのに毎日お見舞いに来てたけど、必ずなんかかんかい言いつけてたのは、照れ隠しだって」

「ちよっ、おま……」

「本当は根が優しくていい奴だって。でも、やんちゃで見ていて危なっかしいから、ほっとけない」

「……やめろってえの……」

「かわいくて抱きしめたいくらいだつて。……気持ち悪い」

「……」

「……」

「……。おい、てめえ！」ギツと睨みつける。「本当に綾さんがそう言つたのか！」

礼也の目を見据えたまま、夕季が首を振る。

「てめえ！　どういつつもりだ！」

「おもしろかったから、つい」

「てめえは！」

「全部違つわけでもないけど」周囲の注目をざつと見渡し、夕季が口を結んだ。「どれが正解か、ここで発表してもいいの？」

「やめろ、てめえ……」夕季と睨み合う礼也がふいに失速する。胸焼けするような表情で顔をそむけた。

不思議そうにその様子に注目する夕季。振り返ると、楓の厳しい顔があつた。

「あなた、もう自分のクラスに戻ったら」ジロリと夕季を睨めつける。「授業始まるよ」

表情もなく楓を見つめ返す夕季。

その迫力と無言のプレッシャーに、楓の心がわずかに後退した。

「すみません」

神妙な様子で夕季が頭を下げる。

ほつと気持ちが出るむのを見透かされないよう、楓は気丈な態度をキープしてみせた。

おもしろくなさそうに礼也が割って入った。

「なんだ、なんだ、てめえ。なんでこいつにや、んな簡単に謝りやがる。俺にも謝れ」

「うるさい」

「んだあ！」

「霧崎君！」

「ああ！」

「いい加減にすれば」

夕季の静かなる一喝に教室中が驚愕のまなざしを向ける。
楓も含めて。

「んだ、てめえ！」

「みやちゃん連れて来るよ」

「何！」

「後で綾さんに言いつけるから覚悟しといて」

「……。てめえ、ちよつと来い」怒り心頭に発する。ただし、半分泣きつ面。「それはちよつとやりすぎだろ。とにかく落ち着け。な」
「触るな」

「いいから来いって」夕季の手をつかみ強引に連れ出そうとした。

「ジューズおごってやるから」

「離せ！」

「お！」

礼也の手を振り払い、夕季がプンスカと歩き出す。

その後に礼也が続いた。

「おい、待てって……」

二人の視線が楓と合致する。

楓は畏怖するようにそのやりとりを眺めていた。

キンコーンカーン……

再び夕季が歩き出す。

「おい、待て、夕季。俺も少々調子こいてた節があつたかもしれないねえと言わざるを得ない面があつたかもしれない可能性がねえと言えなくもねえかどうかはわからねえ」

「礼也、授業始まったよ」

「んなのどうでもいいって」

「どうでもよくない」

「おい、あのな。雅には黙ってるって。イヤガラセされんだろうが、ぜってえ。あと綾さんにも……」

クラス中の視線が見守る中、二人の姿は廊下の彼方へと消えてい

った。

放課後、夕季の姿を見かけ、楓が足を止める。

校舎の陰からその様子を観察し始めた。

教室での一件以降、夕季のことが気にかかっていた。

校内の誰からも恐れられる礼也と、対等以上に渡り合う下級生の存在。それも自然体のままで。

噂はちよくちよく耳に入ってくる。優等生であることは知っていたが、他に特別何かが秀でているという印象はなかった。クラブ活動もせず、生徒会に従事することもなく、行動自体が目立たないためである。とは言え、一学期の学期末考査からの連続トップは賞賛に値する。

学園一の有名人であると誰もが口にする楓にとって、興味がわくのはしごく当然だった。

何より二人の関係が気にかかっていた。

「？」

後方から声をかけられ、夕季が振り返る。

サッカー部の練習着を着たその男子生徒に楓は見覚えがあった。

たまに礼也のもとへ訪れる、穂村光輔という一年生だった。

「……ってことでさ」

「ふうん」

「あ、そうだ、夕季。そう言えば、綾さん言ってたよ」

「何」

「……」

「……」

「……」

「……。言いなよ」

「……みんなでチャットとかしたいから、雅にやり方教えてやれって」

「……」

「いや、そんな睨まれると言いくいんだけど……」

「睨んでない……」

二言、三言交わし、夕季が校門へと向かう。

小さく手を振り、光輔が振り返った。目の前の顔を見て、ビクツと体を震わせる。

「ねえ」

楓に呼びかけられ、萎縮する光輔。

「あなた、古閑さんと親しいの？」

「……親しいって言うか」何の前置きもなく切り出され、光輔が困惑気味に答えた。「昔からの知り合いってくらいだけど……」

「そう」表情もなく機械的に相づちをうつ楓。「部活動とかしてないみたいだけど、何か用でもあるの？ アルバイトとか」

「……。家の手伝いじゃないかな。あいつ、お姉さんと二人きりだから」

「へえ」

「あの、あいつになんか用なの？」

楓が光輔の顔をちらと見やる。

それを光輔は、自分が対等の位置にすることで楓の機嫌を損ねたのでは、と感じていた。

「……」

「彼女、かなり優秀みたいだから、生徒会の実行委員に推薦しようと思つて。度胸もありそうだし」

光輔の顔も見ずに淡々と発する。

表情の乏しい顔つきは、光輔が持つ楓のイメージとはかなりかけ離れて見えた。その冷たい印象にしり込みする。

「あいつ、そういうのやらないと思うけど」

「……」

「……」

「……。ずいぶん親密な仲みたいね。あなた、彼女とつき合っているの？」

「え！ まさか！」

大げさに驚いてみせる光輔とは対照的に、楓はそれをごく当前のように受け止めていた。

「じゃあ、他におつき合いしている人とかは？」

「さあ、いないと思うけど」

「……」

楓が考えにふける。頭の中で夕季の姿を思い描いていた。

細身なのでスタイルは良さそうに見える。身長は楓の方がやや高く、凹凸では負けていないだろう。顔立ちはかなり違う。ともにメークをするわけでもなく、端正な夕季に比べ、楓の方がはつきりとした構成だった。好みのわかれる部分ではあるが、常に笑顔を心がける自分の方が印象はいいだろうと、楓は勝手に解釈していた。

知らず知らず、己と夕季の容姿を比較していたことに気づいて、楓がはつとなる。

「礼也のクラスの人すよね」

ふいをつかれたように光輔に刺しこまれ、楓が目を見開いて顔を向けた。光輔にとっては何気ない一言であり、楓もそれを理解していたはずなのに、何故か赤面する。

「だから！」

「……だから、って言われても……」

湯気が立ち上りそうなほど顔を赤く染め、楓が光輔に背中を向けた。

その怒りの意味を光輔は勝手に解釈した。

「あの……」

申し訳なさそうな光輔の呼びかけに立ち止まる楓。

「あいつが迷惑かけてすみません」

振り返り、じろつと光輔を睨みつける。そして何も言わずに、その場から立ち去って行った。

悲しげな様子で一人佇む光輔を置き去りにして。

「……そんなに」

校門へ向かう楓に、同学年の生徒や下級生達が挨拶をする。教師達までもが当然のように笑顔を向けてきた。

穏やかな笑みをたたえ、楓がそれを受け止める。

しかし通り過ぎるや、反転するように仏頂面となった。

むしゃくしゃしていた。

家事を理由にクラブ活動を早抜けしてきたものの、何故だか真っ直ぐ帰る気にはなれなかった。

「！」

通りの角で礼也の姿を見かける。

コンビニから出てすぐに、レジ袋の中からメロンパンを取り出しかぶりつく礼也。口にくわえたまま缶コーヒーのプルタブを起こし、眠そうにあくびをした。

それから公園にでも向かうつもりか、礼也は駅とは反対の方向へと歩き出した。

その様子を物陰からじっと眺める楓。

複雑な想いが交錯していた。

楓が過去を振り返る。

それはまだ入学したばかりの頃のことだった。

*

入学式を終えた新入生達は、それぞれの学級へと振り分けられる。楓のクラスでも他と同じく、席順は窓際から五十音順で始まり、男女が列ごとに交互に並んだ。

一番後ろの席に着き、楓が隣へ目をやる。窓際の席で外ばかりを

眺めているその生徒の名前は、すでに名簿で確認していた。

スキンシップのつもりで軽い気持ちで楓が声をかける。

「同じキリがつく同士だね」

返事はない。

「霧崎君……」

すると顔も向けずに無愛想なりアクションだけが返ってきた。

「それがどうした」

「……」むっとしながらも、プライドの高い楓が気を取り直して再度接触を試みる。「うちの名字、この辺だと一軒しかないんだよね。霧崎も珍しいからそうなんじゃないの？」

「知らねえよ」

「……」

そこには歩み寄りの余地さえうかがえなかった。

生徒会の人間とともに楓が校舎裏を通りかかる。

そこで不愉快な光景に遭遇した。

比較的平和な学園内に存在する一握りの心無い集団。彼らが裏庭にたむろし、喫煙していたのだ。

周囲を威嚇するように睨みつける。

かたわらの男子生徒ははなから抗うつもりなど毛頭なく、足早にそこを立ち去ろうとしていた。

「行こう。あんな連中に関わっても意味がない」

「はい……」

楓もそのつもりだった。

どうせ彼らには何を言っても伝わらないであろう。教師や他の生徒達がいるのならともかく、リスクを冒してまで彼らの愚かな感情に深入りする必要はない。後々損をするのは彼ら自身なのだから、と。

「！」楓が目を見開く。

集団の何人かが花壇に侵入し、花を踏み荒らしていた。

吸い殻を投げ捨てたり、花を筆り取っては放り投げる。ゲラゲラ笑い、まるで悪びれた様子も見られなかった。

花壇の花は学園の近所の老夫婦が寄贈してくれたものだった。生徒会全員で植え込み作業を行った時も、彼らは一緒に手伝ってくれた。穏やかな笑みをたたえながら。

もともと特に正義感が強いわけでもない。が、心を踏みにじる行為だけは見過ごせなかった。

口もとを結び、楓が一歩進み出た。

「桐嶋さん……」

同じ生徒会の役員は見て見ぬ振りを決め込む。

それでも楓の想いは止まらなかった。

彼らに一言言ってやらなければ収まらない。

たとえ無駄でも。

たとえリスクが大きくても。

「何だ、おまえ」

集団の一人が楓を睨めつけ凄む。

その唇が震えたのを確認し、彼がにやりと笑った。

「一本めぐんでほしいのか？」

「……」

別の一人が楓の顔に見覚えがあることに気づく。

「こいつ、生徒会の奴だろ。前に二年の衣浦と一緒にいたの、見たことあるぜ」

「てこた、あいつもか」離れた場所から傍観する別の一人に気がついた。「おい、こつち来い」

顔を引きつらせながら生徒会役員の男子生徒がやって来る。

「おい、おまえ、何年」

「二年です」

「こつちは一年か」

「……」後退する心とは裏腹に、気丈に楓が睨み返す。

「……そうです」

「てめえ、先輩ならちゃんとしつけしとけ」

「は、はい……」

「恥ずかしいんですか」

「ああ！」

集団のリーダー格が楓を睨めつけた。

顔中汗まみれになりながらも、楓は退く様子を見せなかった。

「三年生にもなってこんなことばかりして、みっともないです」

「んあ！ よく聞こえねえ。もっぺん言ってくれ」楓にぬうつと顔を近づける。楓の全身を舐め回すように視線を這わせた。「もっぺん耳もとで優しく言ってくれ。バカの俺達でも納得できるように、もっと色っぽくの方がいいな。時間かかりそうならカラオケとか行つてからにするか？」

「……」

「おい、おまえ」

他の一人が男子生徒を威嚇する。

「さっき俺らのこと、あんな連中って言っただろ。バカとかクズとかよ」

「！」「顔面蒼白。「言ってます……」

「聞こえてんだ、全部！」

「……」

じろりと二人を見回す。

するとリーダー格の男が面白そうに笑った。

「仕方ねえだろ、俺らバカなんだからよ。な？」

「……」

眉間に力を込め、二人に醜い圧力を加える。

「どうせおまえらもそう思ってたんだろ？ 俺らのことカスとかクズとかよ」

「そんなことないよな、桐嶋……」

「ああ！」

「……」

楓がぐくりと唾を飲み込む。

何もできない。だが、せめて胸だけは張ってしようと思った。
と、覚悟を決めたその時。

「おお、いいところにいやがった。おい、おまえら、そのバカども」
人を食ったような調子の呼びかけに、牙を剥き出しにした集団が
不機嫌そうに振り返る。

その声が礼也のものだとわかるや、途端に十名近い肉食獣達はみな顔を伏せて縮こまってみせた。

「おう、おまえら、タバコ出せ。今すぐ全部出せ、このカスども！」
「……」

「早く出せ！ 今にもバッテリー切れそうなんだって！ どうせなんもしねえで無駄に生きてるだけなんだから、ちったあ困ってる人の役に立てって！ このクズ野郎どもが！」

ぐむむむ、と彼らが顔をしかめる。

今にも爆発寸前だった。

「あん？」

じろりと見やる礼也。

すると彼らは直立の姿勢で、一人一人礼也に己のタバコを箱さら手渡し始めた。

その幾人かは武道系の部活動で、チームメイトや後輩達から恐れられているメンツでもあった。

すべてをカバンに収め、礼也が嬉しそうに笑う。

「ラッキ、これでコンビニ行かねえですんだわ」

状況が把握できず、楓はただそのやり取りを眺めるだけだった。

集団のリーダー格が愛想笑いをする。

それを睨めつけ、礼也が冷たく言い放った。

「おい、てめえ、人に物盗られて、何へらへら笑ってやがる」

「あ、や……」

「あ、やじゃねえだろ。また鼻曲がるまで、ぶっ叩かれてえのか」
「いや、そんな……」

「ああっ！」

「……」

すっかり小動物の集まりと化してしまった集団を、礼也が順番に見渡す。

一度こてんぱんに打ちのめされていた彼らにとって、ケタ違いに凶悪な礼也と視線を合わせられる勇者は一人とていなかった。

「さつきから目え、笑ってねえぞ、てめえら。腹ん中ボコボコ煮立ってんだろが。ム力ついてんだろが。だったら媚びてねえで向かってこいって。骨一本になるまで向かってこいって。したら、てめえら認めてやる。今度こそ手加減ナシでボコボコにしてやる」

「……俺らは別によ、そんな何でもかんでもケンカっていうつもりも……」

「んだ！ ホンモンのカスだな、てめーら！」

「……」

「おい、コラ、カスども。こないだ、ボウズにしてこいつつったの、どうなってるやがんだ。俺の言うことなんぞ、シカトか？」

「そういうわけじゃ……」

「あんだあ！」

勇気ある発言者に高速のカウンターを浴びせる。

「んじゃ、なんだって！」

「……。一回ボウズにしたんだけど、伸びたんだよ……」

「一ヶ月でそんなか！ てめえは呪いの人形か！」

「……。長めだったから……」

「嘘こけ！ ボケッ！」

「……」

別の一人にロックオン。

「てめえは？」

「……あ、俺はずっといきつけの美容院が予約で一杯で……」

「はあ、そんな流行ってやがんのか？」

「オーエル達に大人気で……」

「美容院ってツラか！ ヒグマみてえなガタイしやがって、ハゲ！」
「……」

礼也の目が据わる。レーザービームのような眼光で子羊達の網膜を焼きつくしていった。

「しゃあねえな。んじゃ、特別に俺が刈ってやる。一人五千円でいいわ」

「ええっ！」

「何が、ええっ、だ！」

「……やつすっ……」

「遠慮すんな。出血大サービスだって。おい、誰か今すぐ枝切りバサミ持ってこい」

「枝切り……」

「わざわざ床屋行くメンドーはぶけていいだろ。もっと喜べって」

「……」

「喜べって！」

「……やった……」

「安心しろって、枝切りはプロ級だ。頭は刈ったことねえが、間違っても耳の上の方ちょん切れるくらいだから、心配すんなって。死にやしねえ。ブサイクが加速するだけだっての」

「……」

「三回こつきりだからよ、後はメンドーだから自分らで適当にぶち抜いとけ」

「あの、俺ら今から床屋……」

「ああ！ 床屋行くのがメンドーだってから、わざわざこつちがやってやるつつってんだろが！ なんだ、てめーら、俺をバカにしてやがんのか！ 俺の親切心を踏みにじろうってのか！」

「……」

凶悪な恫喝に、レギュラークラスのアウトサイダー達が乙女のような仕草で愛想笑いをする。

それがまた礼也の激怒回路を刺激した。どこをどう触ってもフェ

ザータッチで入力される理不尽な回路である。

「気に入らねえ。おい、てめえら、全員そこに正座しろ。満員電車みてえに、びっちりくっついて並べ」

「……」

情けない表情を見合わせ、十人ものコワモテ三年生達が一人の一年生の命令に従う素振りをする。

その時、花壇へ足を踏み入れた礼也に、楓が待ったをかけた。

「そこへ入らないで」

「んあ」じろりと礼也が見やる。「んだ？」

礼也に見据えられても楓は一步も退かなかった。

ただ真っ直ぐにそのまなざしを受け止める。

「その花壇、近所の人達が手伝ってくれて、私達が作ったものなの。お願いだからそこから出ていって」

「……」

「お願い」

「……」

「……」

面倒臭そうに礼也が後頭部をかく。

「なんかどうでもよくなっちゃったな……」あくび。「おい、なんかメンドクせえのがいるから、二度とおまえらそこに近づくんじゃねえぞ、ボケども。俺のせーにされたらたまんねえ」

「……」

「ついでおまえら、そこ直しとけつて。俺は屋上でニコチン補給してくっから、終わったら報告な。そんなからな、明日っから一本でも毛え、はやしてやがったら、ツラがまっ平らになるまでブン殴るからな。覚えとけ、クズども」

「……」

「もしバツクレやがったり、腹いせで俺に全部おつかぶせようとしてまた荒らしやがったら、卒業まで下の毛もボウスだ、わかったか、カスども」

「……」

「返事はねえのか！ ボケ、クス、カス！」

「はい……」

花壇の修復にかかりだした上級生達に振り返ることもなく、礼也がその場を後にする。

楓は複雑そうな表情でその背中をずっと見守っていた。

*

やがて礼也の姿が見えなくなる。

楓は物憂げに一息つくと、自分の家の方角へと振り返った。

その時、警報が鳴り渡った。

何度も聞きなれたあのサイレンだった。

着信に気づき携帯電話を取り出す。

「わかった。すぐに行くから待ってて。まだ動いちゃだめだからね

……」

第十四話 『避けられぬプロセス』 6（後書き）

最近三週連続で日曜の夕方にパソコンが壊れたです……

第十四話 『避けられぬプロセス』 7

「天竺町にアスモデウスです」

忍からの報告を受け、桔平とあさみが振り返る。

出向期間を終えた波野しぶきのかわりに、副局長補佐見習いの忍が臨時で連絡業務に就いていた。

連結効率と機密を両立させるために、司令部別室へ連絡係として忍を配置させ、桔平らが直接指示を出す。

「天竺町ってつたら」

桔平があさみへ振り返った。

「山凌高校の近くね」

「……」忍の横へ張りつき、桔平が食い入るようにディスプレイを凝視する。「勤労会館の辺りか。近えな」

「はい、まだ動体反応はありませんが、付近四町ではすでに避難勧告が出たようです」

「……。奴らは？」

「夕季ならすでにスタンバっています。光ちゃ……、光輔は呼び出しに応じないそうです。おそらく部活動の最中かと。礼也はケイタイの電源が入っていないのか、連絡がとれないということですよ」

「あいつら……」

「光ちゃ……、光輔だけでも学校へ問い合わせてみますか？」

「……。別に光ちゃんでもいいぞ」

「……あい」

「真面目だな、おまえ」

「スンマセン……」

「お、おお……」

あさみが腕組みをする。

「仕方ないわね。空竜王だけでも向かわせましょう」

「おう」あさみに頷き、桔平が忍に指示を出す。「しの坊、俺の名前で学校に連絡してくれ。礼也はともかく、光輔くらいならつかまるかもしれねえ。木場達にもキャリアで天竺に向かうように連絡しとけ」

「はい、桔平さん」

ちらと忍を見やるあさみ。

「古閑さん、ここではなるべく副司令と呼んでね。コード展開中、ここでのやりとりはログとして保存されるから」

「はい。……ですね。すみません……」

「正式な手順もなしにあなたがここへ出入りできるのは、決して副司令の一存だけではなくて、メック・トルーパーとして積み重ねた実績と信頼があるからなのよ。その辺、よく心にとどめておいてね」

「はい」

「かてえな、おまえ」

あさみが桔平をじろりと睨めつけた。

「柊副司令も同じです。メリハリだけはつけてね。最近、なあなあが過ぎるみたいだから」

「……あい」

あきれたようにあさみが二人を眺める。

また忍へと向き直った。

「波野さんの後任がまだ決まらないみたいなの。機密上のこともあるし難しいセクションだから、人選も慎重になっているようね。しばらくは私達のサポートに徹してもらうつもりだけど、あなたは求められてここにいるわけだから、それなりの期待もしています。誰でもいいってわけではないからそのつもりでいてね。オビディエンスへの指示は私達が出すけれど、そのうちあなたにお願いすることになるかもしれないわね。信用のない副司令のことはともかく、綾からの推薦もあったから大丈夫だとは思っけれど」

「はあ……」

「……今さりげなく俺がカチーンとくるようなことを言わなかった

か？」

「それから、緊急時にここであつたことはすべて秘密厳守ですから」

「はい」

「あれ、無視……」

「そう言えば、綾が言つてたわよ」

おそろおそろ忍が顔を向けた。

「……。何をですか」

「……」

「……」

「……」

「……。……言つてください」

「……」

「……」

「セクハラには気をつけてって」

「俺のことか！」

まじまじと桔平を眺めるあさみ。

「そうとも言つわね」

「そうともって……」

「大変です！」

せっぱつまつた様子で忍が振り返つた。

「動き出したようです！」

「何！ 本当か！」

「はい、きつぺ……、柊副司令殿……」

「殿？……」

空竜王のkokopitt内から廃墟と成り果てた街を見下ろし、夕季が憤りを叩きつける。

「この辺りはもう駄目みたい」

『アスモデウスは？』

ディスプレイ越しの桔平からの通信に応答した。

「勤労会館に向かつてる。思ったより移動速度が速い」

『勤労会館には五千人近い人達が避難しているはずだ。絶対に接近を阻止しろ』

「わかった」

『逃げ遅れた住民もまだうろつろつしているはずだ。何とかしてそこから奴を引き離せ』

「了解。接触して山あいへおびき出します」

『おう、頼む。礼也と光輔にも連絡がとれた。学校で木場達と合流させてすぐに応援に向かわせる』

「わかった。！」

夕季が目を見開く。

『おい、どうかしたか？』

「桔平さん。子供が二人取り残されてる」

『何！』

「小学生くらいの子。あたしは余裕ない。今アスモデウスを押さえないと間に合わない」

『わかった。他の誰かを向かわせる。場所を教えてくれ』

「場所はっ！」

大地に突き立つ真空の刃が悪魔の行軍を足止めする。

空竜王が放った空波だった。

「勤労会館から西に……」

応答を続けながら、夕季がアスモデウス目がけて突撃していった。

「んあ？」

山陵学園高校の間近まで迫ったところで忍からの連絡を受け、礼也が不機嫌そうに顔をゆがめる。

「んだ、そりゃ。学校行けつつたり、また反対行けつつたりよお！」

『お願い、他に人がいないの。礼也が一番近い場所にいるし』

「でもなあ、……うあっ！」

礼也の頭上を空竜王がかすめ飛ぶ。

アスモデウスの前に防戦一方だった。

「大丈夫かよ。やられそうだが、あいつ」

乱れた金色の髪を物憂げにかき上げ、やれやれと言わんばかりに顔を向ける。

『夕季なら大丈夫。そこじゃ思うように戦えないだけだから。アスモデウスを避難区域から引き離したいのだけれど、ルート上にちゅうどその家があるみたいなの。お願い、礼也』

「じゃあねえな……」ビニール袋を破り、メロンパンを頬張る礼也。途端に仏頂面になった。「駄目だな、ここのは……」

瓦礫が散乱する街並みを抜け、礼也が目的地を目指す。学校周辺の一帯はわずか一時間でまったく別の景色へと変貌していた。

家々は潰れ、高層マンションは二つに折れ、道路はめくれ返り、街中至る場所で火の手が上がる。

それはかつて観た地震直後の被災地の映像と酷似していた。

そのどこにも人の気配はうかがえない。

「つたく、どこのクソガキだ。目いっぱい迷惑だつての……」

かすかに聞こえる泣き声に耳をそばだてる。

噴煙の向こうに二つの小さな影を確認した。

「おい、そこにいるのか！」

礼也の声を聞き入れるや、二人の子供が走り寄って来る。ともに小学校低学年であろう男女の児童は、涙でくしゃくしゃになった顔で礼也の腕を引っ張り始めた。

「おい、ちよつと待て！ どこ連れてく気だ」

「お姉ちゃんが、お姉ちゃんが……」

「！」

年長の男の子がえづきながらも懸命に言葉を絞り出す。

「お姉ちゃんがどうした」

「ジヨトを助けようとして……」

「じよと？」

ハテナ顔の礼也にその妹が涙いっぱいの顔を向ける。

「犬。まだすつごく小さいんだよ」

「犬……」

二人の話を要約すれば、彼らを連れ出しにやって来た姉が子犬を助けようと再び家の中へ戻ったその時、数十メートル先に頭だけを出した石像状のアスモデウスが突如として動き出し、それによる地割れが家を崩壊させたと言う。

「で、お姉ちゃんは？」

「行こうとしたら、危ないから来るなって」

「閉じ込められたってわけか……」

今にも崩れ落ちそうな玄関を遠目に眺め、礼也が複雑そうに眉を寄せた。

*

「痛……」

楓が苦痛に顔をゆがませる。

抱きかかえた白い子犬が懷の中でぶるぶると震えていた。

楓の家は、小学校二年生の弟と一年生の妹、海外出張が多く留守がちな父親の四大家族だった。

二週間ほど前、また出張に赴く父が、幼い弟達が淋しくないようにと知人からもらい受けたのがこの子犬だった。

弟達を外へ出し、避難場所へ向かおうとした時に、犬がまだ二階に取り残されていることに気がつき戻ったのである。

二人の笑顔を奪いたくなかった。

二人を家の外で待たせ、今にも崩れ落ちそうな二階へ駆け上がる。部屋の中で怯えて立ち上がることもできずにいた子犬を抱きしめ、弟達のもとへと帰ろうとした時、階段が崩れ落ちたのだ。

倒れた柱に挟まれた左の足首へ手を伸ばす。体をよじるだけで激痛が走り抜けた。

折れているかもしれない、と思った。

落下の衝撃で腰を打ち、芯の抜けたような状態のままでは、自力で柱を除けることは極めて困難だった。

涙目になり、助けを求めようとする。

その時、弟達の声が聞こえてきた。

「お姉ちゃん……」

二人の悲痛な叫び声に顔を向けると、今にも崩れそうな玄関が視界に入る。

それは楓に一つを選択肢を消し去らせた。

「洋一、ほのか。先に逃げて」

「でも、お姉ちゃんが」

「お姉ちゃん！」

「お姉ちゃん、大丈夫だから。ジョトも無事だよ。でもゆっくり出て行かないと家が崩れそうなの。そこにいると危ないから、二人で先に行つてて」

「でも……」

「大丈夫。後で必ず行くから……」助けて、と心の中で叫ぶ。「…

…心配、しないで……」

「お姉ちゃん……」

「勤労会館、わかるよね」死にたくない、と目を見開く。「まだ逃げ遅れた人がいるといけないから、大人の人達にここに来てもらえるように言える？」

「うん」

「うーん！」

「洋一、ちゃんとほのかを連れて逃げるんだよ。いい？」涙が滲み出た。「気をつけて逃げ、て……」

「うん。後から絶対来てよ。約束だよ」

「約束……！」

「うん、わかった。約束する……」
顔をくしゃくしゃにしながら、楓が震える体を抱きしめた。
『お願い、誰か来て……』

第十四話 『避けられぬプロセス』 7（後書き）

お越しいただきましてありがとうございます。

いかにもオタ全開でアレですが、石川智晶さんて何かいいすね。怒涛のように押し寄せてくる圧倒的な表現力には、クリエイターよりも深く作品の世界観を理解しているのではと思ってしまっほです。

下種のかんぐり（？）ですが、メジャーどころに交じってガンダム系をコNSTANTに任されているあたり、かなりの実力者なのでしょう。個人的にはエンディングの女王認定です。

てことでBGMはバーミリオンで……

第十四話 『避けられぬプロセス』 8

表情もなく、泣きべそ状態の二人へ振り返る礼也。

「おし、俺が行ってくつから、おまえら、この先の公園で待ってろ」
「でも……」

「ここは危ねえんだ。おまえらがケガしてたらお姉ちゃんが悲しむぞ」

二人が真顔で頷く。

それをじつと眺める礼也。

「おまえら、お姉ちゃんのこと好きか？」

「うん」

「うーん！」

それを見て礼也がおもしろそうに笑った。

「よっしゃ。俺が必ず助けてやるって。もしバケモンが来たら、とにかくあっちこっち逃げろよ」

しっかりと手をつなぎ、二人が公園へ向かって駆け出した。

それを見届け、顔をバチバチと叩き、礼也が気合を入れる。

目いっぱいにくくらませた頬から派手に息を吐き出した。

「さて、行くか……」

崩れ落ちた玄関を恨めしそうに眺めながら、礼也がその家の門をくぐり抜けていく。

そこには、『桐嶋』と書かれた表札が見てとれた。

「ったく、しゃあねえ姉ちゃんだな……」

ドアを蹴り飛ばし、礼也が玄関へ足を踏み入れる。

落下する天井を間一髪で避け、探るように歩を進めていった。
そこで見た。

崩落した階段の中心で、ペタンと座り込むようにほうけている楓

の姿を。

助けが来たことに一瞬ほっとするが、それが礼也だとわかるや、すぐさま楓が表情を切りかえる。

その目尻に涙のあとを認め、やれやれと言わんばかりに礼也が近づいていった。

「大丈夫か。今助けてやるからよ」

「……。いい。放つといて……」

周辺の木材や瓦礫を押しよせる礼也を睨みつけ、憎まれ口をたたく楓。

「馬鹿言っでんなって」

「……誰も助けてなんて頼んでない」

「はあ？ ふざけんなって。ぼろくそ泣いてたくせによ。よく言うって」

「……」絶句。続けて飛び出した言葉は、本人の預かり知らぬたわ言だった。「あなたに助けられるくらいなら、死んだ方がましって言っているの！」

「お……」一瞬あっけにとられ、何ごともなかったように楓の自由を奪う柱に手をかける。「かしんねえが、頼まれちまったんでな仕方なく、っだ！」

「痛っ！」

「お、わりい」

「……」頬をふくらませ、じっと見上げる。「嫌々ならいいって言うてるでしょ。もう、放っておいてよ！」

礼也が楓の顔をまじまじと見下ろす。

「ホントに帰っちまってもいいのか？」

「……。いい、よ……」

「はん？」

自分が涙目であることを思い出し、楓が慌てて顔をそむけた。

「ま、実のところ、そう言ってくれりゃ俺もありがてえんだが、残念ながら今の俺は正義の味方モードだよ。それによ、約束しちまっ

たからな。外でおまえのことを心配して待ってるチビどもと、っなっ！」大きな柱をゴロリと転がす。「折れちゃねえようだな。これじゃ歩けねえだろうが」

「大きなお世話なの！ 私のこと嫌いなくせに。顔も見たくないくせに……」

「あん？」不機嫌そうにじろりと睨めつける。「何言ってやがる！ だいたいてめえが俺のこと嫌ってるくせに、よく言っつて」

「……。別に嫌ってるわけじゃない……」

「ふざけんな、てめえ！ なんかつつと目のカタキにしゃがって、嫌いモン同士、おあいこだつて」

「……。じゃあ、もう話すことない……」

「はあ？ もともと会話なんて成立してねえじゃねえか。おまえが一人であーだこーだ騒いでるだけでよ」

「……」悔しそうにそっぽを向いた。「私は自分から話しかけるよう努力してるだけ。少しでもみんなとうまくやれるように」

「話したくねえ奴にも無理やりか？」

「……そんなのわからないじゃない。私はよかれと思って……」

「いいと思っでやるから、おせっかいっつてのは夕チがわりいんだ」

「……。何もしない人に言われたくない」

「俺だつて言いたかねえつて。てめえがぎゃあぎゃあぎゃあぎゃあ、やかましく言っできやがるからよ……」

「私だつて好きでやかましく言っているわけじゃない！」振り返り、睨みつけ、言い放つ。すぐさまクールダウンし、淋しげな表情になつて顔を伏せた。「……責任があるから義務で」

「責任とか義務でイヤイヤ言っでやがるのわかってんのに、どうやって話、ポンポン弾ませりゃいいんだつて。んなの、誰だつてゲツブしちまうだろ」

「……」

「ったくよ……」あきれ返るように息をつく。「ま、しゃあねえな。とっかかりが悪いだけでゴツゴツしちまうもんなのに、そこでこじ

れちまってりや、全部アウトだつて。俺とおまえみたいに最初っからその気もなけりや、うまくいくはずもねえけどな」

「……」顔を上げ、礼也に注目する。

何も言わずにじつと見つめる楓を、礼也は不思議そうに見返した。

「……」

「おい」

「……」口もとを結び、楓が眉を寄せた。「……ごめん」

「あん？……」

「……」

「……くっ」

ふいをつかれたように礼也が笑う。

途端に楓の目がつり上がった。

「何がおかしいの！」

「何がってよ……」思わず噴き出す。おかしくてたまらないといったふうだった。「なんかおもしれえな、おまえ。結構、掘り出しモンかもしんねえ」

赤面する楓。それでも片時も礼也から目を離すことができなかった。

「笑いたいなら笑えばいいじゃない。どうせ私なんて、そとつらばかりよくて、まわりの目だけを気にしてるぺらぺらの馬鹿女なんだから」

「なんだ、わかってんのか。だったらやめりやいいじゃねえか」

キツとなつて睨みつける楓。

「私だつて好きでそんなことしているわけじゃない！」

「じゃ、なんでやってんだ」

何気ない礼也の問いかけに、楓がぐむつと口ごもる。

「……みんながそうしろつて、求めてくるから」バツが悪そうに顔を横に向けた。「……霧崎君には関係ない」

「別にほつときやいいじゃねえか」

無責任な発言にムツとなつて振り返り、楓が噛みつくように訴え

始めた。

「期待されたらそれに応えなければいけないの！　今までずっとそうしてきたから、今さら先生やみんなを裏切れない」

「ぜんっぜん、理解できねえ」

「霧崎君なんかにはわからないよ。わかるわけない……」

「……そりゃ、おまえ、わかんねえけどよ」面倒臭そうにあくびをする。「まあ、どうでもいいわ。こんな話、おしまいだって」

「……」

楓が淋しげに目を伏せた。

懐の子犬をぎゅっと抱きしめた楓を、礼也がちらと見やる。

「そんな大事なのかよ、そいつが」

「……。弟達にとってはね」

「あのチビどものワン公か。拾ってきちまったとかか？」

「違う。うち、母親がいないから、淋しくないようにってお父さんが」

「ほええ」

「私じゃ、あの子達に何もしてあげられないし、いい遊び相手が出てきたかなって……」

「いいところあんじゃねえか」

「……」

何気ない一言に、楓のまなざしが一点を見つめたまま静止する。

その焦点の先で、おもしろそうに笑いながら礼也が続けた。

「読み、浅かったかもしれないねえな。そとつただけのぺらぺらが、自分の危険もほったらかして、命懸けでガキやワン公助けに行けるわけねえからな。勉強はさっぱりだが、それくらいわかるっての」

楓の鼓動が高鳴る。

ドキッという音が礼也に聞こえていないか気になるほどに。

「犬は飼い主に似るって言うけどよ、こいつもおまえにそっくりだよな」片手でひょいと子犬を持ち上げ、震えるその様子を楽しそうに眺めた。「いつもびくびくおどおどしててよ。ほんっと、そっく

りだつて」

礼也の横顔を見つめる楓の目からじわりと涙が滲み出す。

「今にこいつも、どっかの誰かみたいにツンケンしちまうのかもし
んねえな」

振り返る礼也に悟られぬよう、慌てて涙を拭った。

「……悪かったわね、ツンケンしてて。どうせ私は桐嶋ツンケンよ」
「あら？」

「あら、じゃない。みんながそう呼んでることくらい知ってる」

「なんだ、知ってたのか、やっぱおもしれーわ、おまえ」

礼也が笑う。

つられて楓も小さく笑った。

子犬を懷へ収め、礼也が楓を背負おうと腰を落とす。

すっかり警戒を解いていた楓が咄嗟に退いた。

「やめてよ」

「この方がつとり早いって」

強引に楓を背負い、礼也が歩き出す。

子犬は礼也の懷の中でおとなしく収まっていた。

「でもよ、俺はやっぱ猫派だな。犬もちつけうちはいいいんだが、
だんだんキャンキャン言ってひつついてきて、ウザくなつてきやが
る。人間と一緒にだつて」

勝手に話し始めた礼也の声もまるで耳に入らず、赤面し続ける楓。

「……。やっぱり恥ずかしいよ……」

「恥ずかしいだ？」じろりと見やる。「バカおまえ、俺なんかよ、
お袋がエンコーやってた時にできちまつたいらねえ子でよ。で、家
出中にどっかでこそつと産み落としゃがって、んで、育てられなく
なつて捨てられたつてんだぜ。ジジ、ババもキツい奴らでよ。こ
んな汚らわしいのは孫でも何でもねえから知りませんわ、って言っ
たとか言わないとかって話だ。お袋もどっか行っちゃまって、全然会
いにも来ねえよ。ま、会う気もねえけどな。これくらいあってから
初めて、恥ずかしいとかって言えつての」

「……」

「ああ！」不意そうに顔をゆがめる。「んだ。人が生き恥晒してカミングアウトこいたってのに、あっさりスルーかって」

「……うちも人のこと言えないから。お母さん派手好きで、自分より十以上も若い男の人とくつついて、私達を捨てて出て行ったから……」

「……」眉間に皺を寄せる礼也。「おまえんちも結構ヘビーなんだな……」

「うん……」

はっとなる礼也。

「んだ！　なんで俺がてめえにこんなこと言わなきゃなんねえ！」

「……自分から言い出したくせに」

「ああ！」ふいににやりとする。「って、なんでこんなコッパズいこと言い合ってんだろな、俺ら。変だよな、たいして仲良くもねえのに」

「……」

ふっと笑い、礼也が空を見上げた。

「しゃあねえな、今日は特別だ。他の奴らには言っんじゃねえぞ」
「うん……」

少しだけ嬉しそうな様子で、楓が小さく頷いた。

廃墟と化した街並みを、楓を背負い、礼也がしっかりとした足取りで歩き続ける。

間近に聞こえるドンドンパチパチの雑音もまるで気にもとめない様子だった。

「……ケンカ、昔から強かったの？」

おそろおそろ探るように楓が口にする。

対して礼也はさほど気にもとめない様子で淡々とそれに受け答えた。

「あん？ ガキの頃なんざ、ケンカに勝った記憶ねえよ。闇雲に上の奴らにつつかかっちゃあ、スタボロにやられてたからな」

「ふうん……」

「ま、年とって全部ひっくり返したけどな」

「……」

ははつと笑い、礼也が振り返る。

「おまえ、俺のこと怖くねえのかよ」

楓の表情が揺れる。礼也の何気ない問いかけに考えをめぐらせ、覇気のない声を絞り出した。

「……怖いけど、霧崎君なら絶対に手を出さないと思っていたから」

「は！ やっぱりハッタリだったのかよ。それにまんまとキメられちまったってわけか。やられたって」おどけるように吐き捨て、静かな口調で続けた。「嘘こけて」

「……」

「ヤベえ、殺されるって顔してたくせによ」

「……。でも、殴らなかつたじゃない」

「おまえ、もう駄目だってわかった時、覚悟したろ。そんな奴殴っ

たつて、ちつともおもしろくねえ。こつちの負け、決まっちゃってんだからな。結局、俺の苦手なタイプだったってこつたな」

「……」

「でもよ、たいがいにしとけよ。いっつもいっつも、そんなんが通
用するわけじゃねえ。いつか取り返しをつかねえことになるって」

「……。それくらいわかつてる。自分でもおかしいことしてるなっ
て思う。無理ばかりしてる自分が大嫌い。別に好きでぺらぺらの皮
をかぶっているわけでもないのに……」

「そんなのつまんねえだろ、実際」

「でも、今さらやめられない。それをやめると何も求められなくな
って、誰から必要とされなくなるから。私は、その方が怖い……」

「そんな奴らなんざ、いつかおまえのそこから勝手に消えてっちま
うつての。ま、やめたくてもやめられねえんじゃ、こんなこと言っ
ても無駄だろうけどな」

「……。しゅんとなる楓。何を言えいいのかわからなかった。」「
本当は最初から私のまわりには誰もいないんだよね」

「あん？」

「みんなそれを見透かして私のことを利用しているだけなのにね。
都合がいいからくつついているだけ。便利だから利用しているだけ
なのに」

「そんなんお互い様だつて」

「……。そうかもしれない……」

「ドロドロだな、おまえもよ」

「どろどろ……」複雑そうな表情になる。

「どいつもこいつも腹ん中ほじくりやドロドロなんだろうが、そう
いうのがミエミエの奴らにや、ガツツリ、ツンケンしちゃってんだ
ろ、おまえ。噂が立つ時や、たいがいツマンねえ奴らからだろうし
よ。ま、俺はそいつら以下の踏み台つてとこだろつから、言えた義
理じゃねえが」

「……」

「誰もいねえつてのも気楽でいいもんだぜ。これ以上離れてく奴もいねえんだからよ。よく言うだろ。いいことと悪いことやるときは、一人でやれば裏切られてハメられる心配もねえ」カカカと笑い飛ばす。「いいことなんぞ、したこたねえが」

「そんな風には考えられない」

「だろうけどな……」

礼也が、へへっと笑った。

「……夢を」

「んあ？」

目を細め、瞳をはかなげに揺らしながら、楓が己の心情を吐露し始める。

「夢をよく見るの。最初は知った顔が何人もいて、みんな笑ってる。でもいつの間にか私の周りには誰もいなくなってる。私は一人きりになってる。目が覚めた時、なんだか、すごく淋しい気持ちになってる……」

苦虫を噛み潰し、むっとなる礼也。

「俺なんか最初から最後まで一人だったの。夢なんか滅多に見ねえけどな」

「……。きつと私は一生自分を偽り続けて生きていくんだと思う……」

黙り込んでしまった楓を気遣うように、礼也がふう、と息をついてみせた。

「案外、当たってるのかもしれないな。おまえの言ってることも」

「利用されるのは嫌だけどよ、人に必要とされるのは別にまんざらでもねえかなって気がしてきた。嬉しいとまではいかねえがな」

「……」探るように、確かめるように、不安定な言葉をつむいでいく。「最初は人に頼られると嬉しかった気がする。でも今はそうしなけばいけないっていうプレッシャーしか感じなくなった。必要でなければ、自分の居場所がなくなってしまうような不安しかない

「……」
「……。あれだな。いい人が何か一つズルすりゃ、こいつもこんなもんかって思われるのに、ズルい野郎がたまにいいことすりゃ、案外いいところあるじゃねえか、って思われるような感じでな」

「……」
「普段はどうしようもねえ悪ガキなのに、映画の中でだけ張り切って主人公助けちゃったりよ」

「……何それ」

「映画版理論ってやつだ」

「ふうん……」

「ふうん、て、おまえ……」

礼也が深く長いため息を彼方へ向けて吐き出した。

「ま、誰だってどつかで無理してんのは確定だけだな」

「……」

「おまえも結構氣い張って生きてんだな。でもよ、そんなんじゃ好きなヤツに好きって言うこともできなくなっちまうぞ。俺も人のこたあ言えねえがな」

はっとなって顔を上げる楓。切なそうに瞳を揺らした。

「……好きな人、いるの？」

「一応な。ま、好きってか、腐れ縁ってえかよ。ガキの頃からのつき合いだからな」

「……。……どんな人？」

消え入りそうな声を楓が力なく押し出す。

流れに何一つ引っかかりを感じることなく、礼也はそれに即答した。

「どんなってよ、おまえ。そいつ、俺のことなんて何とも思ってたよ。でも、好きでも何でもないくせに、ほっとけねえみたいでケンカしたらメッ、とか言いやがって、ガキ扱いしてるつもりだか、まいっちまうって、ったく。ま、おまえに言っても仕方ねえことだけどな」ようやく気がつく。「何言わせんだ、てめえ！」

「……あの一年の子？」

「はん？」

「前にうちのクラスに来てた。……古閑さん」

「ああ、あのバカか。あいつじゃねえよ」口もとを、むん、と結ぶ。
「ぜってーねえ！」

「綺麗な子だね。頭だつていいみたいだし」

「ま、能面みたいなツラしてっからそう見えるのかもな。でもよ、笑うと結構ブサ顔なんだぜ」振り返り、額を指さす。「ここんここにちっちえー傷があつてよ、ちよいハゲてんだぜ。笑っちゃうって」
「……」

「あいつはただの顔なじみだ。平気で俺に噛みついてくるム力つく野郎だつて。ま、凶暴さで言ったらおまえといい勝負かもな。ム力つくのは一緒だが、ちんちくりんじゃねえだけ、おまえの方がマシだつて」

「何それ……」不機嫌そうにぼそり。

「あん？ 誉めてやってんのに不満そうだな」

「ちつとも誉めてない。ム力つくとか言っし……」

「ホントのことだからしゃあねえじゃねえか」

「……」

「でもよ、おまえもいけねえんだぞ。すぐにつつかかってくるから」

「あれは、霧崎君……」

「わかつてるって、悪いのはよ。でもよ、結構クるんだぜ、こう見えてよ。今さら人に好かれようと思っちゃねえが、おまえは別格だ。顔見るとトラウマスイッチ入るようになってきちゃった。もうちつと手加減してくれてもいいんじゃないか。ホントよ、まいっちなぐだつて」

「……ごめん」

「いや、こんなところで謝られてもよ……」

楓が眉を寄せる。

「……霧崎君、私のこと嫌ってるよね」

「ん？」ふいをつかれ反応が遅れた。「そうだな」

「やつぱり……」

「ま、俺の場合、世の中の人間ほとんどが気に入らねえからな。でも、おまえのことはそんなに嫌いじゃねえよ」

「……」心が揺れ始める。「……嘘だ」

「嘘じゃねえって。別に好きってわけでもねえが。たまにムカついて、うつとおしいくらいか」

「……」

「珍しいパンツも見せてもらったしな」

「あ、う……」

「嫌われてんのはこっちの方だろ。こんな状況なら誰が来たって王子様だろうに、ただだけ嫌われてんだっての」

「……」

「ま、嫌かもしんねえが、今日だけ我慢しといてくれ。明日からまた知らん者同士でいいからよ」

先よりも輪をかけて切ない気持ちに見舞われる楓の心。

胸の内を締めつけられるような痛みが走った。

ふっと笑う礼也。

「でもよ、なんで、もっと大声で助け呼んだりしねえんだよ」

楓の気持ちを汲み取ることなく、礼也が土足でズカズカと踏み荒らす。

「……。そんな恥ずかしいこと、できない」

「おまえ、プライド高そうだからな」

「……」

「チビどもも心配するし、か」

「……」

見透かしたように礼也が、へっ、と笑う。

「どうせこんな時じゃ、外だって誰もいねえけどな。もちっとチビども教育しとけて。メソメソ泣いてるばっかで、助けも呼びに行かねえ。おかげでこっちゃんあ、えれえこっちゃんだぜ」

「そうだね。言っとく……」言葉とともに大切な気持ちを封じ込める。「……ごめんなさい、迷惑かけて。せつかく助けに来てくれたのに、私じゃ霧崎君もがっかりだよな」

「知ってたって」

「え……」

予想外の返答に楓がまばたきも忘れる。礼也は何こともなかったように続けた。

「ま、知ってたつつうか、何となくによ。玄関に表札かかってた。前におまえ、言ってたからな。この辺にや一軒しかないって」

「……」込み上げる想いに押され、楓が言葉を失う。わなわなと唇を震わせ、目に涙を浮かべた。

「あのな」

「……」

「おまえが前にくれたパン。あれ、どこで買った？」

気持ちを引きしめ平静を装う楓。それでも発した声は上ずってしまった。

「……うちの近くのパン屋さん。フレールっていう」

「そっか。あれ、うまかったな。俺、メロンパン、ガキの頃からずつとブームだよ。この辺なら、また今度買いに来るかな」

「……」

「あれ？ 笑わねえの？」

「……どうして？」

きょとんと見つめる楓に振り返り、礼也は少し照れながらつないでいった。

「俺がメロンパン好きだとかコクると、たいてい笑いとれるんだけどな。夕季のバカなんざ、すげえ見下しやがる」

「私も好きだから、メロンパン」

すると礼也のテンションが上がった。

「あれ、おまえもなの？」素の表情のまま、嬉しそうに笑う。「そうだよな、うめえよな。あんなうまいもん、他にはねえよな。外が

カリッとしてて中がほわつとよ。それをあの野郎、好きじゃねえとか言いやがって。信じらんねえわ。思い出しただけで腹立ってきた！　ちくしょー！　ま、べちゃべちゃのやつは俺も勘弁だけだな」

「……ははっ」

「ほれみろ、やっぱ笑った」

「そうじゃない。そうじゃないよ……」　楓が淋しそうに目を伏せる。

「……また今度、買ってくね」

「ああ、頼むわ」

それからしばらく、二人は沈黙を受け入れていた。

「あのな、別にいいんだけどよ」

ふいに礼也がそれを口にした。

「何？」

楓に力なく返され、氣遣うような口調で礼也が話を続ける。

「おまえが偽善者でも何でも、別にどうでもいいことだったの」

「……。偽善者……」

「いや、そういうつもりじゃねえんだけどよ……」もどかしそうに顔をゆがめる。「だってよ、そんな人間いるわけねえもん。みんなどっかかんか、計算してるわけだろ。映画やドラマじゃあるまいし、人間なんざ、損得で動いてる方がよっぽどかわいげあるっての。でなきゃ理解できねえって。だからよ、仮におまえが偽善者だったとしても、俺は何とも思わねえ。むしろ安心するって。どうせひねくれモンだし」

「……」

「この世の中、正直モンが損するようにできてんだ。正直モンは長生きできねえ。だったら、ニセモンでもいいから、ずっと生きててくれた方が、周りの奴にとっちゃありがてえだろ。カッコつけて、そんでぽっくり死んじまったら何にもならねえ。どんななんっても生きててくれた方がいいっての」

楓からの反応がない。

礼也がボリボリと頭をかきむしった。

「やっぱりおまえ、俺とは違うのかもしれないな。おまえは自分がそういう人間になりたいって思ってたから、そうしてるわけだろうし」

「霧崎君、また嘘ついてる」

「ん？」

「本当は霧崎君も信じてるんだよね。そういう人がいることを知っているんだよね。だから、私みたいな上辺だけの人間が許せない……」

「はあ！」不快そうに顔をゆがめる。「てめえ、勝手にキレイごとで人くくってんじゃねえって。俺の本体はよ、もっとドロドロでぐちゃぐちゃなパーツで組み上がってんだからよ」

「……」

「って、雅が言っただけだ」

「……。……雅？」

「ん？ ああ、おまえに負けず劣らずのいじわるな女だ」

「……。ふ、うん……」

「ま、俺とおまえじゃ、……いろいろ違いすぎるってことだ」

「……」

「おまえらは真面目に学校行ったりや、普通に卒業して働いて結婚する。上流か中流かは知らねえが、ちゃんとした家庭ってのを築けんだろ。だが俺は違う。他の奴が普通にやれることができねえからな。何一つ、まともなことができやしねえ。口先ばかりでよ、駄目なのは重々承知だが、今さらどうにもならねえんだ。まともなモンに近づけば近づくほど、そこに自分の居場所がないって気づかされる。情けねえって。結局、俺とおまえじゃ住む世界が違ってたことだ。俺なんかじゃ、いくら頑張ったっておまえらみたいにはなれねえ」

「そんなこと、ないでしょ……」

「わかってるくせにシラジラしいこと言っただけじゃねえって。一番必要な奴と一番邪魔な奴が、同じ場所で同じ扱い受けてちゃ不公平だろうがよ。俺だって自分の居場所くらい知ってる」

「……」

黙り込む楓に、へっ、と礼也が笑ってみせる。

「ま、それ承知でこうやってつき合ってくれんだから、貴重な存在

なんだろうな。珍しいって、おまえみたいのも。結構ありがてえかもしれないねえ」

「……。霧崎君って誉められるの苦手なの？」

「ああん！」じろりと顔を向ける。「んなの、誰だって苦手だろーが。人が人、誉めん時は、なんかかんかよからぬこと考えてる時の多いだろうしよ。シラジラしいって。っても、直で誉められんのも恥ずかしくて、ムズ痒くなってくるけどな。まだ駄目出しされた方がマシだったの」

「……。私は逆。白々しくてもいいから、誉めてほしい。駄目出しされるとすごく落ち込む。泣きたくなる……」

「本気で駄目出しされりゃ、誰でもヘコむけどよ」

「誉められていないと不安になる。自分なんて必要ないんじゃないかって思えてくる。いなくてもいいんじゃないかって。そう思うだけで怖くて怖くて、何もかも捨てて逃げ出したくなる……」

「逃げる奴は信用できねえ。てめえが助かるためにすぐ裏切るからな」

「……う」

「ま、偉そうに述べてやがるくせに、俺だって言えた義理じゃねえがよ」

「……」

ふん、と鼻息をもらし、礼也が口を真っ直ぐに結んだ。

「誰だって迷えば逃げ出したくなる。逃げ場所を探そうとするのもガチで仕方ねえって。おまえみたいに、ヘタレのくせに何があっても逃げない奴なら知ってるけどよ。ま、あいつは天然だからな。こないだも大事なところで目えつぶちまったって、えらく反省してやがったが。ホントに勇気があんののは、ホンモンよりもフェイク貫いて頑張ってる野郎かもしれないねえ。嘘もつきとおしゃホンモンだ。危なっかしいけどよ」

「……」

「迷いがねえ奴は強い。だが、引くことを知らねえから早死にする。

だから大事な奴ばかりいなくなつて、俺みたいないらねえモンはいつまでも生き残っちまうんだ。おまえは偽善者でも逃げねえから、俺よかマシだつて。な？」

「……。そんなふうに言われてもちつとも嬉しくない……」目頭が熱くなり、額を礼也の背中に押しつけた。「言つてること滅茶苦茶」「んなこたわかつてるつて。こつちだつて何言つてんのかとつちらかつてんだからよ！」

「……」

ふさぎ込んでしまった楓の様子に、柔らかいものにそつと触れるように、穏やかに礼也が話し始める。

「あのな、俺の名前な、ほんととはあんま好きじゃねえんだけどよ」

「……レイヤ？」

「おお」

「いい名前だと思う」

「……。なんでレイヤってーか、わかるか？」

「……わからない」

「ほんととはよ、レイって字、ゼロって書いてたつてよ」

「ゼロ？」

「漢字のゼロ。一の前の零だ」

「……。どうして？」

「お袋達の呪いが込められてんだよ。すべてをリセットしてゼロに戻りたいっていうな。そんなんじゃ不憫だから、どっかの輩がギリで差し替えたつて話だ」

「……」

「俺がいる限り、奴らは永久にリセットできねえ。俺は誰からも求められない、いねえ方がいい人間なんだよ。笑っちまうだろ。てめえらで勝手にこしらえといて、なくなつちまえてんだからよ。そうはいくかつて」

「……」

「世の中には二種類の人間がいるつてよく言うじゃねえか。でもよ、

俺はいつだってどっちにも入れねえ。ずっと外っ側の人間だ。だからゼロヤでちょうどいいんだって」

「だったら、カズヤになればいいじゃない」

「カズヤ？」

「一の也って書いて一也」

「んじゃ何か？ 次はニヤでそんな次はサンヤかってーの？」

「……普通に次郎とか三郎でいいじゃない」

「そんなん普通すぎだろ」

「……。じゃ、ニヤでいい」

「あつははは！」礼也が豪快に笑い飛ばす。「俺もニヤは勘弁だつて」

「……」

「おまえよ、普通信じねえだろ、こんな作り話」

「作り話……」

「ころつといきすぎだったの」

「……。全部嘘だったの？」

「ん？」ちらと楓を見やった。「さあな。どうだかよ」

「……。ひよつとして、さっきの……」

「んあ？」

「……」

「エンコーの話か？　ありゃ、ほんとだって」

「あ……」

「妊娠して産まれたとこくらいはな」

「……。……じゃ、私も嘘」

「何だっけか？　おまえの話って」

「……」一瞬むつとするが、すぐに立て直す。「メロンパンが好きだっていう話」

「マジか……」

表情を和らげ楓が小さく頷く。

「世の中、嘘ばかりだと思ってた方が、がっかりしなくてもいいか

もしれないね」

「そいつはあるかもな」ははは、と礼也が笑った。「欲しいと思わなきゃ、消えてなくなったって何ともねえ」

「……」楓も笑う。淋しそうに瞳を揺らしながら。「……。うん……」

「嘘なんかじゃねえって」

「？」

「おまえのことは別に嫌いじゃねえ」

「！」穏やかな礼也の旋律に楓の心が射抜かれる。ふいをつくように襲いかかる嗚咽をこらえることができなかった。「うつ、ひつ、いつく、うつ……」

「……。てめ、どっから声出してやがんだ……」

「……ひ、いひつ、……ひつく……」

「……。ま、いいけどな」平坦に、そして優しくに礼也がその音色を奏で続けた。「おまえがどれだけ垂れ流そうが俺には関係ねえしよ。言う気もねえけど、今日だけにしとけて。でねえと、せっかく無理くり気張って生きてる意味ねえからよ」

「ご、ごめん……、ひつ、うつ、く……ひつ……」

「だから、いいってよ、んなの……」

「ひつ、うつく……」

「あゝあ、っと……」

第十四話 『避けられぬプロセス』 10（後書き）

ここのところ風邪気味で、ずっと引っかかっていた膿栓（別名・臭い玉）がやっとなれました。咽喉の奥がイガイガして何か臭くてイヤだったかったので、取れてすっきりさわやかです。確実ではありませんが取る方法を発明しました。確率は三十パーセントくらいです。今回も三回試みたあげくようやく除去できました。て、もうそれは偶然の範疇でしょう！

またいつか発表したいと思います。百回記念とかで……
お立ち寄りいただきましてありがとうございます。

公園へとたどり着いた礼也を待ち受けていたのは、楓の弟達の憎悪のまなざしだった。

「おい、約束どおり……」

「お姉ちゃんをいじめるな！」

「いじめるな！」

「へ？ 何言つてやがんだ。俺はこいつをだな……」

激しく睨みつける二人に、わけもわからず弁解をしなければならぬ礼也。

「嘘つけ。お姉ちゃんが泣くなんておかしい。おまえがいじめたからだ」

「……。だからだ！」

礼也が振り返る。

慌てて涙をぬぐう楓の姿が目に入った。

礼也の背中から降り、楓が弟達を叱りつける。

「こら、違う。この人はお姉ちゃんを助けてくれたの。謝りなさい」
楓に促され、二人が素直に謝った。

「ごめんなさい……」

「ごめーんなさい……」

「あのなあ、おまえら。助けてもらっというて、ごめんってのは変じやねえのか」子犬を楓の妹へ手渡し、あきれた素振りで横を向く。

「まあ、別にいいけどな」

弾かれたように楓が振り返った。

「あ、霧崎君」

「ん？」

「……。どうも、ありがとう……」今にも泣きそうな顔のまま微笑

顔を立て直す。「あの、お礼……」

「はん？」ものぐさな様子で礼也が片目をゆがめた。「んなの、こないだのメロンパンでチャラだって。またくれるってんならもうけどな」

「あ、……うん」

へっ、と礼也が鼻で笑う。それから背中を向け、片手を上げてみせた。

「じゃあな、イチゴ姫。んにゃ、桐嶋ツンケン、か。あゝばよ」
「……」

歩き出すその背中を淋しそうに見つめる楓。

目に涙を浮かべ見上げている弟達に気がつき、わなわなと唇を震わせた。

「お姉ちゃん」

「お姉ちゃん……」

堰を切ったように号泣し始める弟達。

二人を抱きしめ、楓も安堵の涙を滲ませた。

と、その時だった。

「！」

飛来する影が楓達目がけて襲いかかろうとするのに気づき、礼也が急激なターンと猛ダッシュを試みる。

三人を突き飛ばし、地べたに這いつくばる礼也。楓達を抱きしめたまま影の主を睨みつけた。

「何してやがんだ、てめえ！」

見上げれば、四人を庇うように空竜王が覆い被さっていた。

乗用車ほどもあるコンクリートの塊が空竜王のすぐそばで転がっている。楓達のいた場所に突き刺さる寸前で、夕季が間一髪滑り込んだのだ。

数百メートル先で海竜王とアスモデウスが向き合うのが見えた。青く切れ上がった両眼が四人を見下ろす。

楓達は怯えるように抱き合い、ただ凝視するだけだった。

空竜王のハッチが開き、蒼白になった夕季の顔がのぞいた。

「大丈夫、礼也！」

「大丈夫じゃねえ！」夕季を睨みつけ、礼也が凄まじい剣幕で噛みつく。「氣いつける！ボケッ！もう少しでぺちゃんこになるとこだったじゃねえか！」

「……ケガは？」

「ねえよ！」

「……」

「ああ！もういいから、行けって！」

「ごめん……」

「いいって言ってたんだろ！ウゼえぞ、てめえ！」

ハッチを閉じ、音もなく申し訳なさそうに空竜王が飛び立つ。

真顔で注目し続ける楓達にも目もくれず、礼也が携帯電話を取り出しホットラインを展開する。

「おい、桔平さん、陸リユウはどうなってんだ！」

『木場がすぐそばまで到着しているはずだ。近くに県道があるだろ。そこまで出てくれ』

「わかった」ぶすりと突き刺す。「おい、光輔達に言っとけって。もつと氣いつけてやれってよ」

『仕方ねえだろ。野郎が急に暴れ出したんだから』

「仕方ねえですむかって。こっちや死ぬとこだったっての！助けに来た奴に潰されるとこだったんだぞ！」

『助けてもらつといて、なんだその言い草は。あいつらだって必死にやってんだ。わかんだろ、それくらい。ぎゃあぎゃあ言ってねえで、てめえも早く合流しろ』

「わかったよ！んなろー！」

『なんだ、てめー、その……』

通話を打ち切り、礼也は楓達に振り返ることなく表の通りへと駆け出した。

痛む左足を引きずりながら楓がその後を追う。

そこで楓は見た。

大型トレーラーの上で上半身を起こした、人型のロボットを。兵士のような輩と二言、三言交わし、それに乗り込む礼也の姿を。そのロボットに楓は見覚えがあった。先に古閑夕季が乗り込んでいたものと同じくである。

テレビで巨大なモンスターと戦っていたロボット。確か、ドラグカイザーという名で報じられていた、コンピュータで制御され遠隔操作で動く米軍所属とされていた人型兵器である。

何らかの形でメガルが関与しているとは噂されていたが、無人でもなく、ましてやその操縦者が礼也や夕季だとは夢にも思わなかった。

ハッチが閉じ、咆哮を従えながら陸竜王が大地に立つ。その様子を楓は畏怖するように眺め続けるだけだった。

「住む世界が違いすぎる……」

「おそらく、フォラスだろう」

「フォラス？」静かに告げた風野を見据え、桔平が眉を寄せる。「それが、今発動しているプログラムの正体だと言つのですか」

問い返した桔平に重々しく頷き、風野は報告書を手渡ししながら先につないだ。

「極秘裏にプロジェクト・フォラスは進行している。これまでの一連の流れも、アスモデウスではなく、すべてフォラスが起こしていたような節さえある」

用語事典ほどもある分厚い報告書を手に取り、桔平は食い入るように消化していった。

「あさ……、進藤局長はそれを？」

風野が手を組んだまま、首を横へ振る。

「知らないはずだ」

桔平の胸中は複雑だった。表向きトップである局長のあさみにすら知らされていないプロジェクトとは、どれだけ極秘だと言つのだらうか。自分の考えすら及ばぬ、メガルの底と奥行の深さに戦慄せざるを得なかった。

「俺達の知っているメガルっていうのは、氷山の一角にすぎないってわけですね」

素直に心の内を晒す。

風野も同等のかまえてそれに対応した。

「実際のところ、君がどのレベルまでメガルの情報を把握しているのか、こちらでもはかりかねているのだがな」

皮肉には皮肉を。

だが、今の桔平にはそれを取り上げる余裕すらなかった。

「その情報を外部へ持ち出すことはかなわない。もし君にその気があるのならば、何日でもここで読みふけるがいいだろう」

「必要ないでしょう」報告書をパタンと閉じ、風野へ返す。「司令官も知らない情報を知ったところで無意味に混乱を招くだけです。必要なことは、すべてあなた達が執り行うはずだ。俺達の知らないところでこれまでどおり。ならば俺達もこれまでどおり、自分達が正しいと思ったことを続ければいい」

報告書を受け取り、風野が桔平を凝視する。

「その柔軟さこそが、我々に足りず、そして何より必要なものなのだろうな」

「行き当たりばったりなだけですよ」

「そうではない」ふいに口もとをゆるめ、表情を和らげた。「我々は書類の上でしか物事のアウトラインを描けない。一行文章がずれるだけで、どう対処したらいいのかもわからない。彼女が君を信頼する気持ちがよくわかる」

「……」無造作に報告書を放り投げた風野を眺め、桔平が認めたくないものを受け入れなければならない時の表情になった。「博士のおっしゃることが事実ならば、あのアスモデウスですら単なるテストだったと言っわけですか？」

風野が頷いた。

「人類の進化レベルをはかるためのな」桔平以上の熱いまなざしを向ける。「これまでの接触で彼らは、人類がプログラムを受け止めるべき対象だと認知したにすぎない。これから、本格的な攻撃が始まるはずだ」

「……。あさみにはそれを」

「言うてはいない」

「何故俺に？」

「……」

風野はその問いかけに答えようとはしなかった。それが逆に桔平にすべてを悟らせることとなる。

「……知っているようですね。すべて」

「君が自ら買って出たこともな」

風野の表情は変わらない。それをしごく当然のことであると受け止めているようだった。

「いつから」

「君の採用が正式に決定する半年ほど前からだ」

「どつりで。これで合点がいました」朗らかな口調とは対照的にまなざしに殺気を宿す。「何故」

桔平と同じ表情で風野が答える。

「最初はそのつもりだった。だが、獣は草むらに身を潜めている時の方が恐ろしい。相手によっては剥き出しの牙が目の前にあった方が安心できることもある。危険は承知の上だ」

「なるほど。追い出されずにいたわけではなく、むしろこちらが檻に閉じ込められていたというわけですか。息苦しかったのは堅苦しい制服のせいじゃなく、のどぐびに槍が突きつけられていたからだ」その目を見据えたまま、にやりとする。「怖い人だ」

「君もな」にやりと笑う。「まるで今始めて知ったというふうに聞こえる」

「白々しいのはお互い様でしょう」

「違うない」

睨み合う二つの激情により、空間の密度が増し、空気が研ぎ澄まされる。

不用意に吸い込めば全身を蝕む毒となる危険さを伴うほどに。

やがて対峙に疲れ果てたように背もたれに身を投げ出し、桔平は数時間ぶりの呼吸を再開するがごとくに大きく息を吸い込んでみせた。

「……いったい、あなたは、何を背負っているというのですか」

「それを知ったところで、君のメリットは何もない」

「わかっていますよ、そんなことは」

「私もだ。君と火刈の関係をこれ以上詮索するつもりは毛頭ない。

君は自分がすべきことをしろ。だが、後のことを頼みたい。進藤あさみのことも含めてな」

桔平がぼりぼりと頭をかく。己のかなわない相手に出会った時、無意識にそうしてしまうのだった。

「当然、彼が二つの顔を使い分けていることも、知っていますよね」「ああ」

「ならば何も隠すことはない」厳しい表情を向ける。それは風野を通して、他の何かを見据えているはずだった。「表の顔と合わせて三つ。或いはそれ以上の顔を、あの男は持っているのかもしれない」……彼の目的は、……いや、望みは何だ」

「わかりません」

「……」

「ただ、もし彼を理解しようという気持ちがあるのならば、彼からたどり着けるもつとも遠いものを思い描かなければならないのかもしれない」

風野が重々しく頷く。

「正義と平和、か。或いは……」

「……」

「君は……」

「はい」

「……いや、何でもない」

風野が口ごもる。それは桔平の前で初めて露呈した反応だった。

その心境を察するように、桔平が笑ってみせた。

「あなたと同じですよ」

「……」

「俺はあなたと同じです」

「……。そうか」

「はい」その目を見据えながらしつかりと頷く。「信じられないほどのスピードで状況が激しく変化し、内容も複雑に交錯し続けている。間隔も日増しに短くなりつつあります。まばたきする余裕すら

与えられず、常に形を変えながら遠ざかるその深い闇に対応していかなければ、到底真実へはたどりつけない」

「そしてそれが、君が彼の手持ちの捨て駒達と一線を画す理由でもある」

「……」

「人間が戦う理由は様々だが、その種類は概ね二つに大別できる。争いを求める者と、求めない者だ。君はどちらだ？」

「おかしいことを言いますね」

「？」

「俺達はそれを受け入れるしか選択の余地がないのに」

「……」 風野が笑う。「そのとおりだ」

それに応えるように桔平が重々しく頷いた。

「彼女にとって君と出会ったことが運命ならば、彼女が君と我々を引き合わせたことも運命なのだろうな」

「すべてが必然なんじゃないですか」

不可思議なものを眺めるように風野が眉を寄せる。

桔平はわずかにも臆することなく、あらかじめ用意されていた答えを淡々と発していった。

「こんなぶつそうな街なのに、人は減るどころかどんどん入ってくる。それだけのメリットがあるからです。こういった環境だと真ん中の連中が抜け、いい人間と悪い人間だけが自然と残っていく。そんな人間達を戦場で腐るほど見てきたが、良くも悪くも、生き死にの場面では真っ先に決断し、行動できる人間達です。彼らは勝手に引き合い、また俺達もそんな人間達を求めている」

空虚なまなざしを投げかけながら、桔平は静かに先につないでみせた。

「俺とあなたがこうして刃を向け合うために引き寄せられたように……」

「おい、桔平」

トリップしていた桔平の心を、木場が引き戻す。

「んあ？」

「おまえ……。……いや、何でもない」

何か言いたげな様子で木場が言葉を飲み込む。

桔平が見透かしたように口を開いた。

「何だよ、はつきり言えって」

「……」

「俺の正体が知りたいんだろ」

「！」

二人が向かい合ったまま、沈黙だけが流れていく。

それを破ったのは、やはり桔平の方だった。

「教えてやるよ。あのな……」

「桔平さん！」

朗らかな声に振り返る二人。

詰め所の入り口付近で雅が手を振っていた。その後方に夕季の姿が見てとれる。

「晩ご飯、食べに行きましょう。てか、おごってって、夕季が」

「みやちゃん！」

木場が桔平の様子をうかがう。

桔平の表情は先から変わらなかった。

いつもとは違う雰囲気は夕季が気づく。

それを知り、なおも攻め続けるのが雅だった。

「何の話してたの。真面目な話？」

「ん、ああ」

ばつが悪そうに桔平をちらちらと見る木場に、雅が追い討ちをかけた。

「駄目だよ、ケンカとかしてちゃ。メッ、だから」

「ん、ああ……」

「みやちゃん……」

「何の話してたのか、教えてやろうか？」

表情も変えずに桔平が切り出す。

その真剣な面持ちに、三人の視線は釘づけだった。

「俺が政府のエージェントで、ある重要人物を暗殺するためにメガルに派遣されたスパイだってことを説明してたんだ。な、木場」

「……」

どう対応すればいいのかわからない。

雅を除いては。

「またまたあ」面白そうに笑い、夕季へと振り返る。「桔平さんって、ホント、そういうマンガみたいな話するの、好きだよ。スパイとか、エージェントとか。ね、夕季。……エージェントってどういう意味だっけ？」

「……」

夕季は真剣なまなざしで桔平に注目し続けていた。

それに気づき、ようやく桔平の顔から笑みがこぼれた。

「バカ。んなわけねえだろ。何でもかんでもすぐ信じてんじゃねえ。ノリツッコミだ」

「……」ぴくりと眉をうごめかせる。「……。……バカ？……」

「わかった、わかった、にう麺おごってやるから怒んな」おもしろそうに笑う。「木場が」

「な！」

「にう麺って？」無邪気にアヒル口を向ける雅。

「ソウ麺を煮込んだ……」

「あたしババンビがいいな。ババンビ、ババンビ」

「……みやちゃん、許して」

「じゃ、にんにくらーめんチャーシュー激盛り」。木場さん、ごちそうさま」

「お、おお……」

「あ、しいちゃんも呼んでこようよ。夕季、メール打って」

「うん」

「電話したらどうだ？」

急に思い出したように雅が振り返る。

「あ、そう言えば、綾さんが駄目出ししてたよ、木場さんのこと」

「何！」

「何だかマジ怒りっぱかったけど、フォローしといた方がいいかも。ヤバイよ、ヤバイよ、嫌われちゃう」

「……」複雑そうな表情で木場が雅を見返した。「冗談だろ」

「もうプンスカプンでした」

「……。何も心当たりがないが……。理由は？」

「え〜とね……」

「うむ」

真剣なまなざしをぶつけ合う二人。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……。忘れてしまったのか？」

「うむ」

「……」

「……」

「……」

「あ、でも、大丈夫だよ」

「いや、大丈夫じゃないだろ……」

オレンジ色に波打つ海岸線の彼方へと桔平が視線を泳がせる。

その紅く染まった横顔を、夕季は眩しそうに目を細め眺めていた。

合唱コンクールまで残り一週間。

あれ以来、礼也もクラス練習には出席するようになっていた。ただし、出席のみだが。

「桐嶋さん」

休み時間に同級生に名前を呼ばれ、楓が振り返る。

実行委員を任された女子生徒が困ったような顔を向けていた。

「何」

「うん」 申し上げにくそうにそれを口にする。「霧崎君、練習に出てくれるのはいいんだけど……」

「うん」

「全然参加してくれてないんだよね。ずっとぶすつと椅子に座ったままだし。かえってさ、なんかやりにくくて……」

「……」

楓が顔を向ける。

礼也は自分の席に座り、眠そうにあくびを連発していた。

ツカツカと歩み寄る楓。しかしながらその足取りは重く、表情も気乗りしない様子だった。

「霧崎君……」

様子をうかがうように、おそろおそろ楓が口を開く。

すると面倒臭げに礼也がちらとそれを見やった。

あれ以来、二人は一言も言葉を交わしていなかった。

「合唱コンクールの練習……」

「あん？ 出てんじゃねえか、ちゃんとよ」

「……。そうじゃなくて。ちゃんと参加してほしいの」

そのすべてに以前のような覇気が見られない。まるで別人のよう

だった。

「邪魔しなきゃいいんだろ。高木の奴は本番だけ口パクしてくれりゃいいって言ってたぜ」不服そうにじろり。「だいたい参加する意味あんのか？」

「霧崎君」口もとを結ぶ。「ちゃんと参加して。お願いだから……」
「なんでそんなことくらいでマジになってんだって。わけわかんねえぞ」怪訝そうに眉をゆがめる礼也。「結局、俺なんざ、いねえ方がいいってことじゃねえのかよ」

何も言わず、楓がただ眉を寄せる。

唇を震わせ、今にも崩れ落ちそうなその様子に、礼也が根負けした。

「わかったって、やるよ、やる」不機嫌そうに立ち上がり、背中を向けた。「やりゃいいんだろ、やりゃよ。くしゃくしゃになっても知らねえぞ。ったくよ」

感心するクラスメート達。

「そのかわし、笑いやがったり、ふざけたマネした野郎はその場でぶっ殺すからな」

教室中が後悔の念につつまれた。

礼也がその場から立ち去ろうとする。

ほっとする周囲とは対照的に、楓の表情は淋しそうだった。

楓が礼也を避ける理由は気まずさからだけではない。

楓にはわかっていた。

その背中がもはや手の届かない場所にあることを……

*

一年生ながら生徒会の役員に当選し、楓は多忙な日々を過ごしていた。その日も急な用事に昼休みをほとんど費やし、ようやく遅い昼食にありつく。

「あれ？」

机の上に置いておいた楓のパンがなくなっていた。

友人が心配そうにたずねる。

「お弁当、どうしたの？」

「なくなってる。パン持ってきたのに……」

そこへ礼也がやって来た。

席にどっかりと座り、楓達をちらと見やる。それからこともなげに言い放った。

「わり、あんま腹減ってたんで食っちまった。勘弁しろ」

一瞬呆然となり、その慄然とした態度に怒りが込み上げる楓。キツと礼也を睨みつけた。

「何だよ。悪いって言ってるんだろ。ほらよ」

少しも悪びれた様子もなく千円札を突きつける礼也に対して、楓が無視を決め込む。

すると礼也は、ちつ、と舌打ちし、楓の机の上に札を叩きつけ、教室から出て行ってしまった。

「何あれ……」

「最悪……」

啞然とする友人達の声も耳に入らず、楓は礼也の去って行った後を目で追い続けていた。

その日もまた遅れて昼食をとる楓。

「しまった……」

「どうしたの、桐嶋さん」

友人たちの問いかけに苦笑いで応える。

「今日お弁当作ってこなかったの忘れてた」

「もう売店閉まってるんじゃない。あってもハズレパンぐらいしか

……」

「いいよ。一食くらい抜いても。ダイエット、ダイエット」

「あら、かわいそ。チヨコでよかったら食べる？」

「ありがとう」

その時、机に突っ伏して寝ていた礼也がむっくり起き上がり、不機嫌そうに立ち上がった。

騒がしさに機嫌を損ねたのだと思い、楓達が恐縮する。

しかし礼也は何も文句を言うことなく、楓の机に紙袋をポンと差し出したのだった。

「？」

不思議そうに見つめる楓から顔をそむけ、面倒くさそうに礼也が告げる。

「あまったからやるよ」そのまま教室から出て行こうとした。「うぶっ、もう食えね」

「……」

呆然と見守る楓達には目もくれず、礼也は出入り口の近くの同級生をじろりと睨みつけた。

「おい渡辺、食いすぎて気持ち悪いから帰るってそれらしくオッサンに言っとけ。しくじったら命はねえ」

「ええっ！」

やがて紙袋をさばくり、中身を取り出す。

メロンパンだった。

「……自由すぎだよね」

楓のそばで友人がぼそりとこぼす。

その声も耳に届かず、楓はいつまでも礼也の背中を追っていた。

*

切なそうに瞳を揺らす楓に、その背中が振り返ることはない。

それを楓は仕方がないことだと心に言い聞かせていた。

決してそれまでどおりに戻ったわけではなく、むしろより遠い存在となってしまうことも承知していた。

否、もとよりその背中は楓の手の届かない場所にあった。

すでに答えの出ている問いかけに目を伏せ、受け入れるしかない

その結論をただ先延ばしにしていただけなのだ。

伝えなければ失わなくてもすむことがある。

晒せば消えてしまうものもある。

真実を知り、己をさらけ出してしまった今、以前と同様に交わることはこの先二度とないだろう。

そして真つ直ぐに向かい合えば、今度こそ決定打を受け入れるしかないのだということも覚悟していた。

疲れ果てた心を氣遣おうとする、その優しさに触れてしまったため。

上辺だけの優しさが、ぬぐい去れない痛みでしかないと気づいてしまったため。

あれからいく度となく、交錯するいくつもの仮定を頭の中で繰り返す。

もし、モンスターが現れなければ。

もし、犬を飼っていないければ。

もし、弟達が逃げ遅れなければ。

もし、家が崩れなければ。

もし、礼也が来なければ。

そのすべてが偶然であると同時に、必然であつたと思ひ知らされる。

なるべくしてなつたこと。

その結末を知りながら、あえて望んだ選択なのだと。

たどりつく最後の『もし』は、『もし、二人が出会わなければ』、であるのだから……

「おい、てめえ。どういふつもりだ」ふいに足を止め、礼也がぶすりと突き刺す。「ふざけてやがんのか」

「……」期待の見られない表情を礼也へ向ける。これ以上言い争う気力もなかった。「……何」

「何、じゃねえだろ。すつとばけやがって。とことん俺をコケにしよつてハラか？」

「……」

「どうなってんだ、メロンパン。ずっと待ってんのによ」
胸を貫く楔。

次から次へとあふれ返る感情が楓から言葉を奪った。

「……あ、うん」今にも泣き出しそうな顔を隠すように楓がうつむく。「ごめん、霧崎君……」

すると間髪入れずに、背中を向けたまま礼也が片手を上げた。
「礼也でいいって」

ほっとしたように、嬉しそうに楓が微笑む。

それは誰も知らない本当の笑顔だった。

了

第十四話 『避けられぬプロセス』 13（後書き）

勝手にEDをイメージして女王の『1/2（はんぶん）』という曲で脳内補完していたのですが、女の子同士のことを綴ったものだというのに最後までまったく気がつきませんでした。好きだった女の子がオカマちゃんだったという類の勘違いでしょうか？

終わってみればやっぱり五割増し。打ち込みの弊害による冗長さは、もはや回避できそうにありません。

最終章のために続けているのに、このペースでは生きているうちに最終章までたどりつけるのかさえ怪しくなってきました。戦士達の戦いはこれからも続くエンドが走馬灯のように……

とにもかくにもおつき合いありがとうございました。

第十五話 『サイレント・カロール』 OP

その薄暗い部屋で一人、進藤あさみは膝の上に置いた両拳を見つめるように待ち続けていた。

客をもてなす部屋としてはかなり殺風景であり、鉄格子のかかった小窓と簡素な机、パイプ椅子は、警察署の取調室と酷似していた。底冷えする寒さに目を細め、小窓を見上げる。それも当然、窓の外に粉雪が舞い落ちるのを確認できた。

ドアノブのまわる音に気づき、あさみが顔を向ける。人影を認めるより前に、精一杯の笑顔を構築した。

まだあどけなさの残る少女の面影を多分に含んだその顔へ一瞥をくれた長身の男は、笑み一つ見せることなくあさみの前に腰を下ろす。

重々しい彼の雰囲気、あさみの笑顔が崩落しかけていた。

「私にお話したいことって、何でしょうか？」

不安げにあさみが眉を寄せる。

すると沈痛な面持ちを崩すことなくその男、火刈聖宜は、嘆きとも悲しみともとれる臍腑を苦しみとともに吐き出し始めた。

「真実を突きつけよう。君がそれを知りたくないのならば、耳を塞ぎ、目を閉じていればいい。もし君がその痛みに耐えられるのなら」

「は、い……」困ったような表情で火刈に注目する。彼の印象は初めて会った時から今に至るまで『吸血鬼』のままだった。

「非業の死を遂げた君の父親と兄弟、そして心労に焼かれ息絶えた母親の無念から目をそむけることができるのなら」

「！」乾いた笑顔が凍りつく。「それはいったいどういうことでしょう」

「単刀直入に言おう」その瞳の奥に空虚な悲しみをたたえ、あさみ

を見据える。「彼らは風野守人に殺された。莫大な利益を独り占めしようとする、ゆがんだ心の持ち主に」

「……」カッと目を見開き、絶句する。「それは……」

「事実だ。君を引き取ったのも罪悪感もあるだろうが、おそらくは真実の露呈を恐れるがために、常に身近に置いて監視しておきたかったためだろう」

互いの視線をぶつけ合う二人。が、そのまなざしにはどちらの輪郭も残らない。

氷壁も融けるほどの直視すらまるで心を揺らさず、あさみはただ火刈の激情を正面から受け止め続けていた。

やがて血を吐くような想いとともに、その一言を絞り出す。

「……何故それを私に」

その時、初めて火刈の顔に小さな変化が表れた。

「君のお父さんである進藤教授の生前、私は大変世話になった。教授の無念を思えば、心が張り裂けんばかりに痛む」神妙な様子であさみを見つめる。「君の手助けがしたい」

「手助け……」

「復讐のためのな」

「……」黙って口もとを結ぶあさみ。「もしそれを私が受け止めなければ、私もこの世に存在できなくなるのですね？」

悲しげに目を細め、火刈が首を振った。

「始末されるのは私の方だろう。それほどまでに彼の力は強大だ」

「何故そこまで……」

「復讐は決して美德ではない。すべてを捨て、投げ打ち、覚悟を決めた者だけが成し遂げられる愚かな行為だ。私はすでにすべてを切り捨ててきた」

「……。もし私があなたを信用しなければ」

「その時は私が破滅するだろう。その覚悟でこの場に臨んだ。強制はしない。だが答えはここで出せ。持ち帰る余裕はない」

あさみが顔を伏せた。握りしめた拳の端から血が滴り落ちる。

次にその顔を上げた時、それまでとは一変してしまったあさみの姿があった。

まるで振り落ちる雪の中へ笑顔を封じ込めたかのような、無表情な氷のまなざしが。

「私は何をすればよろしいのでしょうか」

火刈が笑いかける。

この世のすべての悲しみを哀れむがごとくに。

その日は夕季と忍の引越しの日だった。

メガルの宿舎を出て、アパートで二人きりで暮らし始めるために集合住宅の二階にあるその部屋は決して広くはなかったが、窓から街を見渡すことができる。遠くに海が見え、目を閉じれば潮の香りも感じ取ることができた。

十二月だというのに陽射しは穏やかで暖かい。

大きく伸びをして振り返った忍と、ダンボール箱を抱えた夕季がキッチンで鉢合わせになる。

「あ、ごめん、夕季」

夕季が嬉しそうに笑った。

「これ、ここでいいの？」

「あ、うん」忍も同じ顔で笑う。「それはあっちの部屋かな」

家具や家電などの大きな荷物の搬入はすでに終わっていたが、身の回りのこまごまとしたものは後からそれぞれが梱包し、メガルで借りたトラックに積み込んできたのだ。

「思ったより荷物あったね」箱を持ち上げ、忍が口を真一文字に結ぶ。「ほとんどあたしのだけだ」

「いい日でよかったね」

「まあね。日頃の行いかな」

「寒気団がきてるみたいだから、来週あたり雪が降るかもしれないって」

「こんなに暖かいのにねえ。今日にしといて正解だったね」
「ん」

その時、玄関のチャイムが鳴った。

夕季がドアを開ける。

そこにいたもっさりヘアーの少年は、楽しそうに笑いながら片手を上げてみせた。

「やほー、手伝いに来たよ」

「光輔……」

「何、何？」忍が歓喜の表情で出迎える。「嘘、手伝いに来てくれたの？ 悪いね光ちゃん」

「いや、困ってる時はお互い様だしさ。下の荷物、持ってくればいいの？」

「嬉しいこと言ってくれるじゃん。ね、後でごはん食べてきなよ」

「あ、うん、そんじゃ……」

玄関の前で夕季が立ちふさがる。口をへの字に結び、光輔を睨みつけた。

「え、と、何から手伝えば……」

「ごはんたかりに来たくせに」

「……」

「夕季！ なんてこと言うの。せつかく手伝いに来てくれたのに」忍にたしなめられても一歩も引くことのない夕季を、不本意そうに光輔が見つめる。

「……」

「……」

夕季と目を合わせたまま、光輔が無表情に呼び鈴を押した。
ピンポーン！

「おーい、沼やん」

訓練を終え、事務所へ向かう大沼透を桔平が呼び止めた。

大沼が振り返り、わずかに笑みをたたえたその顔で桔平を受け入れた。

「あ、柊さん」

すると桔平が苦虫を噛み潰したような顔になった。

「やめてくれよ、よそよそしい。同じ年じゃねえか。桔平君でいい

って」

「そういうわけにはいかないでしょう」

大沼が真っ直ぐに桔平を見据える。

静かなる男の圧倒的なオーラは、桔平と木場を除けばメック・トルーパーでも別格と言えた。

「あんたも変わってるよな。まともにやってりや今ごろ上級士官なのに。本来なら俺や木場の方が顎でこき使われてるところだぜ」

「そんなことは関係ないでしょう。ここではあなた達の方が上司だ」
「でもよ、あんたは防衛大出のエリートで俺らは兵卒スタートなんだぜ。本当なら逆の立場でもおかしくないところだ。副局長つつつても所詮はただの任命だしな」

「それもあなたの力だ。私にはそれを推挙してくれる知り合いも信用もない。それに優れた人材はどこへ追いやっても勝手に頭角を現してくるものです」

「あいな……」

それをしごく当然のようにとらえている大沼の思考に、桔平が閉口する。

「そうは言っても、結局はいいようにやられちまってるだけなんだけどな」

「そういつた輩に使われるような類の人間ではないでしょう。あなたも木場隊長も」

「……まあ、ね」バツが悪そうに笑う。誉められているのかけなされていいのか、正直よくわからない。「おお、そうだ、そうだ……」

桔平が用件を思い出す。

「沼やんに頼みがあったんだ」
「？」

一通りの作業を終え、忍が大きく息を吐き出す。あとは配置や細かい整理だけだった。

「やっぱり手が多いと助かるね」夕季の部屋であーでもない、こー

でもないと言い合う二人に振り返る。「そっちはどう?……」

「勝手に動かさないで!」

「いや、やっぱパソコンはこっちの方がいいしょ」

「ここでいいってば!」

「あれ、何、このマウスパッド。犬? かわいいーじゃん」

「勝手に触るな!」

「おまえ、ゲームとか持っていないの?」

「持っていない!」

「マンガは? なんか読むものとか」

「そんなの、……ハックチン!」

「何、今のクシャミ。なんかさ……」

「うるさい!」

仲がいいのか悪いのかわからない二人のやり取りを忍がおもしろそうに眺める。

「夕季、あたし、お昼のしたくしておくから、そのコンビニでジュース買ってきて」

振り返り、夕季が頷いた。

「うん」

「あ、俺も行く」

「……」

「……。何故そんな嫌そうな顔を……」

「なんで?」忍も不思議そうな顔を向ける。

への字口のまま、夕季が首を傾げた。

「……。特に意味はないけど」

「ふん……」光輔一人が腑に落ちない表情だった。

アパートから歩いて数分の場所にコンビニエンス・ストアがあった。

夕季が買い物カゴにペットボトルを何本か入れる。雑誌のコーナーでマンガを立ち読みしている光輔を横目で見やり、ふん、とため

息をもらした。

ふと顔を向けたガラスケースの前で夕季が目を見開いて硬直する。オマケ付きの缶コーヒーがラックに陳列してあった。円筒形の小さなプラスチックの中には、女子中高生に人気の少女マンガ、『エルサイズのバラ』のミニフィギュアが一体ずつ付属する。

それをギツと睨みつける夕季。

夕季がエルバラの愛読者であることは、忍も知らないはずだった。缶を手にとろうとし、直前で思いとどまる。

光輔の様子が気になった。

「……」

光輔の方をちらちらとうかがう夕季。

結局勇気が出ず、その足でレジへと向かった。それでも、清算後もまだエルバラが気になって仕方がなかった。

「光輔、帰るよ」

「ん、ああ」夕季にせかされ、光輔がようやく雑誌をラックへ戻した。「ちよっと待って」

飲料水のコーナーへ行き、レジへ向かう。外へ出てから、光輔が夕季に缶コーヒーを手渡した。

「はい」

「別に……！」気のないそぶりでコーヒーを受け取ろうとした夕季の目が点になった。

エルバラ・コーヒーだった。

カッと目を見開く夕季。

「おまえ、カフェオレならオツケーだろ？」光輔が笑う。オマケを確認するや、不機嫌そうに顔をゆがませた。「あれ、なんだこれ、エルバラじゃん。オンドレだって。いらねえ。夕季、やるよ」

夕季はじつと光輔を睨みつけていた。

その圧力に光輔が後退する。

「……。なんで睨んでんの」

「睨んでない」

「いらなら捨ててよ」

「……」

「……。……って俺が捨てればいいんだよね」

「！」夕季の眉がぴくりとうごめく。「いい。ここに入れておいて照れたように睨みつける夕季がレジ袋を広げ差し出した。」

「へ？」

「おごつてくれたから」

「ふん……」

竜王格納庫に隣接する三十畳ほどのミーティング・ルームで、光輔らを前に桔平が書類を読み上げる。その横には秘書兼事務雑用係の忍が並び、反対側には木場と大沼の姿があつた。

「……と、まあ、こんな感じで、これまでの反省を活かして、有事の際のおまえらへの接触方法の改善と、アクセスルート的大幅な見直しをおこなったというわけだ。んで、臨海道路や幹線道路へのルート開拓と、統括マッピングシステムの強化。これは市に特別予算をまわして先日完成させた。竜王は大型コンテナに常時収納をデフォルトすること、プログラム発動から一分以内の出動が可能となった。市や民間団体への協力申請もとれている。おまえらの位置さえわかれば、そこに一番早く到達できるであろうと予測されるところ。この人間がただちに外向いて、竜王の載ったトレーラーへと引き合わせてくれる寸法だ。ひらたく言うと市内のどこにいても五分以内に接触させちまおうってシステムだな。あくまでも理論値だが。ま、市内の端から端だと、お互いが時速百キロ以上で飛ばしてかなきゃならねえ。実際はかなりつらいだろうな。だから市外に出る時は必ず報告していくように。どこにいてもGPSでわかつちまうけどな。それと、人がごったがえしているようなところはなるべく避ける。その分接触がややこしくなる。これに関わって機動隊長としてここにいる沼やん……、大沼主任が抜擢された。メックとの兼務になつて大変だろうが頑張ってくれ」

「はい」

「緊急時には木場や、運転に定評のある俺も協力するからそのつもりで……、って、なんだ夕季、露骨にゲゲゲッて顔しやがって！」

「外で桔平さんに会いたくない」

「おい、おまえ、お父さんが聞いたら悲しくなるようなこと、しれつと言いついてんじゃねえぞ！ ネコ娘みてえなツラしてからに」

「ネコ娘じゃない」

「じゃ、何娘だつてんだ、おお！」

「知らない」

「知らない娘かつての？」

「バカなの？」

「いや、バカなのって、おまえ……」

「こら、夕季！」

忍にたしなめられ、夕季が困ったような顔を向けた。

「だつて……」

「だつてじゃない」

「……」

申し訳なさそうに桔平が口をはさむ。

「まあまあ、しの坊」

「ですが」

「いや、逆に俺がせつねえから」

「……すみません」

「いや、もっとせつねえから……」

「つたく、あの野郎はよお……」

光輔達と別れ、疲れ切った様子で桔平が悪態をつく。

「なんで、ああかわいげねえんだろうな」

並んで歩く木場が顔を向ける。

「夕季のことか」

「おお」首をコキコキ鳴らし、拳で己の肩を叩いた。「しの坊は素

直でいい子なのに、姉妹でなんであんなに違うんだ」

「二人とも根は真面目だからな。あれでも精一杯気を遣っているんだろう」

「どういう気の遣いようだったんだ。俺が優しいからってズケズケ失礼なことばっか言いやがって」

「いいだろう。心を開いている証拠だ。俺には結構よそよそしいぞ」
「つつたつてなあ」

「彼女に敬語でも使わせたいのか」

「……そういうわけじゃねえんだが」

「だったら少しくらい大目にみてやれ。やるべきことはしっかりこなしているのだからいいだろう」

「……。ま、カラに閉じこもって、黙りこくつちまうよりいいかもな。でもよ」両腕を真上に向け、大きく伸びをする。「あれじゃ、友達できねえぞ」

「……」

「同じくらいの奴らじゃ近寄れねえだろ。変なオーラ出してやがるから」

「光輔達がいるだろうが」

「あいつらは特別だ。家族みてえなもんだからな。友達とは違う」

「そつでもないだろ」

「んじゃ、おまえ、あいつがみっちゃんや光輔に悩みごととか相談すると思うか？」

「……」

「な？」

「……かもしれんな」

「縦や横のつながりはあっても、対等じゃねえんだ、あいつらは。本当に必要なのはバカなことでも何でも遠慮なく話せる相手だ。おまえみたいな明らかにレベルが劣る相手が好ましい」

「俺はかなり不愉快だぞ」

「気にすんな。むしろありがたがっけ」

「……………」

「あいつの場合、残念ながら寄って来るのはオッサン達ばかりだな。フケ顔だからオッサン受けすんだろうな。あの顔で女子高生ってな、詐欺みてえなもんだ」

「……………」木場が真顔で異議を唱える。「俺はそうは思わんぞ」

「嘘こけ、おまえも前にそう言ってたじゃねえか」

「……………」俺はそんなこと言っていないぞ」

額に汗を浮かべ、ちらちらと目配せする木場。

そんなことなどまるでおかまいなしに桔平はおもしろそうに続けた。

「忘れたとは言わせねえぞ。やだも、あたしの友達、こ汚いオッサンばっかり、てな。ぎやはははは！」

「……………」桔平……………」

「あん？」

木場が小さく顎をしゃくった方角へ顔を向ける桔平。

ほんの数メートル離れた場所で、夕季が表情もなく二人を凝視していた。

「……………」

何も言うことなく、ジロリ、と見据えたまま桔平の横をすり抜ける夕季。

「……………」なんだ、ちいみは……………」

「……………」

「……………」

「……………」

通り過ぎるまで一言すら発せず、夕季はずっと桔平の顔だけを見続けていた。

「……………」やだも……………」

第十五話 『サイレント・カロール』 2

周辺の高校に比べ山凌学園高校は比較的大人しいと言われていた。その中にも一握りのはた迷惑な輩が存在する。小さなピラミッドのほぼ頂点に位置するのが、この校舎裏でたむろする武闘派の三年生達だった。

男女合わせて十名近い困った集団の前で、数人の草食動物がうなだれている。

終始彼らを威圧しながら、その捕食者達はいびつな牙を剥いて悦に浸っていた。

「なんで約束守れねえの？」

猿山の一人がクイと顎をしゃくる。

すると迷える子羊達はぶるぶると震えながら己の保身だけに全霊をかたむけた。

「無理です。そんな大金、すぐには……」

「何言ってるの！」

「すみません」体をビクツとすくませ、無抵抗のサインを出す。

その様子をボス猿を始めとする山のファミリーがおもしろそうに眺めていた。

「んじゃあよ」ボス猿が貫禄と懐の深さを示しながら穏やかに告げる。「いつなら持ってこれんだ？」

「いつって……」

「いつだ！」

威を借る小猿が大声を張り上げる。一人一人を舐めるように眺め、殺し文句を口にした。

「だから言ってるじゃん。親とか先生に言いつけてもいいよって。そんな俺ら関係ねえし、だいたい警察に知り合いいっから、全部

もみ消しちゃうよってさ」

「……はい、すみません……」

「いや、すいませんはいんだよ。大事なのはいつならいいかってことでさ」ジロリと睨めつける。「いつよ？」

「てめえら、ちようどいいとこにいやがったな。おい、ハゲども」

嬉しそうなその口調に、小猿が反応し激高する。

「ああ！ 何だって。誰だ、わけわかんねえこと言つてやがるのは。言いがかりつけ……」目一杯の凄みを込めて振り返った彼の表情は、その声の主を確認した途端に友好的な笑顔に変わった。「……ないでほしいな、霧崎君」

メロンパンを口にくわえ、表情もなく礼也が猿山を見渡す。その風貌からは金狼を連想させた。

ボス猿を始め、その仲間達はすでにお行儀のいいキュートな集団に変貌していた。

「なんだ？ 俺が言いがかりつけたってか？」

「いや、いや……」小猿が両手を前に押し出し、服従のポーズをとる。「そんな、俺の勘違いだって。悪かったよ」

ジロツと睨みつける礼也。

小猿が喋ることをやめ、泣きそうな顔でうつむいた。

「おい」

礼也に呼ばれ、ボス猿が弾かれたように顔を向ける。

「こないだのゾクじゃものたんねえぞ。まとめてぶん殴つてやつたらすぐ土下座してきやがった。拍子抜けもいとこだって。フロツクで一発当てやがった奴は、泣いて謝つても許さねえで半殺しにしてやったけどよ。どうせなら、もっとカッチリした奴ら連れてこいや」

「……」驚愕の表情でゴクリと唾を飲み込む。「……いやあ、おかげで助かったよ。あいつらには俺達もさんざん酷い目にあわされていたから。うちの学校にもっと強いのがいるって霧崎君の話したら、そんなの信じられるかって言い出してさ。な？」

「……お、おお」

「おおお……」

「嘘こけ！ 奴ら、後輩のてめえらに泣きつかれて仕方なくやったんですうゝ、とか泣きながら言ってやがったぞ。あいつらにはまいっちんぐですうゝ、とかゆって、ぺぺつと唾吐いてよ」

「……それはまいっちんぐですね」

「まいっちんぐだな……」

「ふざけてやがんのか、てめえら」

「あ、いや、その……」

「ああ！」

ビクツと顔をそむけるボス猿。

手下達は何もできずにその光景を直立したまま受け止めるだけだった。

「まあ、んなことはどうでもいいって。ところでてめえら、体なまってるんじゃねえ？ 欲求不満なんだろ。いじめとかしちゃうあたり丸見えだつてよ」

「いや、まあ……」

「ちょうどいいわ、相手してやるって。とにかく今むしゃくしゃしてつから、誰か訳もなくぶん殴りたかったとこだしょ」

「何！」礼也に直視され、小猿の血の気が引いていく。「……が気にさわっちゃったのかなあ、困ったな……」

慌てて羊達へ振り返った。

「俺らここで一緒にお話してただけだよな！ あと、デーエスとかよ！ 仲間だもんな！ 別にひでえこととかしてねえし！」礼也の顔をうかがいながら懸命に説得を続ける。「ほら、おまえら違うって言えってば！ 仲間、仲間、仲間だもんな！」

「わかった、もういいって。俺も弱いモンいじめとか大好きだしよ。それにいじめってよ、むしろいじめられる方に問題があるとかって主義だしな」

「わかってくれた？ よかったあ……」

「わかるって。腐ったもん同士、仲良くやらなきゃな」うんうんと頷く。「とりあえずおまえらのツラが気に入らねえからって理由で、理不尽に何発かず殴ることにするわ。カジュアル感覚でサクッとよ。まず、てめえ、ロクオン！」

「ちよっ、ちよっ！」

救いを求め振り返った猿山は完全武装解除を続けていた。

礼也がにやりと笑う。

「いくって！」

「わ、わ、わ！」

楓は体育館の入り口で先代生徒会長の衣浦卓也に呼び止められ、足止めをくらっていた。

上辺だけの笑顔で応え、おざなりな言葉をつむぐ。

「最近どうだい」

涼しげに笑うミスター山凌学園に真っ直ぐなまなざしを向ける楓。

「はい、私は、……！」

衣浦の眼前で、みるみる楓の顔つきが変わっていった。

そのつり上がった両眼に、思わず衣浦の心が退く。

「……。桐、嶋君……」

「ちよっと、何やってるの！」

「……」

ミスター山凌を押し分け、反対側の校舎を楓が睨みつける。あ然となる衣浦に悪びれた様子もなく楓が告げた。

「先輩、ごめんなさい」

「……ああ……」

それから振り返ることもなく楓は校舎目がけて走り出した。

「……」

それは今にも礼也が小猿を殴りつけようとする、その時だった。
「霧崎君！」

ゲップが出そうな顔で嘆息する礼也。

がっしりつかんだ小猿の肩を押し出し、顔を向けると、楓が厳しい表情で凝視していた。

「霧崎君、授業始まるよ」

ほっと胸を撫で下ろす猿の軍団。

平静を装い、礼也が何こともなかったように再び小猿目がけて振りかぶった。

「ちよっと待ってるって、こいつら一発ずつしばいたら行くからよ」
青ざめる小猿。仲間からの援護射撃は望めそうになかった。

「駄目！ 早く来なさいってば」

楓が礼也の肩に手をかける。

辟易しながら振り返る礼也。大きなため息を吐き出した。

「……。ちっ……」

小猿を突き飛ばし、整列する軍団を睨みつける。

「おい」

「はい……」

「今回はミス・イチゴ姫に免じて見逃してやる。だが今度気に入らねえツラしてやがったら、俺好みのイケメンになるまで整形してやるからな。覚えとけ、てめえら」

「はーい」

「それから、明日までに全員坊ちゃん狩りにしてこい。女はおかっぱな」

「はーい……」

「あとな、いじめはかつこ悪いとか言ってた奴がむしろかつこ悪かったとか言う奴は許さねえぞ。ゾノをバカにする奴は俺がとことんいじめてやる」

「……」

「馬鹿なことやってないで、もう行くよ」

「バカなことってどういう意味だ。てめーまでゾノのことを……」
「はいはい」

プレッシャーから解放され、女猿の一人が不本意そうに口を開く。
「なんで言われっぱなしなの？」

ボス猿が顎の下の汗を拭い取りながらそれに答えた。

「マッケンジーさんのチーム、あいつ一人に潰されたんだ」

小猿達が戦慄する。

「精鋭ぞろいの中嶋ケンジさん達がか！」

「そうだ。マッケンジーさん、不意打ちで霧崎に一発入れて、逆鱗に触れて半殺しの目にあっただけ。泣いて土下座したのに許してもらえなかったみたいだ」

「あのマッケンジーさんが泣いて土下座したのか！」

「そうだ」

「あの理不尽な嫌がらせで俺達を泣かせてきた、泣かしのマッケンジーさんがか！」

「そうだ」

「あの飼っていた犬が死んでも涙を見せなかったという氷のマッケンジーがか」

「そうだ。犬が死んだ時は陰でこっそり泣いたらしいがな。そのマッケンジーが泣いて頼んで一旦は許したのに、後から鼻血が出てるのに気づいて、またキレたらしい。奴は本物のワルだ」

「なんてひどい野郎だ！」

「以来引きこもっちゃって、家で韓流ドラマばかり観てるって噂だ。止まらない涙がドラマのせいかどうかは親にもわからないらしい」

「マジか……」

「他のチームにも声かけたが、あいつがメガルの関係者だって知ったらみんなびびっちゃってよ。ヤクザの知り合いいる先輩もメガルには絶対手を出すなって」

「……」女猿が思い出したように顔を向ける。「でもさ、警察とかに知り合いいるでしょ。だったらさ……」

「ツレのツレのツレの兄貴が警察官の採用試験に受かったってただ」

「……」女猿が子羊達を見下したように眺める。「どうすんの、こいつら」

「もういいって」

「ええ！」

「……もういいって」礼也の方をちらと見やり、小猿が泣きそうな顔で引き継いだ。「まだこつち見てるし、あの人……」

「さて、と……」ボス猿が仲間達を見渡す。「床屋行くか……」

「おお……」

「……」ポケットを探り、ボス猿が振り返る。「誰か金余分に持つてねえか？」

「ねえよ」

「俺もねえ」

「……」

「あの……」

草食動物がおそろおそろ申し出た。

「貸しましょうか？」

「……」じろりと睨めつける。

「……」

「すまん」

「あ、はい……」

「明日返す」

「あ、はい……」

楓に手を引かれ、ちらちらと礼也が振り返る。

「何やってるの、ほんとにもう」あきれはてたまなざしを投げかける楓。「いい加減にしてよ、礼也君」

「いや、だってよ」

「イチゴ姫とか言わないでって言ったのに」

プンスカと機嫌の悪そうな楓に、礼也が取り繕うように笑った。
「おお、わりい、わりい。はずみだって、許せ」

「もうミスでもないし」

「お、そういや、なんでこないだ出なかったんだ？ あの一年の女にや負けてねえだろ？」

「そういう問題じゃないの。去年だって本当は嫌だったけど、生徒会の主催だからって、その時生徒会長やってた先輩に頼まれて無理やり出させられただけ。実際四人しかエントリーしなかったし。いい恥かいたただだよ」

その会話を遠くから聞き取り、呆然と立ちつくす当事者の衣浦。

ミス山凌学園コンテストは、当時の生徒会が文化祭の目玉として新規に立ち上げた企画だった。発案者で生徒会長の衣浦が参加者不足を懸念して、当時書記だった楓を無理やり登録させたのである。予想どおりろくな対抗馬もおらず、楓は圧倒的な得票数で優勝した。礼也がからかうように続ける。

「爆票で優勝だったて話じゃねえか」

「相手がたいしたことなかったから」

「んじゃ、おまえはたいしたことあったんだな」

「……」むぐ、と口をつぐむ楓。顔も向けずにぶすりと突き刺した。

「もう何も言わない」

「ははっ」礼也がおもしろそうに笑う。その取り合わせの意味が理解できず、ぼうつと二人を眺めている衣浦の存在がカンにさわった。「てめ、何見てやがんだ！」

ビクツと後退る衣浦に気づき、楓が慌てて礼也を止めに入った。

「こら！」

「……こらって、おまえ、しの坊じゃあるまいし」

「しのぼう？」

衣浦を気につけ、楓が口もとを結ぶ。

「駄目！ 礼、……霧崎君」にこりと衣浦に笑いかけた。「すみません、先輩」

「……いやいや」

「てめ、何、ぶってやがんだ」

礼也の袖を引き、小声で楓が告げる。

「いい加減にしてよ。お世話になってる先輩なんだから」ちらと衣浦を見てぶすり。「この人は私達とは住む世界が違うの」

すると礼也の頭頂がプンスカと噴火し始めた。

「はあ！ そりゃ、どこの世界の住人だってんだ！ 俺らとこいつでどれだけ違うって！ どんだけレベルがたけー生き物なんだ、こいつは！ レベルキュウジユウキュウか！」

「そういう意味じゃないけど……」

「んじゃ、どういう意味だってんだ！ 酔拳でもつかえんのか、このノツペリ野郎は！」

「こら！」

「こらって……」

「……」居場所もタイミングもなく、ただただ立ちつくすのみの衣浦。

「てめーよ」礼也のマシガンが弾ける。「有名なパテシエが作ったケーキが、コンビニのケーキよかウメエって誰が決めた！ スイツを値段で差別してんじゃねえぞ！ てめえは値段食ってやがんのか！ むしろコンビニのが安いくせに上等なゾーンだろ！ いや、決して安かねえ！ たけえぞ、結構！ んなひよった色分けなんぞ、クソくらえだ！」

「……」困ったように楓がその顔を眺めた。「コンビニのメロンパンとフレールのメロンパンも同じなの？」

「……そいつは別モンだな」

楓があきれ顔で眉を寄せた。

機嫌が直り、礼也が楓に顔を向ける。

「んだ？ 用でもあつたのか？」

「もうすんだからいい」

沈黙の衣浦を置き去りにし、楓がじろりと礼也を見やる。

「誰かれかまわずからむのやめなさいよ」

「うつせえな、おまえは。ツンケンツンケンしやがって」

「……」ぶいとへそを曲げる。

すぐさま、やや焦り気味の礼也が取り繕った。

「あ、おまえ、新作食った？ 極上メロンパン」

「食べてない」

「今度買ってやってやるって。おばちゃんとも結構仲良くなったしよ。ビップ扱いだか、たまに一個オマケしてくれんだぜ」

「……」

「おし。帰り、いつとくか？」

「いいけど」

「ラッキ！ 今日、金持ってねえんだって」

「……何それ」

「いや、だからよ、今日んところはおまえのおごりだな」

「話が見えてきません」

「いいじゃねえか。また今度おごってやるからよ。キャッチ・アンド・リリースだ」

「……ギブ・アンド・テーク？」

「それだ！ たぶん」衣浦を睨みつけ、その視線が空の彼方へあることを確認する。「ああ、そういや、おまえんとこのチビどもにクリスマス・プレゼントねだらちまったんだけど、何がいいんだ？ 不機嫌そうに振り返る楓。

「いいよ。本気にしないで」

「でもよ」

「調子にのるからいいの」

「ま、おまえがそう言うんならいいけどな」

対等の立場で世間話をしながら消えて行く二人の影。

衣浦は畏怖するような表情でその場に佇むだけだった。

第十五話 『サイレント・カロール』 2（後書き）

今さらですが、某ヌードルのヘンテコな替え歌が名曲を台なしにしている気がして、なんだか腹立たしいです。別に元歌の方々のファンというわけではないのですが、まるで出来の悪い二次創作をドヤ顔で見せられているようで。ファンの人達はあのセンスで納得しているのでしょうか。

つい最近、立派な大人の職場で「ーんち、ぶーらぶーら、ソーセージ」という懐かしいフレーズを耳にして心を癒されたセンスの持ち主がそれらしくゆってみます。

あ、どうでもいいですね。どうもすみませんでした……

メガル本館大会議室にいつもの顔ぶれが揃っていた。

しかしそこにあさみの姿はなく、代わりに珍しい人物が出席していた。

「副局長。そちらの方は？」

桔平の横で居心地悪そうに着座する忍を見やり、一人がたずねる。
「気にするな」

「いや、しかしこの会議は役席者だけの……」

「副局長補佐見習いだ。副司令補助見習いでもある」

きつぱりと言い放つ桔平の隣で忍の全身が凍りついた。

「いつ決まったのですか？」

「さっきだ。職務超多忙な俺が必要に迫られて任命した。あんたらじゃ頼りないんでな。正式な書類もある」

「そんなにお若いのに大丈夫なのですか」

「まだ二十歳そこそこだが、能力はそこら辺の女子大生やOLなんかじゃ太刀打ちできねえよ。ぶっちゃけ、あんたらより数段上だ。」

俺が保証する」

はた迷惑な保証に忍が今にも泣きそうな顔を伏せる。

「腕っ節も気性も俺と遜色ない。酒癖と男の趣味も最悪だ。なめてかかったら痛い目みるぞ。何せアスモデウスに一人でケンカ売った小娘だからな。俺ですら宴会の席ではそばに近づけねえ。小娘だが背はでつけえ。軽く七十はある」

「七十はありません」

「七十はねえ。ナメた真似しやがったらバズーカぶっぱなされるぞ。ケチヨンケチヨンにされる覚悟があるなら食いついてみな。したら俺もあんたら認めてやるよ」

「……」げっそりやつれ果てる幹部連。恨めしそうに忍に注目していた。

「そうげんなりしなくてもいい。俺がもう一人増えたと思えばいいだけだ。かわいく言えばプチ柊だ。イベント的には柊祭りといった感じだろうな」

「祭り……」

げんなりとする。誰よりも忍が。

「そついや俺も局長も任命だけの名誉職だから役席者ってわけじゃねえんだが、ここから出て行った方がいいのか？」

「いえ、そんな……」屁理屈と言いがかりをただひたすら耐えしのかのみのエリートサラリーマン達。

「この件について不満がある人間は今すぐ申し出てくれ。今言わなかったら、今後一切受けつけねえからな」ふいに大城を見やる。「大城室長。あんた俺に言いたいことがあるんじゃないのか？」

「いえ、特には……」

借りてきた猫のように大人しく鎮座する某元切れたナイフの大城に、桔平が意味ありげな笑みを投げかける。

「言ってくれよ。俺が間違っただけをしているのなら遠慮しないでな。俺だって間違いをそのまま放っておきたくねえ」

「……いえ、特には」

「そうか、ならいいがな……」淡々と続ける桔平。その着地点は互いに予想済みだった。「あんた、今つき合ってる連中とすぐに手を切った方がいいぜ」

「……は？」

「奴ら言ってたぜ。メガルを敵に回すくらいなら、あんたスマキにして差し出すってよ。何だかまつつあおな顔してたぜ」

「……はあ……」

塩をかけられたナメクジのごとく、しゅんと縮こまる大城室長。

一同はその空間に何一つ音色を奏でることができなかった。

恐縮する忍をちらりと見て、桔平がおもしろそうに続ける。

「安心しろよ。俺が権限を与えているだけだから、立場はどうであれ階級はあんたらよりずっと下だ。ぺこぺこする必要はねえ。ただの補助だ、こき使ってやってくれ。ビシバシな」

忍が立ち上がり、一同へ向けて深々と頭を垂れる。

「よろしくお願いしま……」

「俺にはそんな恐ろしいことできねえけどなー!」

「……」苦笑いで窓の外へ目を向ければ、曇天の空が暗い影を落とす始めている。「す……」

「……だつてさ。気を遣ってくれるのは嬉しいんだけど、男の趣味が悪いってのはひどいと思わない?」

その日の夜、食事の支度をしながら忍がグチをこぼす。

夕季が真顔で頷いた。

「わかる気がする」

「何!」

「あたしもその方がいいと思う。あの人、事務仕事苦手みたいでひーひー言ってたし、お姉ちゃんもそういう仕事の方が実力を発揮できるはずだから。あたし達もいろいろなところへ話がしやすくなるし」

「でもあたし高卒だよ。まわりは全部一流大学出ばかりなのにさ。そこまでの権限は正直必要ないかなって思うよ」

「そんなの関係ないよ。大沼さんだって防衛大出てるって聞いたし」「あの人はまた変わってるからね。もともとエスの時だって、大沼さんが辞退したから暫定的に副隊長やってただけだしね。それもあの人のツルの一声で決まったようなものだしさ。あたしなんかじゃ分不相応だったんだって」

「そんなことないと思うけど」

「でもさ、居心地も悪くてね。それまで顔も向けないで、あれやれ、これやれって命令してた人達が、急にぺこしだすんだもの。何かしようとする、いえ、これは私がしますから、ってさ。あたし

なんかに敬語使わなくてもいいのに。桔平さんが副局長辞めたら、絶対報復人事あるよ」

「でも桔平さんの進言が通ったってことは、進藤さんも了承したってことだよな。それって、お姉ちゃんに認められたってことなんじゃないの？」

「そんなに単純なことじゃないと思うよ。ま、みんな桔平さんのこと、かなり怖がってるみたいだから、よっぽどのがない限り、あの人の関係者には手を出さないだろうけど。桔平さんが推薦してくれたのがわかった途端に、あたしへの態度が変わったからね」

「……。関わりたくないんだね、きつと」

「まあね。それもよし悪しなんだけどね。会議の時だって萎縮しちゃって誰も発言しないから、あれじゃ会議にならないよ。ある意味、ワンマンみたいなものだもの。あの人がわかってるのかな」

「司令室にずっといるの？」

「ううん。用がある時だけ呼ぶから、普段はエスの事務所にいればいいって」

「ふうん……」

ピンポン

「あ、誰か来た」

「木場さん達かな。ちょっと顔出すようなこと言っていたから」

「……」口をへの字に曲げる。「桔平も？」

「……あんだねえ」

「ごはん狙いだ」

「……」

「すぐに作りますから、テレビでも観ながら待っていてください」

「お、おお……」

客間に居心地悪そうに座り、木場が恐縮してみせる。

「てめえが入ってくるとどこでも犬小屋みてえになっちゃうな」

まるで気を遣う様子もなく、桔平があぐらをかきながら大声を張

り上げた。

「こら、静かにしろ。近所迷惑だ」

「近所迷惑はてめえのガタイだ。今度来る時までになのでけえ頭取りはずしてこい」

「できるか！」

「できる！ 岩石オープン、分割、リボルビング、ピーッ！」

「……」あえて捨て置く。「すまん、忍。メシ時に押しかけてしまつて」

「いえ、もともとそのつもりでしたから。あ、その辺のもの、何でも召し上がっててください」

「いやいやいや、すいませんねえ、奥さん」

かしきの茶菓子に手を伸ばす桔平。缶コーヒーを運んできた夕季と目が合った。

「……」

「また辛らつな言葉を浴びせて俺の心を砕こうとする気か？ くるならこい。バカとかアホとかたいていシミュレーションはしてきたからな、ちよつとやさつとじゃビクともしねえぞ」

「……」

「……」

「おたんこなす」

「……」

「こら、夕季！」

「いやいや、別にいいんだけどな。何だか懐かしい響きだし」夕季から缶コーヒーを受け取る。少しだけ淋しそうに目を伏せた。「小学校の給食の時に牛乳こぼして、隣の席の女の子に言われたの思い出して、ちよつとだけ心が折れそうになつたが」

「折れればよかったのに」

「そのとおりだな」

「何！」ギツと木場を睨みつける。「おい、木場、勝手にチャンネルかえんな！ 今、『一人でおつかい行けるもん』、観てたのに！」

「俺は大家族スペシャルの方が……」

「やかましい！」怒りのまなざしで夕季へ振り返った。「おい、夕季、おまえどっちがいいと思う。ズバリ」

「ニースでも観れば」

「あ、そういう目で見るか……」

「俺もか……」

「……」

缶コーヒーを一口飲み、木場が眉間に皺を寄せる。

「これは甘いな」

その様子をじっと見つめる夕季。

「バカだな、この甘さがいいんじゃないか」桔平がグビグビと流し込む。途中で何かに気づいた。「ん？ これって、今、オマケ付いてなかったか？ エルバラの奴」

「……。付いてなかった」顎を引き、夕季が小声で答える。

「そうか。コンビニによって違うんだな」特に気にもとめない様子で残りを飲み干す。「そういや、あったかいやつに付いてるオマケって熱で変なふうになったりとかしねえのかな。どうでもいいけどよ」

夕季が後ろめたそうな顔で桔平を見続けた。

「なんだ？ 変な顔して」

「別に。もう一本飲む？」

「お、サービスいいじゃねえか。めずらしく」

「……」

「夕季」

忍に呼ばれ、夕季がキッチンへ向かう。

「何、このオマケ。捨てちゃってもいいの？」

「駄目！」口を真一文字に結んだ。

「え？」

「……。もったいないから……」

光輔は一年A組の教室へ足を踏み入れた。選抜クラスとあって、体育コースの自分達の教室とはかなり異なる雰囲気が漂っていた。

光輔の顔を確認し、一人の男子生徒が手を上げる。

「おい、ホム、こつち」

「お、栗原」

二人はともにサッカー部員だった。

「なんか、このクラスって居心地悪くね？」

「そうか？」栗原と呼ばれた少年がサラサラの髪を揺らしながら答える。「ま、体育コースのおまえらから見たら、大人しく見えるんだろうな」

「なんか、早弁とかしてねえし、おかしいよ」

「いや、一時限目からじゃないっしょ」

「いや、体育コースにとつての早弁はおまえらの予習にヒツテキするんだぜ」

「マジか？」

「おお、だいたい八十パーセントくらいのヒツテキ率だな」

「おまえ、匹敵の意味わかってる？」

「まあ、かく言う俺は予習派なんだけどさ」

「嘘だな」

「うん、嘘」

楽しそうに笑い合う。頭の程度はかなりの隔たりがあるものの、二人はよく気が合った。

「あれ？」

「ん？」

光輔が振り向いた方角に栗原も顔を向ける。

窓際の席に夕季の姿があった。頬杖をつき、つまらなそうに窓の外を眺めている。周囲に溶け込むことなく、また周囲もそれに触れようとはしなかった。

「古閑さんと知り合いだっけ？」

光輔が頷く。

「あいつって、いつもあんな感じなの？」

「ん？」

「いや、友達いないのは知ってたけどさ」

「ああ」言葉を選びながら栗原が続けた。「古閑さん、おっかないんだよな。今はちよつとよくなったけど、少し前までいつもピリピリしててさ。何か言うтусぐ怒りそうな感じだし」

「ま、当たってるけど……」

夕季が小さく息を吐き出す。

それが光輔にはしごくつまらなそうに見えた。

「うぜえぞ、雅」

礼也の声がし、三年生の校舎の近くで楓が足を止める。

礼也と雅の姿があった。楽しそうに談笑する様子を遠巻きに眺める。

「じゃあ、約束したからね。破っちゃだめだよ」

にゅつと笑い、雅が小指を立てる。

「ガラじゃねえって、クリスマス会なんてよ」

「駄目。せつかくしいちゃん企画してくれたんだから。綾さんも礼也君に会いたがつてたよ」

「綾さんが？」

「あたしや夕季、綾さんとよくチャットで話すの。礼也君もパソコン覚えればいいのにつて言つてた」

「無理だつて、そんなの」

「あたしもそう思う」

礼也を眺め、意地悪そうに雅が笑った。

去って行く礼也を雅が手を振って見送る。

礼也の姿が完全に見えなくなる頃を見はからって、楓が静かに間合いを詰めた。

「あの……」

「ん？」口もとをつり上げながら雅が振り返る。「あたし？」

「はい」楓が神妙な仕草で頷く。一呼吸おき、やや上ずり気味に切り出した。「先輩、こだま先生の妹さんですよ」

「ええ」

真剣な表情でそれを口にした楓を、雅が戸惑うように見つめ返す。「私、先生とお話したことがあるんです。教育実習の時に少しだけでしたけれど、とてもいい人だなんて思いました」

嘘だった。実習中、陵太郎と楓との接点はない。

それが本当かどうかはわからなかったが、それでも雅は嬉しそうに笑ってみせた。

「そう。ありがとう。お兄ちゃんも喜ぶよ。ロリコンだから」

「ロリ……」

得体の知れない後ろめたさのため、楓は雅を直視できなかった。顔を伏せた楓を気遣うように雅が優しい声をかける。

「礼也君のお友達だよ」

楓の心臓がドクツと音を立てた。

楓が顔を上げ雅と再び向き合おうとする。その屈託のない笑顔が眩しくて、涙腺が緩みそうだった。

「礼也君と仲良くしてあげてね。礼也君、あんなふうだから誤解されちゃうけど、本当はすごくさびしんぼなんだよ」

「樹神先輩……」

「ん？ 呼びにくいでしょ」光輔や礼也に向けるものと同じ笑顔で雅が楓をつつみ込んだ。「みやびちゃんでもいいよ」

「……それは、ちよつと」

「そっか」涼しげに空を見上げる。「じゃ、こだまっちで」

「それも、ちよつと……」

「おいっす」

聞き覚えのある声に夕季が振り返る。わざとらしい笑顔をふりまく光輔を表情もなく見つめ返した。

「……」

「元気？」

「……」 何のリアクションもとらずに再び窓の外へと視線を投げかけた。

「待て待て、無視すんなって」

ふん、と憤りのような鼻息をもらし、夕季が不機嫌そうな顔を向ける。

「何か用？」

「数1の教科書貸して」

「……」 ぶすつとしたまま机の中を探り、無愛想に突き出す。「次の休み時間に必ず持ってきて」

言うが早いか、すぐさま顔をそむける。

口もとを引きつらせながら、光輔が仕切り直した。

「いやいや、あのさ。できたらちよつと教えてほしいんだけど……」
その突き刺すような視線に光輔が凍りつく。

昼食後の長い休憩時間を生徒達はそれぞれの目的ですごしていた。友人達と談笑する者、携帯電話とにらめっこする者、携帯ゲームをする者、次の授業の予習をする者、机に突っ伏して眠る者。だが、何もせずに退屈な時がすぎるのをひたすら待つのは夕季くらいのものだった。

わずかに身をのけぞらせ、自嘲気味に光輔が続ける。

「次の時間、俺、当たるんだよ。すっこり忘れててさ。ここ教えて、お願い」

「知らない。自分のせいでしょ」 ぷいと横を向く。「数学、苦手だから」

「いや、そんな冷たいこと言わんと。毎ロールおごるからさ。あ、

また力仕事とかあつたら、手伝いに行くし。いつでも呼んでよ。困ったことあつたらすぐ行くから」

「……」あきれたように嘆息する。渋々シャープ・ペンシルを取り出した。「どこ」

「やった、ラッキー！」

ジロリと夕季。

「……まったくどうしようもないな。俺って奴は……」

表情一つ変えず、書き写すように夕季が問題を解き始める。思考時間とのタイムラグは、ほぼゼロだった。

「すげえな、おまえ……」

二人の様子をちらちらとうかがいながら、何やらこそこそ話している男子生徒達に光輔が気がつく。顔を向けるとその閉鎖的文科系の二人はこそこそと顔をそむけた。

「？」

「おう、ホム」

栗原の声が聞こえ、光輔が振り返る。

「何やってんだ、おまえ」

「おお、夕季に宿題教えてもらってたんだよ」
夕季が手を止める。

「なんだよ、ホム。俺が教えてやったのに」
「マジか」

「おう。こんなの簡単。ボールと数学は友達だ！」
夕季の机から教科書を取り上げる。

「あ、それ、夕季の」

「あ、悪い」栗原が自分のノートを持ち出し、ペンを走らせた。「はい、一個！」

「さすが選抜クラス」

「まかせろ！」

「……」夕季がゆっくりと窓の外へと顔を向けた。

「んじゃ、こっちは？」

「これはな、こうなつてこうなつて……」手を休め、首を傾げた。
「ん？ ……あ、こーだ」

「すげー」感動しながらノートを手に取り、光輔が夕季のものと見比べる。「あれ、なんか夕季のと答え違うぞ」

「何！」

「どっちがあつてんだ？」

「間違つてないと思うんだけどな。……たぶん」

「でも夕季が間違つてるとも思えないし」

「……」ひたたくるように夕季のノートを手にした。「ちよつと見せろ」

無表情のまま、夕季がそろりと顔を向ける。

栗原の目が点になっていた。

「……。こつちであつて……。んじゃあさ、これは？」夕季の顔をちらちら見ながら、自分のカバンから問題集を取り出した。「これ参考書見ても、よく意味がわからなかったんだけど」

困ったように夕季が光輔の方を見やる。しかし何のリアクションもなく、無言のまま栗原の指した問題を夕季が解いてみせた。

「すげえ……」食い入るように解答を凝視し、栗原の体が硬直する。

「この問題、何年前のセンター試験で正解率一桁だった難問だぜ」

「そりゃそうだろ」何故か、えへん、と光輔が胸を張った。「なんたつてこいつ、センター試験で満点取つたつて都市伝説持つてる奴だからな。ま、数学は苦手な方らしいですが」

「光輔！」

夕季の叫びに教室中が注目する。

いたたまれず、夕季が泣きそうな顔でうつむいた。

そんなことなどおかまいなしで、閉塞状態に陥った栗原の敗北感が加速する。

「こんなひねくれた問題、解けるわけないよ……」

夕季がくすぐったそうに眉間をひくつかせる。

そして光輔がさらに自慢げに胸を張り上げた。

「まあ、こいつもひねくれ者だからね」

夕季がギツと光輔を睨みつけた。

「あ、睨まれた……」

「……」

「あれ？ 否定しないね」

「……」 ぷいと顔をそむける。

「……まあ、睨まれてもいたしかたないかも……」

そんな二人のやりとりなど耳に入らず、栗原はひたすら敗北感に打ちひしがれていた。

「夕季」

その顔を確認するまでもなく、夕季が辟易した表情になる。

「ねえ、ちょぴつと教えてほしいんだけど。今度はなんと英語」

「たまには自分でやったら」

振り返りもせず、ぶすりと告げた。

すると情けなさを倍加させ、光輔は卑屈な笑みを浮かべて見せた。
「いや、俺も一応チャレンジはしてみたんだけどさ、まったく歯が立たないっていうか、攻略不可能っていうか」

「……」

「これなんて訳すの？ アイアムアボーイ？……」

「栗原君に聞けばいいじゃない」

「いや、あいつさ、こないだおまえに負けてから自信喪失して教えてくれないんだって。何かスネちゃってさ。古閑さんに聞けばいいじゃん、ってさ」

「……」

「雅に聞くと、つわりがひどくて無理、とかって逃げられるし。つわりって何だっけ？ 茂樹とか祐作とかだと俺と頭、どっこいだし。頼む、夕季、もうおまえしか頼る奴いないんだって。最後の手段なんだって。ハルマゲドンだよ」

「……」

泣々振り返る夕季。光輔に仏頂面を向けた時、他のクラスメートの顔が飛び込んできた。

二人の女生徒が控えめな笑顔で夕季を見つめていた。

「古閑さん、よかったらさっきの授業のどこ教えてもらえない。先生が言ってた意味がよくわからなくて」

何気なく視線を向ける夕季。

「あ、忙しかったらいいけど……」

不機嫌そうな自分に睨まれたと感じ、一步退いた彼女達を見て、夕季が申し訳なさそうにうつむいた。

そのすき間を埋めるごとく、光輔が自然に飛び込んでくる。

「あ、こっちはすぐ終わるから、ちいよいつと待ってて」

じろりと睨みつける夕季にも、光輔はまるで動じない。

「遠慮しないでこいつに何でも聞いてよ。どうせヒマ人なんだし。

お礼は苺ロール一本でいいですから」

「苺ロール？」

「光輔！」

にこにこ愛想を振りまきながら、光輔が女生徒達の教科書を手に取る。

「何、これ。なんで数学の問題でこんなややこしい文章とか使うの。うちのクラスの奴だと、この漢字から読めないけどさ。英語で訳してもらった日本語の意味がわかんない時もあるもんなあ。やっぱ選抜クラスは違うよな」

「何組なの？」女生徒の一人が楽しそうに問いかける。

すると光輔も楽しそうに笑った。「G」

「体育コース？」

「うん。週に十二時間体育あるんだぜ」

「ええ！　すごいね」

「いや、俺から見たらこっちのクラスの方が断然すごいんだけど……」

光輔達が他愛もない会話を交わすうちに、夕季がまたたく間に問題を解いてみせる。

別の女生徒が目丸くした。

「うわっ、すごい。どうしてそんなに簡単にできちゃうの？　って、先生、説明ヘタすぎ」

「すごいね。なんでそんなに頭いいの。って、先生、明らかに間違

えてるよね」

「すごいな、マジで。って、性格はちょっとアレだけさ」

「……」夕季が光輔をジロリと見やる。

「あゝれ……」

その様子を静観していた別の男子生徒が、思いつめた表情でそろりと参入してきた。

「あの、ごめん。ここ、見てくれないかな」

「……」

「とりあえずできたんだけど、意識って苦手で、なんだか間違ってるような気がして。……駄目？」

「別に、いいけど……」

さらに何人かが集まり出していた。

その光景をちらちらと盗み見している輩がいた。以前光輔と夕季を眺め、ここそこと陰口をたたいていた閉鎖的な二人だった。光輔が目を向けるとさっと顔をそむける。何とはなしに、羨ましそうにも見えた。

勉強会の中心にいる夕季へちらと目を向け、光輔が呆然となる。

「あれ、俺のは？」

「知らない」

「ええ、マジで。アレじゃんか、アレ。ひどいじゃんか」

「ずっずっしい」

「そんな、ごむたいな……」

冷たく言い放つ夕季に、泣きそうな顔の光輔がすがりつく。

すると最初に夕季に質問を持ちかけた女生徒が、楽しそうに笑顔を向けてきた。

「あたしが教えてあげようか？ 古閑さんにやってもらった方がい

いかもしれないけど」

「マジ？ やたっ！」

「どれ？」

「これ」

「ええとこれはね、私は一人の少年ですか？　いいえ違います、あなたは二人の少女です。……なんじゃこりゃ」

「おおおっ！」

夕季が複雑そうな表情で目を伏せた。

女生徒がふいに手を止める。

「ん？　どしたの？」

「なんだか、古閑さんの前だとやりにくいなあって」

「そんなことないって」光輔が、えへん、と胸を張る。「こいつさ、勉強は所詮こんな程度でアレなんだけど、実は暴力の方がハンパなくアレで、ケンカとかでも礼也と互角に……」

「光輔！」咄嗟に立ち上がり、思わず丸めたノートで光輔のボサボサモツサリヘアを弾き飛ばす。それからすぐに我に返り、机と向かい合った。

静まり返る室内。

明らかに教室の空気が先までとは入れかわっていた。

点になった大量の視線が集中する不毛地帯で、泣きそうな顔の夕季が唇を震わせる。その表情から読み取れる心境は、これですべて終わった、だった。

水をうつたような静けさの中、光輔が額に手を当てながら片膝をついた。

「あばお……」

下校時間になり、昇降口で夕季が戸惑いにつつまれる。同級生達が声をかけてきたからだった。

「古閑さん、さよなら」

「あ、うん……」笑顔は出ないまでも、精一杯の好意的な口調を心かける。「さよなら……」

それを別段おかしいと思うこともなく、彼女達は去って行ってしまった。

複雑な心境のまま、一人その場に取り残される夕季。

こんなふうに通級生から声をかけられたのは初めてだった。
そこへ滑るように光輔が現れた。

「夕季、一緒に帰る。今日部活ないんだよ」

「……」

「あれ？ 何、その顔」

「別に……。普通だけど……」

「普通って、いつもそんなだっけ」

「……。どういうこと」

「犬のうんこ踏んだみたいな顔してるけど」

「……」 夕季が考えにふける。

「あれ？ 睨まれない！」

「……」

「あ、やっぱり睨まれた……」

「穂村君、またね」

夕季のクラスの女子生徒に声をかけられ、嬉しそうに光輔が応答した。

「あ、うん」

「今度試合観にいくから」

「あ、マジで？ レギュラーになったら言うから」 ぼつと眺めている夕季に気がつく。「どうしたの？ 犬のうんこ……」

「もういい！」

学校からの帰り道を並んで歩く二人。

ほとんどが光輔のトークショーだった。夕季からの相づちが返らなくても、そのペースは変わらない。

「よかったよな。前より学校に近くなって。俺んちからも近いし、これから一緒に帰れるな。コンビニに近いのも何気にポイント高いよな」

「光輔」

「ん？」

ふいに夕季が顔を向けた。思いつめたようにそれを口にする。

「どうしてうちのクラスに来るの」

「なんで？ 栗原に会いに来てるだけだけど」質問の意図がわからず、夕季を見返す。「あとおまえのクラスって何気に女子が多いしさ。あ、別におまえに会いに来てるわけじゃないよ」

「……」

「迷惑だった？ 宿題とか。まさか……」困ったように見つめる夕季と目が合った。「やきもち……、じゃないよな？」

「なんで！」

「いや、何となく……」

「……」

「……そんなわけないか」

「……」光輔から視線をはずし、夕季が情けなさそうに言葉をつなぐ。「あたしと一緒にいると変な目で見られるよ」

「なんだよ、変な目って。全然気になんないし。おまえや礼也に睨まれる方がよっぽどプレッシャーだよ」

じろりと光輔を見やる夕季。

しかし光輔はそれをものともせず続けた。

「ほら、そうやってすぐ睨む。その方がよっぽど変な目だってこと」夕季が反省したような顔になる。

「そりやおまえが変なのは確定だけどさ」

一瞬キツとなり、すぐに気づいて夕季は睨むのをやめた。

「おまえさ、学校いてもツマンなくない？」

「……」光輔の何気ない問いかけに、ぶすつと夕季。「おもしろいわけないじゃない。学校なんて」

「そうか？ 俺、結構楽しいけどな。おまえくらい何でもできたら、もっと楽しいと思うんだけど」

「……。どうして寄ってくるの」

「え……」体をのけぞらせ愕然となる。うっん、と考え込んだ。「どうしてだろ？」

「……」

「俺達つき合ってたたりするっけ？」

「そんなわけないじゃない！」

「だったら友達だからでいいじゃん」

むぐ、と口をつぐむ夕季。怒ったように背中を向けて歩き出した。
「あ、待って」光輔が焦って追いかける。「そんな変な意味じゃないって。てか、変なこと言ってるよな？　だな。そんなに怒らなくたって……」

「怒ってない！」

「じゃ、照れなくたって……」

「……照れて……」

「なんだ、照れてたんだ。ははは……」気がついた。「ええ！　おまえが！」

「いい加減にしないと怒るよ」

「いやいや、悪かった、悪かった。今のは俺の方がアイムソーリーだな。これ言っと、桔平さんや雅、必ずヒゲソーリーって言うんだよな」

「……」

「あれ、ツツコミなし……」

光輔がモチベーションを立て直す。

「あ、そういや、クリスマス大会のことだけど」

「……クリスマス大会？」

「俺もなんか買ってた方がいい？」

「いいよ、別に」

「でも、ただでお呼ばれってのも気がひけるしさ」

「早く帰ってくればいい」

「またそういうこと言う」

「桔平や礼也も連れて帰って。三十分くらいで」

「三十分！　短か！　……桔平って、おまえ……」何とか気を取り直して続ける。「でも、もうすぐ冬休みだし楽しみだな。毎日意味もなく遊びに行ってもいい？」

「駄目」

「いや、ごはん食べに行くだけだから」

「来るな！」

「じゃ、雪が降った時とか……」

「子供なの！」

意味のないやりとりを交わしながら二人が街へと消えて行く。

その様子を物陰から淋しそうに眺める影があった。

篠原みずきだった。

ふと誰かに見られているような気がして、みずきがキョロキョロ見回す。しかしそこには誰の姿もなかった。

ふう、とため息をつき、歩き出すみずき。

そこへ怪しげな笑い声が被さってきた。

「ふっふっふ」

ビクツとなつて振り返ると、邪悪な笑みを浮かべながらみずきを見つめる雅がいた。

「光ちゃんのお友達の人だよね？」

「はい……」戸惑うように雅を見つめ返す。「……樹神、先輩？」

「そういうのいいよ」アヒル口をつり上げ、にんまりと笑う。「みやびちゃんできていいって」

「それ、無理です」

「そう……」雅が淋しそうに目線を伏せた。「じゃ、こだまっちでよろびく……」

「あの」雅の声を遮るみずき。

「何？」

「あ、うん……」もじもじとスカートに手をかけ、沈んだ声を押し出した。「穂村君って、古閑さんのことが好きなのかなって」

「昔はね」

「え？」

淡々と発する雅にみずきが顔を向ける。ぽかんと口を開けたまま、見開いた両目が釘づけとなった。

そんな様子に気づいてか否か、雅は相変わらずの口調と笑顔で続けた。

「今はどうかだけど、昔はね、あの二人結構仲良かったんだよ。夕ちゃん、光ちゃん、だったしね」

「ゆうちゃん……」

「ちっちゃい頃、光ちゃんが他の子にいじめられると、夕季がよく助けてあげてたの。それで光ちゃん、夕季にいつもべったりでね。でも夕季はああいう感じだから、そういうの結構ウザったみたいで、だんだんケンカしてるみたいになってきちゃたのかな。光ちゃんのお姉さんがいなくなってから、そういうのもあまりなくなっちゃったけど」昔を思い返すように空を見上げる。「光ちゃんさ、夕季のことが好きだったんだよ。たぶんだけど」

「……」

みずきをちらと見て、取り繕うようにフォローする。

「あ、昔の話ね。今は違うと思うけど。見てるとお互い気を遣い合っちゃってるところもあるしね。苦手みたいだね、普通に話すのが」

「……」

「好きなんだ？」

「！」

意地悪な不意打ちにみずきの心がかき乱される。

「そんな！ あたし！ そんな！」

「丸見えだよ。全開で」

見透かしたようなその表情に、みずきが観念する。

「……先輩って、いじわるですよ」

「ええっ！」ショックを隠せない様子で雅がカツと目を見開いた。

「どうしてわかったのかしら！」

「ふうん……」

しょんぼりと塞ぎ込むみずき。ツィテールが力なく垂れ下がっていた。

それを好ましげに眺め、雅がちよこんと首を傾げた。

「光ちゃんも鈍感だからねえ」

「……。あの、言わないでください！ 絶対！」

「言わないって」

「ほっ……」

「そのかわり、いじわるみやびちゃんって呼んでね」

「……それ、無理です」

「あそ……」

ふいに、みずきの背中に手を当てる雅。ぐいぐいと力を込めて押し始めた。

「光ちゃんに気持ち伝わるように、あたしのありあまるパワーを分けてあげるよ」

「は、あ……」

「いじわるパワーだけどね」

「ええええ！」

「えっと、名前何だっけ？」

「篠原みずきです」

「承知した！ えい、えい！ みずきちゃんの想い、伝われ、伝わりまくれ！ 伝わりまくりまくりすてい！」

「先輩……」

「そっれいっ！ らあああゝ！」

「……」

「あれ？ オダムドーかってツツコミは？」

「知らないス……」

笑顔であり、また真顔でそれ続ける雅を、みずきは困ったように眺めるだけだった。

「えい、えい！ オトコなんてシャボン玉！ ついでにいじわるになれ！」

「ええええ……」

「らあああゝ！」

第十五話 『サイレント・カロール』 5（後書き）

サードヒロイン（？）、実に一年ぶりの登場となります。主役口ボも一年放置……

街はクリスマス一色だった。

イルミネーション、ディスプレイ、クリスマス・ソング、サンタクロース、子供達のはしゃぐ声、笑顔。

それらは一年のうちで、もっとも街を暖かく浮き上がらせる。

夕季と忍は明日のクリスマス会のための買い物に、近隣のスーパーへと出向いていた。

イベントブースはクリスマスにちなんだ催し物で賑わい、タイムサービスの重なりもあってか食料品売り場は大盛況だった。

飲料水のコーナーで忍が足を止める。

「……お酒、飲みたいよね」

夕季がそろりと顔を向ける。桔平のことを言っているのだと理解した。

「やめとけば。飲むのあの人だけだし。また騒ぐと面倒だし」

「でもせっかく来てくれるのにね……」

「……。じゃ、一本だけ買ったら？」

すぐるようなまなざしで忍が夕季を見つめる。

いわく、犬の何やらを踏んだような、だった。

「飲みたいの？ お姉ちゃん」

「……うん」

「……」

悲しげな瞳の忍を、夕季が真顔で見つめ返した。

「……じゃ、買えば」

「……じゃ、買おうかな」ほっとした表情で六本入りの缶酎ハイのパックを三つカゴに放り込んだ。「重っ！」

「……」

「あ、ほら、あたしってそんな酔っても変わらないっていうか、顔に出ないっていうか……」

「一度に飲んじゃ駄目だよ」

「……あい」

「しいちゃん、お菓子、こんな感じでいい？」

スナック菓子を大量に抱え、光輔が歩み寄る。

咄嗟に表情を切りかえ、忍が振り返った。

「あ、うん。バツチリじゃない」

「光輔、これ持って」

「あ、ああ」夕季が差し出したカゴを受け取る光輔。「重っ！」

「ごめんね、光ちゃん」

「いや、別にいいけど。なんでこんなにお酒買ったの？ 飲むの桔平さんだけでしょ」

「あ、うん……」

バツが悪そうに忍が笑う。

すると夕季が光輔を睨みつけた。

「つべこべ言うな」

「いや、なんで怒られてんのか、わけがわかんないんだけど……」
カゴの中身と夕季を交互に見比べた。「んじゃ、俺も飲んでいい？」

「駄目」

「クリスマスなのに」

「関係ない」

「マジメ、おまえ」

「もう宿題教えない」

「それはもうスイマセンでした！」

「あれ？」

忍の声に二人が振り返る。

「あれ、紀さんじゃない？」

惣菜のコーナーに南沢の姿があった。隣にはベビーカーを押す若い女性が見てとれる。

幸せそうに買い物をする一家のテリトリーに介入すべく、光輔が派手に手を振った。

「南沢さん！」

場内に響き渡るほどのオーバーキルな呼びかけに、空間にいるほとんどの視線が注目し、夕季と忍が恥ずかしそうに顔をそむけた。

「お！」

光輔達に気づき、南沢一家が引き寄せられるようにやって来る。

「なんだよ、めずらしいな」

「あ、はい。明日のクリスマス大会の買い出し」

「クリスマス大会？ 健全だな、おまえ達」

「ええ。しいちゃんからシモネタ禁止令が出ていますから」

「なるほど」

夕季をちらと見やり、南沢が奥方に合図する。それから嬉しそうに笑った。

「ほら、幸子。これが夕季」

途端に彼女の顔が明るく弾ける。

「ああ、この子が夕季ちゃん！」

「……」

「旦那から話は聞いてるよお。ほんと、迷惑ばかりかけちゃってごめんねえ」

「あ、と、いえ……」

「ほんと、ありがとうねえ。こうして一家三人でいられるのもあなたののおかげだもんね。感謝してます」

「そんな……」正面から直球勝負の幸子に対し、夕季がぐいぐい押し込まれていく。「……あの、シュークリーム、ありがとうございますました」

「ああ、いい、いい、あんなの。また買ってくからね」

「あ、……はい」

赤ん坊を抱き上げながら、南沢がおもしろそうに笑った。

「こっちがお姉さんの忍」

「ああ！　あなたが忍ちゃん！」

「あ、はあ……」

「聞いてる、聞いてる、旦那から。ほんと背が高いねえ。七十は楽勝だよ」

「いえ、七十はないです……」

「七十はないんだあ！」

「は、は……」

訳もなくテンションが加速していく南沢幸子、一児の母。

「なんだかモデルさんみたいだよ。服とか困るんじゃないの？」

「いえ、それほど……」

「足長そうだしさ、Gパンなんて切ったことないでしょ？　いいよねえ。あたしなんか身長ないし、地味な顔だから髪染めても全然目立たないし、うらやましいよね。ちよつとしゃべないでいるだけで、黙ってれば案外静かな人なんですわねえ、つてよく言われるんだよ。印象薄いから仕方ないんだろうけどさ、遠まわしに暗い人って言われてるみたいで傷つくつちゅうねん」

「……もつと自信を持たれても全然さしつかえないと思いますよ」

「でもいいよね。それだけ肩幅あったら、男の人の服とかも着れそうだし。きつと似合うよ、ガッチリしてるから。パットいらないでしょ？」

「……それが悩みなんすけど」

「そうだ。柊さんに聞いたんだけど、最近、キャラ崩壊しまくってんだってねえ。いろいろ迷走してんだね」

「何のことですか……」

連続コンボに、あつと言う間に瀬戸際まで追いやられる忍。

それでも幸子の猛進は容赦なかった。

「酔っ払うとスイッチ入って別人になるんだってね」

「いえ、それはないと思います。お酒、結構強い方なので、飲んでもほとんど顔に出ないと思います」

「じゃ、シラフで木場さんの頭とかペシペシ叩けちゃうんだ？　そ

れもすごいね」

「……。へえええー！」

「あつははは！　へえええー、だって！」

「こらこら、幸子……」

南沢の助け舟を素で迎え撃つ妻、幸子。

「だって、忍ちゃん、こないだの忘年会でもべろんべろんに酔っ払って、思いつきりひっくり返ってたってコマちゃんが言ってたよ。一瞬見えてたって」

忍、硬直。

「あれ、知らなかった？」

「ええ、まあ、初耳って言うか……」自嘲気味に遠くを見つめた。

「なあんだ。それで朝、首が痛かったんだ、すごく。そうですか。見えてたんですか。はははは……」

「綺麗にスッテーンっていったって。まるでバナナコントみたいだったってさ」

「……。何だか気持ちが悪くなって……」

「何？　二日酔い？　あつははは！」

「あつははは……」

「ほら、夕季」

南沢が赤ん坊を差し出す。

「抱いてみるか？」

「……。でも……」

「大丈夫だって」

腫れ物を触るように、おっかなびっくり赤ん坊を抱く夕季。懷に収まり、むにやむにやと口を動かす仕草を見て、夕季も柔和な顔になった。

まだ一歳頃か。眠そうな様子だったが、ぐずりはしなかった。

「ほうら恵、パパの命の恩人だぞ」

夕季がその小さな顔を見つめる。最初は戸惑っていたが、落ち着いた表情で赤ん坊を眺める夕季の顔は、穏やかで優しげだった。

「……かわいい」

「だろ」

南沢にまなざしを向ける夕季。得意そうな顔が飛び込んできた。
「うちの自慢の娘だから」

「……」赤ん坊が夕季の服を握りしめる。すると薄笑みを浮かべ、
何とも言えない表情になった。

「あ、笑ってる」

光輔に指摘され、夕季が顔を赤らめる。すかさず、キツ、と睨み
つけた。

「俺、赤ちゃんのこと言っただけど……」

「……」

「ま、いいじゃん。別に」赤ん坊の顔を覗き込む光輔。「おまえ、
犬コロとか赤ん坊とか触るの好きだもんな。アバババア」

「そういう言い方やめて……」

「よし、俺も」

光輔が抱こうと手を伸ばした途端に、赤ん坊がぐずり始めた。

「ややややや！ ちょっと、待って」焦って光輔が手を引く。恨め
しそうに夕季を眺めた。「おかしいな……」

「何が言いたいのか」

「何がって……」

「ははは」南沢が楽しそうに笑った。「こいつ、男は駄目なんだ。
おまえのせいじゃないよ、光輔」

「はあ……」

「ああ、あなたが光輔君！」

忍を完膚なきまでに叩きのめし、続けて幸子が光輔に狙いを定め
た。

「聞ってる、聞ってる。やっぱわかるんだね、子供にも」

「何が？」

「何がってか！」

「何がって、か？……」

「柊さんと雅ちゃんがさ」

「ああ、だいたいわかったす……」

光輔が首を差し出す。

勢いわずかにも衰えず、ケラケラと幸子が笑った。

「あたしのこと、サツティって呼んでね」

「さつてい……」

「サツチーじゃないわよ。間違えたらあかんでえ。あはははは！」

「はあ……」

「わあ、恵ちゃん、かわいい」

幸子から解放された忍へ赤ん坊を差し出す夕季。

「お姉ちゃんも抱く？」

「え、あ、うん、うん」嬉しそうに赤ん坊を受け取ると、にまにまとしまりのない笑顔を向けた。「かわいいねえ」

「うん……」

夕季もそれに穏やかな笑みで応えた。

かたわらでは光輔と幸子のやり取りが続く。ようやく光輔がイーブンに持ち込み始めていた。

「姉さん女房すか」

「わかる？」

「なんとなく」

「そういうフェロモン出てる？」

「フェロモンっていうか、オーラみたいな……」

「おんなじ、おんなじ。あたしの親友の弟なの、旦那」

「へええ」

「小学校の時から知ってんだけどね。いつもお姉ちゃんの後ろでもじもじしてて。お姉ちゃあん、さつちゃあん、つて。お坊ちゃんでさあ、いつもぴちぴちの半ズボン履いててね、よく横からさ……」

「こらこら、幸子さん……」

南沢が顔を引きつらせて二人を眺めていた。

「いっけね、シモネタ禁止だっけ？ 忍ちゃん」

「シモネタだつたんですね……」

「あつははは！」

「あつははは……」

光輔が赤ん坊と幸子を交互に見比べた。

「この子も今にあんなふうになっちゃうんすかね」

「光輔！」

たしなめる夕季の声を尻目に、南沢が不機嫌そうに眉間に皺を寄せる。

「たぶんな……」

「かわいかったね、恵ちゃん」

買い物帰りの道すがらの車中、忍がしまりのない顔で振り返る。
後席で荷物を抱えながら夕季が頷いた。

「お姉ちゃん、前」

「あ、うん。あたしも赤ちゃん欲しくなっちゃったな」

「誰の」

「え！」

ギョツとなつて振り向く忍の横で、光輔の顔面が蒼白に染まった。

「ちよつ、しいちゃん、前、前！」

「わ、わ、ちよつと！」赤信号が目に入り、必死の形相でハンドルにしがみついた。

「ちよつと！」

「……」

何とか停止線の手前で踏み止まり、恨めしそうに夕季を振り返る忍。

すると、夕季がすつと視線をそらした。

「……。あたし変なこと言つてないよね……」

「……さすが新車」

「……ありがと、光ちゃん」

「……」

辺りはすっかり暗くなり、街中がきらびやかなライトに彩られる。
冬の空は澄み渡り、星座の位置取りまでがはっきりと浮かび上がっていた。

信号が変わり、忍がコンパクトカーを慎重に発進させる。気を取り直して光輔の方へと目をやった。

「光ちゃん、もう帰る?」

「ん? んん」

「よかつたらごはん食べてけば。後で送ってってあげるから」

「あ、でも悪いし」

「いいよ、気にしなくても。ガツツリつき合わせちゃったしね。もう八時過ぎちゃったし、今から何かするのも面倒くさいでしょ。食べてきなよ。そんなたいしたもんないけどね」

「あ、でもさ……」

「遠慮しなくてもいいよ。家族みたいなものだもんね。みんなで食べた方がおいしいし。ね、夕季」

「……」

「あ、はは……」

「なんだったら泊まってってもいいよ。どうせまた明日来るんだし。外寒いしね。学校、終わったんでしょ? あたしは仕事に行くけど、夕季と二人で支度しといてくれればいいから」

「あ、ううん……」ちらちらと後ろを振り返る。「うう、ん……」

「何? どうかした?」忍もそれを目で追う。「夕季、寒いのか? 変な顔して」

「別に……」夕季が口をへの字に折り曲げる。「……何も言っただいから。まだ……」

「?」腑に落ちない様子で忍が首を傾げた。「でもなんかさ、犬の……」

「お姉ちゃんまで!」

「……」不思議そうな顔を夕季へ向ける。「甘えたような顔してさ」

「……。それならいい……」

「?」

「はははは……」

一夜明けたその日の朝、日本中が白一色へと変貌していた。

日本全土を席卷した前代未聞の大雪。それも一晩中降り続いたわ

けでもなく、誰もが知らぬ間に一メートル近くもの積雪が地表を覆っていたのである。

「夕季、これって……」窓を開け、忍が上ずった声を絞り出す。「一時間前に見た時は何もなかったのに……」

時計の針は午前六時十分を指し示していた。十二月下旬の六時台前半はまだ暗く、闇の中、そこに雪だけが存在していた。

「夕季、テレビつけて」

「うん」

夕季がりモコンに手を伸ばす。だが何度チャンネルボタンを切りかえても、何も動かない黒い画面が静かに広がるだけだった。

「どこも駄目みたい。天候不順だと映らないのかな？」

「かもしれないね」

「ワンセグも駄目」

「ラジオも駄目だね……」

やがてテレビの主電源がプツリと切れる。同時に照明の光が落ちていった。

二人が窓の外へと目をやる。

街中から光が消えていた。光だけでなく、動くもの、物音、すべてが静粛の薄闇に閉ざされる。

未曾有の大停電は、やがて開けかかる薄陽の光をともない、凹凸すら判別できないほどの白銀の世界を音もなく映し出していった。

「ケイタイも通じない。これじゃ何がどうなっているのか全然わからないよ」

恨めしそうに顔を向ける忍を夕季が見つめ返す。

「何か確かめる方法はないの」

「ないね。車も動かせないし、これだけの新雪の中をメガルまで歩いて行くのは無理がありそう……」

玄関でガタガタと物音がし、二人が振り向く。

夕季がモップを、忍はフライパンを手にとり、臨戦体勢のままゆっくりと歩み寄って行った。

耳をすますと、カチカチとインターフォンのボタンを押す音が聞こえてくる。

「どちらさまですか」

おそろのおそろ忍が問いかける。

するとその物音の主は取り乱したように弾けた声を出した。

「俺！ 光輔！ いいちゃん、開けて！」

「光ちゃん！」

ロツクをはずし、ドアを開ける。すると光輔が雪崩のように転がり込んできた。

「どうしたの、光ちゃん」

「うん、うん。朝トイレに起きたら雪が積もっててさ。寒かったからまた寝ようと思ったんだけどすっげ寒くて寝れなくてさ。俺んち暖房とかないし。んで、やることなかったし、ゲームやるうと思ったら停電で、腹減ったんでなんか食おうと思ったらカップラーメンしかなくて、作るうと思ったらお湯出なくて、うんもゝってさ。ケイタイも通じないし、状況もわかんないし、んで、とりあえず部屋から出てコンビニ行こうと思ったら、すげえ雪が積もってて、その角で遭難しかけて、心が折れて、コンビニ行くのあきらめて、あ、こつからならしいちゃんのところが近いかなって思っで、泳ぐみたいに転がってきてさ……」興奮し、息を切らせながら意味のないアクションを続ける。「お願い、なんか食わせて！」

「……」忍の目が点になる。「パンならあるけど……」

「やたっ！」

両拳をつき上げて雄叫びをあげる光輔を、夕季が冷やかな視線で睨めつけた。

「帰れば」

「……」

「夕季、いいじゃない」ロールパンの袋と牛乳入りのコップを光輔に手渡ししながら、忍が夕季をたしなめる。「こんな状況だもの、こちだって不安だったし、一人でも知ってる人がいた方が心強いよ」

「ほう、ほう……」

口一杯にパンを頬張る光輔を、夕季が再度睨みつけた。
光輔がすつと目をそらす。

「それに何かおかしい。何の物音もしないで、たった一時間でこんなに降り積もるなんて。……」自分でうまく処理し切れない仮定を忍がつかないでいく。「積もったっていうより、突然現れたって感じがする……」

「……」夕季が顎を引いた。「プログラムが関与しているって言うたいの？」

「わからないけれど、だったら考えられる。目的も方向性もまったく予測できないけどな」

「……。でも、だとしたらメガルに連絡だけでも……」

ドン！ という爆発音に三人が顔を向ける。窓の外から空を見上げると、メガルのある方角から花火のような照明弾が数発撃ち上がるところだった。

「あれは……」

夕季の呟きを受け、忍が頷く。

「あのパターンは、その場で待機しろってことだったね」
夕季も頷く。

「え？ そうなの？」ロールパンをくわえたまま、一人、光輔が間抜け面を晒した。「どうしよう、俺出てきちゃった」

「……帰れば」

「ええ」……」

第十五話 『サイレント・カール』 7（後書き）

お読みいただきましてどうもありがとうございます。
そろそろストックもつきかけてきました。敵も出ず、戦闘もなく、
ロボットものとしての破綻はとくに始まっています。SFってど
ういうこと？

これに懲りずに今後ともよろしくお願い申し上げます。

光輔らは往来へと移動していた。コンタクトをとるならば、付近の県道が一番早いだろうという判断のもとに。

当然のことながら人影はまばらだった。積雪のため玄関から出られない者も多く、運良く出られたとしても、家の前をうろつろし結局何もできずに引き返すパターンがよく見受けられた。

半コートを着込み、手袋を重ねた両手でかき分けるように進んで行く三人。

意気揚揚と先頭に行く光輔を、心配そうな面持ちで忍がうかがい見た。

「光ちゃん、ゆっくりね。あわてないで」

「ああ、わかってるって」

「コート破らないでね」

「うん、うん」

「結構高かったんだから。通販だけど」

「マジで？ 返そっか？」

「そういう意味じゃないけど……」しまった、という顔になる。「ごめんね、光ちゃん」

「あ、うん、うん……。うずうず！」

「あ、光ちゃん、ハナ出てるよ」

「え！ マジ！」

「待ってて、今ティッシュあげるから」

「うん。ズズズ！」

「お姉ちゃん、早く行こう」

どうでもいいやり取りに痺れを切らし、夕季が口をへの字に曲げた。

「うん、ちょっと待ってて」

ポケットをさばくり、忍がティッシュを取り出そうとする。が、手袋の厚みでうまく引き当てられなかった。

夕季の吐き出したため息が辺りに白く漂う。何もせずにじっとしていると凍えそうだった。ダッフルコートを着込んでも寒さは一向に改善されず、両腕で体を抱え、ガチガチと上下の歯を打ち鳴らした。

「ほ、ほえっ……」

何ごとかと、引きつるような表情で夕季が光輔に振り返る。

「ほげつくしょんっ！　うわわっ！」

勢いよくくしゃみを撃ち放った揺り返しで、光輔がバランスを崩す。足を滑らせ転びそうになる直前で、目の前のそれに手を伸ばした。

「……」何とか持ち直し、顔を上げる。するとそこにあるはずのものがなく、首を傾げた。「あれ？」

「あつた、あつた。はい、光ちゃん。……ん？」ティッシュ片手に忍も同じ表情になる。「夕季は？」

「さあ……」

「……こっ」

二人が顔を見合わせる。きよろきよろと辺りを見回したが、どこにも夕季の姿は見当たらなかった。

「どこなの、夕季」

「……だから、こっ」

「？」

雲一つない晴天は激しい照り返しをとまって、視界の自由を奪う。表層と立体物の区別すらつかない一面の白色を、光輔と忍は眩しげに目を細めながら探索していった。

かすかな窪みをたどるように光輔が雪面へと視線を這わせる。すると光輔から数メートル先の雪中で大の字になって埋まる夕季の姿を確認した。

「……。見つけ」

「……。あんた、何やってんの？」

あきれ顔の忍にぶすりと刺され、夕季が口をへの字に曲げる。

「突き飛ばされた」

「誰に？」

くいと顎をしゃくった。「そいつ」

忍が光輔の顔をまじまじと眺める。

するとばつが悪そうに光輔が、あはは、と笑った。

「早く出ておいでよ」

「……。出られない」

「あ、そ……」

情けなさそうな顔つきの忍にうながされ、光輔が夕季の顔をのぞき込む。

むっとした表情で夕季がそれを睨みつけた。

「早く出して。冷たいから」

「あ、うん、うん。……。あの、あれだね」卑屈な笑みを浮かべ、光輔がご機嫌取りにかかった。「真っ白でまるで雪ん子のように、かな？」

「うるさい、さっさとしろ！」

「あ、はい」

しかし、夕季の手をつかみ引き上げようとしたところで、またもや光輔の鼻がもよおしてきた。

「ふ、ふげっ……」

「……」

「ふげつくしゅん！ あ！」

くしゃみの勢いで雪崩落ちると、そのまま無防備状態の夕季に覆い被さっていった。

「……」

「あ、はは……」

「……。何か恨みでもあるの」

「いえ、特には……」

夕季の目と鼻の先に光輔の顔があった。

それは唇を突き出せばキスが成立しそうな距離でもある。

戸惑いの中、思わず顔を赤らめる二人。

その直後だった。

「ふ、ふえっ……」

「！」

カウントダウンの始まった光輔の鼻腔でキラめく液状物質が膨張するのを確認し、夕季がせっぱつまった表情でわめき散らし出した。

「早くどいてっ！」

「ああ、うん……」

「早く！ お願い！ やだ！ 早く！ お願い！」

「はいっ！」

ようやく立ち上がり、二人が雪を払う。

夕季の全身が新雪で真っ白に染まっていた。

「あ、雪ん子って言うか、雪女だな、こりゃあ。あっははは」

ぎろりと顔を向け、夕季の反撃が始まった。

「おまえは！」

雪ダマを高速でぶち当てる。コントロールは正確だった。

「いたっ、いたた！」 顔面にヒットし、光輔が押しやられていった。

「いたっ！ 全部、顔！ うまい！ いたっ！ いたってば……」

「あんた達、何遊んでるの！」

忍にたしなめられ、雪ダマをかまえた手を渋々下げる夕季。

「だって……」

「いい加減にしなよ。今がどんな時だかわかってるの」

「……」

猛省の夕季をちらと見やり、光輔が助け舟を出そうとした。

「いや、しいちゃん、しょうがないって」 やれやれと言わんばかりに。「だってこんなことって滅多にないからさ。夕季がはしゃぎす

ぎる気持ちもわかるっていうか。……ぐええっ！」

夕季の投げた雪ダマが顔面にヒットし、光輔が背中から倒れ込んでいった。

途端に忍の顔色が豹変する。

「ああー！ そのコート高かったんだよ！」

「ご、ご、ごめん、しいちゃん……」

「ご、ご、ごめん、お姉ちゃん……」

「あつ……」

ジュッ！ と派手な音を立ち上げ、大量の雪の塊が蒸発する。

もうもうと立ち込める水蒸気の彼方から、拳を突き出した格好の陸竜王が姿を現した。

二百メートルもの距離を押しつけた雪道を、足底のローラーで一気に滑り抜けて行く。

その後をラッセル車のような特殊車両が何台も続いた。塩素カルシウムを散布しながら先導する指揮車の後方には、海竜王と空竜王を積載したトレーラーの姿が見てとれた。

『礼也』指揮車のスピーカーから鳳が大声を張り上げる。激しい電波障害のため無線の類は意味をなさなかった。『次の角までおおよそ五百メートルだ。駐車車両も生体反応もない』

「あいよう！」振り返り、礼也が陸竜王の片手を高く差し上げる。オーケーのサインだった。「いちいちスピーカーかよ。メンドくせえ。つたく、今さらアナログってのも不便なもんだな！」

ナックル・ガードを一直線に撃ち放ち、路面へと叩きつける。するとワイヤーの触れた接地面を割るように雪が溶解していった。もう片方のナックル・ガードを先のワイヤーに這わせるように射出すると、それが滑りぬけた箇所はみるみる地面が露になっていく。軽く両腕を外側へ振り、引き戻す熱量で、あつという間に二車線分ほどの道ができあがった。大型トレーラーが通れるだけの幅は充分にある。

『便利なもんだ！ よかったな、おまえみたいな悪たれでも人様の

お役に立てて。その調子で日本中の除雪作業を頼んだぞ。おい、交差点は丸ごとくり抜いとくの忘れんじゃねえぞ。トレーラー曲がんの計算しとかねえとな。頭わりいから言っても理解できねえか。ガッハッハ！」

振り返り、陸竜王が嬉しそうに手を振る。

「うつせえ、バーカ！」

コクピットの中で礼也がそう吐き捨てた。

遭難寸前の状態で光輔ら三人がゆるやかに歩を進める。すぐ目の前の角までたどり着けば、目的の県道だった。

「しいちゃん、夕季、あとちょっとだ。ガンバろ」

先頭に立つ光輔が振り返り、寒さと疲労に苦しむ二人を励ます。

「さあ、もっと足を上げて」満面の笑み。「ほら、夕季、胸を張って、ワンツー、ワンツー！」

「うるさい！」

「元気だね。光ちゃん」

忍と夕季が冷気でこわばる顔を見合わせた。

「何食べてんだろ……」

「……。なんだか、すごく嬉しそう……」

「そんなわけないだろ、夕季！ この非常事態から早く抜け出さなくちゃ！」いかにも嬉しそうな顔を向ける。「さっさと終わらせて遊びたいじゃんか」

「遊びたいの！」

「さっきの続きやろ」

「やらない」

「ええ〜！ だって俺、もらいっぱなしなんだけ……」

その時、背中から交差点へ突入する光輔に、予期せぬ災いが襲いかかってきた。

凄まじい勢いで通り抜けた何かが、夕季達の視界から雪の障害物を取り払っていったのである。

洪水のような大量の水流が光輔を弾き飛ばす。

「あああああゝっ！」

「光輔！」

もんどりうつてしりもちをつく光輔を助けようと、夕季が駆け寄っていった。

「大丈夫！」

「うん、ギリで……」

「あああーっ！」一瞬で忍の顔が青ざめる。「コートどろどろ！」

「ご、ご、ごめんしいちゃん……」

鋼鉄製のローラーがアスファルトを削りつける音が響き渡り、三人の眼前へ全高六メートルの人型ロボットが現れた。

除雪仕様の陸竜王だった。

「お？」陸竜王のコクピット内から夕季らを発見し、礼也がハッチを跳ね上げる。「なんでこんなとこにいやがんだ、てめえら」

三角目玉でわめき散らす忍と目が合った。

「弁償しろ！ 礼也！」

「なんで怒ってやがんだ……」

第十五話 『サイレント・カロール』 8（後書き）

女子バレーの江畑選手が素敵です。アタッカーとしてはもとより、誰も取りにいかないようなデッドなボールでも、周囲を蹴散らしながらダイブするハングリーさはカッコよすぎです。

思えば某球団に足りなかったのは、この泥臭さではないでしょう。確かにスマートではないし、ポーズだときおろす不屈き者もいらっしやるようですが、プレーヤーのそういった不屈の精神と諦めない姿勢にサポーターは奮い立つものです。わかっていただけませんかねえ、落 監督。

と、わけあって反対のチームを応援していた不屈き者が言ってみます。でもベンちゃんあの三塁打はシビレた……

片側三車線の県道の交差点に陣取り、メック・トルーパーと三体の竜王が集結していた。

各自バトルスーツを装着し、光輔と夕季も大型トレーラーに積載されたそれぞれの竜王へと乗り込む。

辺りはすっかり朝の光に覆われていた。路面の積雪に反射し、一層明るさを際立たせる。

トレーラーのカバーはオープン状態で、上半身を立てたままの姿勢でハッチを閉じずに指示を待った。

「これからどうするの」

夕季の問いに、路上から鳳が受け答える。

「わからん。だがこの状況は異常だ。何が起こってもおかしくはない。特定コードが解除されるまで、不測の事態に備えてこのまま待機だ」

夕季が頷く。

「カウンターはどうなってるんだ？」

礼也の声に全員が振り返る。

それを受けたのは鳳の横に立つ木場だった。

「相変わらずだ。何の反応もない」

「また雑魚モデウスの最後っぺかよ？」

「いや」それを口にすまいか否か一旦は踏み止まり、やがて静かに押し出した。「フォラスだ」

「フォラス？」礼也が眉間に皺を寄せる。「なんだそりゃ」

「新しいプログラムが発動したの？」

夕季の顔をまじまじと眺め、木場が平坦につないでいった。

「はつきりとしたことはまだわからん。だがそういった類のプログラムであることは疑いようもない」

「そうだった？」

「ああ」自分でもうまく消化し切れない仮定をつむいでいく。「アスモデウスのような実体をともなったプログラムとは違う、まやかしのような類のものらしい」

「……」

考えにふける夕季を見下ろし、礼也がやり切れない心の内を吐露する。

「バケモンだつてんで、何でもかんでも力技つてわけにもいかなえのな」物憂げに深く息を吐き出した。「こんな感じじゃ、ガーディアンどころか、竜王ですら使い道ねえんじゃねえか？」

その問いかけに答える者はいない。誰もが己の思惑の中、解決の糸口をたどるべく思考に没頭していた。

と、その時。

突如として周辺が闇につつまれる。

それは明かりの消えた街の風景ではなく、光が消え去った本当の闇だった。

「おい！ 木場！」

「わかつている。うろたえるな、各自その場から離れるな！」

足もとすら確認できない漆黒の闇の中、礼也が冷静にハッチを閉じる。すぐさま精神を集中させ、陸竜王を真つ赤に燃え上がらせた。煌々と輝く巨人の炎が、たいまつのように周辺に光を呼び戻していく。

夕季がそれに続いた。

空竜王のハッチを閉じ、懸架台のアームを解除する。空高く舞い上がるや、翼を大きく広げ、きらびやかな白色の光を地上へと放射させた。

光輔も海竜王を解き放つ。二体の竜王からの光を受け、海竜王の外殻が黒く艶やかに輝いた。

「どうするよ、これから。下はパニックだ。指示どころじゃねえ」
礼也の声に夕季が反応する。

『あたし達で何とかするしかない』

あきれたように嘆息する礼也。

「何とかつつたつてよお……」

『大丈夫』

自信満々の光輔の声に二人が振り返った。

『少なくとも、竜王同士ならこうして意思の疎通ができるし』

海竜王の両眼がキラリと光り輝く。

その血気みなぎるフォルムを前に、礼也がふっと笑ってみせた。

「だから、そこからどうすんだっての……」

『礼也、見て』

「んあ！」

夕季の指し示す方角へと礼也が視線を向ける。

『あそこだけ光ってる』

暗闇の中、遠く一点にだけ淡い光が浮かび上がっていた。

「……」

『行ってみる』

「！おい、待て、夕季！」

直後、突然大量のガラスを叩き割ったような大音響が鳴り渡る。

そこにいたすべての人間が物音の方角へと顔を向けた。

空を見上げながら。

それは信じがたい光景だった。

空が割れたのである。

ガラスに石を投げつけたごとく、空高く大きな穴がぼっかりとあいていた。雲をつつみ込むほどの大穴。しかしそれは多くのポイントに鋭角を持ち、すべてが直線でつながれた、まさしくガラスを割った跡と形容できた。

「なんだ、ありゃ……」

礼也がごくりと唾を飲み込む。

闇の彼方にこじあけられた大穴は、妖しげに淡い光を放ち続ける。やがてその空間すらも引き裂くように、何かが身を乗り出してきた。それはとてつもなく巨大な物の怪の姿だった。

「アスモデウス……」

夕季が思わず口をつくむ。

続く礼也も顎の汗を拭いながら驚愕の表情を浮かべるだけだった。
「でかすぎだつての……」

街一つをすっぽりと覆いつくす巨大な影が静かに山あいへと降り立つ。

そこからは生物としての息づかいは微塵も感じ取れない。
だが黙って見過ごすわけにはいなかった。

『礼也！』

光輔の呼びかけに振り返る礼也。

『集束だ。ガーディアンで対抗しよう』

「……。それっかねえようだな」平静を装い、にやりと笑う。「象とアリンコだろ。ま、これっくらいのハンデで、ちょうどよすぎだつてことだ」

『礼也、動き出しそう！』

「わかってるつての」夕季を制し、礼也がまなざしに力を込める。

「行くぞ。集束だ！」

『おう！』

『了解！』

激しくスパークする輝きをとめない、幾色もの光の中からガーディアンシルエットが浮かび上がる。

大地へ降り立ち、巨大アスモデウスを指して滑るように突進を始めた。

加速を続け、山の頂上目がけ一気に飛び上がった。

「どうする気？」

「知れたこと。とりあえず、たたつ殺す！」

「おまえ……」

臥竜偃月刀を頭上高く掲げ、アスモデウスを一刀両断すべく礼也が試みる。

が、その切っ先がむなく空を切った時、すべての闇が引き抜かれるように消滅した。

「！」

「礼也！」

高台に降り立ち、きよろきよろと辺りを見回す礼也の心が夕季の声で呼び戻された。

「……。んだ、こりゃ……」

それはいつもと何ら変わらない、見慣れた風景だった。

光が射し、雪もない、ありふれた冬の朝の色。

ガーディアンのはるか下、また少しずつ日常が動き始めていた。

司令室別室で大量の書類と向き合いながら、桔平が難しそうな顔で腕組みしていた。

報告書によれば、先の異常現象は実質一時間程度の出来事で、多方面にわたる損害は甚大であったが、さして大きな事故もなく、奇跡的に人命に関わる被害は皆無とのことだった。

「何かわかった？」

意味ありげな笑みを浮かべ、あさみが桔平へマグカップを手渡す。それを受け取りながら、淡々と桔平は言葉を連ねていった。

「もつとも早い報告記録は午前六時ジャスト。新聞を取ろうと郵便受けを開けて振り返ったら、そこに雪があつたそうだ。同じ時間に同じ景色を見続けていた人間は、そこには何もなかったという報告もある。そいつが雪の存在を確認したのはそれから約二十分後。他の報告も似たりよつたりだ。全員が全員口を揃えて言うことには、それまでそこには何もなかったのに、ほんの一瞬目をはなした隙に、大雪が目の前にあつたんだってよ。個人個人でこつこつ意見が食い違っているってことは、それぞれが自分の意識の中で大雪の存在を認識したとしか考えようがない。車を運転してた奴らの中にや、信号

で止まった時に雪がドツサリ現れて立ち往生したあの、突然動かなくなつた前の奴にクラクション鳴らして降りようとドア開けようとした途端に囲まれてたあの、とにかくタイミングがバラバラだ。なのに大きな追突事故が一件も起きなかつたのは、奇跡としか思えない」

「或いは、奇跡を起こされていたのかも知れないわね」

「フン」あさみを見ようとせすに鼻で捨て置き、カップのコーヒーをぐいと流し込んだ。「なんだ、こりゃ。砂糖何杯入れてやがんだ」

「二杯よ」ブラックコーヒーを口にしながら笑いかける。「甘いのが好きだと思つていたけれど、多かつた？」

「少ねえだろ」不機嫌そうに机の引き出しからスティックシュガーを二本取り出し、さらさらと注ぎ込む。「ったくよ、カップがでけえ時はこれくらいが常識だろ」

「そうね。今度からお砂糖の中にコーヒーを入れてくるわ」

「そりやおまえ、非常識つてもんだ……」

今度はあさみが鼻で笑い飛ばす。

「あれだけの騒ぎを起こしてほとんど被害もないつていうのに、そのコーヒーの方がよっぽど非常識だとは思わない？」

「わかつてねえな、おまえも」

「どちらが人にとって有害なのかしらね」

いたずらっぽくあさみが笑った。

それを表情もなく受け止め、桔平が腑に落ちない様子で続ける。

「人畜無害か。それどころか、子供らだけでなく喜んでた不届き者だつてかなりいたつて話だ。俺だつてこんな立場でなけりゃ、はいじまつてたところだ。雪が降つてるの見るだけでわくわくしてくる。感情を押し殺すのに必死だつたぜ。だが世の中、そんな気楽な輩ばかりじゃねえ。特に命に関わる仕事をしてる人らは、気が気じゃなかつただろうな」

「そうね」ふいに真顔に戻り、それを口にした。「まさか喜んでい

るだなんて、夢にも思わなかったけれど……」

「考えてみりゃ、人間はもともと何も持たなかったんだよな。エゴだ、何だ、言っても、結局は全部捨てられるわけじゃない。こうなりゃ、どっちが人間らしいのかよ」

街はまたいつもの息吹を取り戻していた。

喧騒、公害、ののしり合い、すべてが元どおりに動き始める。

「どうなってんのかねえ。クリスマスだってのに。それとも、こんな日くらいはっていう、奴らの願いなのかもな」

「人ごとみたいに言うのね。確か文明至上主義じゃなかったかしら」
「都合がいいから利用してるだけだ。なきゃないで、なんとかするだろ」

「今さら？」

「まあな。でも神さんのすることじゃ逆らえねえだろ」

「神が悪魔、かしらね」

「どっちもたいして違わねえよ。俺らからしたらな」

「信心深い人達に狙われないようにね」

「……。神様は見たことねえが、とりあえず魔女や小悪魔が存在することは確かだな……」

「？」

桔平が、うん、と伸びをする。

「フォラスからのクリスマス・プレゼント、てところか。粹なはからいしやがって。最高のジョークだな」

「……」

桔平の顔をまじまじと眺め、あさみが静かに疑問を投げかける。

「どうしてフォラスのことを知っているの」

「……。ん？ そんなこと言ったか？」

「ええ、はつきりとね」

「おかしいな、記憶がねえ。さては何か変なモンがとり憑きやがったな。くそ、俺の口をただで勝手に使いやがって。みっちゃんに御被いしてもらわねえとな。らあああゝってな」

「……」

「ま、全部ひつくるめてクリスマスの奇跡ってとこだな」

「笑えないわね」

「まあな。これだけのことを軽々とやってのける相手だ。俺達がこうして生きてるのも不思議なくらいだからな」

「センスが悪すぎる」

「あ、そっち……」

今度は桔平が問いかける番だった。

「そういうおまえは、なんで知ってるんだ」

「……。何となく、かしら。女の勘は鋭いから」

「自分で言いやがったか……」

桔平が腕時計で時刻を確認する。

「さてと……」 あさみが自分の方を眺めているのに気がついた。「何だ？」

「別に」 すつ、と顔をそむける。「物持ちがいいのね」

「？」 腕時計のことだと気づき、ぶらぶらと腕を振った。「こいつのことか？」

「……」

「バッタもののくせにちつとも壊れやしねえから、新品がいつまでたつても買えねえよ。おまえの呪いでもかかってんじゃねえのか？」

「……」 顔をそむけたまま、ふつと笑う。「壊れるように呪ってあげましようか？」

「はん？」 不快そうに顔をゆがめた。「やめとけ。俺の方がぶつ壊れちまわあ」

「随分な物言いね」

「そんだけ毒があるってことだ。あの雪だって、おまえが降らせたんじゃないだろうな」

「……。そうとも言っわね」

「言っのかよ……」

第十五話 『サイレント・カロール』 9（後書き）

二十年近く応援し続けていた赤シャチ軍団がついに悲願のリーグ制覇。興奮で思わずチビリそうでした……

その日の夕暮れ時、古閑姉妹の部屋ではクリスマス大会の準備が
ちやくちやくと進んでいた。

一人こたつで丸くなる光輔を除いて。

「さぶつ！」こたつにもぐりこみ、手のひらをこすり合わせる。「
いいな、こたつ。俺も買おつかな」

「こら、ふとん引つ張るな！」

「しやわせ」

たしなめる夕季の声を右から左へ流し、光輔が隣の夕季の部屋へ
と視線を移す。

「あ、パソコン見せて」

「勝手に触るな！」

そんな二人のやりとりをキッチンから眺め、忍と雅は楽しそうに
笑い合った。

「光ちゃん、ココア飲む？」

「あ、飲む飲む」一瞬だけ振り返り、夕季の制止もむなしくパソコ
ンを物色し始める。「何、この壁紙。犬？　かわいいじゃん。顔に
似合わずさ……」

「うるさい！」

「パソコンで日記とかつけてんだ。意外。見ていい？」

「いいわけない！」

「俺の出てるとこだけでいいから」

「出てない！」

「じゃ、何書いてんの？」

「知らない！　光輔には関係ない！」

「今日も雅にいじわるされました。昨日もそうでした。その前も、

とか」

「……」

「あれ？ 当たり？」

「当たって……」

「あたしが何？」

「あ、雅、あのさ……」

「もう、死んで！」

「いや、まだ死にたくないんだけど……」

机の上のミニフィギュアに照準が合った。

「あれ、おまえ、エルバラのフィギュア集めてたんだ。捨てたんじやなかったのか」

「も、も、もったいなかったから……」

「おいおい、顔に似合わず乙女チックだったりしちゃう？」

「お願い、帰れ！」

「いや、それ、なんか死ねって言われるより切ない……」

「みやちゃん。礼也、遅くなるから、先にやっててくれって」

ココアを片手に雅が忍へ振り返る。

「ええ、あんなに言つといたのに」ぶくつと頬を膨らませた。

「ねえ、光ちゃん」

「へ？」どうしてもよさそうにあくび。「あ、サンキュ」

「ねえ、ひどいよね」

「ん？ ……あちっ」「ココアをぐびぴと飲みながら雅をちらと見やつた。「誰？ おまえが？」

「やだ、光ちゃん、脳みそ腐ってるよ」

「いや、そんなに腐ってないと思うけど……」夕季へ目配せする。

「日記に書く？」

「書かない！」

「あ、雅、夕季の日記にさ、おまえのことがいっぱい書いてあって……」

「書いてない！」

「え、見せて、見せて」楽しそうに笑いながら雅がパソコンへ手をかける。「悪いこと書いてあったら承知しないからねえ」

「やめて、みやちゃん」

雅の侵攻を阻止すべく懸命のティフェンスの夕季。

それを横目に光輔がテレビのリモコンを手にとった。

「しいちゃん、テレビつけていい？」

「いいよ」

三十二型の液晶テレビの下にガラスケースがあり、その中にはレコーダーとDVDのライブラリが見てとれた。

「あれ、なんかいっぱいあるね」雅へ覆い被さる夕季へ顔を向ける。

「おまえの？」

「違う。お姉ちゃんの……。みやちゃん、それさわっちゃ駄目！」

「いた……」

「あ、ごめん……」

「イタイよ、これ、夕季！」

「……」

「ああ〜！夕季、恥ずかしいよ、これ」カチカチとマウスを巧みに操る。「きゃ〜！助けて〜！」

「やめて！」

「もう見てらんない」カチカチカチカチ！「あ〜れ〜！」

「……もう許して」

「これ、しいちゃんなの？」パッケージをいくつか手に取り、光輔がまじまじと眺めた。「へええ、こっこの好きなんだ。酔えば酔うほど強くなる、だって……」

敗北感に打ちひしがれる夕季を尻目に、雅が満面の笑みで光輔の横へ並ぶ。

「何これ？　すごくおもしろそう」

「本当だ。何なのこれ。ミスター・ボオ？」

「違うよ、光ちゃん。これブーって読むの。小学生でも知ってるよ」
「マジ……」

「英語、赤点確定だね」

「うん、まあ、赤点だったけど……」

「あつははは」包丁を手に忍がおもしろそうに笑った。「ん？」

「おいゝす」

チャイムももどかしく、桔平と木場がのそつと現れる。大きなケ
ーキの箱と、ぱんぱんに膨らんだコンビニの袋をぶら下げていた。
キッチンから笑顔を向け、忍が二人を出迎える。

「お待ちしてましたよ」

「おう、しの坊。本日 of 金銭面は木場が単独で全面的にバックアッ
プするつてよ」

「いや、ほんの今、おまえと折半だと話したばかりだろうが……」

「遠慮すんなつて。なあ、木場」

「おまえは何を言つとるんだ」

「あ、でも、それじゃ申し訳ありませんし」

「しの坊もわかってねえな。じゃねえとこいつが遠慮しちまつて何
も食えねえだろが。なあ？」

「何故そんな説得力のある顔をしている……」

「でも、勝手にお休みまでいただいてしまったのに」

「半ドンじゃねえか、気にすんなつて。おまえも木場も有休全然と
つてねえだろ。今日のは代休扱いにしといてやったぞ。俺からのク
リスマス・プレゼントだ。ガッハハハ！」

「おまえは副局長のくせに休みすぎだ」

「おまえが言つな！」

「いや、おまえが言つな！」

「あ、桔平さん」

「おう、光輔」こたつの上のココアに目が止まった。「あ、しの坊、
俺もココア」

「あ、はい」

「おまえは遠慮とか知らんのか」

「おまえが言つな！」

「いや、だから、おまえが言っな！」

光輔が立ち上がり、DVDを一つ桔平へ手渡した。

「これ、知ってます？」

「んあ！」

その光景に何気なく振り返った忍の顔面が蒼白になる。

「ぎゃあーっ！」

二人の間に忍が猛スピードで飛び込んできた。

「え？ え？」

「ぎゃーって、おまえ……」

「何勝手に出してるの、光ちゃん！」

「しいちゃん、包丁、包丁……」

「しの坊、包丁、包丁……」

「あ、すみません……」

その横では雅がDVDを両手に持って木場へ手渡すところだった。

「みやちゃんも！」

「忍、包丁、包丁……」

「あ、すいま、っせん……」

「しいちゃん、パニックだね」

「……」

突如として、桔平が歓喜の声をあげる。

「お、ブーじゃねえか」嬉しそうに木場へと振り返った。「おまえ前にビデオに録ってなかったけ？」

木場が重々しく頷いた。

「スリーまでな。フォーは杏子のせいで録り損ねた。もうテープがガビガビで観れんが」

「中学の時、アホみてえに観てたもんな。おんなじモン何回もつき合わされる身にもなってみろ」

「そのつどアホのように大笑いしてた奴はどこのだいつだ」

「しょうがねえだろ。あの吹き替えはやべえ。何べん観ても新鮮だよ。お！」テレビ台の中の忍コレクションに気がつき、思わず飛び

かかる。「ジャッキーじゃねえか！　おい、木場見ろ、てんちゅうけんがあるぞ！」

「何だと……！」木場の眼光が鋭さを増した。「おい、桔平！　これ整形前のやつだぞ。こんなものまで出てたのか！　昔テレビで一度観たきりだ」

「マジか！　……んな！　おい、デブゴンまであるぞ。普通買わねえだろ！」

「本当か！　……おお！　普通買わんぞ！」

「七つて、そんなに出てたのかよ。三までは知ってんだけどな。おい、俺はウラシマタローだったてのか！　はたまたハダカの才才様か！」

「どっちかって言うとハナゲのおおさまだよねえ」

忍と向き直り、桔平がギロリと睨みつける。

「おい、こりゃ、しの坊のか」

「は、は！　……はい」

恥ずかしそうに声を上ずらせる忍。

それを見て桔平がにやりと笑った。

「おまえ、いい趣味してんじゃねえか」

「あ、う……」観念したように頭を垂れた。「すみません、デブゴンまで買ってしまったて。つい出来心で……」

懐いっぱいにケースを抱え、木場が真剣なまなざしを向ける。

「頼む、これだけ貸してくれ」

「あ、はい……」

「バカ野郎、デブゴンと香港警察ストーリーは俺が貸りる」

「いや、デブゴンは久しぶりにぜひ観てみたい」

「俺も久しぶりに観る気マンマンだ！」

「仕方ない。桔平、明日一緒に観るか？」

「おお、いいな。朴さんの研究室でクリスマス・カンフー映画・マラソンだ。あそこなら五十インチのモニターがある」

「クリスマスにデブゴンを観るのは俺達だけだろうがな」

「朴さんは毎年B級ホラー映画を娘達と観まくるって言うたぞ」

「なんとこの不毛なクリスマスだ」

「なあ、不毛だよな」

再び忍へ振り返った。

「しの坊も一緒にどうだ？」

「……」赤面状態の忍が桔平を睨み返した。「いいッス、けど……」

「しいちゃん、困ってない？」

小声で光輔が告げる。

雅がそれを受けた。

「そんなことないよ。たぶん恥ずかしいのと、心の友を見つけた喜びからのせめぎあいでごっちゃになって、嬉しいやら悲しいやらで困ってるだけだよ」

「困ってんじゃないか……」

「渾然としてなくてまったりしすぎててなおかつしつこくて、でも獲ったど〜！ って感じで、実に微妙なんだよ」意地悪そうに笑う。

「これはビッグチャンスですよ〜」

「おまえ、何言ってるの……」何となく腑に落ちない様子で光輔が三人を眺めた。「何か、クリスマスばくないよな。こんなんじゃない」

「いいんじゃない。別に」

「お、始まったぞ。ホンデホンデ、ホンデホンデ、ホンデホンデホ
〜イ……」

いつの間にか上映会が始まっていた。テンションの高いB級映画を前に、桔平はともかく、いつになく木場のそれも高めだった。

包丁を手に忍が二人の間で正座する。

「忍、包丁置いてこい」

「あ、すみません」

「しの坊、ココアまだか」

「あ、はい」

「おい、桔平、自分でいれろ」

「おまえが言うな！」

「いや、とにかく、おまえが言うな！」

「静かにしてください」

「あ、悪い」

「すまん……」

光輔と雅が顔を見合わせた。

「ずっとあんなの観続けるのかな？」

「あたしは七時からの犯罪王国ニッポン二十四時・イン・メリークリスマスを予約してもらった」

「……クリスマスにそんなのやってんの？」

「忠臣蔵の再放送も魅力的だけどねえ」

「忠臣蔵っていつだったけ……」 光輔がテレビ画面をちら見する。「サッカー観たかったんだけどな」

「部活、ちゃんで行ってる？」

「うん、まあ」 光輔が雅の顔に注目する。「そう言えば、雅、何部だったつけ？」

「茶道部」

「お茶？」

「お茶」

とりたてて興味も示さずに光輔が続けた。

「茶道部って普段どんな練習してんの？」

「お菓子食べたり、おしゃべりしたり」

「ふん……」

「ちなみにその前は書道部に入ってたんだけどね」

「書道部って毎日習字ばっか書いてんの？」

「ううん。お菓子食べたり、おしゃべりしたり」

「……同じじゃん」

「全然違うよ」 えっへん、と胸を張る。「茶道部にはお茶がついてきます」

「……」

「あれ？ なんてがっかりしてんの？」

「……なんでがっかりされて不満そうなの？」

「びっくりだよ」

「こっちがね」

「みやちゃん、綾さんとチャットつながったよ」

「よっしゃ！」

夕季の声にすつくと立ち上がる光輔。

近寄る光輔を夕季が片手で制した。

「おまえは触るな！」

「おまえって……」

光輔が無理やり手を出した途端、回線が切断される。

「あっ！」

「だいなしだねえ」

「……ご、ご、ごめんなさい」

「ええ〜！ 光ちゃんと夕季、アスモデウスに襲われた時、抱き合
ってたって本当？」

チャット画面を見て雅が大声ではしゃぐ。

それに一早く反応したのは、やはり桔平だった。鶏のモモ肉を頬
張りながら光輔へと振り返る。

「何！ マジか！」

「いや、あの場合は仕方なくて……」

拳動不審状態の光輔にも遠慮なしにたたみかけていく雅と桔平。

「仕方ないと抱き合っちゃうの？」

「抱き合っちゃうんだろうな」

「うん、まあ……」

夕季の両目がつり上がった。

「光輔！」

「あ、はは……。綾さんてば……」

「ねえ、みやちゃん」携帯電話を片手に忍が告げた。「礼也、用が
できたから来ないって」

「ええ〜！」ぶんすか。「まあ、もともと乗り気じゃなかったみた
いだけど」

「あいつはクリスマスってガラでもないからね」

「みんなそうだけどねえ〜」

大騒ぎのテーブルを横目で見やり、カーテンの隙間からすっかり
暗くなってしまった外の景色を雅が眺める。

桔平の揶揄に露骨に顔をしかめる木場のそばで、光輔と夕季がす
ったもんだのかけ合いを続けていた。

「光輔！」

「ご、ご、ごめん……」

切り分けられたケーキがそれぞれの目の前に配られる段階になってもなお、その立ち位置は変わらずにいた。

光輔が隣の夕季の様子をうかがい見るように、何度もちらちらと目をやる。

「あ、夕季、苺好きだよな。これも食べな」

ご機嫌取り状態で夕季へ苺を差し出す光輔。

それを夕季がつっけんどんにつき返した。

「いない」

「遠慮するなつて」

「いないって言うてるでしょ！」

「そんなこと言わずにさ」

トイレから戻ってきた桔平がたまたまその現場に遭遇する。夕季の皿の上に苺が二つあるのを目撃し、いやらしそうな笑みを浮かべた。

「おいおい、おだやかじゃねえな。どういっつった」

「ははは……」

「さてはおまえら俺に内緒でこっそりつき合ってたやがったな。ちきしょー」

むっとなる夕季。

慌てて光輔も否定にかかった。

「内緒でとかそんなんじゃないですよ！」

「光輔！」

たしなめる夕季のその意味も解さずに光輔が自己弁護を始める。

「だってこっそりとか内緒でとか、桔平さんが人聞き悪いこと言うから……」

「その前につき合ってたないってことを否定して！」

「え？」目が点になった。「つき合ってたないことを否定するの？」

「……。つき合っていないって、否定を……」

すると、さらににゅっと口もとをつり上げる桔平。

「なんだ、なんだ、結局つき合ってたんじゃないか。綾っぺに言いつけるぞ。ちきしょー」

「ちが……」

夕季の唇がひくひくと震えていた。

「こいつは絶対日本人じゃないな」

「私も同感です」

木場と忍の会話にフェザータッチの反応を見せ、桔平がキツとなつて振り返る。

「ああーっ！ おい、木場！ 止めとけって言ったじゃないか」

二人仲良くカンフー映画の鑑賞中だった。

「いや、これは、忍が……」

「私のせいなんですか！」

「いや、その……」

「バカ野郎、才まえガタン口んガ、のシーン見逃しちまったじゃないか。楽しみにしてたのに」

そこまで責め立てられ、さすがに木場がむっとなる。

「おまえが長すぎるからだろうが」

「バカ野郎！ 仕方ねえだろ。シャワー付きはやべえんだ。最終決断に踏み切るタイミングがうまくはかれねえ。立ち上がるうとしたら、また襲ってきやがる。ピンク色つてのがまた何気に落ち着く」

「三分で済ませると言っていたくせに、三倍遅いぞ！」

「俺のせいじゃねえ。赤い水洗のシャワーのせいだ」

「何を訳のわからんことを」

「巻き戻しましょうか？」

「もういい、もういいい！」リモコンを差し上げた忍を切って捨てる。「過ぎた時は巻き戻らねえ！ もう終わりだ！」

「そうか。なら仕方ないな」

「仕方ないですね」

「……。おい、おまえら、俺がせっかくうまいこと言ったのに、それはねえんじゃないかな……」

「あ、ちょっと戻していいですか？ 桔平さんの声がうるさくて」
「おお」

「あゝ、もう！」眼中にない二人に憤慨し、桔平が夕季の苺をつまんで食べる。二つとも。

「……」

「ちょっと待てつてばよ！ もっかい観ようぜ、一緒に」

残された真つ白なケーキを、夕季と光輔はそれぞれの思惑を胸にじつと見つめるだけだった。

「……」

「……。俺達つて、やっぱりつき合ってたんだな？ 新発見？」

オロオロとうろたえながらも場を和ませようとする光輔に、凄まじいまでの眼光が襲いかかる。

「……ははっ、冗談です……」

夕季が光輔の耳を思い切りつねり上げた。

「あだだだー！ ちぎれる、ちぎれるって……」

その頃雅は、パソコンの前で綾音とチャットの真つ最中だった。

「あだだだ、ちぎれる、ちぎれるゝ、だって……」

「みやちゃん！」

夕刻、曇天の薄闇の中、礼也は仮設住宅が建ち並ぶ一画へと足を踏み入れていた。

メガルからの援助によるもので、プログラムによって被害を受けた人達が、新しい住居のめどがたつまで住むことを許されていた。

玄関先で声がし、礼也を招き入れた楓が嬉しそうに笑う。

礼也はクリスマスケーキの箱を手にとっていた。

間髪入れず、楓の後ろから弟達が元気よく飛び出してきた。

「あ、ケーキだ！」

「ケーキだ！」

「こら、いい子にしてなさい。お礼は」

楓にたしなめられ、二人が大人しくなる。礼也に顔を向けた。

「お兄ちゃん、ありがとう」

「ありがとう」

「あんでもねえってよ」

ケーキを二人へ手渡し、礼也がおもしろそうに笑う。

戸惑いながら楓が礼を口にした。

「礼也君、ありがとう。ごめんなさい、無理言っちゃって」

「んあ？」やや気まずそうに後頭部を指でかく。「約束だからな」

二人の微妙なやりとりも意に介すことなく、天然の小さな悪意が割り込んでくる。

「早く食べようよ」

「早く食べたいです！」

「駄目。夕ご飯の後だからね」

「ええ」

「えええええ！」

「我慢しなさい」

次に小悪魔達は礼也の持つ紙袋に興味を示した。

「ねえ、こっちの袋は？」

「これは俺のだ」

「何なの、見せて」

「バカ、やめろって」

「あ、メロンパンだ。ちょうだい」

「ちょうだい！」

「バカ言うな、おまえらはケーキで我慢しろっての」

「ちょうだい！」

「ちょうだいなあ！」

眉間に皺を寄せ、礼也がごほんと咳払いをする。

「おまえら、やメロン……」

「こら！ 洋一、ほのか！」

二人を叱責し、楓が申し訳なさそうに礼也へと振り返った。
「ごめんなさい、礼也君」

「……」

「？」

手持ち無沙汰になり、礼也が帰ろうとする。

それを引き止める楓の様子もどこか滑らかではなかった。

「あの、ありがとう」

「いいって。約束だからよ」

「……。よかったら……」言いづらそうに切り出す。「夕飯、食べてく？」

「あん？」バツが悪そうにそっぽを向いた。「いや、やめとく」

「……あ、他に用あったんだっけ」

「ヤボ用だけだな」

「そう……」

「それに邪魔しちゃ悪いしよ」

「邪魔なんかじゃないけど……」

「……」

淋しそうに楓が顔を伏せる。

いつもと勝手が違っていた。学校でのように気さくに話すことができない。それは当たり前のごとくそこに存在するものではなく、招く者と招かれる者という特定されたシチュエーションのせいに他ならなかった。

沈黙を気遣うように雪がちらつき始める。

吹き抜けた風がやけに冷たかった。

「んじゃ、行くわ」

木枯らしに肩をすくませたことを契機に、礼也がぼそりと告げる。それ以上足止める術を楓は持たなかった。

「……うん。ごめんなさい、忙しいのに。本当に今日はあり……」

「お兄ちゃん、ごはん一緒に食べようよ」

「うっん！」

「あん？」

ふいに乱入する二人の小悪魔達。

何気なく目をやった礼也へ小さな槍を差し向けた。

「お姉ちゃん、お兄ちゃんの分まで作っただよ」

「すごいご馳走！　じゅるるる！」

「……」

楓が顔を伏せる。恥ずかしさで今にも泣き出しそうなのを悟られないために。

「そういうことなら、ちっとゴチになるかな。あっちゃ、別にどうつてもんでもねえし」

はっとなって顔を上げる楓。

両手を腰に当て、あきれたように礼也が楓を見下ろした。

「だったら早く言えって。遠慮しちまったじゃねえか」

「……。それは、どうも……」

「？」

不思議そうに楓を眺める礼也の腕を、両側から汚れなきゴブリン達が玄関へと引っ張っていく。

「ねえ、一緒にゲームやる。マルオ・カート」

「よぐギダネー！」

「メシ食ったらとつと帰るっての」

「ええ、一回だけお願い」

「あいシデマス！」

「つてよ……」

楓に振り返り、礼也が念を押した。

「あのな、本当に邪魔じゃねえだろうな」

「そんなこと、ない……」胸がいつぱいで言葉につまる。「……けど、よかったら……」

「……」ふいふ、とため息をついた。「いいけどよ、俺はガキ相手でも容赦しねえぞ。コテンパだって」

「やった！」

「サランヘヨーン！」

「さっきから何言ってたんだ、こいつ……」

「四人対戦だよ。お姉ちゃん、まるで鬼のように強い」

「まるでドラキュラのように強いですけど、何か！」

「こらっ！」

「おい、言っとくけどな、俺は負けたら切れるからな」

「ええ〜！ 大人のくせに〜！」

「恥ずかしい大人です！」

「知るかっ！」

楓が嬉しそうに笑った。

ピンポーン……

呼び鈴が鳴り、表情もなく夕季がドアを開ける。

真っ先に飛び込んできたのは雅の笑顔だった。

「おいす夕季、クリスマス大会やろ」

夕季が複雑そうに眉を寄せる。

雅の後ろには同じく熱苦しげな笑顔の陵太郎と、気まずそうに顔をそむけた桔平の姿があった。

「けっペーさんがクリスマスなのに誰も相手にしてくれなくて淋しいから、かまってほしいんだって」

「おいおい、みっちゃん……」

「駒田さんにもフラれちゃったらしいよ。一緒に徹夜でパイオ・ヘザードやろうと思って買ったのに、駒田さんコンパ行っちゃったんだって。俺も連れて行って言ったら、すぐシモネタとか言うから駄目だって断られたみたい」

「……全部言っちゃったな」

「せっかくケーキまで買ったのにせつね〜な」

「今がな。ここにいることがとにかくいたたまれねえ」

「……。あたしは……」

「ほら、けっペーさん」明らかに乗り気ではない夕季に被せて言う。

「夕季、けっペーさんのこと嫌ってるから来ないって言ったじゃないの!」

「オブラートとかねえんだな……」

「仕方ないすよ。本当のことですから」

「おまえが言うな!」

ゴチンと陵太郎のもっさり頭をこづく。

「つて！ ひどいすよ。雅の方がよっぽど辛らつなこと言ってるのに、なんで俺だけ」

「おまえはかわいくねえからだ！」

「よかった、かわいくて」

「自分で言いやがったな……」

陵太郎と雅の部屋で居心地悪そうに夕季が腰を下ろす。四つに切り分けたケーキが乗せられた取り皿がそれぞれの席にあった。

「あたしこのチョコもらっていい？」

「いや、看板のチョコの所有者はオーナーの俺だろ」

「けっぺーさんには家とサンタさんどうぞ」

「どうぞって、これローソクじゃねえか……」

「さすが、けっぺーさん！」

「なあ、いい加減、そのけっぺーさんてのやめてくんねえか？」

「いいえ、クリスマスですから」

「……つまり話が通じねえわけだな」

「クリスマスですから！」

わいわいと楽しそうにはしゃぐ桔平と雅を、夕季は恨めしげに眺めていた。

「はい、夕季」

雅がきらびやかな三角の紙帽子を夕季に無理やり被せる。今日のために雅が買ってきたパーティーグッズだった。

露骨に不快感を表し、夕季がそれを取り外そうとする。

「取ったらもう今後二度と口をききませ〜ん。お正月くらいまであっけらかんと言いつつ雅の笑顔に負け、悲しみに暮れながらその手を押しとどめた。」

「おお、さむ」 陵太郎がもそもそとこたつにもぐり込む。「あったか。やっぱりこたつは買って正解だったな」

隣に座った陵太郎を、夕季は何のリアクションもなくただ眺めていた。

目が合うや、咄嗟に夕季が視線をそらした。

「……またいじわるされてるのか？」

そろりと夕季が視線を戻す。

陵太郎が顔を向けて笑っていた。

「推薦、決まってよかったな。おまえならもつと上の高校でも余裕だろうけど、こればかりは仕方ないからな」

「……。別に何も……」

「そうか」熱苦しげに笑う。「残念だがこれからは生徒と教師の立場だ。学校では先生と呼べよ」

「はい、先生」

「いや、今はまだいいからな……」

奇声に顔を向けると、桔平と雅がゲームを始めようとしているところだった。夕季同様、二人とも三角帽を被っている。髭付き丸めがねのオプシオンもオマケだった。

「けっぺーさん、そこ違う！」

「いや、待て、みっちゃん……」

「壁に肩擦ってるよ！」

「わかってる、わかってるって！」

「Ｌボタンでかまえるの！　こうだよ、こう」

「いや、わかってんだけど難しくて。あれ、これ取れねえな……」

「それ、アイテムじゃなくて床のシミ。オオボケ？」

「このメガネ取ってもいいか？　でけえ鼻が邪魔で何も見えねえ」

「取ったら冬休み中、毎日ランチとケーキバイキングおごってもらいます。当然口は一生ききませんが」

「俺はそれを黙って受け入れるしかねえのか……」

「おかしいよ。女子高生と一緒にランチに行けるだけでもありがたいってのに。その上ケーキバイキングもだよ。もう、びっくりだよ」

「この野郎、本気だな。自信満々に言い切りやがった顔に一ミリも迷いがねえ。だが、妙にむかつくのに、何故か許してしまう自分が情けねえ」

「よかった、かわいくて」

「三十になってもおんなじこと言いやがったら、ゲンコツでぶん殴ってやるからな……」

「ああ、また！ もうへたぴー！ 貸して！」

「へたぴーで……」

コントローラーを雅がひったくる。

「とう！」

「ハーブ取っただけだろ……」

「あれ？ 見たことあるよ、ここ？ おかしい！ 何だか同じ部屋ばかり。このゲーム手抜きだよ」

「いや、そこさっき三回も入ったろ」

「え？ え？」

「まーた、おんなじドア開けちまったな。なんにもねえとこなのに」
「わかってるよ。ひよつとしたら五回目くらいにはラスボスが出るかもしれないかと思って」

「まだ最初の部屋出たばかりじゃねえか。だいたいセーブするところにラスボスが出るわけねえだろ」

「あ、なんか飲んじゃった」

「さっき取った回復アイテムだろ、それ。ノーダメなのにもったいねえな」

「食べる前に飲む！」

「ああ！ そっち、ゾンビいんだろ！」

「わかってるよ！ 死ね！ えい！ えい！」

「おい、手に武器なんも持ってねえぞ」

「そんなのわかってるよ！」

「わかってんのかよ……」

「えい！ えい！」

「ああ、おい、シャクシャクされてんぞ。連打しろって。逃げろって。おい、肩、壁擦ってんだろ」

「おかしいよ、これ！」

「親指でポーズ押しちゃってんだよ。あ、またかじられてんぞ。ほら、足引きずってるってばよ。早くなんか飲んどけって」

「もう、メガネ邪魔！」

「あっさり取っちまったな」

「気が散るから黙ってて！」

「いや、俺よりへたぴーだろ……」

ぼうつとその様子を眺めている夕季に陵太郎が気づく。

「つまんないか？」

視線だけで夕季が答える。小さく首を横へ振った。

「そうか」すると安心したように陵太郎が笑った。「来年はもっと楽しくなるといいな」

夕季の皿へ自分の苺を乗せる。

それと陵太郎を交互に見比べ、夕季が戸惑いの表情を見せた。

「ん？」ケーキを頬張りながら視線を合わせる。「好きだろ、苺」

「……」

「雅がどうしてもおまえを呼ぶって言い張ってな。俺は無理やりはどうかと思ったんだが、鼻の穴に指を突っ込んででも連れて来るってきかないんだ。礼也は音信不通で諦めたけどな。桔平さんも、おまえらをぜひ呼んでやれって」

「……」

「少しくらい話しかけてやれよ。あの人もおまえのことを気にかけてくれているんだからな」

「……」

「……。おまえまで俺のことをウザいとか言うのか？」

「……」

夕季が口をつぐむ。

その戸惑いが、決して拒絶ではないことを陵太郎は知っていた。

「いつでも遊びに来いよ。こたつに入りに来るだけでもいいから」

「……。ん」

「あゝれ〜！」

雅の絶叫に二人が振り返った。

「あゝあ、死んじまったじゃねえか。すげえカジられたな」

「もう、信じられない！ ゾンビ、キモい！」雅が痼癢を起こす。

「ウザい！ お兄ちゃんみたい！」

「おまえな……」

夕季が少しだけ表情を和らげた。

*

宴もたけなわの頃合い、缶チューハイを片手に、桔平が正面の夕季へ目をやる。

「何だ？ またそんなモンかぶらされてんのか？」

桔平に言われ、夕季が不服そうに口を尖らせた。

「だって、取るとみやちゃんが……」

夕季の頭の上にはパーティー用の三角帽子が乗せられていた。顎紐までしっかりと着け、キンキラの飾り付けと相まって、その仏頂面とのマッチングはとりわけ有り得ないものだと言えた。

「おまえはみっちゃんの命令には素直に服従すんだな。俺が何か言っても軽くスルーするくせによ」

「別にスルーしているわけじゃ……」

夕季と目が合い、桔平が思い出したようにそれを口にした。

「お、そうだ」ポケットをごそごそとさばくり、小さなフィギュアを取り出す。十個以上もあった。「これだ、夕季。エルバラ。全三十種類って、いったいどれだけ買わせようってハラだ？」

じつと凝視する夕季。自分が持っていないものも多く、興味津々だった。

「なんだ、欲しいのか、おまえ」

「……別に」

「早く言えって。やったのによ。結構捨てちまったぞ。色違いのオンドレとかもあったんだけど、どっかいつちまった。欲しいんなら

また探してきてやるけど、どうすんだ」

「い、いらない……」ぷいと横を向く。その表情は明らかに欲しそ
うだった。

「オマケくらいで恩きせたりしねえから心配すんな」何の気なしに
あくびをする。「また持つてきてやるよ」

「……うん」

「パスカルだけは一個もねえんだよな。おまえ見たことねえか？」

夕季がふるふると首を振る。

「そっか。人気あんのかな……」

桔平が木場へちらと顔を向けた。

「そっぴやよ……」木場も夕季同様、三角帽を被っていた。当然、
髭付き丸めがねのオプシヨン有りで。「メガネ、すげえ広がってん
な……」

「黙れ」

「おまえまだあのガシャポンやってんのか」

「いや」グラスの牛乳を飲み干し、にやりとする。「こないだコン
プリートした」

「マジか！」真顔で夕季へ振り返った。「な、ドン引きだろ？」

「……うん」

「な！」

木場と夕季を交互に見比べ、桔平が感慨深そうに口もとをゆるめ
る。

「考えてみりゃ、一年前にはこんな光景、想像もできなかったな」

夕季がその顔を眺める。

「おまえらが仲良くアパート住まいなんてのも、一生ねえと思って
たからな。誰か一人のおかげってわけでもないんだろうけど、みん
なが腐んねえで地道に積み重ねてきたおかげだろうな」

「陵太郎さんのおかげだよ」

何気ない仕草で桔平が夕季へ顔を向ける。

夕季は握りしめたフィギュアをじっと見つめるように、ゆっくり

とそれをもう一度口にした。

「陵太郎さんのおかげだと思う。たぶん……」

「そうか……」天井を見上げ、桔平がふっと笑った。

カラになった缶を軽く振り、桔平がふと左手の腕時計に目をやる。デザインだけ高級品に似せた、どちらかと言えば安っぽい造りの金属製のそれは、色褪せ、傷つきながらも、しっかりと時を刻み続けていた。

第十五話 『サイレント・カロール』 12（後書き）

毎朝安物のトマトジュースを一缶飲んでいます。そのおかげかここ数年、口内炎になったことがありません。以前はグキツといくと必ずクレーターになっていたのに（寝ぼけて舌を嚙んで朝起きたら口内炎というパターンも数知れず）。そういえばあんなにひどかったアトピーもすっかり治ったようです。

根拠はまったくありませんが、同じような悩みを持つ方、駄目もとでやってみてはいかがでしょう。トマトアレルギーの方はやめておいてください。ちなみに花粉症には効果ありませんでした。

司令室別室で明かりもつけず、あさみは机の前に座っていた。受話器を手に、暗い海へと視線を泳がせる。雪がちらついていた。

*

「うー、さつぷ」

十二月の寒空を見上げ、制服を抱きしめるようにあさみが肩をすぼめる。

隣には、ポケットに手を入れ険しい表情で周囲を睨みつける桔平の姿があった。

「ちゃんと時計してるね。えらいえらい」

無邪気な笑顔を向けるあさみに、桔平が無愛想に振り返った。

「しねえとおまえがぎゃあぎゃあ、やかましいからじゃねえか」

「ひどい、何、それ」あさみの頬がぶくつと膨らむ。「なんだ、ちみは！」

「なんだちみはってか……」

「おかげで遅刻とかもあんまりしなくなったでしょ」

「関係ねえって……」

「関係なくない！」

「……」

「関係なくない？」

「……聞いてんのか」

「……」と桔平が顔をそむける。

それを楽しそうに眺め、あさみが再び空を見上げた。

「なんだか雪が降りそうだよ」手袋をした両手をこすりながら、クリスマスデコレーションが施された住宅の前で足を止める。きらびやかなライトアップに見とれ、寒さも忘れて瞳を輝かせた。「綺麗だね。あたし達もやろっか？」

「やらねえよ」

「やろつよ。柵なんだから」

「関係ねえだろ」

「おおありだよ。知らないの？ クリスマスツリーの木のこと」

「……。知ってるけどよ……」

「嘘だ」

「……」

あさみがにこつと笑う。

「柵ってね、魔除けの意味もあるんだって。まるでどこかの誰かさんみたい」

「俺がおまえのボディガードってことか？」

「そうとも言う。ほんとツリーの木は違っただけだね」

「……」

「ね、クリスマス、どっか行く？ デートしようか？」

「……別によ」

「あー」焼き芋の屋台を見つけ、即反応。

「……」

「食べよ。あたしおごってあげる」桔平を置き去りにし、一人で駆け出した。「すいませ〜ん」

「……」

大き目の芋を二つ選び、一つをあさみが桔平に手渡す。

「はい」

「……」

戸惑うように芋とあさみを見比べる桔平に、あさみは嬉しそうに笑ってみせた。

「時計、大事に使ってくれてるから、ご褒美」

「先輩、あたしの半分あげる」につこり笑いかけ、あさみが自分の焼き芋を半分に折って手渡した。「クリスマス・プレゼントです」

「おお、すまん。……これで終わりか？」

「あつはははは！」

受け取った焼き芋を木場がさらに二つに割り、後ろの友人へ渡す。それから嬉しそうに残りを頬張り、すぐさまつかえた。

「おっほ！　んがっ、ふんぐっ！」

「んだ、野生の雄叫びか？」

「やかましい、桔平」

木場の後ろで小さくなっている学生服に気がついた。

「んだ。茂倉とどっか行くのか？」

「ん？　ああ」胸をドンドンと叩き、芋の塊を落とし込む。後方の友人を親指でさした。「こいつがな、北中の奴らにたかられてうちの一年を助けようとしたら、囲まれて袋叩きにあつたらしいんだ。話をつけに行くところだ。三年の連中は腰が引けてて話にならないから、俺が行ってきつちりワビを入れさせる」

「殴り込みか。俺も連れてけ」

身を乗り出した桔平を木場が押しとどめる。

「駄目だ。おまえが行くと、また前みたいにメチャクチャになる」

「ざけんな。てめえだけだと、またこないだみてえに丸め込まれちゃうぞ。頭、わりいんだから」

「おい、こら、頭が悪いはないだろ、って、てめえとは何だ！　先輩に向かって！」

「メンドクせえこと言ってんな。かたっぱしからぶつたたいてきやいいじゃねえか」

「そんなことをしても何の解決にもならん。暴力で押さえ込むのは簡単だが、それでは奴らと変わらんだろう」

「真面目だな、てめえ」

「俺が真面目かどうかは知らんが、正しいことをしようとする者の心を踏みにじる行為だけは断じて許せん。って、だから、てめえと

は何だ、貴様！先輩に向かって！」

「おい、とつとと行くぞ、ゴリライモ」

「誰がゴリライモだ！」

「わりの。芋食ってやがったから間違えちまった。行くぞ、ゴリラえもん」

「おう。いい加減にしとけ」すぐに気がつく。「おう、じゃねえ！
てめえ、ゴリラえ……」

「桔平君」

あさみの声に場が静まり返る。

あさみは真顔で桔平を見つめていた。

「ケンカは駄目って言ったじゃない」

「……ケンカじゃねえよ」顔をそむけ、ぽりぽりとこめかみをかく。
「こいつが暴れねえように見張りにいくだけだ……」

「おい、こいつってのは！……」

「木場先輩」

今度は木場の番だった。

「先輩も駄目ですよ。ケンカとかしちゃ」

「……。はい……」

顔をそむけ合う二人を交互に眺め、あさみがふつと笑う。
すべてお見通しだった。

逃げるように二人が、あさみのもとから離れようとする。

意気揚々のその背中をあさみが引きとめた。

「桔平君」

そろりと振り返る桔平。

それをあさみが真っ直ぐに迎え入れた。

「ケンカとかで時計壊したら、本当に絶交だからね」

「……」むぐつと口をつぐんでから、けつ、と顔をそむけた。「……
……それでてめえみてえな口やかましいのと縁切りできんなら、願っ
たりかなったりだったの」

「おい、桔平……」

「本当に？」

「……」

表情のないあさみの顔に、桔平と木場が顔色を失う。
するとあさみはふっと笑い、二人に背中を向け、小さく朗らかに
呟いた。

「別にいいよ。そんな安物……」

その背中が桔平には淋しげに映った。

「だったら、俺によこせ」

力強く告げた木場に、不愉快そうに桔平が顔を向ける。

睨みつけるように桔平を見下ろし、木場が手のひらを差し出して
いた。

「はあ！」

「俺によこせ。俺が使う」

「ふざけんな。てめえにや、自分があるだろうが。俺にはこれし
かねえんだ！」

「だったら俺のとかえてやる。おまえが俺のを使え」

「はあ！ 俺にそんなゴリラ用の使えつてのか！」

「ゴリラ用とはどういう意味だ！」

「ゴリラ専用ってことだ！」

「そんなことはわかってる」

「だったら聞くな！」

「あのなあ、貴様！」

「うるせえ、黙ってろ」

後ろ姿のあさみに木場が訴えかける。

「おい、進藤、俺は一生大事にするからな、本人ともども。だから
俺によこすようこいつに言え」

「ふざけんな、てめえにやもつたいねえ」

「なんだと！」

「てめえはゴリラ用の使つとけ！」

「ゴリラ用とはどういう意味だ！」

「ゴリラ専用ってことだ！」

「そんなことはわかってる」

「だったら聞くな！」

「あのなあ、貴様！」

二人に背中を向けたまま、あさみが表情を和らげる。

雪がちらつき始めていた。

空を見上げ、静かにあさみが笑った。

嬉しそうに……

*

「……はい、そうです。ガイア・ストーンを彼らに剥奪されました。申し訳ありません……」雪空を見上げ、悲しげに瞳を揺らす。「お心遣い、ありがとうございます。はい、わかっています。あの日、背中を押していただかなければ、今の私はなかった。真実を知りながらなお目を伏せ、諦めることしかできなかった弱い心はどうに捨て去りました。過ぎた時は二度と戻らない。過去を懐かしむ余裕など、我々にはないはずです。本当の戦いはこれからです……」

クリスマス大会もすっかり落ち着き、光輔はこたつに突っ伏すように眠りこけてしまっていた。

「光輔、寝たいなら帰りな」

ぶすりと告げる夕季を尻目に、そつと肩に毛布をかける忍。

「いいじゃん、いいじゃん。疲れたんだよ、きつと」

「何もしてないのに」

「地球を救ってくれたじゃない。あんた達と一緒に」

「……」

「うーん、この野郎、あつち行け……。ぶつとばすぞ……」

むにやむにやと寝言を言い始める光輔に二人が注目する。

「どんな夢見てるのかな？」

「……知らない」

おもしろそうに雅が近寄ってきた。

「怖い夢でも見てるんじゃないの？ 雪女とか」

「光ちゃんのことだから、夢の中でもあたし達のために戦ってくれてるのかもね」

「……」

光輔の寝顔をじつと見つめる夕季。

忍や雅の楽しそうに笑い合う声が空間を満たしていた。

もし光輔がいなかったらどうなっていたのだろうと、ふと考えた。ほんの半年前まで、何一つ持たなかった己の境遇も含めて。

ここにある一つ一つが、当たり前のように存在するそれらが、決して当たり前ではなく、簡単に手に入るものでもなく、自分にとっては特別なものであることを知っていたからだった。

「うーん……、なんだちみは……」

「あ、続き。なんだちみはってか？」

「みやちゃん、し〜」

光輔の寝言に聞き耳をたてる三人。とりわけ夕季を除いた二人の顔は、赤ん坊を見る時のような薄笑みになっていた。

「……う〜ん、来るな」苦しげに眉間に皺を寄せた。「あっち行け、夕季……」

「光輔！」

「うわあっ！」眠ったままの状態で夕季の声に光輔が反応する。目を覚まし、現物が目の前にあることを確認して再度反応した。「うわあああああっ！」

こらえ切れずに笑い出す忍と雅の横で、夕季が不機嫌そうに、ぷいとそっぽを向いた。

わけがわからず、忍達に顔を向ける光輔。

「……なんで夕季、怒ってんだろ」

「なんでだろうね。うつ、くく……」

「あたしも直接見たわけじゃないからねえ〜、ゆーき女。……ぷっ、く」

「……何それ。……」光輔が忍と雅をまじまじと眺める。「なんで二人とも涙出てんの……」

「明日でいいのに」

忍の制止を振り切り、玄関先で靴を履き、夕季が振り返った。

「いい。買ってくる」

「そう。外、寒いよ」

「わかってる」

「気をつけてね」

「うん……」

夕季の後ろ姿を見送り、忍と雅が顔を見合わせた。

「素直に送ってくつて言えばいいのに」

「ねええ」

二人で楽しそうに笑い合った。

「さてと、もう遅いし、みやちゃん、今日泊まってく？」

「うん」満面の笑み。「夕季の日記全部読まなくちゃいけないし」
「……」

薄暗い街灯の歩道を夕季が歩いて行く。

少し前には光輔の姿が見てとれた。

「へっぷし！」光輔が振り返った。「あれ、何してんの？」

光輔の横へ並び、夕季が顎を引く。

「牛乳買いに。木場さんが全部飲んじゃったから」

「ふうん……」たいして興味もなさそうに相づちを打った。「へっぷし！」

「……。そんな薄着じゃ風邪引くよ」

コートにマフラー、ミトンで完全防寒の夕季に対し、光輔はシャツの上にジャケットを一枚羽織っているだけだった。

「昼間は結構あったかかったんだけどな。まさか本当に雪降るとは思わなかった。うゝ、ぶるるるっ！」

「木場さんに車で送ってってもらえばよかったのに」

「いや、近いからさ。それにあの人達、今日徹夜でDVD観るって言ってたから」微笑ましげに視線を流す。「つき合わされそうで、絶対」

「……。お姉ちゃんのコート借りてくれば」

「いや、さすがにそれは……、うゝ、ぶるっ！」

綿のように、蝶のように、雪の花びらが風に舞い宙に踊る。

寒さに縮こまる光輔を見かねて、夕季が自分のしていたマフラーを手渡そうとした。

「ん？ いいって」

「いいよ、してって」

「いや、本当にいいから」

口をへの字に曲げ、ぐっ、と夕季が身がまえる。

それ以上断る理由が光輔にはなかった。

「……んじゃ、お言葉に甘えて」

「……ん」

「うお、あつたけ」

「……」

街灯の明かりに揺れる、花びらのような白雪を二人が眺める。

それが本物かどうか確信はない。だが、たとえプログラムによってもたらされたものとしても、今はそれを否定する気持ちにはならなかった。

「積もるかな？」

「風があるから積もらないと思う。道は凍るだろうけど」

「え、マジ？ 積もったら明日雪合戦やろうと思ってたのに」

「……。誰と」

「え？ おまえとだけど」

「一人でやれば」

「……一人で？」

「……」

コンビニエンス・ストアの店内には雪を連想させるデコレーションが施され、クリスマススを彩るメロディが静かに流れていた。ケーキ販売の特設ブースに、サンタクロースの格好の店員達。そこへ集う客の顔もどことなく穏やかに映り、ゆるやかな雰囲気をももたせていた。

まるで人間達の争い事すべてがなくなった、平和な世界であるがごとくに。

レジ袋を手に、夕季が店の外へ出る。

それを追いかけるように光輔が呼び止めた。

「はい、これ」

光輔が差し出したエルバラコーヒーを夕季が受け取った。

「……ありがとう」

「まだやってたんだな。もうほとんどなかったけど」オマケの部分をはずし、夕季へ手渡す。「ダブってたら捨てといて」

「……」

夕季がじつとそれを見つめる。

まだ一度も引き当てていない、色違いのオンドレとパスカルのパイグユアだった。

二人の足もとを、さあつ、と冷たい風が吹き抜けていった。

「うおっ、さみー！」ガチガチと上下の歯を打ち鳴らし、光輔がマフラーを巻き直す。「んじゃ、俺帰る。これ、サンキューな。帰ってもさみーけどさ。マジこたつ買おっかな、電気ストーブってなんかやけどしそうだし。おまえも気をつけて帰れよ」

「光輔」

背を向けて歩き出した光輔を、夕季が呼び止めた。

「？」

「……」不思議そうに振り返る光輔をじつと見つめ、静かに夕季が告げる。「またね」

すると光輔が嬉しそうに笑った。

「またごはん食べに行くから」

「……ん」

コンビニのレジ袋をぶら下げ、夕季が家路をたどる。時間帯と雪のせいもあり、車の通りはまばらだった。

雪の粒は大きさを増し、風に舞い、街灯の光に妖しく揺れていた。首筋を冷たい風が撫でていき、ぶるつと震えてコートの襟を立てた。ミトン越しに持つ缶へ口をつけ、すする。まだ温かく、もうつとコーヒーの香りの湯気が立ち上った。

先の歩道で何気なく足を止める。

ふと、積もるかもしれない、と夕季は思った。

「……」

車道を隔てた向こう側で、人影を見かけた。

小柄な老人のようだった。風体から男だとわかる。

この寒さの中、彼はコートも着ずに、ただその場で佇んでいた。
老人が雪へ手をさしのべ、穏やかに笑う。
その手のひらの上で、白い華が舞い踊り、淡く光を発したように
見えた。

了

第十五話 『サイレント・カール』 14（後書き）

お読みいただきましてありがとうございます。

なんだかんだ言って、創作の原点がメアリースーであることは否定できません。

セイラさんと深い仲になったこともあります。ダーティがないと連邦は負けるだろうと言われたこともあります。数知れぬスパロボに乗り、必殺超人キックを放ったり、いじめっ子に尊敬されたり、おそらくヒーロー史上もっとも多くの敵と戦い、そしてハーレムを構築してきたことでしょう。血のつながらない妹は腐るほどいます。さすがに福音の人型決戦兵器には年齢制限で乗れませんでした、世紀末頃それに乗って自分が地球を救えることを信じて体を鍛えていた四十過ぎの人なら知っています……

そんなこんなで、これからよろしくおつきあいください。

第十六話 『コンフィデンス』 OP

夜の海岸線を一台の四輪駆動車が走り抜ける。

ゆるやかなカーブへさしかかり、木場は助手席で腕組みする桔平を横目で見やった。

「それは本当なのか」

「ああ」ほんのり赤らんだ顔に刻まれた表情には、一片の隙も見られない。「間違いない。あいつがそう言った。少し揺さぶってやったら、あっさりとな」

「そうか……」密度を増した雪の重なりが白い川のごとく闇から闇へ流れ続ける。「だとすれば、当然政府へも筒抜けだと考えた方がいいな」

「まあな」木場の車からシガーソケットを抜き取る桔平。両手で捻り折ると、中から小型の発信機が現れた。「凝りもせずに……」

「そいつは殺していない。また仕掛けられると面倒だから戻しておいてくれ」

「おう」

「この車だけでも十四の発信機が見つかった」

「俺のは三十以上だ」シガーソケットを元へ戻す。「いつの間に仕掛けやがったのか見当もつかねえ。部屋の中は諦めてるけどな。今のところ、夕季達の部屋には何も仕掛けられた様子はないようだ」

「この間か？ 今日か？」

「今日だ。トイレも風呂もみっちりチェックしといた。現時点では何の反応もない」

「そうか。一まず、だな」

「ああ。奴らには何も言わない方がいいだろう。いたずらに不安がらせる必要もない」

「……。そうだな」

「ま、俺らと違って、あいつらなら聞かれて困るようなこともないだろうが」

「プライベートが侵害されたことを認識してしまう方が問題だ。誰も信じられなくなるだろう」

「……違いねえ」

「ジャミングもあまり長すぎると警戒される。そろそろ切り上げるぞ」

「だな」 桔平が携帯用の電波妨害ユニットをポケットから取り出す。傍受を示すメモリがマックスまで振り切られていた。「また何かおかしいことがあったら教えてくれ。どんな小さなことでもいい。もらさずにな」

「おかしいこと、か……」

「まあな、んなことばっかでゲップが出そうだがな」 窓越しに流星のような白いぼた雪を眺める。「見えるものと戦っているうちはまだいい。フォラスは人を欺く」

「やつかいな相手だな」

「俺達の常識は一切通用しないと考えていた方がいいだろうな。心してかかっつけ。自分にはできない選択を迫られることもあるだろうからな」

「俺にもか」

「……。おまえ、笑顔で近寄って来る顔見知りの人間を殺すことができるか？ 命乞いする光輔や夕季を躊躇なく撃ち殺すことができるのか」

「！」 カツと目を見開き、訝しげに木場が眉を寄せる。「おまえにはできるのか」

「……」 桔平は何も答えず、ただ外の景色を眺め続けるだけだった。やがてぼそりと押し出す。「……できるよ、俺は」

「……。おい、もし……」 一旦言いかけ、木場がそれを思いとどまった。「いや、何でもない」

桔平が顔をそむけたままユニットの電源をオフにする。それから腕時計に目をやり、時刻を確認した。

木場もそれを一瞥する。

それから二人はフロントグラスへ向かい、一言も喋ろうとはしなかった。

雪は勢いを増し、明け方には積もりそうな気配だった。

第十六話 『コンフィデンス』 1

「おい、しの坊、こいつ何とかしろ！」

メック・トルーパーの事務所前で桔平が大声を張り上げる。

焦ったように忍が桔平へと近寄っていった。

「あ、はい。何か」

「何かじゃねえだろ、ったくよ」

「あ、ええ……」夕季へ向き直る。「何したの、夕季」

「何もしてない。この人が一人で騒いでるだけ」忍に問われ、夕季が不本意そうな顔をした。「鬱陶しい」

「なぐにいゝ！」

「こら、夕季」

「だって」

「だってじゃないでしょ」

「だってもおひけえなすつてもねえ！」

得意満面に吐き捨てる桔平の横で、雅がおもしろそうに笑った。

「あれえ、スベっちゃったねえ」

「スベっちゃったじゃねえか！ おい、しの坊。おまえのしつけが悪いから、こいつ、こんなに生意気になっちまったんだろ。何とかしろって話だ」

「はあ……。何があつたの？」

それに何も答えようとはせず、夕季がぶいとそっぽを向く。すると憤慨しながら桔平が嘆息した。ふん、と鼻息を荒げ、忍を見下ろす。

「いいか。俺が、小倉トーストがあるサ店見つけたから食いに行くぞ！ つつったら、気持ち悪いからやだ、だってよ。おかしいだろ、おまえ」

「……はあ」

「ねえ、おかしいよねえ」

「なあ、みつちゃん。こんな奴ほかつといて、二人だけで行くか？」

「パス」

「パス……」

桔平の顔を見つめ、忍が眉を寄せた。

「……。何ですか、それ」

「はあ、おまえもか」あきれたように首を振る桔平。「小倉トーストつつたらアレだろ。アレに決まってんじゃねえか。わかんねえかなあ。つたく、おまえら姉妹には常識ってモンがねえのか。ふざけやがって」

「……すみません」

「お姉ちゃんをいじめるな！」

突然噛みついてきた夕季に、思わず桔平が一步退いた。

「いやいや、いじめてねえけどな……」

「夕季、いい加減にしなさい」

「だって……」

「だってじゃない」

「だってもおやめになってもねえ」

「もう、黙ってて！」

「黙って……」

「いいツツ」ミだよねえ」

「こら、夕季！ 何てこと言うの！」

「だって！」

「だってじゃない！」

「……」

一瞬の沈黙。

「……。だって、なんだか、だってだって……」

「うるさい！」

「……今、誘ったじゃん、みんなで……」

「無理だと思つたらやめとけばいいのにねえ」

「やるせねえな……」

「なんて言い方するの！」 厳しい表情で夕季をたしなめ、忍が申し訳なさそうに桔平に頭を下げた。「すみません、桔平さん」

「いや、まあ、なんだ……」

「謝りなさい」

「やだ！」

「夕季！ いい加減にしなさい！」

「……」

思いがけないシビアな展開に、桔平のこめかみがヒクつき始める。「まあまあ、しの坊。夕季も悪気があってやったことじゃねえからさ……」

「桔平さんは黙っててください！」

「謝らないから」

「夕季！」

険悪な雰囲気だった。

遠目に見守る光輔と木場にはひたすら滑稽に映るだけだったのだが。

「複雑な人間模様が生まれてるな……」

「そうつすね……」

感情のともなわれない木場の呟きを、光輔も同じように流した。

「あたしは悪くない！」

「そういうこと言ってるんじゃないでしょ」

「いや、おまえら、ほんのおちやめな悪ふざけなんだから、そんなマジにならなくてもさ……」

「そういう問題じゃありません。家族間の話に口をはさまないでください」

「いやいや……」

「いつの間にか自分だけ関係なくなっちゃってオロオロだよねえ」
ただ一人、雅だけが楽しそうにはしゃいでいた。

「……ひよつとしたら、あいつのせいかも」

「……うむ」

事態は一向に改善されることなく、再び両雄が真つ向からぶつかり合う展開と相成った。

「全部この人のせいだよ！」

「何！」

「どうして人の嫌がることばかりするの。バカなの」

「ちょ、おまえ！ 軽いスキンシップだろが。別にセクハラしたわけでもねえのに、そんなこっちゃ、いつまでたっても誰も友達になつてくれねえぞ！」

「うるさい！」

「自分だって木場さんしか友達いないのにねえ」

「いねえんだよ！ 駒田の野郎、また俺に黙って合コンしやがつて、ちくしょー！ ったく、憎たらしい、も、このVの字眉毛が！」

「Vの字じゃない！」

「Vの字だ！」

「違う！」

「強気じゃねえか、てめえ。おい、みつちゃん、鏡持ってねえか？」

「あるですよ」

「あ、サンキュー」雅から子猫を象った手鏡を受け取る。「お、かわいいな。にゃんこ先生か？」

「うん。全然違う」

「やつぱりな。全然違うもんな」ぐいつと夕季へ突き出した。「ほれ、見てみる」

身を乗り出して夕季が覗き込む。返す刀で桔平の顔を睨みつけた。

「全然Vの字じゃない」

「どこがだ！ おまえ、どこ見てやがんだ！ 腹でもイテえのか！」

「……」

「てめえ、そうやって眉間に皺寄せて、Vの字がWになってんのもわかんねえだろ！」

「……」

「口はへの字でよお。おまえの顔はマンガか！」

「描きやすそうだよねえ」

「なあ、センスねえよなあ」

「……」

「上はVの字、下はへの字、すぐに怒ってそのうちW、なぐんだ！」

「……」

「なぐんだっ！」

「はい」

雅が嬉しそうに手をあげる。

「はい、みっちゃん」

「夕季」

「ぴんぽん」

「やたっ」

「二十ポイント。今のとこトップだな」

「気仙沼から来ました、こだまみやび十七歳、好きな食べ物は八宝菜！ イチ悪そうな奴はだいたいトモダチ、優勝目ざして頑張りマス！ でも最後の問題は二百ポイントなんだよねえ」

「まあ、お約束だからな。こればかりは俺一人の力じゃなんともしかねえ」

「解散総選挙させちゃうくらいの影響力あるのにねえ」

むつとなり、夕季が折れそうなほどへの字口を突き上げた。

「鼻毛がボーボー、鼻毛がボーボー、だーれだ」

「んあ？」

「……」

「……。おい、そりゃあ、俺のことか？」

「正解」

「やった。桔平さんの逆転優勝だね」

「やったぞ！ くそ、てめえ！」 凄まじい形相で夕季から鏡をひったくる。くるりと返し、ぶちぶちと鼻毛抜きを開始した。「ぬな、

ぬおっ！ あ、いて！」

「やめておくんなまし！ 鏡がかわいそう！」雅の顔が青ざめる。

「ああ、にゃんこ先生が！」

そんなことなどおかまいなしの桔平を、夕季が蔑んだ表情で見下ろす。

「いて、いつつ、ち、縮む、タマが……」

「縮んでなくなれ！」

圧倒され傍観していた忍がようやく呪縛から解放され、悲しげに眉を寄せた。

「夕季、今のはちょっといただけないかも」

「……だって」

「女の子なんだし、いくらなんでもそれは……」

「すげーこと言われた！ 夕季にすげーこと言われた！」

忍の目が点になる。

「なんて下品な野郎だ。女子高生のくせに。ひゃー！」

「……なんだか喜んでるみたい、だね」

「ねー、大喜びだよねー」

忍と雅が顔を見合わせた。

「おい、木場！ 今、夕季がな……」

「……」

一段落の後、光輔らはメガルを出て帰路についていた。

「あんた、なんで髪切っちゃったの？」

信号待ちのタイミングで、忍からの何気ない問いかけに、夕季が顔を向ける。

助手席で光輔も聞き耳を立てた。

「別に……。特に理由なんてないけど」

夕季の髪は以前より短く、長めのショートカットという感じだった。切った分量はそれほど多くもなかったが、それだけでもかなり印象が違って見える。

「それだと縛らなくてもいいかもね。前の似合ってたのにな。黒崎さんなんてあんたのことカッコイイとか言ってたんだよ」

「やめて」

「なんだか、ファンクラブ作るとか言ってたような気もする」

「……。誰の」

「夕季の」

「無理」

「は？ 無理？」

「そういうの、絶対無理」

「……。淋しがるよ。あの人、アイドルオタクだから。FJC四十七士とか好きだし。フージョーシーってどういう意味だろ？」

「あ、アイドルだったんだ」

乱入してきた光輔がおもしろそうに笑う。

それを夕季が睨みつけた。

やれやれ、と笑いかける忍。

「こんなに目つきの悪いアイドル、いないけどね」

「確かに悪い」

「あ、でもツンドルって言うのもアリなのかな？」

「あゝ、どっちかっていうと、ニランドルって感じかも」

口もとを結び黙り込む夕季に、二人が同時に顔を向けた。

「睨んでないね。まだ」

「いや、充分睨んどると思うけど、俺には……」

「……」

「夕季、そんな顔しない」

夕季が、ぷいと横を向いた。

卑屈な笑みを浮かべ、光輔がほころびを繕おうと努める。

「まあまあ、しいちゃん。いいって」

「でもねえ」

「まあ親しい友達同士ってことで」

「友達じゃない」

「ええ、なんで！」

夕季の心無い一言に、がびーん、と衝撃を受ける光輔。

「友達として光輔と話すことがない」

「そんなことないだろ。んと、んと……」ちらちらと様子をうかがうように無理くり絞り出した。「昨日の晩メシ何食べた？」

夕季はプンスカと怒ったまま、光輔の顔を見ようともしなかった。

「俺、ラーメン……」

第十六話 『コンフィデンス』 2

「桔平さんの場合、女友達とかだと、普段どんな会話してます？」
光輔の呼びかけに桔平が顔を上げる。

食堂で向かい合う二人。テーブルの上には桔平がたいたげたハンバーグカレーの皿が積み重なっていた。

「なんだそりゃ？ おまえだって女友達いるだろうが」

「いや、だから桔平さんの場合だとですけど。……例えばそんなに親しくない女友達、って感じの時だと、どんなかなって……」

「ん、そりゃ、とりあえずパンツの色とか聞いときやおっけーじゃねえか」

「パンツの色ですか」

「おお」

当然のようにそう答え、続けてカレーを食らう。

「いきなりすか」

「いきなりじゃねえよ。おかしいだろ、考えてもみる」

「……ええ、そうすね」気持ちを切りかえた。「じゃ、どんな感じで？」

「おいーす、元気がないぞー、もっかい！ で、ガツチリつかんだ後にだ」

「……。つまりあれですか。あいさつの後、すぐに」

「おお、そっこーだな」

「なるほど……」光輔が、うんうんと頷く。「……」

「？ おい、わかったのか？」

「ええ、桔平さんに聞いた俺がバカだったってよくわかりました」

「おいおい、随分とご挨拶じゃねえか、てめえ」光輔をジロリと睨めつける桔平。券売機の前で礼也の姿を見かけ、呼び止めた。「お

い、礼也、おまえ女の子と会話する時、どっから入る？」

「あん？」 桔平から食券代を受け取り、礼也が凶悪な顔を向ける。
「とりあえずパンツの色だろ」

すると桔平がしてやったりの顔になった。

「だよなあ。気になるよなあ、絶対」

「テッパンだつて。てか、いきなり何聞いてきやがんだつて」

「そんな鉄板、初耳すよ。カルチャーショックですつて。どこの国に行けば、そんな深夜アニメみたいな挨拶できるんすか」

光輔のツツコミに心外そうな顔を向ける桔平。

「波野ちゃんは毎朝教えてくれたぜ。とりあえず真っ先に色とディテール聞いてから、遅れておはよーの挨拶だ」

「マジか！ あの人、どんなの履いてんだ？」

礼也が身を乗り出してくる。

「すげえぞ」

「すげえのか」

「……」 あきれ顔の光輔。ちゅるるると、うどんをすすった。

「たとえばどんなのだつて」

「たとえばよ……」

業務連絡が鳴り渡る。

「……とかよ」

「！」 礼也がフンと鼻息を荒げた。「すげえつて！」

「な、すげえだろ」

「あとは？ あとは？」

「お、食いつきハンパねえな、おまえ」

「パねえつて！」

「あとな……」

業務連絡、繰り返し。

「……だ」

「……。すつげえじゃねえか！」

「すつげえだろ！」

「すっげえって！」

「……」光輔、辟易顔。「すっげえ……」

ラーメン定食を抱え、礼也が桔平の隣に座る。かたわらにフレールの紙袋を置いた。

対面では桔平のパンツ談義に胸焼けしながら、光輔が淡々と相づちを打つ。

「……て感じたな。ま、シマシマがベストチョイスだろうが」

「何言ってるんだって、あんた」

「あん？」

桔平の導き出した結論に礼也が待ったをかけた。

「ベストは……」再び業務連絡の割り込み。「……パンツに決まりだって」

「ああん！」露骨に顔をゆがめ、親のかたきめとばかりに礼也を睨みつける。「んなもん履いてる奴、見たことねえぞ。都市伝説だろ」

「んなこたねって。俺あ、実際この目で見たんだからよ。ありや確かに……」そして業務連絡繰り返し。「……パンツだったって」

「はああ！ 昼間っから取り返しのかねえ夢見てんじゃねえぞ、おまえ」

「んとだつての！ シマシマこそありえねえぞ。んなの、狙ってっと思えねえ。リアルだと、ブルマとおんなじで絶滅種だろ」

「いや、だから見たんだって。俺は自分が経験したことしか口にしねえ」

「昼間から安酒かつくらって酔っ払ってんじゃねえって」

「んだと！ てめえこそふざけたクスリやらかして屋気楼でも見たんじゃねえのか」

「おいこら、取り返しのかねえギャグかましてんじゃねえぞ！」

「ああ！」

「……」睨み合う二人を光輔は冷やかに眺めていた。ちゅるるる、ポンと、うどんをすすする。汁が目に入り、顔をしかめた。「うわあ……」

「わかったか、光輔」

「ええ、わかりました」指で目をこすりながら重々しく頷く。「な
んで桔平さん達が女の子に嫌われるのかはつきり」

「おまえってばよ!……」

「達って何だ! 達って!」桔平以上のヒートをぶちかます礼也。

「俺も含まれてんのか! そんなに!」

「入ってないと思ってたのか?」

「んだ、てめえ! スルーできねえぞ! 俺をこのオッサンとイ
ブンで取り扱いやがって、黙ってられっか!」

「おい、礼也、てめえも大概だ!」

「俺の身にもなってみろって!」

「俺の身にもなってみろ……」

そこへ天ぷら蕎麦を手に木場がやってきた。淀んだ空気に触れ、
一瞬でタイミングを誤ったことに気がつく。

「おい、木場。おまえ何パンツが好きだ」

「何パンツ……」

「んなの、決まってるっての……」礼也の声と時報を告げるチャイ
ムが重なった。「……パンツだよな。ガチで」

「いや、シマシマだろ。ベストチョイスだろ」

「……」

口もとをガッチリと結び、木場がくるりと背中を向ける。
それを回避不可能のホーミング・ミサイル達が追尾した。

「おい、木場。逃げんのか、てめえ」

「俺ら、自爆覚悟でイテえカミングアウトこいてんだから、あんた
も言えって」

「卑怯だぞ、てめえ」

「な!」

「そうだって、卑怯だったの」

「何だと!」

「おい、礼也。もうこいつは相手にするな」

「するかつて、こんな卑怯者」

「きわめてちつぽけな勇氣も出せねえチンケなゴリライモだからな」

「せめて好きな色くらい言えつて。ピンクとかよ」

「どうせこいつのことだ。純白が好きとか言い出すに決まってるがな」

「な！」

「マジかよ。そいつああ、イテえな」

「な、イテえだろ。おい、木場。おまえ、しの坊がドドメカラーのパンティーだったらどうするよ」

「何を！ 貴様……」

「それもイテえな」ズルン、ズルン、とラーメンを流し込みながら、礼也が憎まれ口を叩く。「パンティーって言い方が輪をかけてイテえ。くあつ！ 汁が目に入つたつて！」

「なあ。ま、しの坊のことだ、案外花ガラだったりしてな。シマシマつて顔でもねえし」

「あのツラでティーバックとかも勘弁してほしいつて」

「ありえねえな」

「ありえねっしょ」

「おい、どうすんだ、木場」

「どうすんだつての」

意気投合の二人が再び木場の追い込みにかかった。

断崖絶壁に立たされチラチラと目配せする木場の横で、光輔は懸命に空気のふりを装っていた。

「……。おい、おまえらしい加減に……」通りかかった忍の姿を確認し、木場の顔が青ざめる。「……」

忍は木場の方を見ようともしなかった。

「あれ、リアクションすらねえぞ……」

桔平の呟きを捨て置き、木場が立ち上がる。

「おい、忍、あのな……」

途端に忍が振り返り、キッと木場を睨みつけた。

「白です！」

「……」

「おい、しの坊、あのな……」

返す刀で桔平を睨みつける忍。

「白の縞々です！ 何か！」

「いや、何もねえが。…… すぐえ角度のVの字眉毛だ」

「白の縞々って、何だ？」

「花柄のティーバッグだけど文句あるの！」メロンパンをくわえた礼也の何気ない呟きを、忍が全力で叩き落とした。「あんたはメロンパンでも食べてなさい！」

「…… いや、言われなくても食うけどよ」ぽりぽり。「ティーバッグって……」

頭頂からプンスカと高温の蒸気を発し、コンクリートの床も踏み抜かんばかりの勢いで忍が券売機へと向かった。

「おい、待て、忍」追いかける木場。「おまえは誤解している」

「してません！」

「いや、あのな、俺の話を聞け」

「聞きません！」

「おごってやるから」

「いりません！」

「いりません？……」

「…… しいちゃん、怒ると怖い」光輔がおそろおそろ口を開く。「やつぱりこの話題は……」

「何だ、あいつ。おかしいんじゃないか」

「おかしいって」

驚愕の表情で光輔は、懲りない二人を見続けた。

「じゃ、仮にですけど、仮にその女友達が夕季だとしても、その質問できますか？」

「ああん、と桔平が振り返る。

「たりめーだろ。関係ねえぞ、誰だろうと。な、礼也」

「……いや、おりゃ、いいわ」

拍子抜けしたように桔平が眉をくゆらせる。

「おいおい、なんだなんだ。おまえも意外と……」

その時、桔平の眼前に一個の影が敢然と立ちはだかった。

わけがわからずとも冷やかなまなざしをただ差し向ける、への字口のVの字眉毛が。

「……」ようやく辿り着いたセーブポイントの寸前でブレイカーが落ちた時のやるせなさを漂わせ、桔平が夕季を見上げる。「また芸術的なVの字だな……」

「どうした、桔平」忍に叩きのめされ、すっかりやさぐれてしまった木場が、ブバツバツと蕎麦をぶち込みながら反撃に出た。「どいうふうに聞けばいい。教えてくれ。うおっ、汁が目……」

「早く言えって」礼也が裏切った。「もう今さらなんともなんねえから、ハラくくって笑いモンになっとけって」

「てめえ……」顔色を失い、自嘲気味に笑ってみせた。「ま、仮にも部下だしな。友達だったらいいんだが、部下にそういうこと言うと、セクハラになっちまうし」

「セクハラにそんな定義はないぞ」

木場へ振り返り、情けない顔で桔平が救いを求める。

「いや、もうすでに心が折れまくるくらい睨まれてんだが、それでも俺は結果の見えるチャレンジをかまさなくちゃなんねえのか……」

ふと思ひ立ち、光輔がポンと手を叩く。

「あ、夕季、さっきさ……」

「光輔！」

必死の形相で桔平が立ち上がった。

「……み、やびが、探してたみたいだったけど。メールうっても返ってこないとか……」呆然と立ちつくす桔平を、光輔が不思議そうに眺めた。「……何すか？」

「……」

ぐぐい、と光輔を睨みつける桔平。

「……お、れのみっちゃんからのメールはメシの催促ばかりなんだけどな……」

「そう、すか。……すいません」

「……。だぞ……」

「……。どうしたんすか、涙目になってますけど」

「カレーが目に入っただけだ」

「……そうすか」

「……」表情もなく見つめる夕季に千円札を手渡す。「好きなものを食べ。しの坊の分もだ」

「……」

「ホンの気持ちだ」

「……いいけど」

第十六話 『コンフィデンス』 3

「何、これ」

休憩所で光輔から差し出されたチケットを見て、夕季が動きを止める。

そんなことなどまるでおかまいなしで、光輔は勝手に話を進め始めた。

「山凌ランドが今日から大晦日まで半額フェアやっててさ。その前売り券が一枚余ってるんだけど、どうかなって……」

「行かない」即答。

それでも食い下がる光輔。

「いやいや。楽しいよ、きつと。三十日にみんなと約束してんだけど、乗り物とか乗り放題だし。それでたったの……」

「いい」

「……。いや、あのさ、約束してた奴が急に都合が悪くなってさ……」

……

「あたしには関係ない。他の人誘えば」

「他いないんだよ。雅も何だか忙しそうだったからさ……」

「あたしも忙しい」

「うーん、困ったなあ。もう買っちゃってあるんだよな。俺、まとめて立て替えてるから、誰も行かないと自腹だよ。うつつ……」

「……」ふん、と一息つき、あきれたように光輔を見据える。「いくら」

すると光輔が嬉しそうに顔を上げた。

「え、行ってくれるの？」

「行かない。券だけ買ってあげる」

途端にがっかりの光輔。

「なんだ。だったらいい。それじゃ申し訳ないから」

「……」

「無理言つてごめん。ありがと、夕季」

光輔が肩を落とし背中を向ける。

夕季もへの字口でそれを眺め、くるりと背中を向けた。

「おい」

息を切らせ、待ち合わせの駅へ光輔が現れる。

そこではすでに、篠原みずきや羽柴祐作といった、光輔の友人達が勢ぞろいしていた。

ツンツンすだれ頭の曾我茂樹が腰に手をあてがい、ふん、と光輔を見下ろす。

「おせーぞ、光輔！」

「ああ、悪い悪い」親指をくい、と後ろへ向けた。「こいつんち寄つてたら遅くなっちゃって」

「はあ！」

光輔の後方には、夕季の無愛想な顔があった。

途端に茂樹が直立不動の姿勢となり、夕季の姿に釘づけになる。

「あ、古閑さん、髪切っ……」

「光輔が何か食べたいつて言うから遅くなったんじゃない！」

顎を引き、夕季が光輔を睨みつける。

顔を引きつらせ、光輔が振り返った。

「いや、朝ご飯はちゃんと食べなくちゃ……」

「自分んちで食べてこい！」

「でもさ、せつかくしいちゃんが作ってくれたんだしさ……」

「お金取るよ！」

「まあまあそう言わんと」

「？」まじまじとみずきが茂樹の顔を見上げた。「曾我君、どうしたの？」

茂樹は顔を赤らめ、光輔達のやりとりを複雑そうに眺めていた。

「いや、なんでも……」

「？」

メンツがそろい、あまり馴染みのないメンバーの簡単な紹介が始まった。

「祥子達と同じクラスの熊本麻衣です」

「同じく津山千春です」

「麻衣ちゃんと千春ちゃんね」気持ちを立て直した茂樹が鼻の下を伸ばし、二人を迎え入れる。「俺、曾我茂樹。よろしく」

「茂樹、またエロ眼鏡かけてる」小柄な少年、宮田隆雄からのツッコミが入った。「3Dの」

「メガネなんてかけてねえっちゅうの！……」

茂樹を押し分け、みずきが二人のクラスメイトへ飛びかかった。つた。

「まいゝ、ちはゝ、久しぶりゝ」

抱き合ったまま、三人がくるくる回り出す。

すると麻衣と千春がしごく冷めた表情を向け合った。

「おとつい会ったよね、ちは」

「私は昨日も会ったけど」

男女四人ずつの会合は楽しげな雰囲気の中、深く静かに進行していった。

一人、憮然と立ちつくす夕季を除いて。

不穏な様子に気づき、光輔が振り返る。

すると夕季が憎悪のまなざしで光輔を睨みつけていた。

「……あはは」

口をへの字に曲げる夕季から、光輔が慌てて顔をそむける。

「あ、こいつ、古閑夕季。よろしくね！」

羽柴祐作の隣で笑っていた園馬祥子が顔を向けた。

「あ、古閑さんね。知ってる、知ってる」

麻衣と千春が続く。

「有名人だもんね」

「すごく頭いいんだよね。今度勉強教えて」

すると夕季はへの字状態を解除し、小さくお辞儀してからみなへ背中を向けた。

祥子らの目が点になる。

「あれあれえ……」

焦ったように追いかける光輔が、後ろから夕季を呼び止めた。

「夕季、どうしたんだよ」

怒りもあらわに振り返る夕季。

「嘘ついた」

「……へ？」

「四人ずついるじゃない。あたしなんていなくていい」

「いや、違うつて。そうじゃないつて。本当はもう一人来るはずだったんだけど、急に駄目になったつて」しどろもどろ。加えて妙なアクションのオマケ付きは、不審なことこの上なし。「栗原っているだろ。おまえのクラスにさ。あいつが来るはずだったんだけど、急に都合が悪くなつてさ。風邪ひいたとか言つてたかな」

「……」

「本当だつて。なんですすぐ疑うんだよ」真顔で真っ直ぐに夕季を見据える。「俺の目を見るよ。これが嘘ついてる奴の目か？」

ギロリと睨みつける夕季。

またたく間に後ろめたそうな顔つきになり、光輔が目をそらした。
「いや、普通に見てくれればいいから……」

山凌ランドは地元顧客を対象とした山あいの遊園地だった。小規模だが、ジェットコースター、観覧車、お化け屋敷、プールと、アクションの類はまずまず充実しており、家族連れが一日を過ごすためのポリュウムとしては必要充分だった。近年ではアクアライの開通によって、遠方からの来場者も増えつつあり、また中高生のデートスポットとしても重宝されていた。

その中のスケートリンク内に光輔達はいた。ちなみに夏は屋根が

取り外され、流れるプールへと変身する。

夕季はでん部を突き出すようにサポートバーにしがみついていた。動くこともままならず、ひくひくと太腿を震わせる。

そこへ光輔が颯爽と現れた。

「へえ、おまえにも苦手なものがあつたんだな」

涼しげに笑いかける光輔を、夕季がジロリと睨みつけた。

「仕方ないでしょ、初めてなんだから。こんなのやるなんて聞いてなかった」

「言ったら来ないだろうって思ってたさ。おまえのことだから、たぶんスカートとか履いてこないだろうし、別にいいかなって」

「よくない！ 膝がびしょびしょで冷た……！」ジーンズが裂けそうなほど大きく足を開く。「あ、う……」

「あんま大股開くとジパン破れちゃうぞ」

「破れたら弁償！」

「なんで……」

一拍置き、光輔がおもしろそうに笑った。

「でもさ、おまえって何でもできちゃうイメージあったから、そういうカッコって結構新鮮かも」

「新鮮かも、じゃない！ あっ！」膝をそろえたまま、へっぴり腰が突き上がる。「ううううう……」

「ははっ。なんだか、お婆ちゃんみたいだぞ」

「……。帰る！」キツとなつて振り返る夕季。振り向いた瞬間バランスを崩し、内股を閉めた状態で膝から下を開き、ゆるやかにお尻から落ちていった。「う、ふう……」

こともなげにその手をつかみ助け上げる光輔を、恨めしそうな表情で夕季が見上げた。

「ねえ、あれ使えば？」初心者用の補助具を指さす。アイスホッケーのゴールを小さくしたような金属のフレームに、小さな子供達がつかまっていた。「お婆ちゃん」

「光輔！」

「あ、涙目。カレーでも目に入っただの？」

「うるさいっ！」

「あいつら、楽しそうだな」

ゆるゆると氷の上を滑りながら、耳にピアスをつけた茶髪の少年が呟く。

羽柴祐作だった。

祥子の手を引きながら、無言で光輔達を見続けるみずきへと振り返る。

「どうした？ 篠原」

「……」

同じく無言の茂樹へも振り返った。

「どうした？ 茂樹」

「……」

祐作の声も耳に入らない様子で、二人はじつと光輔と夕季の姿を目で追っていた。

そして一時間後。

人が乱雑に入り乱れるスケートリンクの中を、すいすいと縫うようにすり抜ける夕季の姿があった。フォームはすっかり上級者のそれをトレースし、転んだ子供を避けるために、急激なターンで氷を刻みつけた。

先と違う理由で目が釘づけになる茂樹やみずき。

「すごいな。一時間前まで手すりから手も離せなかったのに」

「あたしよりうまくなっちゃったみたい」

「あたしより、だろ？」

祐作達も感心して眺めていた。

「あいつは負けず嫌いだから」

ぼそりと呟いた光輔に全員が顔を向ける。

「そんなに自分が自分が、って感じでもなさそうだけど」

「みんなにはね」みずきの目を見つめ、光輔が受ける。「でも自分だけに負けたくないみたいだよ」

「ふうん……」

「昔からそうだ。みんなより後から始めても、すぐにものにしちゃうからな。何でも一生懸命でさ、あいつ見てると、努力でどうにかならないものなんてないんじゃないかって気がしてくる」穏やかに、少しだけ淋しそうに光輔が笑った。「頑張っつて、やっと追いついたかなって思っつたら、またすぐに離されてさ、いつまでたつても追いつけやしない。全然かなわないよ。まるで違う世界の人間みたいだ」
「才能なんじゃねえの？」祐作があきれたように横を向く。「持つてる奴は全部持つてつちまうもんだ」

「……あたしもそう思う」

「ま、努力できる才能つてのも結構アリかもな。器用貧乏つて感じでもないみたいだし。だつたらさ、俺らが適当に努力したつて絶対にかねわねえわな」

斜にかまえた祐作の発言に目を細める光輔。

「そうかもしれない。でも、あいつの一番の才能はさ……」そこでやめる。それから涼しげに夕季を眺めた。「……」

第十六話 『コンフィデンス』 4

みなと離れ、一人ベンチで休憩する夕季へ光輔が近づいて行った。

「夕季、何か飲む？」

「……」

ものも言わずに夕季が立ち上がる。

光輔の視線がその後を追いかけた。

「どこ行くの？」

「トイレ」

「ああ、頑張つてな」

「何が！」

「いやいや……」

「髪がぼさぼさになってないか見てくるの！」

「あ、だったら、なってるからわざわざ確認にいく必要ないよ」

「……」

「……あれ？」

ふん、と鼻から憤りを押し出し、人ごみをすり抜けて夕季が公衆トイレへと向かう。

轟音に顔を上げると、頭上をついさつき乗ったばかりのジェットコースターが通り過ぎて行くところだった。

ジェットコースターに乗ったのは初めてだった。絶叫する光輔の横で口を真っ直ぐに結び、まばたきもせずに保安用のバーにしがみつく。

観覧車でも一人はしゃぐ光輔を横目に、上からの景色を堪能した。常から竜王で空を縦横無尽に飛び回っているはずなのに、それはしごく新鮮な感覚だった。

トイレの入り口付近で祥子やみずきの声が聞こえ、夕季は足を止

めた。

「なんかさ、とっつきにくいんだよね、あの子」

「うん、まあ……」祥子の悪態を気遣いで受けとめるみずき。「悪い人じゃないみたいだけどね」

「でもさ、あんなだけもの言わないと、腹の中全然わかんないよ。お昼食べてる時だって、穂村君が話しかけなきゃ全然話さなかったし」「あたし達と共通の話題もなさそうだし、仕方ないかも」

「あたしら見下ろしてんじゃないの？」

「それは……」戸惑いを隠せないみずき。「あるかもしれない」
夕季が、ふう、と息をつく。

つまらなそうに元の場所へと戻ると、今度は光輔達の話し声が聞こえてきた。

「おまえさ、なんであの子連れてきたの？」

無然と言い放つ祐作へ、光輔が戸惑いながら答える。

「なんでって、あいつも友達だから……」

その近くで茂樹と隆雄が会話に加わるでもなく、気まずそうに様子をつかがっていた。

「でもよ、全然とけこむ気配ねえじゃん。話しかけてもほとんど反応ねえしさ、何か女王様みたいだし。大人しいだけじゃなくて、あそこまでいくと拒否ってんじゃないかねえかって思うぜ。祥子や篠原達もドン引きだったじゃん」

「苦手なんだよ。知らない人と話すのがさ。一度打ち解けると結構喋るんだけどさ」

「じゃ、わざわざ連れてこなくてもいいじゃん。あの子も迷惑だったんじゃない？」

「ううん……」

「なんでよ。おまえ、あの子になんかあんの？ ひけめみたいなの」

「ないよ、そんなの」

「じゃ何？ なんだあんなに氣い遣ってんの。さっきからホストみてえだぜ」

「……………」

光輔が黙り込む。しばらくして、言い憎そうにそれを口にした。

「……最近、あいつが笑ったとこ見たことなかったから」

「はあ？」

「……………」

夕季は黙って二人の会話に聞き耳を立てていた。後ろへ手をまわし、つまらなそうに壁にもたれかかる。

「あれでさ、笑うと結構いい顔するんだぜ」

「ぜんっぜん想像できねえ」

「ははっ。だろっけど……………」

「あ……………」

気配に気づき光輔達が振り返る。

夕季が立っていた。穏やかな顔を向けながら。

静かに、そして申し訳なさそうに夕季が切り出す。

「光輔。あたし用ができたから帰るね」

「え。なんだよ、用って」

「急用」

「……………どうしても行かなくちゃいけないのかよ」

「……………うん」

「そっか……………」何とはなしにその理由を悟る光輔。「……………じゃ、し

ようがない、か。気をつけてな」

「うん……………」

みずき達がやって来る。ただならぬ雰囲気を感じ取り、黙ってこの成り行きを見守ることにした。

「……………。夕季、ごめん。無理に誘って」

「……………」

祐作が顔をそむける。

茂樹は困ったような表情で、光輔と夕季を交互に眺めていた。

三步、四歩と重い足取りで歩き、ふいに夕季が振り返る。それから光輔を見つめ、淋しそうに笑った。

「光輔、ありがと。楽しかった」

その直撃を受け、茂樹の心臓がドクッと音を立てた。

「……」上ずるように光輔が押し出す。「……あ、明日行くって、しいちゃんに言っというてよ」

「……うん、わかった」

控えめな笑み。それから振り返ることなく、夕季はみなものいる場所から離れていった。

「……」複雑な心境のまま、まじまじと茂樹の顔を眺めるみずき。

「曾我君、どうしたの？」

「……あ、ううん……」

「……。またハート射抜かれちゃったの？」

「……」

そろりと祐作が参入してきた。

「どした？」

「うん。曾我君がまた射抜かれちゃったみたいなの」

「犬枯れちゃった？」

「うん」

「……大変だな」

「大変だと思う……」

肩を落とし、とぼとぼと夕季が出口へ向かう。

昼もすぎ、また場内が賑わい始めていた。

いくつもの光景が夕季の心を素通りしていく。

お化け屋敷、コーヒークップ、メリーゴーラウンド。人との交わりを拒絶してきた夕季にとって、そのどれもが初めて触れるものばかりだった。そして光輔はそのすべてを知っている。夕季と正対な生き方を選び、尚且つ夕季の目指した目標すら置き去りにするほどの心を持ち合わせながら。

認めざるをえなかった。

光輔に触れるたび、夕季はそんな気持ちにとらわれる。妙な敗北

感を感じずにはいられなくなる。それは決して光輔のせいではない。己の生き方を否定するわけでもない。ただ、自分が隠してきた弱さが浮き上がるのが嫌で仕方がなかったのである。

夕季にはわかっていた。

光輔と自分が友達と呼べるような間柄ではないことを。

その感情はいつまでも近づくことがなく、距離を置いて接するべきということも。

互いが傷つかないためにも……

「！」

響き渡る絶叫に心を引き戻される。

それは明らかにそれまでとは異なった反応だった。

コースターの上からの叫び声とは別の類の、渦巻くような悲鳴。

場内を引き裂かんばかりの絶叫の波に夕季が振り返ると、観覧車越しに異形の悪魔が凶悪なるその姿をあらわにしていた。

第十六話 『コンフィデンス』 5

「何！ 恩田代にもか！」司令室別室で報告を受け、あさみへと振り返る桔平。「どうなってやがる、これで十体目だ。奴ら、一斉に地面からわき出てきやがったってのか！」

腕組みをしながら、まばたきもせずにあさみが静かに口を開いた。
「これで全部かしらね……」

「知るか！ わかつてんのは、とんでもねえ非常事態だってことだけだ」三つの受信器を器用に使い分けながら、あさみを睨みつける。
「礼也としか連絡がとれねえ。陸竜王とメックだけじゃ、全部は対応しきれねえぞ！」

「……。樹神さんは？」

「とつくにスタンバってる」

「そう……。空竜王と海竜王のオビディエンサーはどうしたの？」

「しの……。身内の話じゃ、連れと山凌ランドに遊びに行ったらしいが、二人とも電話に出ねえ」

「すみません、遅くなりました！」

息を切らせながら忍が到着する。

それすらも目に入らぬ様子で、二人が向かい合った。

「山凌ランド？ 確か……」

「おう、六体目の出現した場所のすぐそばだ。おそらく場内がパニックで電話どころじゃないんだろう。……！」着信を受け、桔平が確認する。夕季からだった。「おい、夕季！ 今どこにいやがんだ……」

逃げ惑う人々の波から抜け出し、スケートリンクの陰から夕季がアスモデウスの様子をうかがっていた。

「……。まだ動いていない。でも時々目が光ってる。いつ動き出してもおかしくなさそう」目の前で子供が転び泣き声をあげる。父親が慌てて抱きかかえていくのを夕季が目で追った。「…………え、よく聞こえない。……。光輔とは今は別々。……。うん、わかった。早く来て」

「夕季！」

通話を終了するや、絶妙のタイミングで光輔が姿を現した。

その後ろから不安げな様子で友人達が続く。

麻衣と千春は目に涙を浮かべ、互いの手を取り、怯えた顔を見合わせた。

「どうなってんだよ」きよろきよろと周りを見回す光輔。「早く桔平さん達に連絡しなくちゃ」

「もうした」

「え！」

取り乱す光輔を見据え、夕季が落ち着き払った様子で用件を伝えていった。

「大沼さん達が竜王を載せてこっちへ向かっている。礼也も。とりあえずここで落ち合う約束になっているから、あたし達はここから離れないようにって」まるで状況が理解できず、畏怖するように二人を見続ける祐作達をちらと見やった。「羽柴君達には早く安全なところへ避難してもらった方がいい」

「あ、うん……」

ようやく落ち着きを取り戻し、光輔が深呼吸する。

頃合いを見計らうように祐作が横入りしてきた。

「おい、光輔。こんなところでもたもたしてないで早く逃げようぜ」

光輔が祐作らに顔を向ける。

「おまえらだけで逃げてよ。俺、夕季とここに残る」

祐作の顔が狐につままれたようになった。

「は！ 何言ってるの、おまえ！ 逃げなきゃ、今にあのポケモンが動き出して殺されちゃうぞ！ テレビで観てんだろ！ あいつは

「ヤバいんだって」

「あ……」

「ほら、もたもたしてねえで行くぞ。古閑さんも」

光輔の手を引いて、祐作と一緒に逃げようとする。

その手を光輔が振り払った。

「光輔……」

「……」祐作から顔をそむけ、口を閉ざす光輔。

見かねて夕季が間に入ろうとした。

「光輔、羽柴君や篠原さん達と逃げて」

「！」「くわ、と目を見開く光輔。「何言っただよ、おまえ」

「あたしは大丈夫だから。礼也がいてくれれば大丈夫」涼しげに笑いかけた。「光輔はみんなと一緒に先に行って」

総勢十体ものアスモデウスが出没していることを夕季は光輔へ伝えてはいない。ただ光輔がメガルの人間であることが、友人達に露呈することを好ましくないと夕季は考えた。

また、その想いを光輔も感じ取っていたのである。

「何やってんだよ、おまえら」茂樹が二人の間に割り込んでくる。

「光輔も古閑さんも早く行こうぜ。こんなとこにいたって意味ねえだろ」

「……」

「なあ、光輔……」

「曾我君」

夕季に呼ばれ、茂樹が顔を向ける。

茂樹の見たことのない夕季の表情だった。

それからしっかりとしたまなざしで茂樹を見つめ、夕季が静かに真実を告げた。

「私、メガルの人間なの」

「！」

そこにいた誰もが衝撃を受け絶句する。

そのリアクションに、夕季がかすかに眉を寄せた。

「私はここであの化け物の様子を探って、メガルの人達へ報告しなければいけない。だからみんなは早く逃げて。光輔も」

「……」茂樹がごくりと唾を飲み込む。「……マジかよ」

硬直を解くべく、祐作が次の一手を繰り出した。

「……だったらさ、古閑さんはこのままでさ、俺達は逃げよう。ここにいても邪魔なんなるだけだろうし」

隆雄と祥子がそれに頷く。

「な、茂樹」

「……。ああ……」

「光輔もさ……」

「……俺、行けない」

「はあ！」

ぼそぼそと発し、光輔が顔を上げる。そのまなざしに光を宿して「夕季一人を置いていけない。だからみんな、行ってくれよ」

「光輔……」

「穂村君」みずきが一步前へ出た。切なそうにつないでいく。「穂村君がここに残って何ができるの。足でまといになるだけだよ。古閑さんに任せて一緒に逃げよう」

「駄目だよ。俺、そんなできない」

「どうして。古閑さんと私達とは住む世界が違う。穂村君だって……」

「俺もなんだよ！」

「！」

突然の光輔の叫び声に、そこにいた誰もが耳を疑う。静観する夕季も含めて。

それから光輔は苦しげに次の言葉を押し出していった。

「……俺もメガルの人間なんだよ」

「……」

長い長い沈黙。その度合いは、それまでのどれよりも衝撃が大きかったことを物語っていた。

「……う、そだろ」わなわなと口もとを震わせながら、祐作が光輔と向かい合った。「何言つてんの、おまえ。何、急に変なこと言っちゃってんの……」

「ほんとなんだよ」

「！」

「ほんとに俺、メガルの人間なんだよ……」

「……」

怒気を込め、祐作が光輔の肩をつかみ揺さぶる。

「何だよ、それ。つか、そんなの初耳だぞ。ふざけんなよ、おまえ！」

「祐作……」

その時だった。

「光輔！」突然声を張り上げる夕季。「動き出した！」

すると一斉に振り返るみなの前で、ギギギギと石のような体軀を軋ませながら、灰色のアスモデウスが歩き始めたのである。

光輔達の方角を目指して。

「く！」夕季が齒がみする。

祐作達は硬直してしまい、ただ異形なる対象を眺めるばかりだった。

次におとずれる爆発音に目が覚めるまで。

「！」

炎の塊がアスモデウスを真横から弾き飛ばす。引き戻された残像の後に現れたのは、真っ赤に燃え上がる巨人の姿だった。

「礼也……」着信を確認し、夕季が光輔へと振り返った。「光輔、大沼さん達が到着したみたい」

「よし、行こう」

それに夕季が頷いた。

二人が出入り口へ向かい走り出す。

みずき達はその様子をぼんやりと眺めていたが、やがて誰ともなく光輔達の後を追って走り始めた。

第十六話 『コンフィデンス』 6

山凌ランドのバス専用パーキングへ二台の大型トレーラーが乗り入れられる。

そこへ光輔と夕季が駆け寄っていった。

「大沼さん！」

光輔らの顔を確認し、大沼が眉間に力を込める。

「光輔、夕季、急いでくれ。他の個体もここへ集結しつつあるそう
だ」

「他の個体？」

不思議そうに首を傾げる光輔の様子に、大沼が夕季へ振り返った。

「話してなかったのか？」

「……。うん……」

「そうか。まあいい」アスモデウスとアクロバティックな格闘を続ける陸竜王を遠目にちらと眺め、再び二人へと向き直った。「メックではどうすることもできない。早く彼と合流してくれ」

「はい」

「わかってる」

光輔と夕季が別々のトレーラーのそれぞれの機体へと乗り込むと、本部から無線の呼び出しがかかった。

『夕季、光ちゃん』ディスプレイの中から忍が顔を見せる。『用意できた？』

「……しいちゃん、何やってんの」

『あ、うん……』光輔に指摘され、ややバツが悪そうに説明を始めた。『あたしなんかがこんなこととしてちゃおかしいんだけど、波野さんの出向期間が終わっちゃって、後任の人がまだ決まってないみたいだから、臨時で』

「……あ、そう」

続けて桔平のがなり声が響いてきた。

『俺がセクハラしたせいじゃねえからな！ な、しの坊』

『言ってますんで……』

『でもな、そう思ってたんだろうが。な、夕季』

『うん』

『なあに、うんだあ！』

『だってそうじゃない』

『俺が何をした！ 言いがかりはやめろ！』

『毎日下着の色を聞いてた』

『……あれは、ノーカンだろ』

『ノーカンじゃない』

『そんなこと言われても……』

『最低だ』

『バカやる！ セクハラとそれとは別問題だ！』

『開き直った』

『副司令、その件はまた後で』

『あ、そうだ、今はそんなことしてる場合じゃねえ』

『お姉ちゃん、気をつけてね』

『夕季、いい加減にしなさい』

『だって……』

『だってカフェラテもねえ！ てめえ、俺がしの坊なんかセクハラするわけねえだろ！』

『なんかにつて、どういう意味ですか！』

『まあまあ……』

『今のはカチーンとききました！』

『じゃセクハラしろって言ってるのか？』

『そういうことじゃないでしょう！』

『じゃ……』

『二人ともいい加減にすれば！』

『だって……』

『だって……』

思わず苦笑いの光輔。

忍がバツが悪そうな様子で気持ちを立て直した。

『あなた達、スーツは着たの？』

二人とも私服のまま竜王へと乗り込んでいた。

ヘッドセットを装着しながら夕季が答える。

「大丈夫」

『大丈夫じゃないでしょう。危険だから必ず着用しなさい』

「そんなヒマない。今から着てると時間のロスだから」

『でも危ないって言うって……』

『わかった、許可する！』

『ええ！』

『緊急事態だ。そのかわり、何としてでも全部仕留める。骨は俺が拾ってやる。いいか、くれぐれも慎重にな』

「了解！」

『ケータイの電源は切つとけよ。ぶっ壊れても知らねえぞ』

「わかってる」

『竜王に引き寄せられて奴らが集まって来たのかどうかはわからんが、ここでまとめて一網打尽にできんのは好都合だ。ガーディアンに集束して一気にカタつけ……』

『絶対着させろって言ったじゃないですかあ……』

『……』

『オビディエンサーの命にかかわるから、わがまま言っても認めるなつて。だから私は……』

『……。いや、あんな、しの坊。臨機応変っていうか……』

『すぐ勝手に変えちゃって、これじゃあ私なんて必要ないじゃないですか』

『……。いや、悪かった。ホント』

『もついいです……』

『……真面目だな、おまえ』……。『あ、コーヒーが目に入った！』
飛び上がる空竜王に続き、海竜王が大地を踏みしめ、場内を滑り
抜ける。

その様子をみずき達は物陰から見守っていた。

ガーディアンが臥竜偃月刀を横へなぎ払うと、最後のアスモデウスが胴から真つ二つに分断され、土となって大地へ還っていった。

「あっけねえもんだな」擬似コクピット内で礼也が顎を突き上げる。

「ま、雑魚が何匹来ようがこんなもんってな」

「礼也、ブレイクする」

右側の夕季へ振り返る礼也。

「おう、さっさと終わらせてパン屋行かねえと売り切れちまうからな」

「……」

その時、耳をつんざく破碎音をともない、空が大きく割れた。
ガラス片のように空の青が降りそそぎ、暗い大穴から山凌ランドを覆い隠すほどの巨大な影が現れる。

以前姿を見せた、超巨大アスモデウスだった。

「ここできやがるか……」

山のような超弩級サイズを目の当たりにし、改めて礼也達が圧倒される。

巨大アスモデウスの両眼が妖しい光を放った。

「礼也」

「今回はやる気マンマンみてえだな。光輔、気合入れていけ」

「ああ」

「礼也！ 避けて！」

夕季の呼びかけに、咄嗟に礼也が跳び上がる。

ガーディアンがいた場所目がけ、連なった貨物列車ほどの長さもある槍が襲いかかり、その跡へクレーターを穿った。

「えれえこっちゃだな……」

膨大な質量を大地へ打ちつけるだけで地鳴りが起き、数万トンもの爆発力を引き起こす。

ギロリと顔を向けたアスモデウスへ、ガーディアンが滞空したまま両腕を突き出した。

「夜叉?!」

手の甲にある平たい発射口から圧縮空気弾が放たれる。わずかな間隔をもつて連続して発射された高速のそれは、すべてアスモデウスの身体を通り抜け、地面へと突き刺さっていった。遅れて訪れた凄まじいまでの衝撃が園内の建造物を砕き割る。

「んだ、ありゃ……」

「礼也、周りに気をつけて」

不快そうに夕季を睨めつける礼也。

「ああ! んなのかまってるれっか!」

「逃げ遅れた人がいるかもしれない!」

「……。くそ!」

地響きを立て、大地に降り立つガーディアン。

「光輔、ポジションチェンジだ!」

「おう!」

ガーディアンのボディカラーが暗色の色合いを帯び、胸部の装飾部分が黄橙色に光り輝いた。

「一気にカタあつけてやる……」

木場は他のメック隊員達とともに、逃げ遅れた付近住民の救助にあたっていた。概ねかたがつき、混雑も緩和される。

轟音に顔を向けると、上空に巨大なアスモデウスの姿が見えた。その色彩とサイズは、雪山か氷山を連想させる。

挑みかかるガーディアンの攻撃はすべてアスモデウスの巨体をすり抜けていった。避けてはいるものの、アスモデウスの斬撃は確実に大地や構築物を削り落としていく。このままではいずれガーディアンも押し込まれるだろうことは明白だった。

絶句する木場。

通りの向こうに逃げ遅れた老人の姿を認め、近づこうとした時、木場が何かに気づきその足を止めた。

見覚えがある姿だと思ったからだった。

以前も逃げ遅れた老人を助けようと足を止めたことがある。だがその人影は木場が駆けつける前にその場所から姿を消していた。周囲を見回してもどこにも見当たらなかった。

ショッピングモールの、何もない広大な駐車場の真ん中で。

木場が気取られぬよう静かに近づいて行く。わずか三メートルの位置まで近寄っても、老人は木場へ振り返ろうとはしなかった。

老人は穏やかな表情でガーディアンを、否、巨大なアスモデウスを見上げていた。

アスモデウスの両眼に邪悪な光が宿った。

時を同じくして、老人の瞳が妖しく淡い光を帯びる。

「！」

それはほんの一瞬だけであり、注意深く様子をつかがっていないければ気づかないほどのかすかな輝きだった。

じりじりと木場がホルスターの銃へ手をかける。

その時、聞きなれた声が背中から追いついてきた。

「どうかしましたか」

銃に手をかけたまま、木場が視線だけを向ける。

神妙な面持ちで大沼が様子をうかがっていた。

木場のこめかみを冷たい汗が滑り落ちていく。

その切羽詰まった表情に、大沼はただならぬ状況を感じ取った。

ゴクリと生唾を飲み込み、ゆるやかに銃を抜き取る木場。

「俺はこれからこの老人を撃つ」

「！」思いがけない木場の宣言に眉をうごめかせる大沼。何があってもほとんど表情の変わることない大沼だったが、それははつきりと動揺を意味していた。

大沼から顔をそむけ、木場が老人へと向き直る。それからその頭

部へ銃口をポイントした。

その時になつて初めて老人が顔を向けた。

それはどこにでもいる普通の老人男性だった。

弱々しく、人よさげに薄笑みを浮かべ、孫と楽しそうに会話をするのが似合う、どこでも見る事ができる守られるべき立場の人間。

何の害も及ぼさない、尊ぶべき立場の人間。

この世の濁りを憂い、残された人生を正しく生きようと努める、静かなる心の持ち主。

今、その人間の生を、木場は撃ち伏せようとしていた。

引き金にかけた指先にためらいをとどめる。

それは木場の決意だった。

「……大沼。俺は取り返しのない過ちを犯すかもしれん。その時は、おまえの手で俺を……」

鳴り響く銃声。

二度音がした後、弾かれるように老人が吹き飛んでいった。

何が起こったのか理解できず、冷たいままの銃を握りしめ、木場が振り返る。

そこには両手で銃をかまえる大沼の姿があった。

大沼はまばたきすることなく、硝煙立ち昇る銃口を残像目がけてポイントし続けていた。

「大沼……」

「こつというのは、俺の役割ですよ」

木場の顔を見ようとせず、かすかに眉を揺らし、大沼が静かにそう告げた。

畏怖するように大沼を眺め、木場が老人が倒れた方向へと顔を向ける。

「！」

老人の亡骸はなかった。

否、路面へと溶けて吸い込まれていく、その形だけがシミのよう

に残ろうとしていた。

「これは……」

大沼の眩きを受け流し、木場がふう、と息を吐き出し天を仰いだ。彼方では切りかかるガーディアンをあざ笑うがごとくに、音もなく巨大アスモデウスが消滅していくところだった。

メガル本部別棟の地下五十階は暗く淀んでいた。冷気をともし、冷気のように、冷たく澄み渡る空気だけが空間を満たしている。

戦闘終了とともに薄明かりが灯り、巨大な石像のような御神体が帯びていた光を削ぎ落とす。

やがて、その頭部の辺りが静かに開き、中から一人の少女が歩み出た。

ふう、と一息つき、雅が地上へと続く高い天井を見上げた。

悲しげに視線を泳がせながら。

第十六話 『コンフィデンス』 7

山凌ランドの駐車場で光輔達を出迎える、疲れきった表情の木場礼也はすでに、陸竜王とともに帰路へとついていた。

「おまえ達、このまま帰るか？」

竜王をちらと見やり木場が告げる。

「いえ、自分で帰ります」

光輔の様子をうかがい、夕季もぼそりと続いた。

「……あたしも」

木場達と別れ、光輔と夕季だけがその場に取り残される。

会話もなく立ち去ろうとした二人を待っていたのは、光輔の友人達のよそよそしい視線だった。

「祐作……」

その常ならぬ険しい表情に気づき、光輔が言葉を失う。

「おまえ達だったんだな、あれに乗ってたのって」

苦しそうに祐作の顔を見上げる光輔。

距離を置き、そのやりとりを夕季が静観していた。

「あ、うん……」

「なんで黙ってたんだよ」

祐作が押し出す。静かではあるが、怒りのような感情はしっかりと伝わってきた。

「あ、うん。あのさ……」

「おまえ、ふざけてんのかよ！」

突然の茂樹の爆発に再び口ごもる光輔。

その態度が癪に障ったのか、茂樹が光輔の胸倉をつかみ締め上げた。

「なんでそんな大事なこと、俺らに黙ってたんだよ！」

「あ……」光輔が茂樹から目線はずす。「みんなに迷惑かけたくなくて、さ……」

「ああ！」やるせない憤慨がさらにヒートを加速させた。「おかしいだろ、それって！ 何、迷惑とか言ってるんだよ、おまえ！ いい加減にしろよ！ 俺ら、ずっと騙してたってことだぞ！」

「……」

「俺ら、ツレだろ。なんでも話せてわけでもねえけど、そんな大事なこと、なんで一言も言わねえの！ なめてんのかよ、おまえ！」

「やめろよ、茂樹」

今にも殴りかからんばかりの勢いの茂樹を、祐作が制する。

「光輔にもなんかわけがあつたんだよ」ちらと光輔を見やった。「それでも、やっぱ言つてほしかったけどな」

「くそっ！」

筆り取るように茂樹が光輔から腕を引き剥がした。

続けて隆雄がぼそりと吐き出した。

「なんか、裏切られたみたいだよな。信じてたのにさ」

「！」はっとなって光輔が顔を上げる。それから悲しそうにまたそむけた。

みずきは困ったような表情で、ことの成りゆきをはらはらしながら見守っていた。

「ずっと俺達の知らないところで知らないこととしてさ、それで全然知らん顔してたんだな。特別なこととしてんだったら少しくらい言うてくれてもいいのに。そしたらさ、俺らだって少しは気を遣つてさ……」

「……」

「そつという言い方ってないよ」

ふいに発せられた夕季の声に全員が振り返る。

夕季は静かな口調で先につなげた。

「光輔はみんなの事を思つて……」

「夕季、もういいよ」

夕季の声に被せるように光輔が待ったをかける。

その諦めた顔つきを夕季が睨みつけた。

「何がいいの。友達なんですよ」

「でもみんなの言うとおりだから。俺が茂樹達の立場だったとしても同じことと思う。俺、友達にひどいことしたんだよ。俺がみんなの気持ちを踏みにじったんだよ。裏切ったんだ。普段は親友とか何とか、調子のいいことばかり言っていてさ。俺、自分のことしか考えてなかった。そうされたらどんな気持ちになるのかなんて、ちっとも考えてなかった。そうだよな。ほんとにそう思う。俺が悪かったんだ。みんな、ごめん……」

「おまえな！」

「いいよ、茂樹」

いきり立つ茂樹を言葉だけで制する祐作。

みなが見守る中、背中を向け、光輔が一人その場から去って行く。残された夕季が茂樹達へと振り返った。

「本当にそう思ってるの」

茂樹が一步前へ出る。

「何が！」

「光輔が自分達のことを騙してたって。裏切ったって」

「だって、そうだよ」

夕季が茂樹と向き合う。睨みつけるわけではなく、切なそうに瞳を揺らしながら、その顔を見つめ続けた。

「光輔は好きでそんなことをしているわけじゃない。あたしや礼也とは違う。でも、光輔の他に同じことができる人間がいらないから、仕方なくやっているだけ。本当はみんなと普通にしたいに決まってる」

「だからって、なんで俺らに何も言わねえの。裏切りだよ」

「言えば、今までどおりでいらなくなるのがわかっていたから。今みたいに」

「……。だからってさ！」

「きつとみんなを危険なことに巻き込みたくなかったからだと思う。」

それを知れば、さつきみたいにみんなが逃げないことを知っているから。自分のせいでみんなを傷つけたくなかったから。そんなこと、曾我君達の方がわかつているはずでしょ」

「……」

茂樹が目細める。光輔の消えた方角へ顔を向けた。

「光輔、きつとみんなから離れていく」

夕季のその言葉に誰よりも反応したのは、それまで黙って静観していたみずきだった。

「！ どうして」

真剣な表情のみずきと夕季が向かい合う。それから茂樹同様、光輔の後を目で追うように視線を向けた。

「みんなを裏切ったと思っっている自分が許せないから。あいつは、光輔はそういう奴だよ」

「何だよ、それ」不快そうに顔をゆがめ、祐作が前へ出た。「なんで古閑にそんなことわかるんだよ。俺らよりあいつのこと知らないくせに」

夕季が力なく祐作を見上げる。

「死んでもいいって思ったことある？」

「！」「口ごもり、強がるように祐作がそれに答えた。「死にたいと思ったことくらい、何度だってある」

「自分以外の誰かのために？」

「……」

真っ直ぐな夕季のまなざしを受け止めきれず、目をそむける祐作。「だったら、これ以上何を言っただって伝わらないと思う」

「……古閑にはあるってのかよ」

「……」ぎゅっと口もとを結ぶ。それから淋しそうにつないだ。「わからない。でも光輔はずっとそうだった。大好きな人達や、ここにいるみんなのために。だけど光輔はそれを少しも鼻にかけたり、自慢したりしない。それどころか自分だけがみんなと違うことで苦しんでいる。自分のせいでみんなを傷つけやしないかって、いつも

心配している。みんなのことが本当に好きだから」

「あ……」

「どれだけ苦しくても光輔は逃げたりしない。みんなと一緒にいたいから。みんなのことを守りたいから。だから、いつも笑っている。どれだけつらくても、いつだって何でもない振りをして笑っている。みんなに笑っていてほしいから。みんながいてくれれば、どんなことにだって耐えられるから。それなのに、あんな言い方ひどいよ……」

「……」

「光輔がいなかったら、きっとあたしは、今ここにいらなかったと思う。お姉ちゃんも、この街も……」

祐作や茂樹達にはその言葉の意味がわからなかった。

みずきの表情がふつと勢いを落とす。何も言わず、夕季の横顔を見つめていた。

「誰かがそばにいる限り、光輔は決して逃げたりしない。これからもそれは変わらないと思う。だからあたしは、光輔を信じる。周りから他に誰もいなくなっても、あたしは最後まで光輔を信じる。一人にはさせない」悲しげに揺れる瞳に光を宿した。「光輔は、大切な友達だから……」

夕暮れの街並みを、がつくり肩を落とし、足を引きずるように歩を進める光輔。

少し前を歩きながら、夕季が何度も心配そうに振り返り見た。冷たい風が吹き抜けていく。

「光輔……」

夕季に呼びかけられ、光輔がゆっくり顔を上げる。

その時、後方からの声が光輔を呼び止めた。

「穂村君」

光輔が振り返る。

みずきだった。

光輔が二人の顔を交互に眺める。

すると夕季がぎゅっと口もとを結んだ。

「……。あたし、先に行くから」

「あ、うん……」

二人を残し、夕季が足早に立ち去っていく。

それから少しはにかんだ様子で、みずきが小さな声を押し出した。

「あの。さっきはごめん……」

何も期待せずに光輔がその顔に注目する。

「……いや、いいよ、別に……」

「電話したんだけど、つながらなくて」

「？」

携帯電話の電源が切つてあることに光輔が気づく。壊れるかもしれないとの桔平からの助言で、搭乗前にオフにしたままだった。

何の気なしに電源を入れると、矢継ぎ早にメールが飛び込んできた。

その内容を確認し、目頭が熱くなる。

祐作や茂樹達からの『ごめんねメール』だった。

みな一様に励ましの言葉を連ね、最後には決まって『頑張れ』と添えてあった。

画面から目が離せず、光輔がぎゅっと携帯電話を握りしめた。

「……」

様子をうかがいながら、みずきがおそろおそろ言葉を積み重ねていく。

「みんなすごく気にしてた。穂村君に悪いことしたって。穂村君のせいじゃないってわかってるのに、ひどいこと言っちゃったから。みんなのために頑張ってくれたのだってわかってるのに。もし許してくれるなら謝りたいって。古閑さんにも」

「……。夕季？」

「うん」

「……」

「……穂村君？」

「……」

みずきに先に行くよう告げ、光輔が暮れていく空を見上げる。

その表情は先までとはまるで別人のように晴れやかだった。

携帯電話を取り出し、夕季のナンバーを探る。

「あ、夕季。俺。明日の夜さ、初詣に行かない？　しいちゃんや雅も一緒にさ。うん……、そうそう……」

除夜の鐘が鳴り響く頃合い、夕季や忍のアパートからさほど遠くない神社の境内に光輔達の姿があった。

決して大きくはないが、厄年の輩による酒などの振る舞いもあり、多くの参拝者で賑わっていた。

「さっぶっ」

白い息を吐き出しながら、忍が夕季に甘酒を手渡した。

「ありがと」

受け取った甘酒を夕季がずずとすすむ。コートにマフラー、ミ
トンの完全防備だった。

「しかし、すごい人だね。あ」空を見上げると、綿のような白雪
が降り始めていた。「雪だよ、雪。寒いはずだって」

「……。光輔達は？」

「みやちゃんとまだ向こうの方で並んでたよ」

「そう……」

「でも、光ちゃんからこんなところに行こうって言い出すなんて、
珍しいね」

「うん……」紙コップを見つめながら控えめに笑う。「何かいいこ
とあったみたい」

「ふうん……」たいして気にかけることもなく、何の気なしに忍が
続けて問う。「夕季、何お願いしたの？」

夕季がちら、と忍を見やった。

「内緒」

すると忍は嬉しそうに笑いながらはやし立て始めた。

「なんだ、なんだ、好きな人でもできたか？」

むぐ、と顎を引く夕季。

「……お姉ちゃんは？」

忍がにやりと笑った。

「内緒」

「……」口をとがらせ、夕季がじつと忍を見つめる。「木場さんの
ことでしょ？」

「！ ばか、おま、ちよつ、ばか、違うって、ちよつ！ ばか」

「……」

「ばか」

夕季が振り返る。

ざわざわと風に揺れる木々の彼方へ、遠くを見つめるまなざしを
送り返した。

「……」

「ん？　どうかした？」

「……。雪が目に入った……」

参拝の列に光輔と雅が並んで立っていた。マフラーを首に巻き、ほっほっと白い息を吐き出しながら、楽しそうに順番を待つ。

「光ちゃん、あれ観た？　六時から」

「へ？　笑っちゃいけないやつ？」

「違うよ。踊る神奈川県警二十四時年末特大号、事件は現場じゃなくて犯人が侵入した会議室で起きています！」

「……。大晦日にそんなのやってたの」

「すごかったよ」声色を変え、のどを手刀でトントンする。「ハイ、ワタシが通り力カツタ時二ハスデニコノ状態デ〜シタ」

「それ宇宙人とごっちゃになってる……」

「五時間スペシャルだよ」

「五時間で……」

「しいちゃん、紅白と間違えてそれ録っちゃったらしいよ。後でゆつくり観ようと思ってて、録れてなくてすごくショック受けてた。衣装対決観るの、ずっと前から楽しみにしてたのに」

「途中で気づかなかったの？」

「十一時前に録画が終わったから、夕季がおかしいなとは思ってたみたい。二人でケンカ寸前だった」

「……。なんでケンカすんの」

「なんで言わないの！　だって！　とかって、おもしろかった」

「おもしろかった？……」

「まあ、今の二人だったらケンカしても、前みたいに口もきかなくなるようなことはないだろうけどね」

「え？」驚いたように光輔が雅に注目する。「夕季としいちゃんってケンカしてたの？」

すると雅はいたずらめいた笑みを浮かべてそれを受け止めた。

「知らなかったでしょ」

「……。あんなに仲いいのに」

「そうだよ。すごかったんだから」

「なんか変だなとは思ってたんだけどさ」

「今じゃ恋人同士みたいだけどねえ」

「や、それはないしょ……」

雅が嬉しそうに笑った。

「光ちゃんも来ればよかったのに」

「うん……」伏し目がちに光輔も笑う。「ちょっとツレンち行つてさ」

「こたつで寝転びながらおせんべえ食べてたら、かけらが目に入っちゃって大変だったんだよ。ああ、こんな時、光ちゃんがいてくれてたらなあつて」

「俺に何ができたの？」

「ツツコミ」

「ツツコミ?……」

やがて光輔達の番になり、賽銭を投げて二人で綱を振った。

振る舞い所で甘酒を受け取り、光輔の横顔を見上げながら雅が問いかけた。

「光ちゃん、何お願いしたの？」

「ん? この平和がずっと続きますようにって」何のてらいもなくそう答える。「雅は?」

「あたしも同じ」いじわるそうににんまりと笑った。「あたし以外の世界中の人達が幸せになれますようにって」

「……嘘くさいんだけど。あたし以外のつてところが特に」

「あれ! 思いのほか鋭い!」光輔の顔を熱く見つめる。「ほんとね、光ちゃん以外の世界中の人達が幸せになれますようにってお願いしたの」

「……なんで俺」

「だって」

「だって?……」

メール着信があり光輔が確認する。みずきからだった。

『あけましておめでとう。今年もよろしくね』

光輔が嬉しそうに笑った。

それを眺め、雅がふと真顔になる。もう一度、己に言い聞かせるように、囁くように願い事を復唱した。

『……』

「え？」ちびりと甘酒をすする。「何か言った？」

光輔に見つめられ、楽しそうに笑う。

「うっん、別に」

「あ、夕季達だ」

忍を抱きかかえるようにたつく夕季を発見し、光輔が手を振った。

「おーい、ここー！」

「あ、こーちゃーんっ！ やっほおおーっ！」紙コップを高々と掲げ、上機嫌の忍が大きくそり返った。「コマネチ！ きやはははー！」

「お姉ちゃん！」

二人の目が点になる。

「……。べろんべろんだね……」

「……。べろんべろんです……」

「お姉ちゃん、こぼれてる！」

「あ、もったいね〜！」

「もう飲んじや駄目！」

「飲んでませんってば……、ひつくしん！ あ、酒が目に入った！

ぎゃあああ！ あたしの目がああっ！」

「ちよっと、光輔、手伝って！ みやちゃんも！」

光輔と雅が顔を見合わせた。

「もう手遅れだよね……」

「ねえ〜……」

「あゝ、何だろ、すげーシミる！ 助けて、夕季！ おかわり！」

「もう！」

楽しそうに微笑み、雅が雪空を見上げる。

両手を広げ、願いとともにもそのすべてを抱きしめようとした。
『みんなを守れますように……』

第二部完

第十六話 『コンフィデンス』 8（後書き）

ストックがつきてきたので、ひとまずキリということになりました。たいして大きな展開もなく、予定ではもう少し続けるつもりでしたが、ちょうどフォラス編の区切りということで。

またそれらしいものが出来上がったからお披露目しようと思っています。見捨てずにおつきあいしていただいた方、どうもありがとうございます。お忘れでなければ、これからものぞいてやって下さい。

よいお年を。謝々。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2092k/>

プロジェクト・メガル3・第二部

2011年6月20日13時40分発行